ポン・デュ・ガールは永遠に

デクストラ・シニストラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポン・デュ・ガールは永遠に

【Ｎコード】
Ｎ３２３０Ｖ

【作者名】
デクストラ・シニストラ

【あらすじ】
誰かが、そっと闇に囁いた。
「世界は、残酷なばかりではない」と――――

世界の全てを覆い尽くす黒い海。原罪の海、ハマルティア。
その海に、長き年月をかけて作られ続ける、白き巨大な橋があった。
ポン・デュ・ガールと呼ばれるその橋を作るのは、一体の鉄の蜘蛛、アトラク＝ナクア。
蜘蛛を操るのは、一人の獣人の少年。

蜘蛛と少年を守るのは、ジャガーノートと呼ばれる、機械仕掛けの少女。
過去から引き継がれてきた建設の旅の途中、彼らは、異様な『浮島』に出会う。
錆びついた歯車のような彼らの宿命は、静かに、そこから動き出す
――――

世界を包む黒い海と、長く巨大な橋を舞台に繰り広げられる、獣人の少年と機械の少女の、残酷と終末の物語。

プロローグ

「あとは、まかせたよ」
――そう言って『私』に微笑んだのは、誰だったのだろうか。

＞ｉ３０２１６―３５１５＜

キン――と音を立てて、世界が組み替えられた。
仕組みを、有り様を、構成を……一切合財を巻き込んで。
端から端まで、余すところなく組み替えられた世界は、あるべき姿に収まろうと身をよじり始めた。
人の目には、それは『破滅』に見えた。世界を拠り所に生きる矮小な命にとって、急激な世界の変化は破滅と同義だ。
そう。信じられないほどに急激だった。
波すら立たない穏やかな小川に、突如大量の土砂が流れ込んできたような、あらゆるものが耐えられないほどの変化であった。
この変化は、人の罪か。
この破滅は、神の罰か。
罪でも罰でもない。世界は人ごときの罪で動かず、人ごときを滅ぼすために変化しない。
ただ、因果に導かれた結果があるのみ。神の意思は、そこにはない。
その結果が、この変化だった。
冷厳なる結果の『始まり』は、些細な極小の一粒だった。
そこから、全てが始まったのだ。
予兆すらなく、ごく当たり前の日常の朝に――たった一粒の、小さな雨粒から。

天空にて輝く終わりなき爆撃は、何か。
雷轟である。
飛礫と紛うばかりの横なぶりの粒は、何か。
豪雨である。
世界の至る所、余すところなく、稲妻と豪雨が覆い尽くしている。
それらが、大地を這い回る矮小な命を徹底的に削ぎ殺していた。虱（しらみ）つぶしとは、まさにこのことだ。
そんな虱の惨めな断末魔をかき消すのは、逆巻く烈風の哄笑だった。虱は、断末魔を刻むことさえ許されなかった。
嵐だ。史上類を見ない嵐だ。
だが、これを嵐と呼ぶべきか。広大な世界をくまなく覆い、間断なく暴れるこの大気のうねりは、果たして嵐の範疇に収まるのか。
加えて、荒ぶるのは大気のみではなかった。
溶岩と共に大地から染み出す毒気。空から降り注ぐ不可視なる毒の光。どちらを受けても、生きながらに腐り、肉の泥となって息絶える。すでに虱の半数は、この二つの毒によって滅んでいた。
ああ、散る。散ってしまう。
智慧が散る。栄光が散る。文明が散る。
それらを継ぐはずの命が散る。
なすすべもなく、無情に残酷に、つめ先ほどの容赦も与えられずに。
矮小な命が長い時をかけて築き上げてきた華やかな生活圏は、巨大な岩に張り付いた、ただの薄い苔だったのだ。
苔のように、軽くひっかくだけで削り落ちる。その程度の脆弱なもの。
幾度も幾度も、嵐の爪が苔をむしる。むしり、むしり、粉々にして飲み込んでいく。
虱が滅ぶのに時間はかからなかった。彼らが滅ぶと同時に、矮小な命が誇っていた夜を昼にする光も消え去った。今や世界を満たす

のは、昼も夜も区別なく、重く深い闇ばかりである。
暗雲の中で勝利に酔う雷撃が、この世界で唯一の明かりであった。その明かりに、何かが照らしだされている。
天を衝いて屹立する巨塔だ。
闇に浮かび上がる黒き巨塔は、周囲に散らばる瓦礫の中央に建っていた。不気味な唸りを漏らしながら、世界を蝕む嵐の中で孤独を味わっている。
唸りは、造物主へ手向けた鎮魂歌だろうか。どこか物悲しい。気まぐれに薙ぎ払われた主たちを哀れんでいるのかも知れない。
この塔が何をなすための存在か、一見しただけで知るのは容易なことではないだろう。入り口も窓も見当たらない。明かりもない。旧き神話に描かれた混乱の塔のように、高みを目指すために作られた物なのかもしれない。
「彼」の用途を知る者が死に絶えた今、塔は何を思うのか。
雨は一段と強く塔の外壁を打ち、落雷が巨塔の頂点に幾度も舞い降りる。大地の鳴動は巨塔を粉砕せんと度々揺らし、そこに烈風が負けじと加勢する。
それでも巨塔は唸りを止めず、ただ凝然と、地上の全てが白紙に戻される過程を睨みつけていた。

気の遠くなるような時が過ぎた。
世界の全てを包んでいた破滅は、己の所業に満足し、ようやく手心を加えだした。風が次第に弱まり、雨粒の大きさも次第に小さくなっていく。雷鳴は遠くなり、大地の振動もそれにならうように、地中深くへと去っていった。
黒の巨塔は、その半身を黒き海に沈めていた。塔が建っている大地は、黒い海の底に沈んでしまったのだ。
黒い波にその身を打たれ、得体の知れない存在に徐々に侵食され

ても、塔は唸りをやめなかった。
孤独を唯一の供に、ひたすらに耐え忍ぶ。耐え忍び続ける。
「彼」は、待ち望んでいるのだ。許しの証拠を。
さらに多くの時が流れ、遂に禍風（まがかぜ）の哄笑が消えた。雲の流れも穏やかになっていく。暗雲は色を薄め、次第に白き薄雲へとうつろいでいく。
晴れる嵐。変化の時は終わりを迎えたのだ。
すると、その証のように雲の一点が割れた。
細い隙間から、柔らかい陽光が巨塔へと降り注ぐ。
――おお……おおお……待っていた。これを、ずっと。私は、これを、おお……おおおおお……！
「彼」は――巨塔は、一際大きく唸りを上げた。巨大な獣の産声のようにも聞こえる、絶望と歓喜がない交ぜになった声だった。
巨塔の頂点が、ゆっくりと音もなく左右に割れだした。
巨塔が永劫とも思える時の中、ひたすらに守り続けてきたものが、次第に姿を現す。
光沢のある装甲が、日差しを空へ打ち返した。
現れたのは大質量の鉄機だった。黒く、重く、硬い、巨塔の落とし子だ。
落とし子が節々から蒸気を噴きあげ、強靭なる八本の脚を駆動させた。
眼前に広がる世界の廃墟に向けて、ゆっくりと。
鉄機の旅立ちに呼応するように、どこからともなく声がした。
性別も年齢も判然としない、不思議な声。
塔の頂点から、世界へ向けて、声が高らかに響き渡る。
「アトラク＝ナクア……作業工程第1フェーズ……第1作業単位開始――」
今このときより。

蜘蛛の糸が、終わりの世界を繋ぎはじめる。

挿話　２３５－３２１　『ＢＬＡＣＫ　ＥＮＤ』

黒い海の上で、雲一つない青空がどこまでも広がっていた。
水平線の先で交わるのは、空の青と海の黒。水平線を境に、たった二色で表現された世界。
絵画の極みに達した芸術家の、渾身の一枚のような景色だ。複雑な造形物には存在しえない、極めてシンプルな美しさを放つ光景だった。
その景色の中を風が舞う。
湿度と温度の調和が生み出す、シルクの肌触りを思わせる風だった。
風がその手で海面を優しく撫でる度に、黒き海に白い波が生まれる。波は揺らめく水の楽団へと姿を変え、さざめく海神（わだつみ）の交響曲を絶え間なく奏で、青き空へと捧げていた。
波が楽団ならば、波間を踊る陽光の反射は、金色の衣をまとった踊り子の一団か。優雅なる波間の舞踏を披露せんと、時に強く、時に静かに、煌めき、跳ねる。
圧倒的な自然美の世界。自然の仕組みから生み出される全ての現象が、活力に溢れている。存在することの力強さに満ちている。
ゆえに――――際立つ。
滅びの残酷さが、輪郭を描かれたように際立つ。
美しき景色の中で、今まさに、滅びが少女を抱き寄せようとしていた。

タールのような色と光沢の海に、一筋の長大な白い橋が架けられている。
異様な橋だった。現実から乖離しているといっても過言ではない。
見た目は普通の金属製の橋だ。異様なのは、橋の架けられ方その

ものだった。
　水平線の彼方から何十キロ、何百キロと伸びる橋は、己を支える柱の一本もないまま、黒い海の真ん中に浮かんでいた。どのような技術を用いれば、このような建築が可能となるのだろうか。
　橋はとてつもなく大きいものだが、作りかけだった。内部構造が剥き出しの先端部分には、橋の材料と思しき物資が積まれている。
　その作りかけの先端に、一人の少女がいた。
　人間ではない……機械仕掛けの存在。だが、少女の姿をしている。ひび割れ、憔悴しきった顔は、自身の潤滑油によって黒く汚れているが、それでも彼女の愛らしさは翳ってはいない。
　彼女の唇が微かに動く。壊れかけの発声機能を用いて、自分の損傷度合いを音声として出力するためだ。
「全兵装……沈黙……混合循環触媒の損失甚大……組織閉鎖比率、限界域到達……駆動不可能状態まで……約１６５秒」
　語り終えた彼女の表情が、一層濃い陰をまとう。
　痛々しい姿だった。
　いかなる暴力も弾き返す彼女の装甲は、その大部分が失われ、圧倒的な暴力を放つ彼女の兵装は、その力を全て失って沈黙していた。はおる赤いコートは見る影もなく焼け爛れ、白と黒で彩られた金属の体は痛々しくひね曲がっている。のみならず、全身至るところに拳大の穴を穿たれ、そこから体内を循環する、エネルギー伝達用の混合循環触媒が漏れ出して、足下に銀色の水溜りを作っているではないか。
　かろうじて立っている。立っていること自体が奇跡的だ。
　その奇跡を起こしているのは健気なまでの使命感だった。まだ使命を放棄したわけではないと、機械で出来た紅い瞳が滅びに抗っている。
　首を捻り、背後を見た。ただそれだけの作業が、痛んだ体にひどく負担となった。
　彼女の背後には、大破した巨大な機械の死骸があった。

視界がぶれる。再認識した現実の残酷さは、彼女にも耐えられないほど大きい。

嗚咽が漏れる。涙を伴わない嗚咽が。

金色の髪を振り乱し、両脚から崩れ落ちる。心の崩壊につられるように。

橋の上で跪き、力なく前方を見つめる姿は、まさに敗北者のそれであった。

「なんで、こんな……こんなことに」

問い掛けは虚しく、意味の無いものと知りながら、それでも問わずにはいられない。

力がなかった――

知恵がなかった――

運がなかった――

理由はいくらでも後付できる。

だが、結果は変わらない。

彼女が己に言い聞かせ、必至に抗おうとしても、彼女の使命が潰えた事実は変わらない。

彼女の前に立つ、おぞましい『破壊者』によって、彼女の栄光は食い尽くされたのだ。

紅い瞳に破壊者の姿が映り込んでいる。

醜い。何かに形容することもはばかられるほどに、醜く、おぞましい化物が、陽光を背に立っている。

破壊者が乱杭歯をむき出して笑っていた。腐汁まみれの唾液を振りまく様の、なんと汚らわしいことか。

鉄の乙女が右手を前に突き出す。かすかに紫電が腕の表面を走るが、変化はそれだけだった。

破壊者が一際大きく哄笑した。

鉄の乙女は、悔しくて仕方がなかった。何よりも優れ、無敵を誇る自分が、実際は非力極まりない鉄屑でしかなかったと、徹底的に思い知らされて。

破壊者が歩み寄る。鉄の乙女は何も出来ない。
巨躯の影が彼女を覆った。破壊者が壊れかけの玩具で遊戯にふけるには、最適の距離だ。
太く、醜く歪んだ6本の爪が、少女の頭部を鷲づかみにした。
ぎしり。
軋む音が海の上で鳴る。次第に大きく、より強く。
ぎり、ごりりと、爪が少女の頭部に潜り込み始めた。鉤状の先端が、白い肌を裂き、内部の機械まで陵辱する。爪先に触れる中身の感触の滑らかさに、破壊者は極めて卑猥な笑みを浮かべた。
機械の体が痙攣する。補助電脳がありったけのエマージェンシーを発しているが、対応など望むべくもなく、指先ほどの抵抗すら出来ない。
まるで、殺虫剤でくびり殺される虫けらの末路。
だが、ゆっくりと自分が破壊されながらも、その目には恐怖の色もなく、強い敵対心をもって破壊者へ向けられていた。虫けらではない、戦士としての矜持を持つ者の証だ。
ひびの入った眼球から銀色の涙があふれ出て、柔らかい頬を流れ落ちる。憎悪に染まった視線は、破壊者の濁った瞳を貫き続けていた。
「終わり……じゃな……い……」
餌が呟いた。破壊者の爪が止まる。
「必ず……やり遂げる……必ず」
死の際の負け惜しみか、はたまた根拠のある警告か。
どちらであっても、破壊者には、餌がいまだ抵抗の意思を見せるのが、気に食わなかった。
握りつぶすことをやめ、手を離す。
――――何故、手を止める？
少女が疑問に思う間も有らばこそ。
破壊者の巨大な口が、糸を引きながら開き始める。
瞬間、機械仕掛けの少女は、自分がこれから何をされるのか悟っ

てしまった。
勇敢なる意思に飾られた端整な顔が、遂に恐怖に歪む。
あまりに残酷な最後が、暗き口腔の中で待ち構えていた。
悪臭を放つ口腔から、大蛇の如き舌が飛び出る。それも、四本も。
「ひぃ……い、いやあああ！」
機械仕掛けの少女は、四本の舌に全身を絡めとられ、一瞬で丸呑みにされてしまった。
そして、力任せに行われる咀嚼行為。
哀れな悲鳴は、最初の一噛みでかき消された。あとは、煎り豆でも食べているかのような音だけが、破壊者の口中から鳴り響くばかり。
頭部がすり潰され、胴体が引き裂かれ、四肢が噛み砕かれていった。内部の機械から散る火花、少女の体から吹き出した銀色の液体、素体を覆うシリコン、全てが咀嚼されていく。粘着質の唾液で汚し、舌がこねくり回し、さらに小さく、消化しやすい形状に、少女を変えていく。
乱杭歯によって、徹底的に粉々にされた彼女は、そのまま胃の腑へと嚥下された。後はくまなく残さず、ねじの一つすら「ずぶどろ」に溶かされて、無残に吸収し尽くされるだけ。待つのは尻より糞となってひりだされる、排泄物としての末路。
美しき戦乙女の末路として、これほど救いのない最後があるだろうか。
生意気な餌を恐怖で味付けしたことに満足がいったらしい。破壊者は、ぶよぶよと膨らんだ四枚の舌で口の周りを舐め、橋から飛び降りた。
飛沫が高々と上がる。それきり破壊者は海面に姿を見せず、海中へと姿を消した。
飛沫は橋の上まで届いていた。巨大な機械の死骸が黒い塩水に濡

れる。
そしてもう一つ、その塩水に濡れた者がいた。
橋と機械の死骸の隙間から這い出たそれは、顔にかかった飛沫と涙を拭うことも忘れ、橋の縁に立って海を見下ろした。
海には波紋が広がっている。自分の大切なものを奪った存在が、その波紋の中央、深く暗い海の中にいる。
尽きない涙が、黒い飛沫と混ざりながら海に落ちた。
その涙は死者への手向け。戦乙女へ捧げる形なき献花。
残された者は涙を拭い、その場を後にした。
橋を戻る以外に道はない。だが、己に出来ることを思い返しながら、必ず成し遂げて見せると心に誓う。
「必ず……やり遂げる……必ず、やってみせる……メメント・モリ、僕は、必ず……」
長き時を共に歩んできた少女の名を呟き、彼女の最後の言葉を繰り返す。
一切の妥協なき、徹底的な復讐をなすために。
青い瞳を涙でにじませ、彼は大きな猫の耳を前後に震わせた。

復讐に心を支配されたその者には、気付けなかったようだ。
鉄の乙女が最後に願ったものが、復讐ではないことに。

第一章　６４８－１９２６　『カルペ・ディエム』

音が鳴っていた。

地鳴りに似た、しかし地鳴りではない、ひどくこもった重低音だった。音そのものは大きくないが、規則正しく刻まれるリズムは、どこか心臓の鼓動を連想させる。

その鼓動に、一つの部屋が揺れている。

狭い部屋ではない。だが、広いとも言い難い。

ありすぎるのだ。様々な『もの』が。

まるで部屋自体が、望んで混沌たる有様を示しているかのようだった。

ここにある『もの』――――高い天井に張り付いて唸る、異形の機械群。壁面に不規則に設置された、薄く青い光を放つ冷光灯。いたるところを迷走するパイプの束。パイプから漏れる成分不明の黒い液体。比類なき悪臭を孕んだ、ぬるい空気。

そして何よりも多く部屋を占有するのは、うずたかく積もったゴミの山だった。

ゴミは、部屋の六割以上を占有しているだろうか。全体を徹底的に蹂躙する悪臭は、この大量のゴミから産まれているようだった。

機械油と金属臭の狂気的融合による、悪夢の香水。トッピングは、年季の入った腐敗臭と刺激的な化学薬品の臭気……これら全てが渾然一体となった、その臭いの凄まじさは、筆舌に尽くしがたいものがある。小一時間もここに身を置けば、向こう数日間は、己が身から立ち上る悪臭に悩まされることになるだろう。消臭するには相当強力な処置が必要だ。

ゴミ山の上では、天井から伸びた複数のフレキシブルマニピュレーターが、ミミズのように身をくねらせている。彼らは先端に備わったライトで周囲を照らしながら、無造作にゴミをかき回していた。その仕草はどう贔屓目に見ても、部屋を整理しているようには見え

ない。
　衛生や清浄といった単語とは、完全に無縁の空間。例えるならば、金属質の肥溜めか。命あるものなら、出来るだけ身を晒したくない場所であろう。
　それも道理であった。ここは廃棄物処理室という汚物の墓場だ。ゴミ以外の者が長時間居座ることなど、設計段階から想定すらされていない。
　だが、あろうことか設計者が想定しなかった事態が、気の抜ける寝息と共に進行していた。
　場所は部屋の中央、屑山の頂点。
　そこに眠り姫がいる。
　彼女は世にも珍しい緑色のツインテールをゴミ山に投げ出し、今日も夢の中で、デッサンの狂った電気羊を『夢中になって』追いかけていた。
　完全に熟睡している。
　鋭利な突起物だらけの屑山に、何かを敷くでもなく直に寝て、かつ、熟睡しているのだ。彼女の耳元で、マニピュレーターがかなり大きめのゴミを引き揚げているのだが、耳をつんざく騒音にも起きる様子はない。それどころか、幸せそうに「うへへ」と笑い、意味不明の寝言を漏らす始末だ。瞠目に値する豪胆ぶりである。
　そこへ、強烈な目覚ましが降ってきた。
『ごずん』という重量感のある激突音。びくんと伸びきる少女の四肢。目覚ましは重さ約２０キロの廃棄金属の塊。衝突箇所は、愛らしい顔の中央、形のいい鼻の頭。落ちたゴミはそのまま被害者の脇に転がり、ゴミ山の一部となった。
　傍目には、かなり衝撃的な光景であった。うっかりで済まされるような事故ではない。しかし落とし主であるマニピュレーターは、我関せずと作業に没頭している。実に機械らしい反応だ。
　ややあって、眠り姫の瞼が半ばまで開いた。瞼から覗く濡れたように輝く紅い瞳は、大粒のルビーすら曇って見える程の透明度と輝

きを持っていた。
　ダメージがないのだろうか。２０キロの鉄塊と激突した箇所をさすることもせず、錆び付いた関節を軋ませながら、寝ぼけ眼をこする。しかし、大した目覚まし効果は得られなかったようで、両の瞼は、しつこい眠りの精をぶら下げたままだった。
　たっぷりと五分間寝ぼけた後、焦点の定まらない目で天井を見上げながら、あられもない大あくびを披露。
「にゃむっ、ふにゅううんっ……がふっ」
　少々個性的な欠伸を噛み殺すと、少女は半身を起こし、次いで軋む首をゆっくりと左右に回して、自分のいる場所を見渡した。
　周囲に鎮座する塵の数々。冷光灯の頼りない光に照らされて、歪な陰影を見せ付けている。
　積み上げられたごみの一つ一つを捉える視線。それが一点に止まる。
　自分を囲う無機物の死骸から、顔面を殴打した凶器を見つけると、少女は抑揚のない声でぽつりと漏らした。
「作業工程第６４８フェーズ、第１９２６作業単位開始……」
　金属質の右手を見つけだしたゴミに伸ばす。
　細い指が太いシャフトのような部分に絡みつき――
　シャフトが飴細工のように変形するほどの力で、握り締めた。
「カルディエが……電気羊、倒し損ねたのは……おまえがあ……原・因・デスかっ！」
　カルディエは、眠りを妨げたゴミを片手で軽々と持ち上げると、親の仇を討つような形相で投げ飛ばした。
　ゴミが飛んだ先には一本のマニピュレーター。哀れ、衝突音と共に砕け散る。
　狙ってやったのだろうか。破壊されたマニピュレーターは、彼女の顔に目覚ましを喰らわせた張本人だった。
　金属質の断末魔が処理室内を何度もこだまし、そして次第に消えていく。

大した事ではなかった。大量にあるゴミに、新たな仲間が加わっただけなのだから。

屑山の眠り姫は、人ではない。

高次練成学と具現化工学の結晶――人型戦術艦（ジャガーノート）が、彼女の分類上の名称だ。

強靭な金属の四肢、多様な装置の詰まった胴体部。それらを覆う光沢のない白と黒の複層装甲。全体のフォルムは曲線を主体としており、女性的な印象を漂わせている。頭部は人のそれとほぼ同じ外観をしているが、かといってそこが脆いわけではないことは、先ほどの衝突実験で実証済みだ。

カルディエは立ち上がりながら、脇に脱ぎ捨てたままの、黒いぼろぼろのコートを手に取った。コートに備え付けられた数多の装備が、ベルトの金具と触れ合い、支離滅裂なる金属質の歌を響かせる。

ややサイズの大きなコートをはためかせながらまとうと、カルディエは軽やかに屑山から飛び降りた。着地点はゴミに覆われていない僅かの床。４メートル弱の高低差があったにも関わらず、着地音は全くなかった。

次いで足下に転がる黒いハンティング帽を拾い、両手で器用に数度回した後、回転の勢いを利用して頭に被せる。

装飾過剰な帽子から伸びる多彩なコードを、首筋に並ぶコネクタに接続し終えると、カルディエは意気揚々と出口へ足を向けた。

だが、足が止まる。出口は縦横１．５メートル四方の正方形をしているのだが、そのほぼ全てがゴミで埋められているではないか。

カルディエの夜闇をも見通す瞳が、天井付近の上部開閉口を睨みつけた。どうやら出口を塞いでいるゴミは、そこから投下されたものらしい。

腰に手を当て、出口が出口になっていない現状を嘆く。

「あいつめー。カルディエがここで寝てるのに、ぽっちゃり、違う、

うっちゃり、違う、うっかりゴミ投下したなー。文句言ってやるなー。それはもう、鼻から血尿が出るくらい、文句言ってやるデスよ？よっしゃ、今単位の作業予定は『文句を垂れる。そして華麗にふて寝』にバリ決定。なおこの決定事項は、カルディエの許可なく変更できまっせん。使用上の用法・用量を守って、正しくお使いください」

などと意味不明なことを呟きつつ、おもむろに出口を塞ぐ残骸どもに右手を向けた。

長い袖に隠れて、右手そのものは見えない。

袖に紫電が走り、袖口の闇の奥から、数多の金属が高速でこすれ合う音が吹き出た。

何が起きているというのか。

神経を逆なでる金属音が終わった、その刹那である。

かちりと――袖の奥で撃鉄が跳ねた。

間髪容れずに生じる爆音と閃光。

ほぼ同時に赤い爆風が生まれ、カルディエの眼前に立ちふさがる残骸を、木っ端微塵に吹き飛ばした。さらに、砕かれた破片が音速の奔流に攪拌されて、周囲に破壊の渦を撒き散らす。暴虐たる爆轟の災禍だ。

爆風は当然カルディエも飲み込んでいる。無事で済むはずがない。

しかし、黒煙の合間から現れた彼女には、わずかの損傷も見当たらなかった。アラミド繊維とグラスファイバーで編まれたコートの耐用年数が、大幅に縮んだぐらいだ。

至近距離の爆発を全く意に介さない機械仕掛けの少女は、鼻歌混じりに、爆発によって姿を現した黒鉄の扉に手を伸ばした。

第一章　６４８－１９２６　『ヴァニタス・ヴァニタートゥム』

特殊榴弾で、出口を塞いでいたしゃらくさいゴミを粉砕。猛る爆炎を配下に、カルディエは華麗に外界へと飛び出す……

はずだったのだが、爆風で開閉シャフトがしこたま歪み、扉が作動しなくなってしまったのは、完全に計算外だった。

しかし、そこで戸惑うカルディエではない。

彼女には考えがあった。

開け放たれた出口を悠々とくぐり、カルディエは鼻を鳴らした。

どうだ見たかと、言わんばかりの態度である。

機械仕掛けの少女は外に出ると、直ぐさま足を止めた。

望遠機能をあえてオフにした瞳が、眼前の世界を映す。

カルディエの前には、天を埋め尽くす灰色雲の空と、暗黒の海と称すればよいのだろうか、タールじみた黒色の海が果てしなく広がっている。

彼女が立つのは、黒い海の上に架けられた巨大な白い橋、その作りかけの先端であった。

幅は最低でも２００メートルを下回らない。その橋の両縁で柵とともに等間隔に立てられているのは大型の冷光灯だ。冷光灯は、薄暗い空にささやかな抵抗を示すように、青白い光で辺りを照らしている。

カルディエは、前方を見据える両目をわずかに細めた。

橋の延伸方向には、空中に浮かぶ島のようなものが、ぼんやりと見える。仮に島だとすれば、いかなる原理にて浮いているのか。生半可な大きさのものではない事は、カルディエのいる地点からでも把握できるのだから、ますます異様と言う他ない。

橋の先端を中心とする周囲の海域には、百本近い塔のようなものが密集して立っている。彼等は時たま生じる稲妻に照らされる度に、その表面を鈍く輝かせていた。

見るものを威嚇しているかのような、禍々しい姿だった。

形状、材質、高さから直径にいたるまで、千差万別。しかしどの塔も、頂点付近に赤い目のような紋様が一つだけ刻まれていることだけは共通している。

これがカルディエの周囲にある『世界』だった。孤独と破滅に蝕まれた悪夢を具現化した、そう言われても疑いを抱けない、それほど荒涼とした世界。

カルディエは電脳の原子時計で、現在時刻を確認した。

示される時刻は真昼。だが周囲は夕方のように暗い。雲が厚すぎて、日の光が届いていないのだ。

薄暗い世界を嘆くように、風が吹く。

カルディエの長い緑の髪が幾筋か後ろに流れた。つられて背後を見上げる。

そこには、黒い山がそびえていた。

否――――山ではない。とてつもなく巨大ではあるが、それは人工的に作られた機械の『何か』だった。

大きすぎる。空から見渡しでもしない限り、全容を視界に収めることはできないほどだ。

全長２２０メートル、最大幅７０メートル。高さは優に３０メートルを超える。黒く丸い駆動機関部を頭部とすれば、その側面から伸びる四対の油圧式駆動多脚や、後部に連結された居住区兼用のコンテナユニットのおかげで、全体の見た目は不恰好な蜘蛛そのものだ。重厚な表層には血管のようにパイプが走り、その繋ぎ目の所々から白い蒸気や黒煙を吹き上げ、いたるところに設置された照明が、己とその周囲を強い白色光で彩っている。

カルディエが今まで惰眠を貪っていた廃棄物処理室は、この蜘蛛が内部に有する一施設に過ぎない。

蜘蛛の頭に当たる位置にペイントされた『アトラク＝ナクア』という古い時代の文字が、この蜘蛛に与えられた名前らしい。どうやら設計者は、洒落が好きな人物だったようだ。

目を細め、巨大な機械蜘蛛の表面をつぶさに観察するカルディエ。視線が上に行くにつれ、口がへの字に曲がっていく。

「いない。あんにゃろ、どこいきやがったデスか」

目当ての存在が、いつも居る場所にいないことを知り、カルディエは視線を橋の先端に戻した。建造中の橋の先端には、多くの工具や機材が散乱している。だが、動くものの姿は確認できない。

――――うむむ、見当たらんぞな。どっかに隠れてるのか？

カルディエが僅かに身を沈めた。刹那、彼女の体が宙に舞う。特殊な機能を作動させたわけではない。脚力任せの跳躍だ。ただし、３０メートルを軽く越える跳躍だが。

ゴミ山から飛び降りたときと同様に、アトラクの屋上へ無音の着地を行うと、カルディエは浮島とは反対方向に目を凝らした。

島が空中に浮いているなどという景色も大概おかしいが、こちらの景色も負けてはいない。

白い橋が暗黒の水平線の先から、カルディエのいる現地点まで、塔の合間を縫うように幾度ものカーブを描きながら伸びている。橋に対する支えは、途中に紅い橋脚が一基だけ。塔と同じように海に突き立っている。それ以外に橋は一切の支えもない状態で、わずかのたわみもなく、巨大なアトラクとカルディエをその上に乗せているのだ。

幻想的光景と言うより、冗談めかした風刺画と言ったほうが正しい。

カルディエは両目の望遠機能を起動させ、視認可能な範囲を全て見渡した。

「こっちにも見当たりませんなー。どこだどこだどこだ。あ・い・つ・は・どこだー」

歌うように「どこだ」を連発しながら、リズムに合わせて腰を振

る。コートの金具がぶつかり合う音が、ダンスミュージックの代わりだ。
「どうしたの、カルディエ」
気の弱そうな少年の声がした。
自分の名前を呼ばれ、腰を振るのをやめる踊り子。
声は背後の、かつ下方向から。カルディエは縁まで駆け寄り、ひょいと下を覗き込んだ。
目当ての人物が、アトラク＝ナクアの外縁部の梯子を昇っているのが見える。
「おー、いやがったデスな、ヴァニタス・ヴァニタートゥム！　こんちきしょうめ！」
カルディエの顔が喜色に満ちる。好物を差し出された飼い猫の眼光が、ヴァニタスと呼ばれた少年を射抜いた。
ヴァニタスは、子猫のように尻尾をまるめて脅えた。
猫――――比喩ではなく、ヴァニタスは猫の身体的特徴を有する亜人だった。子供ほどの大きさの猫が直立していると言えば、一番的を得ていようか。純白の体毛は油で汚れてはいるが、触り心地の良さそうな輝きを振りまいている。優しさと愛嬌を携える青の猫目が、金色の前髪の合間から、おどおどとした視線を見せているのが、彼の性格をよく表していた。
擦り切れた作業服と、油汚れで色が変わりかけている迷彩柄のポンチョは、彼にはややサイズが大きい。口元が半分隠れてしまっている。しかし気の弱いヴァニタスには、少しでも表情を隠せることは、かえって好都合なのかもしれない。
ただしヴァニタスの場合、口元や両目以上に物をいう箇所があるので、あまり意味はないのだが。
彼は平静を装いながら、カルディエを見上げて問い掛けた。その実、内心脅えきっていることは、伏せ気味の大きな猫耳が主張している。
「い、いやがったって、あの、もしかして……僕を探してたの？」

「おぉう、いっえぇぇす。カルディエは、それはもうヴァニタスのこと探しまくったぞ！　どこにいるのか、早く見つけないとって。焦りのあまり、もう少しでカルディエの駆動系にカオスバイブレーションが生じて、混合循環触媒が沸騰するとこデシタ！」

「そ、そうなんだ……それはごめんね」

梯子を昇りながら、ばつが悪げに頭を掻く。屋上に到着しても、その仕草は続いていた。

カルディエと相対したヴァニタスは、床とカルディエを交互に見ながら、照れくさそうに身をよじった。

実は、先ほどまでアトラクの底面部で駆動系の修理を行っていたので、姿が見えなかったのだ。作業時間も作業単位をまたいで2時間半にも及んでいる。目を覚ましたカルディエが、自分を見失って捜した可能性は充分あると、少年は推測した。

「カルディエ、あの、もしかして僕のこと――」

――姿が見えないから、心配してくれてたのかな。

少年が胸の真ん中にかすかな温もりを憶える。

それを瞬間冷却する一撃は、正面から抑揚のない台詞となって飛んできた。

「お前に文句言うために捜してたデス」

「心配してく……ぅえっ？」

「お前、アトラクの廃棄物処理室に新しいゴミぶっこんだな。おかげで出口ちゅどーんだ！　電気羊にも逃げられた！　あれ！？　電気羊は関係ないかな！？　まあ、そこは聞くなっ」

「え、いや、意味が……」

「わっかんないデスか！全くリカイリョクの乏しい奴だな、君はー。いいか、そのでけえ猫耳が外耳炎になるまで、よおおおく、かっぽじって聞くデス。寝てたらゴミが顔面ストライク、オハヨーしたら出口びっくり、ゴミもっさり！にぎゃーす！！もろともに、ちゅっどーん」

語るごとに一歩一歩、不可思議な身振り手振りを伴いながらヴァ

ニタスに迫り、鼻がつくほどの近距離から無表情で睨みつける。二人の身長に差はないが、ヴァニタスは、高所から睨み付けられている錯覚を覚えた。

加えてである。距離が縮まったせいで、カルディエに染み付いた悪臭が、猫の敏感な嗅覚に痛烈な刺激を与えるではないか。顔を反らしたくなったが、経験上、あからさまに顔を反らすと酷い目に遭うことも、彼には嫌というほど予想できた。

視線と臭いの責め苦。この状態は、ある種の苦行に近かった。

「ぐう……寝てたらって、いや、あの、昨夜はどこで寝てたの？」

「忘れたか！　このミニマム脳みそめ！　寝る前に、今回はアトラクのゴミ山で寝たい気分、あでぃおす！　ってテレパシー送ったデショ」

「テレ……って、いや、僕も君も、テレパシーなんてできないよね」

「あれ？　そうだったけか？　カルディエの色違い、じゃない、勘違いか。ムカツクな！　な！」

話すにつれ、ヴァニタスの疲労感が増す。カルディエとの会話は、五分もあれば修理作業一時間相当の疲労感を味わうことになるのだ。

それから、やや間を置いて。

ヴァニタスは、ネジの飛んだ少女の難解な暗号を解読することに成功した。

「ええと……つまり、廃棄物処理室で寝てたら、出口がゴミで塞がってたんで……爆破したってこと？」

「おかげで扉が開かなくなったな」

「え？」

「だから、こう、思いっきり」

説明途中のカルディエを残し、ヴァニタスは慌てて梯子を降りた。

もつれる足を立て直し、事件の現場へと急行。そこで無惨に破壊された出口と、出口の一部だった扉の残骸が彼を出迎えた。アトラクの照明に煌々と照らし出された破片の数々が、一層哀愁を誘っていた。

ヴァニタスは額に手を当て、肺活量の限界近くまで嘆息した。
「折角、故障箇所を修理したのに……」
彼の嘆きを慰めるためか。
アトラクが唸りをあげた。
パイプが軋み、一層強く蒸気が噴き出す。多脚の油圧式シリンダーの内部圧力が変化した証拠だ。
一際大きな蒸気を噴き出し、逞しき鉄の脚が巨体を引き始めた。
――ああ、もう作業開始の時間か。
少年に見守られながら、山の如き鉄の蜘蛛が動き出す。目指すは前方、作りかけの橋の先端部。蜘蛛の役目が、そこで待っている。
アトラクは、糸ではなく橋を紡ぐ巨大建設機械だった。
ヴァニタスは橋の縁に避け、アトラクの動く様を眺めていた。いつ見ても、圧倒的な質量の駆動は胸踊るものがある。前面部に備えられた四本の大型作業腕や複眼式感覚球を駆使し、コンテナにて生成、積載された資材を使って、瞬く間に橋を延長させていく姿は、いつだったか、カルディエさえ「頼もしい」と評した程だ。
アトラクの修理、管理を役目とするヴァニタスにとって、この機械仕掛けの建設者が正常に動くことは、彼自身の存在の肯定に他ならない。
非常に優れた機能を持つアトラクとは言えども、不滅ではない。支えるものが必要なのだ。
だからこそ、カルディエの突拍子もない破壊行動は、ヴァニタスにとって路傍の雑草並に、処理しても尽きない頭痛の種だった。
ヴァニタスは取り残された扉の残骸に近づき、視線を落とした。
――壊されたのは作業用出入口の扉か。起動と同時に処理室の隔離壁が作動してるはずだから、廃棄物が漏れ出すことはない。すぐに直さなくても問題ないかな。
中央が極端に歪んだ『扉だったもの』を見ていると、ヴァニタスは込み上げる苦笑を抑えることが出来なくなった。
「強化マルエージング鋼と交差圧縮炭素繊維、圧力反応型の有機シ

ョックアブソーバー……その複合材質で出来た分厚い扉を、どうやってこんな風にしたんだろう。思い切り蹴った、とかかな……？」

思わず口をついて出た言葉に悪意はなく、むしろ心から感心している。技術屋としての性分が強い少年だ。

「なーに、ぶつくさ言ってるか」

「うわ！？」

背後からの急襲は、ヴァニタスの細い尾を二倍以上の太さに膨らませた。

いつの間にか背後に立っていたカルディエに向き直り、震える声で「い、いや、なんでもないよ！」と返す。

しかしカルディエは了承しない。頭を左右に振り、半眼の眼光でヴァニタスを貫く。両拳を口元に当てるそぶりが様になるのが、意外と言えば意外であった。

「なんでもないなら、そんなに慌てるはずないもん。なんかニヤニヤしてたし……ぬはっ！　わかった、カルディエのセクスィ～な姿を絶賛妄想中だったに違いないデスな！？　この国宝級変態児め、カルディエとそんなにエッチしたいか！　なんだと、こんなどこの馬の骨とも知らない輩に騙されおって、父さんユルサナイゾ！　母さん塩もってコイ！　まあ、お父さん、少しはカルディエの話も聞いてあげて、ええい、うるさい、母さんは黙っていナサイ、あれえ、ご無体な」

妙な寸劇を始めるカルディエ。上空で立て続けに光る雷がライトアップ代わりか。ヴァニタスは完全に眼中にない様子だ。

毎度の事ながら、この展開に至れる思考の過程を本気で知りたいと、ヴァニタスは呆れて肩を落とした。

事態好転には行動あるのみ。気を取り直し、冤罪を晴らすために異議を申し立てる。

「待って待って、どこまで飛躍するの！　ストップ、ストップ！」

「でも、ドウシテモと言うなら、責任を取って……おう？」

「ようやく止まった……えっとね、僕はカルディエに対して、そん

な変なこと考えてないよ。こんな丈夫な扉壊せるなんて凄いなあって、感心してただけだから」

「ちぇ、なあんだ、そうデスか。それならそうと早く言いやがって欲しいなー」

寸劇を止め、腕を組み、踏ん反り返るカルディエ。比較的近くで生じた大きめの雷は、堪りかねた天からの突っ込みに違いない。

「壊した人の態度じゃないよね、それ……」

至極真っ当な意見も、機械仕掛けの少女には告げるだけ無駄だった。

それどころか、カルディエは再びヴァニタスに詰め寄り、その薄い胸板に鋼鉄の指を突き立てた。

「壊したのは不可抗力ってやつなー。ゴミで塞いだやつが悪い！」

「あの、その話なんだけどさ、前に渡したメモは見てくれた？」

カルディエが目を瞬かせた。

傾げる首から、きりきりと音が鳴る。

「……カルディエ、その時の気分で処理室で寝るじゃない。だから、処理室に廃棄物入れる日程組んだから、該当する作業単位の時は処理室に入らないでねって、メモに」

「見てないっ」

「……」

沈黙が生まれる。雷雲もこの時ばかりは空気を読んだか。

自分の記憶違いの可能性を試算するも、ヴァニタスの出した解答はそれを否定する。

確かに渡したはずだった。メモを受け取ったカルディエが、コートの胸ポケットにしまうところまで、はっきりと憶えている。

「渡した後、胸ポケットに入れてたはずだけど」

ヴァニタスから大きく後ずさり、慌てて胸ポケットを見る。

そこに大きな穴が開いていたことを、うっかり者の少女は今更ながら思い知った。

おそらく、どこかに落としたのだ。大事なメモを。

カルディエの視線が泳ぎ始める。
「あれ、えっと、その……カルディエは……お、憶えてないデスよ？……憶えてないもん……知らなかったもん……」
言いつつ、そっぽを向いている。この機械は、下手糞ながら嘘までつけるらしい。実に迷惑な高機能であった。
ヴァニタスは、手袋をはめた手で自分の鼻を掻いた。
「そっか……じゃあ、作業日程、新しくメモに書いておくね」
と、優しく微笑む。
古びた筆記具で、海草から作った合成紙のメモに作業日程を書き込んでいく。筆先の動きに一切の淀みは無い。
カルディエを責めたり、勝ち誇るようなことをするつもりはなかった。自身の冤罪が晴れれば充分だから。
メモを手渡すと、ヴァニタスはアトラク管理のために内部に戻ることを告げ、眉尻を下げたままのカルディエに背を向けた。
残されたカルディエは、橋の縁に立つ冷光灯にとぼとぼと近づくと、つま先で根元を軽く蹴り始めた。
嘘どころか、拗ねることまでできるのだから、いよいよ機械の領域ではない。
冷光灯に呟いた「ごめんね」の一言を、本来聞かせるべき相手にいえないまま、カルディエは独り冷光灯の足下をうろうろとし続けた。
上から降り注ぐ蒼い光が、素直におなりと、うつむく少女の肩を照らしている。
その光の中で、いくつの円を描いただろうか。
機械仕掛けの足が止まった。
表情は無し。全身は微動だにしない。凍てつく時の中に取り残されてしまったかのように、静かに、静かに、カルディエは一切の動きを消しさってしまっている。
突如、甲高い駆動音と共に、頚椎部のアクチュエーターが動き、カルディエの顔を海へと向けた。

同時だった。

橋の下から伸びた触手が、冷光灯ごとカルディエに巻きついたのは。

第一章　６４８－１９２６　『スウィートホーム』

カルディエが立つ白き贖罪の橋（ポン・デュ・ガール）は、海面から平均５０メートルの高さに建設されている。生身の人間が落ちれば、橋に戻るのは絶望的なまでの高さだ。空でも飛ばなければ、海面から橋上に登ることなど、どんな生物にも不可能だろう。

だが、何事にも例外はある。

その例外が、機械仕掛けの少女を捕獲していた。

カルディエの両腕ごと上半身に巻き付くのは、粘液と黒い海水に濡れた赤黒い触手。太さは人の太ももほどはあるだろうか。渦巻くしわを円形に折りたたんだような吸盤が、触手の片側にずらりと規則正しく並んでいる。

これが海から伸びているのならば……最低でも５０メートルは下らないということになる。

長さ５０メートルの触手を操る怪物がいる。それがこの世界なのだ。

強靭な筋肉で作られた触手が、少女と冷光灯を締め上げる。と同時に、無数の吸盤がカルディエの体に吸いつき、捕獲をより確実なものにしていく。

みしりと金属の歪む悲鳴をあげたのは、果たして冷光灯か、カルディエの体か。

「お前、カナロアな。でもカナロアにしては、ちょっと小ぶり？」

状況を理解していないのか。カルディエは唇を前に突き出し、どこか不満気に呟いた。締め上げられている苦痛などおくびも出さない。むしろ物足りないとでも言うような表情だ。

「まだ子供か。お前ー」

カルディエの両腕が甲高い駆動音を吐き出す。

次第に増す音量。合わせて触手が痙攣し始める。

「なかなか頑張るな。子供でも、これは身がしまってそうデス」

カルディエが微笑んだ。
駆動音が可聴域を超える。瞬間、鋼鉄の両腕は触手の束縛を打ち破った。単純な力比べで、巨大な触手をたやすく上回ってみせたのだ。
カルディエが身を沈め、触手の輪の中から抜け出す。触手は慌てて束縛しなおすが、捕らえられたのは冷光灯のみ。
即座に触手を引き戻さなかったのは、怪物にとって大きなミスであった。
触手の横に立つカルディエ。その右手は指先を揃えられ、高々と振り上げられている。
満面の笑みは、心からのものだった。
「いっただっきまーす！」
大気が裂けた。
カルディエが振り下ろした手刀の軌道上にあったものは、形のあるなしを問わず切り裂かれた。大気も、強靭な触手も。
先端を失った触手がのたうち回る。ヘモシアニンの混ざった青い血を振りまきながら、凄まじい速さで橋から撤退。襲撃より迅速な動きだ。
カルディエが橋の縁に立ち、海を覗き見た。
遥か下の海に、長大な八本の触手を恨めしそうに揺らす巨大な生物が浮いていた。先端を数メートルにわたって切り落とされた触手が、黒い海に青い模様を刻んでいる。
カルディエが笑った。舌なめずりをしそうな勢いだ。
自分が狙った小さな獲物が、実は圧倒的な捕食者だと気づいたか。軟体の魔物は海中へと身を翻し、大量の泡と青い模様だけを海面に残して消えてしまった。
「もっと大きくなってから、またこいな？　な？　そしたら、今度は丸ごと水揚げしちゃるから」
ひらひらと手を振り、消えた魔物を見送る。魔物が聞いたら「誰が二度と」と言うに違いない。

いまだ冷光灯に巻き付く触手を無理やり引き剥がし、カルディエは表面を撫で始めた。

３メートルは優に超える触手全体をまさぐり終えると、機械仕掛けの少女は数度うなずき、慣れた動きで肩に担いだ。

「いいタイミングで、いいものが手に入ったデス」

妙に音程のずれた鼻歌を海風に残し、機械仕掛けの少女は鉄の蜘蛛へと戻っていった。

今作業単位で延長した橋の長さは１８４．２メートル。起動前に故障箇所を直した結果、平均値にまで作業速度を回復することが出来た。

最近の作業速度に、大幅な遅れが出ていたことを懸念していたヴァニタスだが、今作業単位の結果を見る限り、ひとまず安心できると判断したのだろう。タッチパッド式の作業日誌に、久方ぶりの『効果測定・規定数値達成』の印を記した。

アトラクは作業を終え、再び眠りについていた。作業単位が更新されれば、また自動的に橋の延長に取り掛かる。それまでは、カルディエもヴァニタスも休憩することができる。

アトラクの作業が終わるのと同時に食事の準備を始める。二人で決めた毎日のスケジュールだ。

コックの役目を担うのはカルディエだ。たまにゴミ山で寝起きする彼女だが、調理前には必ず大型浄化筒に入ってパーツの隙間まで洗浄するので、料理に凄まじい悪臭がつくなどという、噴飯ものの事態にはならない。また、彼女自身は機械ゆえ有機物の摂取はしない。あくまで食事はヴァニタスのためだけのものなのだ。

故に、多くの量は必要としない。

生きるためには、だが。

アトラクのコンテナユニットは三層に分かれている。最下層が物

資格納庫。中段はメンテナンス・ラボ、そして最上段は拘束技師の居住区となっている。

少年と少女は、居住区の一室である食堂で、向き合って座っていた。

「……なにこれ」

パイプ椅子に座るヴァニタスの視界を埋めたのは、普段の十倍量はあろうかという、完全栄養食の雄大な姿であった。合成樹脂の大皿に親の仇のように盛り付けられた、このマッシュポテトのような茶色の食べ物は、明らかに一度での完食が不可能な量なのだが、盛り付けた本人は何を思って、それを実行に移したのか。

「あの、カルディエさん？」

合い向かいに座る専属コックに、今回の珍事の意図を尋ねる。

返答は「お詫びの印なー」と笑顔を乗せて、親しげに。

胸が高鳴って、ヴァニタスの空腹が一瞬意識から消し飛ぶ。

「ずるい……」

ヴァニタスは、そうきたかと胸奥で溜め息を漏らした。

報復なのか謝罪なのか。どちらであっても真正面から受け止めるのが男の役目と、風車に挑みかかる騎士さながらに、果敢にも単身での攻略を試みることにする。

千里の道も一歩から。まずは一口目をスプーンで運ぶ。味はいつも通りだった。いや、いつもより旨いとすぐに気づく。量だけでなく、味にも手間をかけてあるのだ。もしかしたら、いつもと違う材料が加えられているのかも知れない。

ヴァニタスの感想は正解であった。奥のキッチンに行けば、その『いつもと違う材料』の残骸が、ぴくぴくと横たわっているのが見れただろう。

見なかったのは、ある意味で幸せと言える。

「美味しい？」

カルディエが少し不安げに聞いてくる。上目遣いが非常に可愛らしい。その素振りと料理の味で、ヴァニタスはこの殺人的大盛りが、

少女にとって偽りのない謝罪の印であることを理解した。
不器用で、少々ずれた謝罪。だが、自分に向けられた、純粋な心の象徴。
となれば俄然やる気が出てくるのは、若さの特権、青春の証である。
美味しいよと微笑み、調子に乗って速度を上げる。
カルディエは、心底嬉しそうにその様子を眺めていた。
しかし、気合で胃袋の容量が増大するわけではない。開戦5分が経過し、スプーンの動きが鈍くなり始めた。予想以上に攻略対象は難攻不落だ。
ささやかな手助けと二杯目の水をコップに注ぐと、カルディエはテーブルに頬杖を突いて、ヴァニタスの名を呼んだ。
「ん、何？」と、咀嚼も中途半端に口内のものを飲み下して答える。
「進路上にある非公式浮導体のことなー」
スプーンが動きを止めた。満腹中枢が働きはじめた脳裏に、橋の先に待ち構える浮島がよぎる。
「あれか。何か動きがあった？」
「んーん。何も。今作業単位で直線距離にして15キロ切ったんで、全既存チャンネルによる送信、明滅信号、指向性音波通信、とにかく片っ端からブチカマシタけど……」
「返答なしと」
「うん。非公式浮導体に知的生命体がいるのは稀だけど、あれだけデカイ浮導体も珍しいからなー。何かいるかなと思ってたんだけど、可能性は限りなくこれデスよ」
カルディエの左手の指がテーブルに円を描く。
ヴァニタスの青い瞳が、指先の動きを追った。おそらく可能性は「0」という意味だろう。
「僕もそう思う……けど、アトラクの進路変更しても当てもないし、どちらにしろ、あの浮島に接触してみるしかないかな」
「レアメタル採取できるかもなー」

「まあ、あれば、ありがたいけどね」
　現在、保存物資は６００作業単位分を確保してある。逼迫した状況というわけではない。むしろ余裕がある状態だ。しかし、自然現象を使って頻繁に補給可能な水や電力とは違って、建築材料や食料の補給は、それらを有する存在と遭遇できるかどうかにかかっている。遭遇の予測ができない存在に重要物資の補給を頼る以上、巡り会えた幸運を最大限に活かすのは、至極当然のことであった。
　口に出さずとも互いに心得ている――１５００作業単位にわたり共に生きてきた二人の、暗黙の了解であった。
「非公式浮導体でめぼしいものが手に入らなかったら、機甲塔群から拝借するのも手かな。どう思う？　カルディエ」
「うにゅーん。周囲の機甲塔群は、どれも廃棄封印かまされてたからなー。自己保存機構が生きてりゃ使える部品とかあるかもデス。でも型式が２００番台の塔ばっかだし、建築材料の補給はちとキビシーかもなー」
　と言いながら、つまらなげに、ツインテールの毛先を鼻の下に当てて髭の真似事。何の意味があるのか。
「そっか。結構大規模な機甲塔群だけど、あまり使えるものはないのかな。アトラク用の部品ぐらいか」
「うん。ただ、使える使えない以前になー。ちょっとなー」
　珍しく歯切れの悪い物言いに、ヴァニタスの耳がぴんと立つ。
「気になることが？」
「あるなー。まず、ポゼッショナーに侵蝕された形跡がまったくナッシング」
「え、すると侵食抗体処理されてるわけ？　旧式の機甲塔が？」
「接触して調べんと、何とも言えナッシング。それにな」
　まだあるのかと、唾を飲み込んでカルディエの次の言葉を待つ。
「機甲塔群と非公式浮導体の位置とか変すぎ。なんか、迎撃用の陣形張ってるみたいデスよ」
　陣形と言う言葉に不穏な響きを感じて、ヴァニタスの尻尾が震え

た。
　ろくでもない不安がよぎる。自分達は、今、その陣形とやらのど真ん中にいるのではないだろうか、と。
　不安を解消すべく、自分には彼女がいると言い聞かせながら、首を振った。
「少し、様子が違うわけか。カルディエの出番がないに越したことはないけど、一応、警戒段階をあげておこう。頼んだよ、カルディエ」
「アイアイナー。てけとーにやるから、任せるといいなー」
　頼もしいのか頼もしくないのか、よくわからない返事に苦笑がもれる。
　気を取り直し、ヴァニタスは目の前の要塞に再度スプーンで挑むことにした。

　開戦から２０分が経過――

　勝敗は決した。
　敗戦は最初から分かっていたことだが、ここまで酷い戦況になるとは、流石のヴァニタスも予想していなかった。
　調子に乗りすぎたと後悔するも、時すでに遅し。六割近く残った無邪気な食料兵器を前に、テーブルに突っ伏して全面降伏の意思を示す猫の獣人。病的に痙攣している彼の背中を、殺人コックが優しくさする。
「おー……ヴァニタス、ちょっとは考えるといいなー。気持ち悪くなるほど食べるなんて。何事も『ぼとぼと』が一番と昔のエロい……違った、偉い人も言ってたなー」
「ほどほど……だから……あと、ほどほどじゃない料理を出した人の……台詞じゃないよね、それ……」
　息も絶え絶えな突っ込みを律儀に入れて、ヴァニタスは食堂を後にした。

海藻類から合成された胃腸薬を飲み、自室のベッド――――当然、清潔な普通のベッドである――――で、2時間程休んだおかげで、ヴァニタスの胃袋の嵐も、どうにか過ぎ去ってくれた。まだ気分は優れないが、アトラクの各部点検等、やらなければならない作業後処置が残っているので、あまり長時間休憩しているわけにもいかない。

具現化工学、機械工学、電子工学など技術系の専門書が山積みになったデスクから、アトラクの点検表を引きずり出し、チェッカー類の入った工具箱を物置と化したクローゼットから取り出す。

商売道具を小脇に抱え、錆の浮いた扉の前に立つと、ヴァニタスの生体信号に反応して、重量のある扉が静かに右へとスライドした。

やや重い足取りで、薄暗い通路へと踏み出す。

天井を走る送電用、通信用など各種コード類の間から、生えるように設置された小型の冷光灯によって、申し訳程度の光が通路を満たしている。

薄暗いのはこの通路に限ったことではない。いくつかの部屋を除けば、アトラク内は総じて薄暗く、大型冷光灯のある橋のほうが明るいぐらいだ。

しかし夜目の効く二人には、月明かり並の光があれば充分だった。余分な明かりのために、無駄にエネルギーを使う必要もないため、光量を絞っているのだ。

この蜘蛛に蓄えられた物資もエネルギーも無限ではない。節約は、この世界での生存に必須の行為なのだ。

夜道のような通路を一人、ヴァニタスは進む。点検のために動力室や資材加工制御室、有機再処理施設に立ち寄り、点検表に問題なしと書き込んでいく彼の顔は、少年でありながらすこぶる理知的で、豊富な知識と高度な技術から生まれる驕りのない自信に溢れていた。

アトラクは巨大な建設機械であると同時に、ヴァニタスとカルディエの生活拠点でもある。その管理を任されているという重責が、

彼を鍛え上げてきたのだろう。妥協を許さない姿勢は完全に職人の域に達している。

集中力を低下させることなく、主要設備の点検作業を終えたヴァニタスは、外装及び駆動系の点検に移るべく、一度自室へ引き返した。

自室前の通路に差し掛かった時である。

ヴァニタスの大きな耳が細かく前後に震えた。

「これは……」

猫目の瞳孔が円を描いた。

白い体毛を震わせる不規則な重低音に、ヴァニタスは言い知れぬ不安を覚える。

久方ぶりの感覚。猫の知覚能力が察知したのは、明確な敵意。

ここの機甲塔群の配置が陣形のようだとカルディエは言っていた。どうやらそれは的を得ていたらしい。

慌ててヘッドセットのスイッチを入れ、カルディエと通信を行おうとするも、ノイズが聞こえるばかりで正常に作動しない。

「磁気嵐……？」

天候観測の数値から、そのような兆候は読み取れなかった。だとすれば、人為的なジャミングの可能性もある。

その発生源として有りうるのは、一つ。

ヴァニタスの瞳孔が大きく開いた。

カルディエは、どこか。

思って、考えるまでもないことだと頭を振った。警戒してくれと頼んだのは自分ではないか。

荷物をその場に置きざりにすると、ヴァニタスはカルディエが無事であることを祈りながら、メインハッチへと駆け出した。

第一章　６４８－１９２６　『報復塔』

巨大なアトラクの右側面。

外へ出るための最下層ハッチは、そこに備えられている。主に搭乗員の出入りに使用されるため、大きさ自体はアトラク内部施設のドアとほぼ変りない。しかし、外からの侵入を拒む重要な存在ゆえ、その分厚さと頑丈さは外部装甲に引けを取らない。

重い扉の隙間から圧縮空気が吹き出た。開門の合図である。

上下から扉に突き刺さる固定シャフトが引き抜かれ、開閉装置の駆動音に合わせ、中央から左右にスライドしていく。動きは緩やか。開閉装置の出力が低いわけではない。それほど扉の重量があるのだ。

たっぷり五秒かけ、ようやく人一人が通れるぎりぎりの隙間ができた瞬間だ。

その隙間から、何かが飛び出した。

まだ開ききっていない扉から、勢い任せで飛び出たせいだろう。外に出た瞬間、それは無造作に置かれていた資材に足をとられ、盛大に転倒した。

二転三転、まるで毛玉のおもちゃが転がっているようだ。

転がりきった先で、大の字。仰向けになって目を回しているのは、柔い毛に覆われた獣人の少年――ヴァニタスであった。

アトラクの前で待機していたカルディエが、微かに眉間にしわを寄せている。背後から煌々と照らされる照明が眩しいわけではないだろう。

幸い大した傷もなかったようで、ヴァニタスはよろめきながら立ち上がった。

相棒の無事を確認した紅い瞳が、前に視線を戻す。

射抜くのは、己が前方の光景、その全て。あるのは夜の闇に沈む海、数多くの塔、そして浮島。

機械仕掛けの少女は、右手で身の丈の四倍はある単分子鋼の支柱

を掴んでいる。武器代わりといったところか。
支柱はキログラムではなく、トンで表すべき重量の物体だ。それを手荷物感覚で携えるこの小柄な存在は、果たしてヴァニタスの目にはどのように映っているのだろうか。
頭を振って目眩を打ち消し、ヴァニタスはカルディエの背を見た。
カルディエは両足を大きく開き、前傾姿勢で身構えている。プレデターが獲物に襲い掛かる寸前の姿だ。
では、獲物はどこにいるのだろうか。
「カルディエ、今の音は」
痛打した膝の痛みに堪えつつ、後方からカルディエに問う。
カルディエは「まだ、判別できない」と低い声で答えた。
「カルディエも、アトラクの上で踊りながら警戒してたけど、はっきりとは視認できてないなー。一応、簡易シールドは張っておいたから、何か攻撃があればシールドに負荷がかかってるはずデス。でも、簡易シールドに反応はナッシング。衝撃があったのは間違いないデスが」
「衝撃……」
何故、踊りながら警戒していたのかはあえて聞かず、ヴァニタスはカルディエの横に立って、同じように前方を見つめた。
見つめた先には、薄い膜のようなものがある。アトラクの全方位を覆う、有機ショックアブソーバーシールドだ。半透明のため、向こうの景色が少しだけ霞がかって見える。
かすんだ景色の中で乱立する塔は不気味の一言。墓場から這い出す、幽鬼のごときおぞましさを醸し出している。
細い塔、太い塔。傾いた塔、半壊した塔。押し並べて気味が悪い。滅びの陰惨さを見せ付けるためのオブジェだと言われても、おそらく信じられるだろうなと、ヴァニタスは唾を飲んだ。
「事前のスキャニングで、生存している塔は見つからなかったと思うんだけど」
「うん、なかったな。生きている塔はなー」

「生きている……」
ヴァニタスの耳が前後に震える。
「まさかとは思うんだけど、報復塔が仮死状態から……？」
「可能性は、それが一番でっかいなー。でも、だとすれば、何でカルディエ達が『報復』されるかってことなんだけど」
刹那である。
カルディエ達の前方およそ2キロの地点に立つ塔の一つが、まばゆい閃光を放ったではないか。
ジャガーノートは一瞬で悟る。簡易シールドでは防げぬ一撃であると。
カルディエの右手が弩弓と化す。
橋の先端からおよそ２００メートルの空中にて、轟音と火花が花開いた。柱の打ち出した「何か」と、カルディエが投擲した支柱が衝突したのだ。双方の宿す巨大なエネルギーが、衝突により一部熱エネルギーへと変換され、衝突地点の気体が急激な熱膨張を起こし、不可視の破壊者たる衝撃波を生み出す。
簡易シールドは支柱が突き破り、効果を失っている。衝撃波を阻むものはない。
カルディエとヴァニタスに衝撃波が迫る。放置されたままの資材は吹き飛び、大半が海へと落ちていってしまった。
重量のある資材さえ、この有様。幼き二人の体など、烈風に吹かれる木の葉に過ぎない。
しかし、二人は無事だった。
投擲後、すぐさまカルディエがヴァニタスに覆いかぶさり、自分達を完全に包む電磁シールドを展開していたのだ。衝撃波は完全に無力化され、ヴァニタスの毛先すら揺らすことなく、闇に消えた。
ヴァニタスが状況を把握する間もあらばこそ、カルディエが跳ね起きて、再び塔と対峙する。
闇の中、塔に動きはない。この猶予をカルディエは活かす。
「前方距離２キロ、非公式報復塔を敵対性干渉体に認定する！　ヴ

ァニタス拘束技師は速やかにアトラク＝ナクアへ避難！　同時にアイギス性硬化フィールドを展開、報復塔の攻性干渉に対する防護を整えよ！」

カルディエの声色は、今までの気の抜けた雰囲気を微塵も含んでいなかった。声に乗せて放出された鋭い気迫が、尻餅をついたままのヴァニタスを震わせる。

「早く！」

鉄の乙女に促され、少年技師はアトラクへと駆けていった。

守るべき対象が避難を完了したことを見届けると、鉄の乙女はコートの袖を肩口までめくり、両腕を横に突き出した。

うねる紫電が彼女の体を撫でる。回路に住まう電子の蛇が少女の意思を力に変え、無慈悲な暴力を小さき体に宿すための御前（みさき）となる。

絶大な力が姿を現し始めた。

生木を砕く音に酷似した起動音を皮切りに、カルディエの両腕が形を変える。長方形のパーツを構成の主体要素とした、不穏なる空気をまとった兵器へと。

紫電が走ったのは一瞬。変形に要した時間も同様に。

黒い長方形の砲身と化した両腕が、不埒な塔に向けられた。先端に開いた直径3センチの銃口は、どれほどの威力を奥に秘め置いているのか。

構えて数秒。報復塔の追撃はない。

初弾で仕留められなかったとは思ってもいない――わけではないだろう。試射である初撃の効果から照尺量を探知し、本射となる次射以降の命中率をあげるため、観測行動に重点を置いたに違いない。カルディエはそう考えていた。

――あるいは、攻め手を変えるつもりか。

カルディエは油断なく、自身に搭載された全ての感覚器を最大感度で起動し、待ち構えた。

カルディエの知る限り、型式２００番台の報復塔に備えられた水平攻撃兵装は、混合気体式多薬室砲のみ。これは混合気体の爆発で

弾丸を高速発射する兵器だが、その仕組みのため、どうしても発射直前に気体注入音がする。もし、その音が聞こえたら、迷わず先制攻撃を仕掛けるつもりであった。反応速度と兵器の弾速に、圧倒的性能差があるからこそ選択できる作戦だ。

閃光が走った。

塔からではない。上空からだ。

光源は雷。だが、振ってきたのは雷鳴だけではなかった。

カルディエの身を打つ冷たい大粒――雨である。

少女の口から舌打ちが漏れる。

アトラクの気象観測システムは、1時間以内の雨を予測していない。

「まさか……」

カルディエが、自分の置かれた状況を危惧する。

報復塔は、雨が降るのを待っているようだ。おそらく、何らかの策のために、強制的に降雨を呼び起こす「何か」を行ったと思われる。

カルディエにしてみれば、相手の出方をもっと探りたかったが、これ以上後手に回るのは危険性が高い。情報収集にかまけて返り討ちでは、話にもならない。

照準を定める。目標は報復塔、その中心付近。

電磁の砲身と化したカルディエの両腕が、圧倒的な暴力を開放した。

十字の閃光を銃口から放ち、電磁投射砲（レールガン）が咆哮をあげる。

小型ながら大型戦艦の艦載砲クラスの威力を持つ、ジャガーノートのみに搭載を許された過剰殺傷兵器（オーバーキルウェポン）。それが最大出力で、二門同時に砲弾を放った。

空気の爆裂する音を置き去りに、撃ち出された超音速の弾体が報復塔に命中。

そして轟音が闇夜を震わせる。

爆炎と破片の乱舞。黒い海へと無数の残骸が落ちて消え、残った

半身は黒い煙をもうもうと拭き上げる煙突と化している。
轟音は、報復塔内部で起きた強大な爆発によるものであった。爆発の威力は尋常ではなかったようだ。直径３０メートルは下らない金属製の塔が、半ばから爆ぜ飛んでいる。
「おう、さすが具現連鎖反応式ＨＮＩＷ弾体な。報復塔もイチコロ」
自身の成果に満足するも、油断は禁物と砲身を構えたまま、警戒態勢は崩さない。
報復塔が消えた今、攻撃能力のある機甲塔は存在しないはずだ。しかし、この黒き原罪（ハマルティア）の海では、何が起きるか分からない。カルディエは、そのことをよく知っている。長い、とてつもなく長い旅路の末に、いまここに存在しているのだから。
そして、その警戒は正しかった。

いまだ終わらぬ破壊の余韻に、奇妙な音が混ざる。
薄氷を割る音に酷似した高音だ。当然、海に氷など張ってはいない。
音は、滅ぼされた塔から、少し離れたところで生まれていた。
カルディエの紅い瞳が即座に音源を捉える。
傾きながら海に立つ塔の一柱。流線型を主体とした有機的なデザインの塔が、表面から崩れ去っている。
その崩壊に、どのような意味が。
「爆発の衝撃で――――」
至極まともな結論を口に出しかけたカルディエだったが、視界の端に映ったものが、それを否定する。
『それ』に目を奪われたのは、必然だった。
「うそ……」
驚くのも無理のないことであった。彼女の膨大な経験の中にも、該当するものが存在しない現象が起きたのだ。
今しがた、自分が破壊したはずの物体が、カルディエの視界の中心で万全の唸りをあげていた。

「元通りって……どうして！？」

崩れ去ったはずの報復塔が、完全な姿を取り戻している。何が起きたのか推測するも、二基の補助電脳との三者推論でも答えが出ない。

しかし、このまま放置しておく訳にもいかない。

蘇るのならば、完膚なきまでに滅ぼすのみ。カルディエの両腕が、再度閃光の十字架を放つ。

先ほど同様、決着はあっさりと――――

つかなかった。

弾丸は報復塔の表面を滑り、大きく弾道を逸らされたではないか。本来の目標を逸れた弾丸は、後方に立つ古びた廃棄塔に命中し、それを完全に粉砕しつくして消えた。

「代理犠牲塔！？」

カルディエが叫ぶ。視線は、報復塔の右脇に立つ細い塔へ注がれていた。

代理犠牲塔――――自分をスレイブ化した対象への干渉を肩代わりし、慣性制御により無効化する機甲塔の一種である。

だが、これはありえないことだった。

機甲塔は、機甲塔をスレイブ化できない。さらに加えれば、先ほどまでその代理犠牲塔も『死んで』いたはずなのだ。

一気に二柱の機甲塔が復活した。そして、本来機甲塔の仕組み上、成し得ない共同作業まで行って見せている。

ここの機甲塔は、本当に墓場から這い出す幽鬼なのか。

事実は受け入れがたいが、カルディエには驚愕に戸惑う暇は無かった。報復塔が閃光を発したからである。

カルディエの右手が閃光に合わせて三度目の咆哮をあげた。

撃ち出した弾は迎撃用のクラスターシールドバレット。射出後、設定された距離で弾丸が分散展開、３６基の浮遊電磁起点装置による直径１０メートル前後の電磁防護膜を形成し、物理的な攻撃を打ち消す防御弾頭だ。

カルディエと報復塔、二者の中間点である海原の上空で、大規模な爆発が起きる。報復塔が放った弾丸の運動エネルギーが大きすぎて、一撃でシールドが崩壊したのだ。

爆発の赤い光が消える間もなく、報復塔は爆発を煙幕代わりに第三射、四射と畳み掛けてきた。

カルディエは先手を打っていた。ありったけのクラスターシールドバレットを連射し、展開しておいたのだ。

二つの弾丸が二つの盾と打ち消しあう。しかし残された盾の数はまだ百以上。広く、幾層も布陣を敷き、報復塔の射角からアトラクを完全に防御している。

こちらからの攻撃も出来ないが、逃走のための時間は稼げる。相手の得体が知れない以上、真っ向から立ち向かうのは得策ではない。

『ヴァニタス、聞こえるか？』

通信回線を開き、カルディエが電脳から直接問いかける。

「聞こえるよ。物凄い爆音がしたけど、カルディエ、一体何が起きてるの？」

『ここの機甲塔、おかしいデス。とりあえず、安全圏まで撤退な。準備して』

「わかった」

通信を終え、前方に集中する。撤退に要する時間を最長として見積もっても、シールドが先に力尽きることはないと判断した。

しかし、それでもカルディエが懸念していることが一つだけあった。

――――最初の衝撃は一体……

悩むカルディエをよそに、五射、六射と立て続けに追撃が飛来する。それも同様に盾と相殺。シールドの守りは磐石に思える。

だが、変化は七射目の直後に起きた。

遂に豪雨と強風が、カルディエたちの周囲で猛威を振るい始めたのだ。

アトラクの気象観測システムが、一時間以内の予報を外すことは

考えられない。間違いなく、この雨は人為的なものだ。
カルディエの整った顔を、大粒の雨が濡らし尽くす。頬を流れる雨粒は、風にあおられ、斜めに流れ落ちるほどだ。
まとまった雫が、柔らかい唇に触れた。
唇を濡らす雨を舐めた瞬間、カルディエは強く苦虫を噛み潰した。
薄紅色の唇に力が篭る。空を見上げる表情は雨に濡れ、忌々しげに歪んでいた。
――雨に電磁遮断物質が混じってる……最初の衝撃は、これを雨に混ぜるために、何かを打ち上げた時の衝撃波か！
やられたと後悔するも、既に罠の中。
カルディエの心中を悟ったかのように、報復塔の閃光が絶妙の機を得て、今までにない明度で周囲を白く塗り変えた。
三連射――人間の目では、一撃にしか見えない速度の三連射だ。
三つの光が、まったく同じ弾道を駆け抜ける。
盤石の盾は、毒雨により侵され、脆弱なる薄板へと成り下がっている。もはや全ての脅威を防ぐことあたわず。
爆炎の花が黒き海の上で咲いた。
数は二つ。報復塔から放たれた弾丸の数は――
「やっ……！」
カルディエの叫びを衝撃波が切り裂き、小柄な身体を薙ぎ倒して、硬い橋へと乱暴に叩きつけた。
防ぎ損ねた超音速の弾頭は、彼女の頭上を越えその向こうにあるアトラクを直撃した。
ここまで計算のうちか。アトラクの最も堅固な待機時防御機構は、撤退移動のために解除されている。
蜘蛛の頭部、右側面装甲がはじけ飛ぶ。内部機構まで弾丸が到達したらしい。吹き出る機械の油は黒い血飛沫となって、アトラク自身を、そして橋の上で転がるカルディエを染める。
毒雨により、電磁の盾は全て効果を失って、海へと消えていた。
今、砲弾の直撃を受ければ、アトラクは完全に破壊されるだろう。

しかし、三連射は報復塔にとってもオーバースペックとなる攻撃だった。内燃機関の暖機運転のような低い音を立てるばかりで、追撃に及ぶことが出来ない。

それも一時的なものに過ぎなかった。次弾の発射準備は、塔の内部で着々と進んでいる。準備が完了した瞬間が、アトラクの、そして少年と少女の、旅の終焉となる。

用意周到に張られた罠の勝利。熟練のチェスプレイヤーのように、次第に相手を追い詰め、あとはとどめを刺すだけ。２００番台の機甲塔とはとても思えない、高性能ぶりだ。

カルディエが身を起こし、塔を睨んだ。

――混合気体が空になって、補充してるのか。

歯軋りが漏れる。

――よくも、やってくれたな。

カルディエが立ち上がる。

白い顔に張り付いた機械油が、雨に流され黒い筋を描いていた。目元から頬まで、重力任せに一筆の紋様。彼女の憤怒を表す紋様だ。

様子を探るなどという悠長なことをしていた己に、腹が立った。報復塔を憎む暇すらないほどに、己への殺意が湧き上がる。

アトラクとヴァニタスを危険に晒してしまった失態に、ジャガーノートは、ジャガーノートたる本性を抑え込む事をやめた。

カルディエの右手がさらに形を変える。一段と大きく不快な金属の不協和音を奏で、一段と大きな破壊の象徴を右手に現す。

音叉に似た形状の黒い兵器。カルディエが『ダンス・マカブル』と呼ぶ、限定禁忌兵器だ。

それを高く掲げた。天衝く塔を真似るように、高々と。

対戦相手をチェス盤ごと滅ぼすような存在には、策を弄したところで意味などないことを、今から思い知らせる。その宣言だった。

宣言が届いたか。

報復塔から甲高い音が鳴る。混合気体の充填が、急ピッチで行わ

れている音なのだが、恐怖のあまり叫び声をあげているようにも聞こえる。隣に立つ代理犠牲塔も限界まで稼動しているが、こうなってはその努力も無駄な行為でしかなかった。

カルディエの体から湯気が立ち上り始めた。体を濡らす雨が蒸発している。内在する大量のエネルギーが、ほんの僅かだけ漏れ出し、水の分子を狂い踊らせている。

狂気の踊りは、頂点に達したのだ。

その事実を悟らせるため、小さき破壊者の唇から、抑揚なき判決が紡ぎだされる。

「理の闇と共に……狂い踊れ」

振り下ろされる、黒色の音叉。

小癪にもジャガーノートに挑んだ旧き二つの塔は、この瞬間、滅びを決定付けられた。

そして終焉の鎌は音もなく、全てを刈り尽した――

第一章　６４８－１９２７　『彼方からの絆』

何かが頬を濡らしている。
刺すように冷たい。幾度も幾度も、規則正しく、頬の同じ位置に落ちては、柔らかい猫の毛の合間に染みこんで、少年の肌をゆっくりと冷やしている。
――泣いているの？
闇の中で、ヴァニタスが呟いた。
自分が泣いているのだろうか。誰かの涙が、頬に落ちているのだろうか。
分からない。
だが、見える。
闇の中に、孤独に泣いている者の姿が見える。ぼんやりと陽炎のように浮かぶ輪郭から、聞き覚えのある泣き声が聞こえる。
――あれは。
驚いたヴァニタスは、闇を肺に吸い込んでしまった。
肺から心臓へ、心臓から全身へ。闇が彼の体と同化して、彼を闇そのものへと作り変える。細胞膜を透過し、染色体をほどき、ヴァニタスという個の情報を霧散させ、闇はヴァニタスの全てを置き換えてしまった。
だが、彼の意識は消えなかった。それどころか、闇となった彼には全てが見えた。全てを知ることが出来た。
光の届かぬところに闇は存在する。心の中にも、また。
――君は……
一歩、闇が歩み出る。輪郭が、進んだ分だけ鮮明になる。
――君は、ずっと……
闇の獣人は、ゆっくりと、すすり泣く者に暗黒の触手を伸ばした。

頬に落ちる無数の刺激が重なり、大きな波紋となって、床に倒れるヴァニタスの意識を覚醒させた。

跳ね起きて、周りをみる。部屋は暗く、床にはガラス片が散らばり、壁の配電盤やコンソールから火花が散っている。頬を濡らしていたのは、天井の水冷パイプから漏れた冷却水だった。

記憶が飛んでいる。何をしようとして、何が起きたのか。気絶している間に、何か恐ろしい体験をした気がするが、それも思い出せない。

しかし、消えかけた記憶の一部が、周囲で瞬く火花によって呼び戻された。

報復塔の攻撃。カルディエの指令。防御解除と共に後退開始。その瞬間、強い衝撃が……

「まさか……」

起き上がってコンソールに歩み寄るも、操作など受け付けない状態であることは一目瞭然であった。かろうじて生きているのは、外部カメラのモニターぐらいだ。

そのモニターを見る。

四角いモニターの真ん中で、己の命に等しいものが倒れていた。

コンソールから跳ね散るものより大きな火花が、ヴァニタスの目の奥で爆ぜた。

機能停止していたカルディエを、アトラクのコンテナ中層にあるメンテナンス・ラボまで運ぶのは、体の出来上がっていない少年には重労働もいいところであった。か細い四肢が小刻みな痙攣に悩まされている。指にいたっては、薬物中毒者の禁断症状かというほど震えているではないか。雨に濡れた毛並みをタオルで拭くのにも一苦労だ。

「さすがに重たかったなあ……」

タオルを首にかけながら、ヴァニタスはぼそりと漏らした。

体重は一番気にしていることなー、とカルディエは日常的に漏らしている。確かにある程度は軽量化しておいたほうが、今回のような事態に迅速に対応できるなと、ヴァニタスは今後のメンテナンス方針の修正を真剣に検討しようかと呻いた。

だが、今はそれどころではない。

作業台にて眠るカルディエを憂いを帯びた表情で見つめると、彼は瞼を閉じた。

憂いの原因たる光景が瞼の裏に甦る。

報復塔を中心に、その周囲にあった何もかもが消失していた。カルディエが何をしたのか、その光景が語ってくれた。

――――あれを使ったな。

ヴァニタスはダンス・マカブルの威力と代償を知っている。カルディエが、どのような時にそれを使うかも。

目を開いて、眠る少女の髪をそっと撫でる。しっとりと濡れた緑の髪は、黒き海の緑石巨藻（エメラルド・ジャイアントケルプ）よりも美しく、艶やかだった。

目頭にこもる熱を袖で払い、少年はアトラクの駆動管理室を目指す。

コンテナから連絡通路を通り、駆動機関部など主要設備のある蜘蛛の頭部へ。明かりは半分しか点いていないが、駆動管理室にたどり着くには問題なかった。猫目は伊達ではないのだ。

駆動管理室は報復塔の一撃で深刻なダメージを負っていたが、アトラクの全機能が停止するほどではなかった。故障箇所を調べたところ、建設作業や大掛かりな防御行動は無理だが、駆動系には問題がないことも判明した。

カルディエの機能復旧を行いたいのは山々だが、今回の機能停止を回復するには、アトラクが現在発電できる最大量が必要となる。簡単に言えば、回復作業中、アトラクはただの鉄の置物になってしまうのだ。

この得体の知れない機甲塔群に囲まれたままで、そのような無防備な姿を晒すわけにはいかない。

ヴァニタスは、ひとまず機甲塔群から離れることを優先し、橋を戻るようにアトラクに命令を打ちこんだ。あとは自動的にアトラクが、機甲塔の攻撃範囲外となる安全圏内まで、後退するはずである。

命令は滞りなくアトラクの並列電脳に伝わり、ほどなくして、駆動系の稼動する振動がヴァニタスの体毛を振るわせ始めた。

「これでひとまずは大丈夫かな」

と言って、工具を手に携える。どうやら休む間もなく、アトラクの修理に取り掛かるつもりらしい。

見かけによらず、タフな少年であった。

作業単位が更新されても、ヴァニタスは修理を続けていた。もう二十数時間起きている計算になる。睡魔が襲ってこないわけではないが、持ち前の気合で対消滅させて凌いでいた。

あちらこちらと修理に走りまわり、今は中央集積管理室のメインコンソールに潜り込んで、修理に没頭している。

孤独な作業の音が薄暗い部屋に響いていた。

「よっと……」

コンソール内で、ヴァニタスが呟く。

すると、暗転していたメインモニターとサブモニターの幾つかが光を取り戻した。修理の成果が出たのだ。

コンソール下の配電盤に突っ込んでいた上半身を引っこ抜き、ヴァニタスは意図的に大きく息をついた。

ありあわせの機材と部品で最低限の修理を行った結果、沈黙していた空調や管理システムは復旧できた。しかし、肝心の建設作業機構は稼動不可のままである。身を守るための防御行動も不可。全機能を修復するには、相当の時間と、なにより多くの部品が必要だった。

時間はいくらでもあるが、部品が足りない。調達する必要がある。

「ここまで大きな損傷は初めてだからなあ」

熱暴走、環境保全設備の停止、細かな部品の破損、電球の玉切れ、トイレの詰り、などなど。過去にもトラブルは数え切れないほどあったが、内部機構まで破壊されたのは初めての経験だった。

今回の事態がいかに異常だったか、改めて思い知る。

メインコンソール前にあるオペレーター用の椅子に腰掛け、深くもたれる。そのまま少年は胸の前で指を組み、鼓動が一番感じられる場所に手を乗せた。

脳裏には、これから行わなければいけないことが駆け巡っている。

――まずは、何を行うか、何から行うか、それを決めないと。

今まで通ってきた場所に、役に立ちそうなものはないだろうか。記憶を頼りに探すのでは不確実と、ヴァニタスの指がコンソールを軽快に操作する。

ノイズが走る中央の画面に、過去の経路が出力された。経路には到達時間や確認できた建造物、遭遇した存在などの詳細が事細かに付記されており、ヴァニタスの十代前の拘束技師が残した情報まで、さかのぼって見ることが出来た。

それ以前のデーターは、データー自体存在していないらしい。

疑問に思わないこともなくはなかったが、ヴァニタスにとっては、どうでもいいことであった。彼は、カルディエと橋を作り続けられれば、他に望むもののない人物なのだ。

青の猫目が、しばし画面と睨み合う。最も古いデーターにまで目を通し切る頃には、こめかみに疼痛が走るようになっていたが、痛みを覚えるまで努力した甲斐はあった。

過去に通ってきた海域に、三箇所ほど部品の調達可能な地点が見つかったのだ。ただ、最も近いものでも最大速度で１００作業単位はかかる。重傷のアトラクが、果たしてそこまで持つか、はなはだ疑問であった。

とすると、確実かつ手っ取り早い方法は一つ。

外部モニターに目を注ぐ。

映っているのは黒い海に立つ塔。だいぶ離れはしたが、まだまだ

禍々しい姿を見ることは出来る。
半分以上は消し去られたが、機甲塔はまだ潤沢に存在している。型が旧くとも、使える部品が中に詰まっていることは、想像に難くない。
ただ、いざ近づいた時に、先ほどの報復塔のような機甲塔が生き残っていればどうなるかも、想像に難くないが。
どう動くべきか。
思案に暮れるヴァニタスの耳に、命令遂行を意味するアラートが飛び込んできた。
パタパタと耳をはためかせる仕草は安堵の印。ヴァニタスの表情から少しだけ強張りが消える。
「安全圏に到着、と」
唯一起動する防御機構の有機ショックアブソーバーを展開し、アトラクを覆う。電力を消費しない防御機能だが、高威力の兵器には無意味だ。それでも、ないよりはましだろう。これからしばらく、アトラクは完全に無防備となるのだから。
展開終了を確認。椅子から勢い良く立ち上がる動きは、猫らしい躍動感があった。
安全圏に到達したのなら、優先してやることは一つしかない。
若き猫は、眠れる鉄の乙女を起こすため、コンテナへと向かった。

ステンレスの作業台に乗せられたカルディエは、装甲を外され、天井から垂れ下がるケーブルを各部に接続されていた。
首の両側面、両脇腹、そして両手足の計八本。
眠れる乙女を目覚めさせるための口づけは、このケーブルを通って届けられる。
「よし、セット完了」
ヴァニタスは軽快に指を動かし、作業台に併設された操作端末に、目覚めのキスを実行せよと打ち込んだ。

ケーブルから微細な振動が送られる。振動は、カルディエを深い眠りにつかせている「カオスバイブレーション」を相殺するためのものだ。

ダンス・マカブルは発動に膨大なエネルギーを必要とする。ジャガーノートといえど、単独で発動できるような代物ではない。

発動に必要なエネルギー量は、超大型電基貯蔵塔の最大量に等しい。ジャガーノート十体の最大発電量でも、まるで足りない。

ありえないことに、カルディエはそれを単独で発電してのけるのだが、代償として、体内を循環する混合循環触媒に、カオスバイブレーションと言うソリトン波の一種が生じてしまう。

混合循環触媒は、大出力を誇るジャガーノートのエネルギー伝達を担う、生物で言えば血液のようなものである。カオスバイブレーションは、その流れを完全に狂わせる。

そうなれば、結果はご覧の通り。眠るように機能停止状態に陥る。のみならず、適切な処置を施さないまま長く放置していれば、振動に全身を侵食され、次第に内部から崩れ去ってしまうのだ。

ダンス・マカブルは、自身も死の舞踏に巻き込む両刃の剣であった。

ただし、文字通りの最終兵器である。その、信じがたい「性質」ゆえに……

「うん、順調に相殺してる。大丈夫みたいだ」

端末に表示される進行度合いに胸を撫で下ろすヴァニタス。

後は特に何をしなくても処置は自動で終わる。

安心と共に、強烈な睡魔が奇襲を仕掛けてきた。さすがに今回ばかりは勝てそうにもないと観念する。

自室に戻る気力もなく、彼は作業台にもたれかかると、そのまま崩れるように寝転び、静かな寝息を立て始めた。

互いを守りあった少女と少年は、鉄の蜘蛛に抱かれて、しばしの休息についた。

536－2602　『狂気のヘクセンナハト』

黒という色は、命を育むイメージからは、最も縁遠い色ではないだろうか。

まだこの世界に大地があった頃、黒は死や破滅の象徴的色彩として、人々の間で用いられていた。例外もあったが、概ねそういった認識が、世界共通のものとして存在していた。

そのイメージを踏襲するかのように、タールじみた黒い海は、旧き時代の青い海ほど生命に溢れてはいない。黒い海を黒い海たらしめているある『成分』が、大部分の生き物にとって有害だったのだ。そのため青き海の住人は、そのほとんどが死に絶えてしまった。

しかし、生命というものは、時として常識から外れた進化を遂げ、滅びの定めすら凌ぐこともある。

驚くことにいくつかの種は、したたかなまでの順応ぶりを見せ付け、今もこの黒い海で命を繋いでいるのだ。

生き残りの割合は植物性のプランクトンが最も多い。特に、酸素を生み出すシアノバクテリアにとって、この黒い海はすこぶる快適らしく、経過年数からは考えられない大きさのストロマトライト――彼らの住処である層状岩石だ――を世界中に作りだし、繁栄の頂点を極めている。

植物が激減した世界に、いまだ酸素が満ちているのは、このメガ・ストロマトライトによるところが大きい。また、圧倒的速度で増殖するメガ・ストロマトライトは、小さき生き物にとって格好の食料であり、食物連鎖の基礎たる生産者としての重要性も高い。正に、この世界に生きる生物全体の生命線といっても過言ではないだろう。

メガ・ストロマトライトを中心に、奏で続けられる生命の機音（はたおと）――命とは、かくも強いものなのか。世界が残酷な牙を向けたとしても、屈することなく、逞しく生きている。

ただし。

全ての生き物が、元のままの姿で生きのびたわけではない。
前述のシアノバクテリアのように、従来の生命の枠組みから大きくはみ出すことなく順応した種もあれば、順応と言う言葉では片付けられないほどに変異した種も、数多く存在する。
一例をあげるのならば――
水中を１２０ノットという尋常ではない速さで泳ぎ、十文字に割れる捕食口を開きながら進路上の獲物を貪りつくす、角質の装甲に覆われた鯨。
万を越える触手を半径１キロに渡り張り巡らし、猛毒の刺胞でその海域を支配下に置く水母（くらげ）。
一個の巨大な生物として振舞い、時には６００万ボルトの生体電流すら操り獲物を殺す、群体性の軟体魚。
最大全長４０メートル、猛毒の火山性ガスを好んで体内にため、そのガスを利用して、巨大な針状の鱗を全身から射出する海亀。
このような者達を筆頭に、生物本来の機能的形状を一切無視した化け物が、黒き海の申し子として各海域に君臨しているのである。
彼らは、どれも特徴的かつ悪夢的な容姿をしているが、かと言って軒並み凶悪凶暴な猛獣というわけではない。
捕食する強者がいれば、捕食される弱者もいる。それは、いつ何時、どこであっても変わらない普遍の真理である。
橋の上で行き倒れた者を興味深げに見下ろす存在も、そういった捕食される側の生き物だった。

彼女は、弱者ではあるが美しい生き物だった。
一言で言えば、人と魚の混合種。水棲人と呼ぶべきか。体の半分を覆う虹色の鱗や、首筋のエラ、背筋に沿って生えるコバルトブルーのヒレはどう見ても魚のそれだが、すらりとした四肢や小ぶりな二つの乳房、知恵の輝きをともす深緑色の瞳と白く長い頭髪は、彼女が人の遺伝子を受け継いでいる生き物の証左であった。

とある者達からアプカルルと呼ばれる彼女らは、ある程度の知能と社会性を持った、極めて人に近い生き物だった。水陸どちらでも生きていける生存圏の広さが最大の武器だが、ほとんど海しか存在しないこの世界では、ある意味宝の持ち腐れである。

それ以外に武器のない彼女らは、魔境めいた黒き海で捕食される側の生き物として、日々、強者の影に脅えながら暮らしている。

臆病な性質のアプカルルだが、稀に強すぎる好奇心を持って生まれてくる者も、いないわけではない。そんな変わり者は、日差しのない雲の厚い日に海からあがっては、世界中に架けられた白い橋によじ登り、散歩気分で歩くこともある。

海上高く建設された白い橋をよじ登るのは容易ではない。幼いアプカルルにはまず無理だ。しかし、彼女は橋に倒れたかかった『御柱』の残骸を知っていた。それを足場に登れば、容易に橋の上に登れることを知っていた。

そうやって今日も散歩に興じていたのだが、その道中で橋の真ん中に倒れている生き物を見つけて、持ち前の好奇心に駆られて近寄ったところだった。

リズムよく、小首を左右交互に傾げる。

歳経たアプカルルが見たら、これが何か、知っていたかもしれない。しかし、彼女はまだ幼体から抜け切れていない若い個体ゆえ、経験も知識も少なかった。近くで観察しても、橋の真ん中で倒れ伏すこの生き物が何者なのか、分からないといった様子だ。

頭部の真ん中から飛び出した棒状の口吻らしきもの、小さい頭部にある赤い目は十を超え、いびつな爪の伸びた、手だか足だか判別のつかないものが八本、丸い胴体から生えている。皮膚は硬く、黒く、滑らかな光沢があった。

大きさこそアプカルルの三分の一程度だが、かなり強い存在感を放っている。

好奇心旺盛なアプカルルでなくとも、足を止めて観察したくなるぐらいに。

「……？」

恐れ知らずのアプカルルは、足先で動かぬ生き物に触れてみた。

動く気配はない。死んでいるのだろうか。

さらに二度、三度と繰り返す。甲高い音が鳴る以外に反応はない。

「……」

何かを期待していたアプカルルは、存外の結果に落胆したようだった。滑らかな肩が心持ち下がっている。

暇つぶしも切り上げ時と、彼女は踵を返して、海へ向かった。

矢先だ。

アプカルルの視界が闇に覆われた。

視界を覆ったものの正体を知る間もなく、アプカルルの少女は、固く巨大な『何か』に顔面を掴まれ、有無を言わさぬ強烈な力で頭から橋へ叩き付けられた。

後頭部から突き抜ける衝撃が、暗闇の視界に稲妻を走らせた。衝撃は消えずに頭蓋内部を駆け巡り、柔らかい脳をシェイクして、少女の意識を切り刻み、肉体の自由を完全に奪い去る。

辛うじて失神を免れたが、果たしてそれは彼女にとって幸運なことなのだろうか。

朦朧とするアプカルルの耳に、錆びた鉄のこすれる音と、聞き心地の悪い大音量の金切り声が飛び込んできた。

アプカルルの使う言葉とは違う言語だ。朦朧としていることを差し引いても、彼女には理解できなかった。

すると、声と脳震盪に翻弄されるアプカルルに、何かが覆いかぶさってきた。

かなりの重量である。身動きが取れない。胸部を圧迫され呼吸困難に陥ったアプカルルは、声の出ない悲鳴をあげた。

アプカルルの狼狽など機にもせず、彼女を襲ったものが、耳元で何事かをしゃべり始めた。

幼きアプカルルには一向に理解できない言葉が続く。構わず語り続ける襲撃者。

「――アデュ・ル・アプレ・クナマイ？　デウカデル・ジオウト・バナ・メルハウ――ギジィイイルグウイシャバムゥギィ？　パジジェエイアレァアシイィ――この言葉は理解できルカ？　分かるなら首を縦に振レ」

突然、金切り声の言葉が、アプカルルの言語を象った。

どうやら、アプカルルと意思疎通が出来る言語がどれか、様々な言語で同じ台詞を手当たり次第、口にしていたようだ。

アプカルルの少女が、首を縦に振る。自由を奪われ、相手の姿も見えないこの状態では、逆らう気などおきなかった。

「お前達の集落のハ『これ』か。では、アプカルルの少女ヨ、名を言エ」

「な、なんで……？」

不用意な質問に対する答えは、顔面を締め付ける圧力の増加と言う形で返ってきた。

頭蓋が軋む。鱗に覆われていない皮膚が裂けて、赤い血が噴き出した。

「ひぎっ！？　ひっ、い、いたい！　いたいよお！　やめてえ！」

「名ハ？」

言葉と行動に殺意を込め、無駄なことをさせるなと、言外に示す。効果はてき面、哀れな少女の口は、滑らかに名前を紡ぎだした。

「ロ、ローレライ」

「ホウ……金色の櫛デモ持っているノカ？」

ローレライと名乗った少女には、金切り声の主が言っていることがよくわからなかった。生まれたときに大婆様から頂いた名前に、何か深い意味があるのだろうかと考えるも、どう反応していいか分からず、かみ合わない歯の根を必死に押さえ込もうとするばかりだった。

「フン。下等生物には分かルわけもナイカ。まあイイ。教えろ、ローレライ。お前の集落はドコニあル？」

「しゅうらく？　……お、おうちの、こと？」

「そうダ。その場所を教えたら、お前を解放してヤル。傷も治してヤルし、イイモノもやろう」
「でも、なんで、おうちのこと……」
幼女の頭蓋がみきりと悲鳴を上げた。
「や！　いたいの、やだあ！　やめて、やめてえ！」
「ナラバ、答えろ。答えなケレバ、今以上に痛イ思いをスル……」
「う、うぐ……ひ……うう……」
恐怖に震え、すすり泣くローレライ。それでも彼女の唇は、必死に恐怖に抗い、閉ざされている。
答えを躊躇うのは、恐怖ばかりが原因ではなかった。幼き身でも、仲間を危険に晒すことがどれだけ罪深いか、理解しているのだろう。
襲撃者には予測済みの態度だ。
「アア、分かッタぞ。ソウか。そウかそウカ。集落がどうナルか、気にナルんだな？」
一転して優しげに、そっと語りかける。
ローレライは、ほんの少しだけ首を縦に動かした。
「ヨク考えるンダ、ローレライ……どうせお前のヨウナ『原罪の海（ハマルティア）』から出テ『贖罪の橋（ポン・デュ・ガール）』を歩く変ワリ者は、他の者からもイイ目で見らレテいないダロウ？　お前が命を懸けテマで、かばう必要がアルのか？　お前ノ周リハ、お前が痛い思いをシテマで守ル価値ガアるのか？　ローレライよ」
「かわり、もの……」
金切り声の主が、諭すように語りかける。最初は理不尽なまでの恐怖と苦痛を与え、心が折れかけたところで寛容と理解をもって篭絡するつもりなのだろう。
襲撃者の推測は概ね的中していた。ローレライは、彼女の集落では疎まれる存在だった。
好奇心の強い生き物は身を滅ぼす。己が死ぬだけなら自業自得で済む話だが、場合によっては隠された集落に危険を呼び込み、仲間も巻き込むこともある。

今までそういった危険を呼んでしまったことはないが、仲間の忠告を無視して外に出ていく彼女が嫌われるのは、至極当然の流れであった。

だが、彼女が外に居場所を求めるのには、好奇心以外にも理由がある。それは彼女自身にはどうにもならないことであり、本来、集落全体で受け止め、支えていかなければならない。だが彼女の集落は、その責務を放棄し、あまつさえ一部の成体は、彼女を『慰み者』として扱っているのだ。集落から完全に追い出されないのは、ただその一点のみに価値があるからだった。

ただ一つの異質を持つがゆえに、全てから捨てられし海の幼子。

少女の心の天秤が揺れる。

金切り声の主には、その揺れがよく見えていた。

「答えて生きルカ、お前を嫌うヤツラをかばって苦シンで死ヌか、選べ」

とどめを放つ。正真正銘の最後通告だ。

一文字に結ばれた幼子の唇が、震えながら開いた。

「ほんとに、それ、おしえたら、あたし、たすかる？　たすけてくれる？」

「アア、助かるトモ」

抑揚のない口約束に、ローレライはすがった。すがるしか、なかった。その行いが何をもたらすのか、深く考えもせずに。

誰が彼女を責められるだろうか。彼女は、まだ年端も行かない幼子なのだから。

ローレライが集落の場所を告げると、覆いかぶさる重みが消え、視界を遮るものも離れていった。

恐怖と苦痛からの解放。安堵に震える肺。少女の恐怖が吐息と共に大気に消えていく。

幼く、愚かな少女は知る由もない。

より大きな絶望と後悔が、眼前で牙をむき出しにして笑っている

ことに。

第二章　６４８－１９２７　『振りかざすは理不尽なる暴力』

猫の王子が送った電子のキスは、無事、眠り姫を蝕んでいた混沌の振動を打ち消すことに成功した。

打ち消し終わったのは、ヴァニタスが眠りに着いて間もなくのこと。カオスバイブレーションの消失を感知したアトラクの並列電脳は、カルディエの各種機能を再起動（リブート）させ、相互に連携を取って混合循環触媒の恒常性を回復させる作業に移行した。

全工程が終了するのに、そこから約６時間。

眠りの世界にいる者には、あっという間の６時間が過ぎる。

カルディエの横たわる作業台で、比較的小さな音量のアラームが鳴りだした。

作業台に付属されたコンソールには、作業完了の文字が点滅している。アラームは、眠り姫の目覚めを予告するファンファーレの代わりだ。

ファンファーレに誘われ、カルディエの瞼が開く。

紅の瞳が、再び世界に晒された。

「ん……」

暗い。そして視野が霞んでいる。視野調整と明度補正がリセットされてしまっている。

補助電脳に視界の鮮明化を指令。処理はコンマ秒にて完了、カルディエの世界が輪郭を取り戻す。

調整された視界を埋めたのは、天井からぶら下がった無骨な機械と無数のケーブルだった。

目だけを動かし、周囲の様子を探る彼女の耳に、聞き覚えのある静かな寝息が届いた。

確認しなくても、誰のものか分かる。

作業台から下を覗き見れば、床に寝ている猫耳王子様の寝顔がそこにあった。
それだけで理解できた。
この細い手足で、体力と気力の限界まで孤軍奮闘し、自分を助けようとしてくれたということを。
「ありがとう……」
起こさないように、それでも心に届くことを願って、カルディエは囁いた。
身体各部に連結されたケーブルを丁寧に取り外し、コンソールのエンターキーを押してアラームを止める。
作業台から音もなく降りる。
泥のような眠りにつくヴァニタスを抱え上げると、そのまま彼の自室まで運び、白いシーツの敷かれたベッドにそっと下ろした。
まるで母が我が子にするように――深く深く、愛情を込めて。

ヴァニタスの部屋を後にし、再び作業室に戻ったカルディエは、まず外された装甲を元通り装着し、部屋の隅に置いてあったコートを身につけた。そして髪を縛るリボンを一旦ほどき、膝まで届く長い髪を手櫛ですいた後、手早く元の髪型に結い直す。
身支度を整える姿は手馴れたもので、機械とは言え、中身はそれなりに乙女らしさを有しているらしい。
最後に愛用のハンティング帽を被り、身支度完了の合図替わりに笑みを浮かべる。
準備万端整えた彼女が次に目指したのは、情報の集積されるアトラクの頭脳――中央集積管理室だった。
管理室へ赴いたカルディエは、メインコンソールの前に立つと、顎に手を当てて唸り始めた。ビブラート気味の唸り声が機械の作動音とシンクロする。
これまでの経緯及び現在の状況は、回復作業中にアトラクの並列

電脳『7（セブン）・ギアセス』から、自分の電脳へフィードバックされている。改めて状況把握をする必要性はないとも言えるのだが、カルディエはあえて再確認するために、コンソールにコマンドを打ち込んだ。

遅滞なく、結果がメインモニターに表示される。

《物資生成機能、保存室維持機能、リサイクルシステム、各停止中。建設機構破損、稼動に重大な支障あり。自動復旧不可――防衛機構Ａ－１からＡ－８まで沈黙、Ｂ－１を緊急稼動――退避命令受諾――安全圏までの退避行動中に攻性干渉なし――待機中、ジャガーノート及び拘束技師の行動停止確認、最低電力を基準防御形態自動実行のために確保――ジャガーノートの復旧を確認――基準防御形態を解除命令受諾まで維持――》

金属の指がコンソール上のスクロールキーを押すたびに、電脳に刻んであるものと同じ文章が、モニター上を流れていく。

――特に変化なしかなー。

念のために確認したが、その行為も杞憂で終わるか。

しかし、三十六項目まで確認が終わり、三十七項目に差し掛かった時だった。

《本機から一定の距離に生体反応あり。確認から１５分２２秒経過、いまだ本機との距離を維持したまま停止中。注意されたし――》

これが、カルディエが目を覚ましてから、中央集積管理室を訪れるまでの間に起きた、唯一の状況変化であった。

たった一つの変化。しかし、当然のことながら看過するわけにはいかない。

廃棄されていたと思われた報復塔が、万全の状態で稼動したと言うことは、直前までメンテナンスし続けた者がいるということだ。

もしかしたら、この生体反応は、その当人か関係者の可能性もある。

カルディエから漂う気配の質が変わった。

機械仕掛けの乙女から、鉄の牙を鳴らす狩猟者へ。

コンソールを操作し、アトラクにある命令を下す。

命令受諾の文字が流れると同時に、金属の踵が床を蹴った。
二つの緑の軌跡を描きながら、ジャガーノートは放たれた矢のように真っ直ぐ出口へ。
出口となる最下層のハッチは、カルディエの下した命令を受け、開いている途中だ。
移動速度をさらに一段上げ、ハッチから飛び出す。
アトラクから飛び出したカルディエは、橋の表面を滑る無音の旋風へとその身を変えた。
瞬く間に橋の東側の縁に到達。出来るだけ低く身を伏せ、索敵を開始する。
朝霧に包まれた黒き海は、柔らかな波音以外に音もなく、波を大きく乱す存在がいないことを知らせている。東の水平線が白み始めているので、あと十数分もすれば、神々しい朝日が顔を出すに違いない。
空に雲はない。昨夜の悪天候は嘘のように消え去り、今日は打って変わって、強い日差しがこの海域を照らし出すだろう。橋の上に残された水溜りも、長くは存在できないに違いない。
暑いのが苦手な生き物には、辛い日だろうなーと、心の中で他人の疝気（せんき）を頭痛に病む。
カルディエは感覚器の感度を上げ、アトラクを遠巻きに観察しているであろう存在の気配を探った。
アトラクが割り出した座標――即ちアトラクから北西の方角、距離８００メートル地点の海面を重点的に調べてみる。
朝霧がかなり濃いが、爆煙すら見透かす彼女の瞳にとっては、無きに等しい。
その目が、海中から頭を出してこちらを見つめる生き物を捉えた。
交戦を覚悟していたカルディエだが、見えたのは戦いなどとは程遠い、予想外の生き物だった。
「あれって、もしかして……アプカルル？　それも、一人ぼっち？」
上擦った声が、カルディエの気持ちを代弁している。

水棲人アプカルルが、集落から遠く離れて単独行動することは稀である。この近くの海中に廃棄施設や地形を利用した集落があるか、もしくはあのアプカルルが『はぐれ（ワンダラー）』でもない限り、極めて不自然なことなのだ。

現在の座標地点は、カルディエ達が橋を建設しながら通った場所だ。集落があれば、アトラクのセンサーが探知し、記録（ログ）に残しているはずである。

そんな記録がないことを、カルディエは重々承知していた。

――まだ、小さい子みたいなー。

弱肉強食のこの世界で、幼く脆弱なアプカルルが『はぐれ』として生きていくなど、大海を手で塞（せ）くような行為だ。

望遠機能が見せたアプカルルの顔は、索漠とした表情に染まりきっている。もしかしたら、あれは、こちらに救いを求めているのかもしれない。

カルディエはしばらくアプカルルを観察すると、幼子に待ち受ける運命から目を伏せるように視線を外し、アトラクへと戻っていった。

彼女が去った後も、アプカルルは朝霧の中から、橋の上に佇立（ちょりつ）する鉄の蜘蛛を見据え続けていた……

気を取り直すため、カルディエは報復塔の一撃で散らかった食堂を片付けることにした。大きなゴミを一まとめにし、床に散った細かな破片を指先で拾い集めだしたところ、彼女にとってはそれが存外に面白く思える行為だったらしく、目を爛々と輝かせながら鼻歌まで加えて掃除に没頭しはじめた。

この状態で、食堂前の廊下を歩く微かな足音に気づけるのだから、相当鋭敏な聴覚を持っているのだろう。

足音の主が食堂の扉を開くタイミングに合わせ、顔を上げる。

「おお？　起きたか？」

清掃作業を中断し、食堂の扉に寄りかかるヴァニタスに笑顔を向ける。
まだ覚醒しきっていないヴァニタスだが、送られた笑顔にしまらない笑顔を返すことは、かろうじて出来た。
「うん、おはよー……調子はどう、カルディエ。どこかおかしなところはない？」
欠伸を噛み殺しつつ、問診を行う。
答えるカルディエは、口元に右の人差し指を添えつつ、上目遣いに、
「おう、おかしいところな。えーと、頭ん中かなー？」
言われた方も返答に困る申告であった。
「……それは……冗談で言ってるんだよね」
「うにゅ？」
冗談ではないのかもしれないと憂慮するも、そこは相棒を信頼することにして、質問の仕方を変える。
「うーんと……そうだな、機能的に不具合が出ているところとか、電脳でエラー未対応の警告ログが残ってるところとかは？」
「ナッシング。カルディエは、今日も海の真ん中で『ばっちぐー』を叫ぶデスよ」
指でオッケーのサインを作る。いつもと変わらぬおかしいカルディエに、少年は微笑を浮かべた。
おかしい状態が普段と変わらないというのは、かなりの問題ではないだろうか。
微笑みながらそう思ったことは、彼だけの秘密であった。
「それなら良かった。周辺状況は？」
「フィードバックかんりょー。まとめると、もうなんか『ひっちゃかめっちゃか』な状態なわけデスな。取りあえず一段落したら、これからの分身……違う、方針を話合うデス」
「うん。場合によっては、橋の延伸方向の変更も、考えなきゃいけないかも知れない。あの浮島に近付くのは得策じゃないと思うし…

…」

その意見にはカルディエも賛成であった。無理に危険を冒す必要はない。厄介なことに自ら首を突っ込むのは、愚か者のすることだ。

「まあ、今回は久々の戦闘に不意をつかれて、オミグルシイところを見せてしまったよ！　これからは初心に帰り、不埒な輩は片っ端からウルトラジェノサイドの刑に処すデス」

「あの、ほどほどに。くれぐれも、ほどほどに。頼むから」

言うだけ無駄だが、言わないままでいるのは、ヴァニタスの精神衛生上、好ましくなかった。

「任せろ、ヴァニタス。カルディエは、いつでも『ぼとぼと』だからな！　それより、腹へってないか！？　な！」

「え？　あ、いや、昨日のが響いてて、まだお腹空いてな」

「今すぐ作ってやるからな！　とくと待ちやがれ！」

一体どうしたというのか。普段にも増して暴走ぶりが激しい。

昨日残した分すら冷凍保存したままなのに、さらに調理しても無駄になるだけ。ヴァニタスがそう諭す暇さえない速さで、食堂奥のキッチンへ猪突猛進、殺人コックが駆けていく。

このパターンは、昨日と同じ大量食料兵器投入のサインだ。

ヴァニタスの顔から血の気が引いた。慌てて追いかけ、キッチンへ。

暴走列車を止めようとしたヴァニタスだったが、止まったのは彼の口のほうだった。

カルディエはキッチンの中央で、天井を見上げて立ち止まっていた。真剣な表情だ。まるで戦闘直前のような、緊迫した空気をまとっている。

何かあるのかと訝しがり、ヴァニタスも紅い瞳の視線を追う。

視線の先には換気扇がある。換気扇の何が気になるのだろうか。

「カルディエ？」

呼びかけに反応は無い。

もう一度呼びかけようと息を吸った瞬間、それを妨げるように、

カルディェの人差し指がヴァニタスの口の前に立てられた。
沈黙の時間はほんの数秒。封を解いたのは、沈黙を命じたカルディェ自身だった。
「……泣いてる」
「泣いてる？」
オウム返しの問い掛けも無視し、カルディェはヴァニタスの脇を駆け抜け、疾風迅雷の勢いで廊下を疾走しはじめた。
風――千切れたコートの裾をはためかせ、弾丸の速度でもって、廊下にわだかまる大気に穴を穿つ姿は、黒い風と形容するのがまことに相応しい。
風は、渋面を浮かべていた。
聞こえてしまったのだ。
換気扇は外に繋がっている。分厚い壁越しの小さな足音も聞き逃さない聴覚が、換気扇の向こうから降ってきた声を受け取ってしまったのだ。
「ああったく、もう！」
外への出口を蹴り開け、晴れ渡る空の下で苦々しげに吐き捨てる。
苛立った台詞は、己自身に対するものだった。
自分はこれから愚かなことをする。その苛立ちに対する心中の発露たる台詞。
弱肉強食は悪ではない。残酷ではあるが、理不尽ではない。
自分のやろうとしていることのが、余程理不尽だと知りながら、カルディェは自分を止めることが出来なかった。
止まらぬ勢いのまま、ハッチを出た瞬間に跳躍。１００メートル近い距離をそのたった一度の跳躍で移動し、そのまま橋から飛び降りる。
下は海。何も問題は無い。
ジャガーノートは『戦艦』なのだから。
海面に落ちる直前に、彼女の両手に現れたのは、無理無体をまかり通す、機械仕掛けの暴力の化身。

さあ、いざ振りかざさん。愚直で理不尽な暴力を。
捕食者の集団に襲われている、海の幼子を助けるために。

第二章　６４８－１９２７　『百穴の吸盤』

波の合間からアトラクに送られる眼差しは、逡巡の色に染まっていた。

側に近づきたい。知恵ある人がいるなら、会いたい。でも、行くことが出来ない。

幼いアプカルルは、もう一時間以上も同じ場所で、橋の上の怪物を見続けている。

経験上、橋の上の怪物に「知恵多き人」が乗っていることを、彼女は知っている。今までも幾度か、橋を作りながら進む山のような巨体と、それに寄り添って歩む人らしき姿を見たことがあるのだ。

しかしあの怪物に近づくと、ろくな目にあった試しがない。大抵は、遠くから見ているだけでも「破裂する光」や「硬い風の塊」によって手酷く追い払われ、時にはそれらをまともに喰らって、深い傷を負ったこともある。

にもかかわらず、彼女が橋の上の怪物――カルディエ達の乗るアトラクを見つめ続けるのには、理由があった。

――いる、かな。

いつもならば、攻撃が来る距離まで近づいている。そこで長い時間見つめ続けていても、追い払われる気配はない。

彼女の心にわずかばかりの希望が灯る。今回は、今回はもしかしたら、と。

ふと、初めて遭遇した知恵多き人を思い出す。

あの時差し出された手が、世界は、残酷なばかりではないと教えてくれた。握り締めた手の温もりが、時を経ても薄れることなく、彼女を支え続けている。

あの人と同じ温もりを、あの怪物の主人が持っていることを、この幼きアプカルルは願わずにはいられなかった。願うために胸元で手を握り合わせ、原罪の海（ハマルティア）の黒き海神（わだつみ）に祈りを捧げた。

幼稚で純真な祈りに、心優しき海神（わだつみ）が即座に応えてくれた。
弱肉強食の原則に従った、残酷な一撃をもって。

「……？」
アプカルルの顔色が変わる。
体に感じる波に『雑音』が混ざったのだ。聞こえる音としてではなく、波のリズムをほんの少しだけ乱す、異物としての感覚――
それが意味するところを理解できたのは、彼女にとって死地の中の幸運であった。
今いる場所からとにかく離れるために、身を捻り、全力で泳ぐ。
だが、間に合わなかった。逃げるアプカルルの右足に何かが巻きつき、締め付ける。
心を恐怖に絡め取られ、幼子の顔が引きつる。
巻きついた何かは、吸い付きながら締め上げるという特殊な動きによって、ただならぬ圧力を内側に生み出した。
柔らかい幼子の右足が、一刹那で骨ごと粉々にすり潰される。
黒い海に赤の花が咲いた。奪われる定めの命が刻む、美しい断末魔の花。
花に、幼子の絶叫が添えられた。
花を生み出した捕食者が、叫びに呼び出されて海面に姿を現す。
五本の巨大な海蛇――シルエットだけならば、そう見える。しかし、この海蛇には目も鼻もなく、あるのは回転する牙を備えた円形の摂取口と、全身に浮き出た無数の吸盤だけだった。
痛みに泣き喚く幼子を囲い、ゆっくりと間合いを詰める。海面からは見えないが、下方からも三匹の海蛇が迫っている。
不意打ちの一手で仕留めることは出来なかったが、代わりに機動力は奪ってある。獲物がすでに泳いで逃げることができないと、彼らも認識しているはずだ。しかし、それでも逸（はや）り猛（たけ）る食欲を制し、徹底して慎重に、かつ組織的に獲物を追い詰める。

彼ら『ハンドレッド・サッカー』は、集団での狩りを行う、冷静で機械的な狩人（ハンター）であった。

「ひ、うぐ……やだ、いたいのやだ、たすけて……おねがい、たすけてください……たべないで……」

足の付け根から命の源が滔々（とうとう）と逃げ出し、海に混ざって薄らいでいく。迅速な処置を行わなければ、幼子が明日の日を見ることは出来なくなるだろう。

されど傷口から送られる痛みの総量は、正気を保てる限界直前まで達している。戦うなど言うに及ばず、逃げる素振りさえ行うこともできない。助けてと泣き喚くぐらいしか、今の彼女に行えることはないのだ。

餌の命乞いを聞き入れる捕食者などいるだろうか。

いるわけがない。

自然は弱者へ同情などしない。むしろ、ほとんどの生き物にとっては残酷ですらある。

捕食者の住まう海にて、同じ場所にとどまると言う愚かな行為――その代償を、自然は迅速かつ過不足なく徴収しにきた。『それ』が、今回はハンドレッド・サッカーの一団という姿を象っているだけである。

では、『これ』は。

そう。『これ』こそは、自然の摂理に相反する、不自然の極致たる存在なのだろう。

雄叫びをあげ、一匹のハンドレッド・サッカーに巨大な鉄拳を叩き込んだ、この機械仕掛けの少女は。

ハンドレッド・サッカーの頭部が弾けて消えた。

巨大な拳の速度と重量からなる破壊力が、哀れな捕食者の耐久性能を易々と上回り、砕き殺したのだ。

大量の肉片が宙を舞い、青い血飛沫が空を染める。

それらが海に落ちるより速く、海の上を疾走するカルディエは、幼子を海から引き上げていた。

赤い花咲く海面に、青いまだら模様が染め付けられる。

模様の中心に、理不尽を携えた機械の乙女。自然の摂理の尖兵を、紅い瞳で睥睨して、逆らうならば皆殺すと、言葉も発せず威圧する。

ハンドレッド・サッカーは生粋の狩人だ。仲間が殺されたことに動揺するような精神は、最初から持ち合わせていない。しかし、あまりに仲間の死が突然のことで、対応が数瞬遅れる。

数瞬あれば、カルディエが穴の開いた包囲網を抜けるには充分だった。

「んじゃっ！」

気合一閃、幼子を両手で抱きかかえると、カルディエは包囲網から飛び出した。

強力なる推進力を持って波飛沫を上げて走る黒い海風となる。

ハンドレッド・サッカーが追いかけ始めたときには、もう遅い。

彼らの水中での移動速度は魚類の域を逸脱しているが、それでもカルディエの推進速度に比べれば遥かに劣る。カルディエが包囲網を抜けてから三秒が過ぎた時点で、二者の距離は１００メートルを超えていた。

カルディエが見せた風への変貌――――それを可能にしているのが、脚部の推進装置である。

カルディエの脚部は、膝関節から下が大きく変形していた。装甲が開き、中から筒状のパーツが後方へ伸びている。推進力を生み出すメインノズルだ。ふくらはぎの側面に形成された、穴の開いた半球状のパーツは、姿勢制御の役目を果たすバーニヤスラスタである。

この装置一式は、超高圧縮された空気の塊を自由自在に噴き出す。それにより得られる浮力及び推進力が、彼女を海の上の風に変えていた。

カルディエは後方を見た。ハンドレッド・サッカーは、はるか彼方。執念深い狩人も圧倒的な速度差を見せ付けられて、諦めてくれ

るだろうか。
前に視線を戻す。橋は近い。
橋の上ならば、狩人達も手を出せないだろうとカルディエが考えたのも束の間、前方の海面が弾けた。
海中から突き立つ、三本の柱。陽光に照らされ、ぬらぬらと輝く軟体の柱の正体は、後方に置き去りにした者達の二倍以上はあろうかと言う、巨大なハンドレッド・サッカーであった。
「げげ！雄か！」
素っ頓狂な声をあげ、カルディエが急激に進路を右に曲げる。ハンドレッド・サッカーの壁をすんでのところで回避したものの、ゴールはかえって遠くなってしまった。
ハンドレッド・サッカーは、基本的に雌が狩りの中心となって動く。しかし、万が一取り逃がしたときに、後方で待機していた雄が巨体に物を言わせて仕留める。カルディエは、雄が待ち構えていた海域にまんまと飛び込んでしまったのだ。
カルディエは舌を打った。助けたアプカルルは右股関節から下を失う重傷。出血量から見て、あまり猶予はない。
新たに現れた三匹の雄に加え、引き離した七体の雌も追いつこうとしている。
――仕方ないか。
カルディエは覚悟を決めた。戦う覚悟ではない。罪を背負う覚悟である。
ゆっくりとカーブを描きながら減速し、そしてホバリングを維持しながら止まる。
止まった場所は、視界にハンドレッド・サッカー全員を収められる距離と位置の海上。
目標の姿を一つずつ目で追うと、左手一本でアプカルルを抱え直し、自由となった右手を前方に向けた。
白兵戦用の巨腕に紫電が走り、形が変わる。
報復塔との戦いでも見せた具現化武装である。複数の武器を具現

化し、最小の個体で最大の兵器運用を行う、ジャガーノートの根幹を成す技術だ。この技術が、ジャガーノートに「戦艦」としての能力を与えている。

具現化武装は数秒で完了。機械仕掛けの右手がこの世に現した兵器は、全長2メートルほどの長方形の箱だった。長辺上部表面に設けられた八対の四角い開閉口以外に、何らかの発射口は見当たらない。電子投射銃（レールガン）とは形状が明らかに異なる。銃のような兵器でないことは歴然だ。

長辺を海面と水平に構える。既に狩人達との距離はかなり縮んでいた。海面から半身を出し、迫り来る。その数、総勢十体。

十体のハンドレッド・サッカーと同時に戦っては、さしものカルディエとて、無事ではすまない。

だが、カルディエが今思い悩んでいることは、幼子と自らの身の危険ではなかった。

「ごめん」

誰への――何への謝罪だったのか。

カルディエが呟いた一言が、兵器の封印を解く鍵となった。

八対の小さな扉が一斉に開く。そこに爆雷の妖精達が眠っていた。

――目標捕捉。目標個別認識完了。誘導用識別データ入力完了。発射準備完了。

カルディエの電脳に迸る（ほとばし）、罪なき者達への死刑宣告。

一瞬の迷い。迷うこと自体への嫌悪。そして決断。

「全弾――発射」

断頭の合図が風に乗って海に響いた。

数十もの爆雷の妖精――小型個体識別誘導ミサイルが次々に空へ解き放たれた。圧縮空気にて射出された拳大のミサイルは、空中で点火を開始し、黒煙の尾を引きながら一気に上空高く舞い上がる。

ハンドレッド・サッカーの一群が追撃を止めた。目はなくとも、体表面で感じられる空気の振動が、自分達に迫る異常事態を感知したのだ。狩人らしい優れた感知能力である。

だが、その優れた感覚も死刑判決を覆すには至らない。上空で反転したミサイルは、音速を悠に超えて、定められた目標めがけて突入する。それが雨あられと降ってくるのだ。回避どころか、まともに反応できる方がおかしい。

そして、動けぬ狩人達の一団に、爆雷の雨が降り注いだ。

轟音と共に灼熱の爆風が荒れ狂う。海は抉れ、高温が大気を焼き、風が全てを切り裂く。

ハンドレッド・サッカーは、自分達の身に起こったことを理解する間すら与えられずに、一匹残らず海の藻屑と化した。

死刑はつつがなく執行された。

爆風によって生じた波に揺れながら、死刑執行人が頭(こうべ)を垂れて冥福を祈る。

ハンドレッド・サッカーは、ただ生きようとしていただけだった。殺される理由はなかった。カルディエは、自分がしたことの重大さを認識し、決して記憶素子から消さぬよう、今日のデータをＲＯＭ化した。

しかし彼女に感傷に浸っている暇はなかった。腕に抱えた一つの命を救うために、多くの命を奪ったのだから、これで救い損ねるわけにはいかない。

再び橋に近づき、白い橋の袂(たもと)で停止する。

海面から橋の高低差は、約５０メートル。飛び降りるのは一瞬で済むが、昇るのは中々に骨の折れる高さである。

カルディエは右手を再度白兵戦用の巨腕に具現化すると、橋へ向けて構えた。

拳が爆音と共に撃ち出される。火を吹き、強靭なワイヤーを引きながら５０メートル上の橋に到達した拳は、手近の冷光灯を掴むと、１トンの握力で支柱を握り締めた。

耐圧構造の丈夫な支柱も流石に悲鳴をあげる。潰れるほどではないが、歪みが生じたかもしれない。

カルディエは、自分の拳がしっかりとフックされたことを感知す

ると、巨腕内部のウインチを作動させ、橋の上まで自分と幼子を引き上げた。引き上げる勢いがやや強すぎたようで、橋より高い位置まで飛び出してしまったが、それも高々3メートル程度。カルディエにとって問題となる高さではない。

右手を冷光灯から離し、巻き取りつつ、無音の着地。後を追うコートの裾が、空気を孕みながらゆるやかに枝垂れた。

着地した瞬間、紅い機械の瞳が青い猫目と視線を鉢合わせる。

「うわっ！」

目の前に飛び降りてきた者の影に驚いて、ヴァニタスの腰が抜ける。

「おう、ヴァニタス、いま終わったぞー」

「あ、え、終わったって、何が？」

きょとんと目をしばたいて、猫耳を振るわせる。

今しがた外に出たばかりのヴァニタスにしてみれば、状況などわかるわけもない。

が、カルディエの腕の中で顔面蒼白になっているアプカルルを見て、ようやく大体の事情が飲み込めた。

「アプカルルの子供じゃないか……そうか、その子が助けを呼んでたんだね？」

「……おぅ」

答える声にいつもの明るさはない。

ヴァニタスには、その理由が分かったていた。潮風に火薬の臭いが混じっている。

「戦わなくちゃ、いけなかったんだね。助けるために。でも、それは間違いじゃない。僕はそう思う。ね？」

そう言って、カルディエの肩を叩くと、

「早く処置しないと。手遅れになる前に」

打って変わって精悍な顔つきとなり、カルディエを促した。

カルディエも顔を上げて、ヴァニタスの言葉に応える。

「うん、そうデスな。んじゃ、医務室に――――」

言いかけて、カルディエが腕の中の異変に気づいた。
「う、あああ……」
アプカルルの少女が呻いている。痛みに苦しんでいるのかと思い、カルディエとヴァニタスは心配そうな面持ちで幼子を見た。
二人の目が限界まで見開かれたのは、正にその瞬間であった。
カルディエの腕の中で、信じられないことが起きている。引きちぎられたはずの幼子の右足が、付け根から徐々に再生してきているのだ。まるで、雪の結晶が伸びる様を早送りで観察しているような有様だった。
「これ、一体……」
カルディエがヴァニタスに答えを求める。
「僕にも……」
首を横に振って、ヴァニタスも答えを返せないことを示す。
アプカルルに、これほどの再生能力はない。少なくとも、二人の知識の中には存在しない。
完全に足を取り戻したアプカルルの幼子は、しかし悪夢にでもうなされているのか、目を開けず、同じ台詞をうわ言のように呟いていた。
「たすけてください、ゆるしてください」と、涙を流しながら。

第二章　６４８－１９２９　『ローレライは涙する』

「起きないねえ」

カルディエが溜め息混じりに漏らした台詞は、ヴァニタスの悩みと同じものだった。

二人はアプカルルを医務室に運び、出来る限りの手当てを施した。アプカルルは昏睡に陥っているが、外傷はない。ヴァニタスとカルディエの見ている前で、失われた脚部を完全に再生させてみせたのだから、細かい傷など言うに及ばずか。

昏睡状態の要因をヴァニタスは低血糖と判断していた。生命の理屈を無視した急激な再生により、体内の糖分がエネルギーとして大量に消費されたのだろう。採血してテスターにかけたところ、数値でもその推測を裏付けることが出来た。治療も低血糖の対処療法が中心となる。

応急処置として、砕いた砂糖を歯の間に刷り込むように経口摂取させたところ、容態はかなり落ち着いた。今はブドウ糖を主成分とした点滴を打って、回復を待つ段階に移行している。当然、それで治療が終わるわけではなく、目が覚めてから、他の足りていない栄養分を食事で摂取する必要がある。

「あの再生速度からすると、足一本分、体中から無理矢理に材料を集めて、作り出したんだと思う……どれもこれも足りなくなってるはずだよ」

カルテを眺めるヴァニタスが、暗い面持ちで呟いた。ベッドに寝かせられたアプカルルの苦しそうな顔を見ると、胸が締め付けられる思いで一杯になる。

「今は、そっと寝かせておくしかないよ」

肩越しに諭され、カルディエが頷いた。だが、意識はヴァニタスには向いていないようだ。

右手には濡れたタオルを持っている。ベッドに腰掛けて、苦しげ

に呻く幼子の、熱のこもった部位を拭い続けていたのだ。
初めて見るカルディエの献身的な姿に、ヴァニタスの長い尾が不規則に波打っていた。
ほどほどにね、と忠告し、患者と看護師を残して医務室を後にする。
また一つ積み上がった問題をいかにして解決するか。
薄暗い廊下を歩きながら、少年は思案に暮れていた。

それから無為に2作業単位が経過した。
アプカルルの容態は安定してきてはいるが、まだ目を覚まさない。低血糖状態は改善されているので、要因は他にあるのかも知れないとヴァニタスは考えていた。
それでも、回復傾向であるだけましだった。もう一人の『患者』であるアトラクの状態は、彼女以上に深刻だ。初期修理の段階で部品が足りないことは把握していたのだが、部品調達の目処が立たないのだ。
いよいよとなれば『例の場所』から部品を拝借する以外にないかもしれない。
例の場所……浮島前の機甲塔群だ。そこに乗り込んで、いつ迎撃されるかもわからない恐怖に耐えつつ、無数の部品の中から使用に耐えうるものを選定し、それを抱えたまま生きて帰る。
無謀の極みだ。
「報復塔や殲滅塔がまだ生きてたら、今度こそ終わり……」
どこに焦点を合わせるでもなく、瞳に青空を映しながら、ヴァニタスが囁いた。
晴れ渡る空の下、彼は橋の縁に設置したパイプ椅子に腰掛けて、機械仕掛けの物々しい釣竿を構えている。
隣にはカルディエ。彼女も釣竿を構えているが、長さ15メートル直径10センチの鉄棒に、鋼鉄のワイヤーを巻き付けただけのも

のを、果たして釣竿と呼んでいいものだろうか。
しかし、持ち前の怪力と重力制御で悠々と竿を構える姿は、年季の入った太公望の勇姿そのものである。背面の駆動系が奏でる高域の回転音が、また一段と頼もしい。
太公望は巨大竿を操りながら、ヴァニタスに「心配するな」と返した。さきほどの独り言に対するものらしい。
「んなもん、カルディエが全部ぶっ壊すデスよ。この間の戦闘で、型式２００番台の報復塔はカルディエの『ぬっ殺リスト』にめでたく殿堂入りしました。今後は容赦なくサーチ・アンド・デストローイ」
「そんなリストがあったんだ……」
そのリストだけには殿堂入りしたくないと思いつつ、ヴァニタスは竿の大型リールを操作して一度針を上げた。
針に餌はない。狡猾な魚に持っていかれたらしい。
「あちゃ。またか……上手くいかないなあ」
「ダメダメな。ヴァニタスは、こらえ性が足りないデス。引くのが早過ぎて、針飲み込む前に餌だけ持ってかれてるぞ、このせっかちさんめ」
「うぐ……仕方ないじゃないか、カルディエと違って、あんまり釣りなんてしてないんだから」
と、珍しく頬を膨らませて、ふてくされる。普段はどこか大人びたヴァニタスだが、今回の歳相応といった仕草に、カルディエが鈴の音のような笑い声をあげた。
ますますヴァニタスの頬が膨らむ。
釣りは一旦中断し、膨れ面のまま腰の作業鞄からタッチパッドを取り出す。
異常が生じれば、猫耳に取り付けたヘッドセットからアラームが鳴るよう設定してある。アラームも鳴っていないのだから、わざわざ見る必要もないのだが、ヴァニタスにも色々と誤魔化したい時もある。

光沢の強い黒い画面には、アプカルルのバイタルサインがリアルタイムで映し出されていた。体温、呼吸数、血中酸素濃度、血圧、心拍数、血糖値、脳波など、あらゆる生体信号が図式化され、患者の容態を知らせてくれている。

――変化なし、か。

好転も悪化もなし。

変わらぬ事態にため息を漏らそうとした瞬間だ。

「きたきたあああ！　きたデスよお！！」

ヘッドセット越しでも耳をつんざく、甲高い歓喜の悲鳴に、ヴァニタスの心臓が飛び跳ねる。

カルディエの竿がしなっている。直径１０センチの鉄の棒が、竹の竿のように。

アトラクの保存食を生成する機能は現在完全に停止している。なので、今ある保存食はできるだけ消費しないよう、当座の間、食料は原始的な狩猟――つまり釣り――で得よう。

そうカルディエが言い出したのが、本日の朝のこと。

それから糸を垂らす事、三時間。狙っていた待望の獲物がかかったのだ。果たして獲物は、どれほどの大物なのだろうか。

「わ、と、カルディエ、だ、大丈夫？釣れる？」

鉄の棒がきしみ、それを振り回すカルディエの全身から、高出力に伴う駆動音が響きだす。もはや釣りというより戦闘と言っても良い迫力だ。

離れていたほうが得策とヴァニタスは判断し、椅子を倒しながら遠ざかる。カルディエと格闘している獲物がどんなものか、怖さ半分興味半分だった。

一方、問われたカルディエは不敵に笑みを浮かべるばかりで、返事はない。余裕がないのか、余裕だからこその沈黙か。

全身の積層式導電性高分子アクチュエータが出力をあげる。さらに重力制御で自身を橋の上に固定化。

膂力に関しては大型の建設機械すら凌駕する釣り人が、今ここに

出現した。
「っしゃあああ！」
渾身の力で一気に竿を引き上げる。
海面が盛り上がり、弾け飛んだ。大量の水飛沫を散らしながら、カルディエの獲物が姿を現し、宙に舞う。
太陽を背に輝く黒い巨影。
獲物の正体にヴァニタスは度肝を抜かれた。
釣り上げられたのは、全長８メートル、体重１．８トンの装甲魚『ダンクルオステウス・メガデス』だ。凄まじい顎の力で鋼鉄すら噛み砕く、黒き海の破砕王である。全身を覆う鈍い銀色の装甲は、同じ厚さの鋼鉄を上回り、あのハンドレッド・サッカーを捕食する数少ない種としても知られている。
カルディエの腕力は、その暴君を海中から引きずり出すにとどまらず、そのまま橋の高さまで放り上げてしまった。恐ろしい腕力である。
だが、しかし。
鋼鉄すら噛み砕く――――その評価は正しかったようだ。
引き上げた勢いがとどめとなったか。破砕王の顎によって傷だらけとなっていた鋼鉄の釣り糸（ワイヤー）が、ばちんと音を立てて切れてしまったではないか。
カルディエ達の目線まで飛び上がった破砕王は、自分を引き上げた無礼者に一瞥をくれると、身を捻って真ッ逆様に海へと落ちていった。
高々と上がる水柱。
茫然自失のカルディエ。笑いをこらえるのに必死のヴァニタス。
結局、食料を調達するという目論見は達成できずに終わり、泣く泣く貴重な保存食を消費することとなった。
できるだけ量を押さえられた昼食を頬張りながら、あの殺人的山盛りが、何故か懐かしく思えるヴァニタスであった。

その日の夕飯を、カルディエが作っている最中のことであった。
食堂の椅子に座っていたヴァニタスのヘッドセットから、甲高い電子音が飛び出す。
不意打ち気味のアラームに、ヴァニタスは椅子ごと後ろに転倒しかけた。狼狽しながらも体勢を立て直した時、カルディエが食堂の扉をくぐって走り去る姿が見えた。
――聞こえたんだ。
相棒の聴覚に感嘆している暇はない。
ヴァニタスも、医務室に向かって走り出す。状況把握のためタッチパッドを取り出し、表面をなぞってバイタルサインを表示させる。
数値に異常なし。脳波だけが大幅に変化している。覚醒状態の脳波だ。
「目を覚ましたんだね」
自分の事の様に嬉しげに呟く。
まずは悩み事が一つ、解決の曙光が見え始めた。
そんな楽観を、医務室から響き渡った衣裂く悲鳴が、脆くも打ち砕いてしまった。
色を失って医務室に飛び込む。
「カルディエ、今のは!?」
ヴァニタスが見たものは、悲鳴に面食らっておろおろとするカルディエと、ベッドから降りて部屋の隅で縮こまるアプカルルの姿であった。
「あ、ヴァニタス」
助け舟が来たと、人心地がついた風にカルディエの表情がゆるんだ。
視線はアプカルル、顔はヴァニタスに向けて、
「カルディエが、コニチワーしたら、いきなり悲鳴上げられたデス……カルディエ、そんなにおっかないか？　般若の如き悪女か？」
と、かなり落ち込んだ様子で語る。

「は、般若？　いや、そんなことないから安心して」
「そうかー……？」
「あの子は状況を飲み込めてないだけかもしれない。記憶が途切れてて、まだ危険な状況にあると勘違いしてるんじゃないかな」
ヴァニタスは、できるだけアプカルルを刺激しないように、静かに歩み寄った。反応を見つつ、恐怖感を与えない距離を見定めて立ち止まると、その場で身を屈める。
目線が等しくなり、視線が繋がる。深い緑の瞳は恐怖に侵されて涙を溢れさせていた。
「えっと、言葉は分かるかな？」
努めて穏やかに語りかける。つられて猫耳が垂れ気味になっていることに、本人は気づいていない。
アプカルルの幼子は、やや間を置いてから、顎を引くように頷いた。視線を外さないのは、警戒心からくる行動だ。
「うん、基底言語処理がちゃんとできてるみたいだね。それじゃ、まずは自己紹介だ。僕はヴァニタス・ヴァニタートゥム。彼女はカルペ・ディエム」
「カルディエって呼んでなー」
言いながら手をひらひらさせる。たたそれだけの動作に、アプカルルは肩を震わせた。
「あう……まだ怖がられてるぞな」
「彼女は、君を傷つけたりしないから。それどころか、君を助けてくれたのも、ずっと看病してくれていたのも、カルディエなんだ。だから、怖がらないで。ね？」
自分を助けてくれたという言葉が、アプカルルの記憶を鮮明にする。
異形の怪物に襲われていた自分を、たった一人で助けに来てくれた誰か。虐げられる運命を切り裂き、世界の残酷を否定した誰か。
記憶に浮かぶ視界はぼやけていて、目の前の存在と同一なのか比べることが出来ない。だが、朦朧とする意識の中で感じた腕の力強

さだけは、脳の深いところに焼き付けられている。
アプカルルは、まだ恐怖の色が抜けきらない視線でカルディエを見つめた。
『あの』腕は、『あの時の』腕と同じ形をしていた。それでも、自分を助けてくれたのは、この人なのだと知らされた。
決心を固め、幼子は、なけなしの勇気を振り絞って言葉に変えた。
「……おねえちゃんが、たすけて、くれた、の？」
カルディエが満面の笑みを浮かべた。作った部分など一分もない、会心の笑顔だった。
「おう！　助かって、よかったなー！」
見返りもなにも求めない、心の奥からの言葉。
アプカルルの幼子にも、それは感じ取れたらしい。徐々に表情から恐怖の色が消え、全身に伝播していた震えが静まっていく。
「……ローレライ」
幼子が呟いた単語に、カルディエとヴァニタスが目を瞬く。
恐らくだが、彼女が呟いたそれは――
「君の……名前？　ローレライって」
幼子は小さく頷いた。
「ほほう、ローレライデスか！　いい名前な！　な！」
やおらヴァニタスにに近づいて、彼の背中を布団よろしく叩く。
力加減がどれだけできていなかったのかは、ヴァニタスの顔の歪み具合が物語っていた。
「よっし、ローレライ、まずはちゃっちゃと腹ごしらえな。昔のエロい……偉い人は『腹が減っては、道草はできぬ』と言いマスた。いい言葉なー。今から腕によりをかけて飯作ってやるから、ベッドで寝て待つがよい！　うははははは！」
高笑いを残し、カルディエは食堂に戻っていった。この分だと、またもや大量食料兵器を作成しかねない。
やれやれと漏らすヴァニタスも、今回ばかりはカルディエの暴走を止める気も起きなかった。

「さて、うちの専属コックが、栄養のあるものを作って持ってきてくれるはずだから、それまでベッドで寝てたほうがいいよ。まだ本調子じゃないだろうからね」

そう言った後、ヴァニタスの右手が何気なくローレライに差し出される。

ローレライは息を飲んだ。

まさか、ここで、と。

差し出された右手と手の主の顔を交互に見つめ、両手を胸の前で合わせる。その姿勢は、奇しくもローレライが海で祈りを捧げていた時のものと同じ姿勢であった。

「ん？　どうしたの？　どこか痛い？」

ヴァニタスの台詞もどこか上の空に聞いているようだった。

彼女は思い出していた。

過去に出会った、あの温もりを。

記憶の電光がローレライの脳を巡り、ニューロンに刻まれた長き歴史をなぞり始める。脳裏にて一瞬で鮮明となった過去は、彼女の魂を揺さぶり、心を震わせる。

幼子の過去の記憶は、深緑の瞳から涙となって溢れ出た。

突然、滂沱と涙を流し始めたローレライに、ヴァニタスは動揺を隠せない。

「あ、あれ！？　僕、何か怖がらせるようなことしちゃった！？　ご、ご、ご、ごめ、あの、泣かないで、ね？　ね？」

――ちがう。

止められない涙を手の甲で必死に拭う。

流れる涙は恐怖の色を含んでいない。

含まれているのは、喜び。

あの差し出された手に、再び出会えたことへの、喜びの涙。

――また、あえた。

ローレライが立ち上がる。そして、そのままヴァニタスへ身を投げた。

生憎、受け止める側は非力だ。受け止めきれず、二人揃って床になだれ込む。

「え！？　お！？　あら！？」

この事態は流石に予測の範囲外。少女に抱きつかれ、しかも胸元で泣かれるなどというシチュエーションに対応するマニュアルを、ヴァニタスの脳は備えていない。

「また、あえた……また、あってくれたよ……あって、くれたよぉ……」

ローレライの繰り言が意味するものが何か。それはヴァニタスには分からない。しかし、彼女の過去にあった何かが今と結び付いて、涙を流させていることは察しがついた。

では、今するべきことは一つ。

ヴァニタスは泣きじゃくる少女を優しく抱きしめると、白く美しい長髪を撫でて慰めた。

するべきこと――そう、慰めることだ。

この少女が辿ってきた道が、なだらかなものではなかったと感じたが故に。

ローレライの涙が作業服にしみこんで、ヴァニタスの胸に届いても、彼は少女を抱きしめ続けた。

冷たい医務室の床の上。天井から降り注ぐ冷光灯の淡い光。

重なり合う場所から混ざり合う、互いの温もりだけが、冷えた世界に抗っている。

世界は残酷なばかりではないと、叫ぶように――

第二章　６４８－１９３０　『覚悟と苛立ちの狭間で』

小さな体に、カルディエが作ってきた大量の食事をあっさり収め切り、ローレライは再び眠りに着いた。

昏睡ではない健全な睡眠である。消耗した肉体の修復のために、脳が必要と判断した深い眠りだ。

一夜明けた翌朝の回復振りは、目を見張るものがあった。

たった一回の食事と睡眠で、医務室内を走り回れるまでに回復している。血色もよく、声にも張りがある。見違えるようだ。

どんなに適切な処置と休養を取ったところで、数時間のうちにここまで回復するものではない。彼女が有する超再生能力の恩恵であることは、間違いないだろう。

小柄なヴァニタスより、更に１０センチ近くも低い小さな体で、昨夜の大量の食料を駆逐したことにも驚いたが、ヴァニタスは何よりこの回復力に驚かされた。

ここまで回復していれば大丈夫と判断され、今日の朝食はヴァニタスと共に食堂で取ることとなった。

「ええと、つまりね。僕達が何をしているかと言うと、この橋を作ってるんだ。もうずっと昔から、百代以上にも渡ってね。このアトラクは、その為の建設機械。僕は、今の世代の拘束技師。つまりアトラクのお医者さんかな？　で、カルディエは、僕やアトラクを守る人。あと料理も作ってくれる」

食堂にて食事の音が跳ねている。そこに混ざるのは、ヴァニタスの柔らかい声。

テーブルを挟んで合い向かいに座るローレライに、ヴァニタスがゆっくりと丁寧に語っている。

彼の右手は、三分の一ほど残った完全栄養食をスプーンで突っつ

いていた。口は語ることに専念しているため、食事が進んでいない様子だった。

一方、語りかけられているローレライは、ヴァニタスの二倍量はある完全栄養食を、逆手に握ったスプーンで不器用に頬張っていた。目はヴァニタスの方を見ているので話は聞いているようだが、意識の半分以上は食欲に支配されているに違いない。

生徒の理解度を雰囲気から推測しつつ、ヴァニタスは自分達が何者なのか、ローレライに教授していた。

教えて欲しいとせがんだのは、ローレライだ。意図がどこにあるかは分からないが、拒む理由もないと、ヴァニタスは食事をしながら講師役を買って出た。

できるだけ、ローレライにも分かるように言葉を選んでいるのだが、存外にこれが難しい。

「ずっと、むかし、から？　んぐ……えっと、ずっとって、いつ？」

口の中に物が詰まった状態で生徒が質問を出す。

「ん……今が作業工程第６４８フェーズで、１フェーズが２６３０作業単位だから……そうだね、太陽が百七十万回昇るぐらい前からかな」

「……？」

「分かりにくいか。昔の世界で使われてた『年』て単位だと……ええっと、３６５で割って……四千五百年ぐらい前……って、これもわからないよね？」

ヴァニタスの質問に、ローレライは小刻みに頷いた。素直な少女である。

「ま、君が生まれる、ずっとずっと前からってことさ」

「そうなんだ。でも、なんで、はしをつくってるの？」

聞かれて当然の疑問。しかし、聞かれることを想定していなかった疑問。

対応し損ねた意識にずれが生じ、ヴァニタスの時が一瞬止まる。

幼子の他愛もない質問が、彼の心の動きを止める楔となったか。

痛みにも似た感覚が、心臓付近にちくりと走る。
それを笑顔で隠し、ヴァニタスは腕を組んで唸った。
「うーん。実はね……よくわからないんだ」
「わから、ない？」
「そう。僕もカルディエも、この橋を作らなければいけないことはわかっている。でも、なんで作らなくちゃいけないのかは、わからないんだ……このアトラクにも、そういった情報は残っていなかった。目的はあるのに、目的の根本を知らない。もしかしたら、理由なんてないのかも知れない」
ローレライが首を傾げているのを見て、話が難しくなってきていることを悟る。
微調整を加えながら、さらに語る。
「まあ、旅をしていると思ってくれればいいよ。あてのない旅をね」
「たび……」
「僕はまだ会ったことないんだけど、僕達以外にもアトラクや拘束技師がいるみたい。そんな人達と会ったら、聞いてみるつもり。僕達は、何で橋を作ってるんですかって。そんなことも知らないのかって、笑われるかもしれないけどね」
そう言って、照れ隠しに猫鼻の頭を左手で掻く。
他に技師がいるのは間違いない事実だった。ヴァニタス以前から続く作業日誌の過去ログに、他の橋を見かけたという項目が幾つかある。その中にはヴァニタス自身が書いた項目もあるのだ。
ヴァニタスが拘束技師として稼働し始めた頃、彼らが作っている橋――贖罪の橋（ポン・デュ・ガール）とは違う別の橋と、一度だけ交差したことがある。素材も作りもほとんど同一のものだったが、橋に設置された識別定点標が、彼らのアトラクの固有識別コードとは違ったコードを入力されていた。
仮に、先代の誰かが作った橋ならば、コードは一致しなければおかしい。固有識別コードは変更も改ざんも不可能な代物だ。だとすれば、別のアトラクが作った橋と考えるほうが自然である。

それに――『証言』もある。信じられるかどうかは、別として。
まだ見ぬ「仲間」の存在に思いを馳せ、ヴァニタスは皿の上の料理を一口食べた。
暫くの間、スプーンが皿に触れる音だけが食堂を支配する。
その独裁を破ったのは、ヴァニタスの声だった。
意を決した表情でローレライを見つめ、口を開く。
「ローレライ、今度は僕が聞かせてもらってもいいかな？」
「うん？　……なにを？」
「君のこと。君自身のこと。何故、独りだったのか、それと、君の身体について」
今度はローレライの口が食事を中断することになった。
口元に運びかけたスプーンを静かに皿に戻し、残りわずかとなった完全栄養食に視線を落とす。
人の機微に疎い者でも、迷っていると分かる仕草だ。
不用意な質問だったと、慌ててヴァニタスが付け足す。
「あ、ごめん、無理に答えなくてもいいからね。言いたくないことは誰にでもあるから」
「ごめんなさい……」
蚊の鳴くような声で謝る姿が、かえっていじらしかった。ヴァニタスはこれ以上追求することを諦め、努めて明るく振る舞った。
「気にしないで。ローレライ自身が話したくなったら、話してくれればいいんだ。ね？」
「うん……」
ヴァニタス自身、ある程度予想していたことだが、ローレライが『はぐれ（ワンダラー）』となったいきさつは、彼女にとって思い出すのも辛い過去らしい。そのことが嫌というほど肺腑にしみた。
――あの超再生が、はぐれとなった原因なのかな。
集団によって形成される『社会』にとって、平均的個体は、大部分を占める主要素である。ゆえに、常識から大きく逸脱した個体は、社会というものに良くも悪くも大きい影響を及ぼしてしまう。そう

いった存在を寛容に受け止める強い社会は、簡単に形成されるものではない。まして弱者たるアプカルルの集落に、強者特有の寛容さを求めるのは、酷というものだ。

ヴァニタスは音を立てないように鼻で深呼吸を行った。どこか焦っていた己に喝を入れる。

機を見計らって、話題を変える一言を発しようとした時だった。

「ずあああ！　この海域は釣りに向いてないな！　ふんとにダメダメデスよ！？」

我鳴りながらの、コック兼釣り人の入場である。

ヴァニタスはカルディエの扱い方を心得ている。差し障りのない「それは大変だったね」の一言に苦笑を添えて、カルディエの不機嫌を見事にいなした手際から、彼の経験の多さが読み取れる。

「おう、オココロヅカイ、ありがとうございます。でも、もういいな。カルディエに釣られない魚に、価値はナッシングね。見限りました。金輪際、この近辺で釣りはしないデス。と言うわけでローレライ、カルディエの料理食べてるか？　美味いか？　食いしん坊さんか？」

脈絡のない話の振り方にローレライが面食らうも、辛うじて首を縦に振ることは出来た。

「にひひ。それは良かったデス。さすがカルディエの料理だなー。あれだ、寝た子を起こす料理ってやつなー。どうだ、恐れ入ったか」

カルディエが腰に手を当てて反り返る。目を皿にしている二人には、彼女が言っていることの意味が理解できなかった。

「あ、うん、そうだね、美味しいよ」

「お、おいしいよ」

ヴァニタスに追従するローレライ。意外と空気は読めるらしい。

二人の返答に満足し、カルディエもローレライの右隣りに座る。パイプ椅子が、彼女の重さに抗議の軋みをあげたが、誰も気にしなかった。

カルディエは両手で頬杖を突き、

「一杯食べるんだぞ。ローレライ」
打って変わって、優しげな口調で語りかける。
「うん」
ローレライの浮かべた笑顔は明るい。止まっていたスプーンも動き出す。カルディエは小さく頷いていた。
幼子が不器用に料理を食べる様を見守る姿は、我が子を見守る母の姿を思わせた。
自然と、ヴァニタスの顔も笑みを形作る。
その笑みを無理矢理消し去ると、ヴァニタスは目を細め、意識を己の内側に向けた。
昨夜、ローレライが寝静まってから二人で話したことが思い出される――――

カルディエは医務室のベッドに眠る幼子に、清潔なタオルケットを首元まで掛けてから、部屋の明かりを落とした。
おやすみを告げ、部屋を後にする。
通路に出ると、ヴァニタスが待っていた。壁に寄りかかり、青く輝く夜の瞳にカルディエを映している。
わざわざ通路で自分を待っていたのかと、カルディエがいぶかしむ。
「ヴァニタス？　どしたの？」
抑え目の声量で待ち伏せのわけを問う。
「……あの子のことで、話がある」
猫の声色が違う。トーンの抑えられた、耳打ちでもしているかのような小声だった。
カルディエの口元に力が込められた。お互いに距離を保ちながら、沈黙を鎧う。
静寂が熟成しきったところで、ヴァニタスが口火を切った。
「あの子を……ローレライを、これからどうするつもりだい？」

「守る」
即答かと、ヴァニタスは溜め息をついた。
「あの子が望む限り、ここにいさせたい。助けてまた放り出すつもりなら、最初から助けない。カルディエは、ヴァニタスも、アトラクも、ローレライも守る。絶対に」
「絶対なんてないんだよ。それに無理をすれば、君だって壊れてしまうかも知れない。死ぬ気でやるのかい？　死んだら、誰も守れない」
「死ぬ気の覚悟なんて、カルディエはしない」
と、高潔な眼差しで相棒の瞳を射抜き、一呼吸置いてから、
「ヴァニタスの言うとおりだ。壊れたら、守りきれない。壊れずに、最後までみんなを守り通す……『絶対』に」
あえて否定された絶対と言う言葉を使う。
口だけの覚悟は決して言わない――それがカルディエの性格だ。
もとよりヴァニタスに説得するつもりなどない。カルディエが最初からそのつもりでローレライを助けたことも、手に取るように分かっている。だが、自分達以外の者を生かしていける余裕がないことも、彼はわかっている。それを承知の上で、カルディエはヴァニタスに守ると告げたのだ。
ヴァニタスとて、何もローレライを放り出したいわけではない。守りたい気持ちはカルディエと一緒だった。それでも、何故、ここまで頑なにローレライを守ろうとするのか、理解が出来なかった。それがヴァニタスの苛立ちを増幅させている。
猫の奥歯が鳴る。無意識の歯噛みは苛立ちの化身だ。
――無理して共倒れたら、意味がないんだ。守るなとは言わないけど、もっと考えて動いてくれなきゃ……それに……
がりりと、歯が軋んだ。
――彼女が僕以外を大切に思うなんて……
視界が暗くなる。冷光灯は明度を変えていない。
――カルディエは、僕を守るためだけの……

白い猫毛が逆立ってきた。
――僕だけの……
心の奥にたまった腐った膿から、醜悪な産声があがった。
黒い海の底から引き上げたヘドロに、下賤な欲望の種を受精させて生まれた化け物のような――不定形の憎悪の産声。
産声が少年の脳で木霊（こだま）する。神経細胞の一つ一つをタール色に染め上げるために、徐々に、しかし確実に。
侵蝕は熱く、それでいて心地よい。ヴァニタスに止めることは出来なかった。
だが――
「ヴァニタス？」
闇の産声を消したのは、自分の名を呼ぶ少女の声だった。
酷い眩暈がヴァニタスを襲う。
自分の心に浮かんだ言葉の、あまりの黒さにはっとして、ヴァニタスは自身をひどく嫌悪した。幸いにも表情の変化は隠微で、カルディエに悟られることはなかった。
――なんて醜いことを考えてしまったんだ、僕は。最低だ。最低の男だ……
苛立ちの主成分に自ら気づいたヴァニタスは、この場はそれ以上何も言わず、また明日にしようと告げて、自室へと引き上げていった。

昨夜の出来事を思い出し、またもや自己嫌悪に陥る。
ヴァニタスが残った食事を一気に食べたのは、己の感情をごまかす意味合いもあったし、覚悟を決める意味合いもあった。
大きな溜め息一つ、不甲斐ない己ごと吐き出す。
「カルディエ、相談なんだけど」
ヴァニタスが申し訳なさそうに声をかける。覚悟を決めたくせに弱気な自分が、情けなくなった。

カルディエが小首を傾げた。
「アトラクの機能回復に、どうしても部品が足りない。でも、進んで危険を冒す道は出来るだけ避けたい」
ここで視線を一瞬、ローレライに向ける。彼女は食事に夢中で気づいていない。
「……だからナイト・ストークを呼ぼうと思う」
ナイト・ストークという単語を聞いた瞬間、カルディエが椅子から立ち上がった。
椅子が倒れ、床と激突する。大きな音だったが、カルディエは気にも留めない。それどころではないのだ。
ヴァニタスを見下ろす視線は、怒りに塗れ、わずかなら侮蔑が含まれているようにも見える。
ヴァニタスの喉が硬い唾を飲んだ。言ってしまったことへの後悔がないと言えば嘘になるが、もう後には戻れない。
「本気？」
カルディエが問い掛ける。
「それが一番、危険が少ない」
ヴァニタスも引く気はないといった様子だ。
「あいつを頼れば、ろくなことにならない」
「それも分かってる。でも、生きている可能性のある機甲塔に……殲滅塔クラスの機甲塔に攻撃を受けるよりは、ましだ」
「なら、カルディエが一人で機甲塔に行ってくる」
「機甲塔から必要な部品を持ち出せる？　どれを持ち出すか分かる？」
「……カルディエには、できないってこと？」
「ううん。多分、出来るんじゃないかな。ただし……かなりの時間をかけて」
「……なら時間をかければいい」
「でも、その間に僕らが危険に晒されたら？　今のアトラクは、防御機構を起動できないよ」

「……」

言い返す言葉を思いつけず、カルディエは押し黙った。代わりに、無言の圧力でヴァニタスを押し潰そうとする。

平静を装うヴァニタスは、内心生きた心地がしなかった。許されるなら、今すぐにでも全力で土下座したい気分だった。

この雰囲気に挟まれて、可愛そうなのはローレライだ。恩人二人を交互に見つめ、この悪い空気は自分のせいかと涙を浮かべている。今にも泣き出しそうではないか。

しかし、カルディエとヴァニタスが同時にローレライの涙に気づいた。

二人の口から、全く同時に「しまった」という言葉が漏れる。

険悪な雰囲気は一瞬で消し飛んだ。

「あ、いけない……あの、ごめんね、違うんだよ、ローレライが悪いんじゃないんだよ、泣かないで、ね？」

「げっ、まずった……あややや、べ、別に喧嘩してるとかじゃないな、これはそう、えーと、夫婦喧嘩デス！　ケルベロスも食わないってやつな！」

「いや、結局それじゃ喧嘩だよって、夫婦！？　え、僕と、カ、カ、カル、カルディエが！？」

「なんだ、その嫌そうな顔は！　迷惑千万、満員御礼とでも言うつもりかコンチクショー！　乙女心を手のひらで上手に気持よく転がしやがって！」

「い、いや、そんなつもりは」

「いいデスいいデス、ヴァニタスがカルディエのことどー思ってるか、よーく分かりましたデスよ！　実家に帰らせていただくなー！」

「実家！？　ていうか、僕が嫌ってるわけ……ないよ。ないじゃないか」

「あーん？　じゃあ、どう思ってるデスか？」

「そ、そりゃ……えっと……ごにょごにょ……」

「きこえなーい！　はっきり・ぽっきり・もっさり喋れ！」

「もっさ……？　いや、今はそんな場合じゃなくて……あああああ、もう、こんなときに話ややこしくしないで、頼むから！」

先ほどの重苦しい雰囲気などどこへやら、二人はいつもの調子を取り戻し、夫婦漫才よろしく侃々諤々（かんかんがくがく）とやりあう。

二人の様子に、ローレライは堪らず腹を抱えて笑い出した。目に浮かべた涙の種類が変わり、彼女は通りの良い高音の笑い声を、食堂に隅々まで響かせている。

幼子の愛らしい笑い声が、カルディエとヴァニタスの頭を冷やした。目を合わせ、お互いの心を感じ取る。

二人の謝罪は言葉を必要としない。この世界で共に歩き出したのは、昨日今日のことではないのだから。

やれやれと肩をすくめたのはカルディエであった。

「そうだなー。そうだった。ヴァニタスが考えもなしに、そんな案出すわけねーデス。色々悩んで、悩みぬいて、その案に決めたんだろなー……」

おもむろに椅子を立て直し、論議の場に腰を下ろしたカルディエは、だいぶ落ち着いた様子で語った。諸手を挙げての賛成というわけではないが、ヴァニタスの言い分に譲歩するという意思表示である。

ヴァニタスは説得に成功したことを神に感謝した。

「じゃあ、賛成ってことでいいかい？」

ヴァニタスが改めて承諾を求める。

カルディエは「おう」と一言だけ、答えた。

「わかった。朝食が終わったら、準備を始めよう」

カルディエはやや憮然とした面持ちで椅子から立ち上がり、食堂の扉をくぐった。

その背に目を注いでいたヴァニタスは、彼女の姿が見えなくなった後、事態が飲み込めていないローレライの頭をそっと撫でた。

「大丈夫。心配しないで。きっと、上手くいくから」

幼子を安心させるために囁いた台詞は、同時に自分自身に対する

暗示でもあった。
これから呼び寄せる存在への恐怖を、少しでも和らげるための暗示。
ヴァニタスは、自分の選択が間違っていないことを神に祈った――

第二章　６４８－１９３８　『宵闇の鸛』

この世界に、まだ『大地』というものがあった頃のことである。

鸛（コウノトリ）という鳥がいた。

やや変わった鳥で、人家の屋根に巣を作って、つがいで卵を温め、子を育てる習性を持っていた。

その習性から、鸛は、背に赤ん坊や幸福を乗せて運ぶ鳥という伝説が生まれた。いわゆる民間伝承の類だが、微笑ましくもあるその言い伝えは、人々に親しみやすく、受け入れやすいものだったのだろう。夏の繁殖時期に鸛が訪れる地域では、縁起の良い鳥として扱われ、人々に愛されていた。

子宝や幸せの象徴として、天空を舞う白い翼。それが、彼ら鸛（ストーク）であった。

だが白き翼が光の中を舞えば、必然、生まれるものが一つある。

大地に堕ちる、黒い影だ。

如何に翼が白く輝こうとも、影は薄くはならない。それどころか、地に堕ちた影は、本体が受ける光が強ければ強いほど、その濃さを増す。

白い鸛が幸せの象徴ならば、悪意の象徴は黒い鸛。そう考えるのも自然な流れといえようか。

彼ら鸛の対極（かげ）は、宵闇の鸛（ナイト・ストーク）という名を与えられ、闇の中で人目をはばかりながら、どす黒い翼をはためかせ、夜の狭間を住処に暗躍していたという。

白い鸛に反逆するように、宵闇に飛ぶ黒き鸛の領域は、流産や堕胎と言った出産に関わる負の面であった。彼らは胎児を殺し、奪い、貪る悪魔だったのだ。

その悪虐非道な行いを人々は恐れ、憎み……そして必要とした。

彼らは、芽吹いたばかりの命を闇に溶かし、形を成さんとする命を子の宮から引きずり出し、くびり殺すもの。

彼らは、胎児が息絶える様を、喜劇でも見ているかのように、腹を抱えて呵々と笑えるもの。
彼らは、生まれ来る命のための讃歌を、慟哭と嗚咽の鎮魂歌に変えるもの。
それらを望む人々の『闇』を叶えるもの。
悪魔と呼ばれることに、彼らは心地よさすら覚えたのではないだろうか。
そのために自分は生まれたのだ、作られたのだ、と。

ヴァニタスが呼ぼうとしている存在は、その悪魔と同じ名を冠している。
命を嘲り、命を弄び……闇を叶える悪魔の名。
ナイト・ストーク。

「これでよし……と」
アトラクの屋上にて、アンテナ設備の調整を行っていたヴァニタスは、聞くもののない独り言を漏らし、空を仰いだ。
黒い海の上に広がる、突き抜ける青空。
相変わらずの強い日差しは、赤熱したコイルから放出される熱線のごとし。生身で受け続けるのは御免被りたいほどである。
ヴァニタスの場合、体温調節剤と抗紫外線溶液の混合液（スペシャルブレンド）を毛皮にコーティングしているから耐えられるが、無策で作業をすれば、二時間以内には著しい不調を訴えることになるだろう。
ヴァニタスは方位計と三軸電磁波測定器を交互に見つめ、アンテナに最後の微調整を加えた。
天に向かって伸びる、この長さ3メートル弱の複雑な金属細工が、悪魔を呼ぶ電波の祭壇だ。呪文は単調な電磁の波、生憎と血の滴る生け贄はなし。されど手順は間違っていない。後は時間が解決する。
しかし、アンテナから特殊な周波数の電波を送信し始めて、既に

８作業単位が経過していた。今だ目当ての悪魔は現れない。波間の音と共に、平坦な毎日がゆるやかに過ぎていく。

平坦とは言え、快適ではない。

アトラクのリサイクルシステムが停止しているため、糞尿含め、集積槽から溢れた汚物は全て海に垂れ流しだ。生活用水の精製も出来ないため、最低限の飲み水を確保するべく、風呂も禁止。

衣類の浄化はオゾン式の浄化筒で出来るが、生身はそうはいかない。

試しにヴァニタスは、自分の臭いを嗅いでみた。

眉根が寄る。最後の風呂から六日が過ぎた体は、流石に臭いがきつくなっていた。

ともあれ、生活面で不便が生じ始めてきた以外で、この八日間で起きた出来事と言えば、嵐でアンテナが歪んだことと、ローレライがカルディエ手製の服を貰って、大喜びしたことぐらいだった。

――ローレライ、とっても喜んでいたっけ。

その時のローレライの笑顔か脳裏に浮かぶ。抱きしめたくなるほどに愛らしい笑顔。

浮かべた少年の顔も自ずと笑顔になった。

「さて、もうちょっとで終わるから、頑張りますか」

ヴァニタスは、歪んだアンテナを真っ直ぐ立たせるための、最後のボルト群を電動工具で絞め始めた。絞める作業そのものは機械任せではあるが、重たい機械を支えるのはヴァニタスの細い腕が担う。

残り三つのボルトのみとなった所で、疲労がしびれに変わってきた。

両手を振って痺れを取り除こうと試みる。

手を振りながら、ふと屋上から橋を見下ろすと、駆け回る幼子の姿が見えた。貰った服を着てはしゃぐ姿は、無邪気そのものだ。

ローレライが着ているのは、体にフィットしたウェットスーツのような服だった。形状は背面の開いた半袖の上着と、側面にスリットのある半ズボン。黄色地に黒のラインが入っており、胸元にある、

流線でデザインされた魚の意匠が可愛らしい。海藻類を服として着るアプカルルには、このような服でも至極珍しいに違いない。

カルディエ曰く「なんかアトラクの倉庫にあったんで、引っ張り出して直してサイズ合わせてプレゼントしたなー」とのこと。

裁縫の技術もかなりの腕前だと知ってはいたが、縫い針だけでここまで出来るものなのかと、ヴァニタスは感心しきりであった。

しばらくローレライを見ていると、その視線に気づいたのだろうか。屋上のヴァニタスに向かって両手を大きく振り始めた。

どうやら、ヴァニタスが痺れを取るために手を振っていた動作を、自分へ向けられたものと勘違いしたらしい。

ヴァニタスも振っていた手を顔の横まで上げて、ローレライに応えた。

「本当に、いい子だなあ」

彼の台詞は、本心からのものだった。

彼女の素直さと無邪気さを見ていると、嫉妬を抱いたあの夜の一幕を恥に思う。自分の中にある、唾棄すべき醜い感情を知ったときの自己嫌悪は、しばらく忘れられそうにない。

アトラクの管理者である拘束技師として、自己の感情は二の次にしなくてはいけない。改めて、己に課した戒律を意識し、胸中で復唱する。

それに集中しすぎてしまったのかもしれない。

いつの間にか現れた背後の気配に驚いて、ヴァニタスは反射的に振り向いた。

ローレライは下にいる。ならば気配の主は一人しか考えられない。

「カルディエ、何か？」

と、振り向きざまに言った言葉を受け止めたのは、ヴァニタスの予想していた人物ではなかった。

黒く大きな影。

骨格標本のような金属の身体。

頭までボロボロの布を纏い、白く輝く鳥の仮面を被った大柄な人

物が、そこにいた。
音もなく現れたそいつは、仮面に穿たれた穴の奥から、闇を瞳の代わりにして、微動だにできない猫の獣人に覆いかぶさるようにして、見下ろしていた。
「あ……」
どうやってヴァニタスの背後に現れたのだろうか。
物音一つ立てないどころか、アトラクの七種に及ぶ警戒装置の、どれか一つすら反応させずに。
原理不明の忍び足（スニーク）。おかげでヴァニタスは完全に虚を突かれてしまった。行動は不可能だ。こうなっては運命に身を任せるしかない。
「呼んだな？　ヴァニタス・ヴァニタートゥム」
仮面の怪人の声は、男とも女とも、若いとも老いているとも判別のつかない、聞き心地の悪い奇妙なものだった。
ヴァニタスにしてみれば、この声を聞くのは久しぶりのことだった。少し前までは、できれば二度と聞きたくないと思っていた声だった。
そう、この声の持ち主こそ、ヴァニタス達が召喚しようとしていた――
「ナイト・ストーク……」
乾いた声が、少年の喉を震わせた。
「久方ぶりだ。じつに久方ぶりだな。六千二百四十四万三千五百三十五秒ぶりか。残酷な世界は、お前を鍛え上げているか？」
トレーナーが教え子に成果を尋ねる口調で、ナイト・ストークが語りかける。
ヴァニタスはぎこちなく頷いた。
「そうか。それは重畳。では、残酷な世界の一員である『我々』は、Ｇ・Ｎｏ．７の拘束技師ヴァニタス・ヴァニタートゥムに質問しよう。何故、我々を呼んだ？」

「……破損したアトラクのパーツについて、相談したいことがあったからです」
なけなしの勇気を振り絞り、震える声で答える。しかしヴァニタスの足は、亀が這う速度で後ろへ下がろうとしている。体は恐怖に素直なようだ。
ナイト・ストークは、鳥のように首を三度捻った。
「ほう。あの奇跡的な『規格外』がいて、このアトラク＝ナクアが破損したのか。ほう。ほおおおおう。興味深いな。実に興味深い。いいぞ。実にいい」
何がいいのか分からないが、ヴァニタスはナイト・ストークが妙に上機嫌なことだけは、分かった。
「それで？」
ナイト・ストークが手短に問う。
促されていると気づくのに、一呼吸の間があった。
「あ、あの……アトラクを修理するために、パーツを調達したいのですが――」
「これか？」
ヴァニタスが言い終わるより早く、ナイト・ストークが身を震わせると、ボロ布の内側から大量のパーツが落ちだした。
あれよと言う間に、その足元に山となって積み上がる。一体どこから出てきたのか。
「あ、えっと……」
戸惑うヴァニタスの目の前に、ナイト・ストークがパーツを拾い上げ、突き付けた。
「これか？」
問う声に感情はない。
問いに押され、ヴァニタスはパーツをつぶさに観察する。それが必要な部品の一つだと見定めるのに、多くの時間はかからなかった。
「これです」
「それは重畳。では、お前の希望は叶えられたな？」

「は、はい」
と勢いに押されて答え、はっとして慌てて首を横に振る。
「あ、いや、待って、違う、そうじゃなくて」
「契約は履行された。では、対価を頂こう」
言うが早いか、ナイト・ストークは闇の視線をヴァニタスから外し、彼の後方を見下ろした。
何を見ているのだろうか。ヴァニタスは黒い翼の行動を不審がる。
自分の後方にあるものは何か。
まず、アンテナ。次にアンテナに付随する、各種制御用の機器。
その向こうには落下防止用の鉄柵。
そして、その更に先に『いる』もの――――それは橋の上でこちらに手を振っていた……
ヴァニタスの心臓が短い悲鳴を上げる。
それだけはと、絶望の鼓動が鳴る。
やめてくれと、懇願の鼓動が響く。
ナイト・ストークが見ているものが、何か。
ナイト・ストークが望んでいることが、何か。
悟った瞬間、己の選択した道が誤りだったことに、彼は気づいてしまった。
「いい。実にいいな。ヴァニタス、今回の対価は『あれ』だ。前回のような資材では駄目だ。我々が与えた価値あるものに見合う対価は、あれしかない」
ナイト・ストークの歪んだ人差し指が、アトラクの屋上から橋の上にいる者を指し示す。
ヴァニタスが振り向いた先に、不安げに彼を見上げる幼いアプカルルの姿があった。
ヴァニタスの感情が爆ぜたのは、その瞬間だった。
「ふざけるな……ふざけるなあ！　駄目だ、許さない！　あの子は、あの子だけは駄目だ！」
怯えは退去し、怒りが心を支配する。込み上げる裂帛の気勢を武

器に、ヴァニタスは悪魔に立ち向かう。
ヴァニタスの怒りを理解出来ないとばかりに、ナイト・ストークが三度首を捻る。
「拘束技師よ。お前が望んだものは渡した。契約は履行されたのだ。我々はただ、その対価を粛々と徴収するのみ」
ナイト・ストークの仮面が歪む。
笑っているのか。悪魔よ。
「安心するがいい。お伽話の魔王のように、ここから連れ去ったりはせぬ。ただ『腑分ける』だけのこと。いま、この場で、生きたまま、思いのまま。その行為が我々を満たす。それだけでいいのだ。のう、我々は実に良心的であろう？　これだけの物をお前に与え、たったそれだけのことしか、望まぬのだから」
腑分けるという単語が、ヴァニタスを総毛立たせたのは、言うまでもない。
――腑分ける？　あの子を、あんな小さな子を、生きたまま……解剖……する……だと？
理解できなかった。何故、それが対価になるのか。
喰らうでもない、犯すでもない、従えるでもない……ただ、解剖したい。
そんな対価があるのか。
唐突な理不尽に脳天を打たれ、ヴァニタスは正気を失いかけた。
自分が呼んだ者が、理解の範疇を超えた存在であることは、彼も重々承知していた。初めて出会ったときも、願いの対価に備蓄資材をごっそり持っていかれた苦い記憶がある。その時の理不尽な対応と摩訶不思議な在り様に、カルディエは嫌悪を隠さず、ヴァニタスも警戒すべき相手だと認識した。
その認識の程度が甚だ甘かったのだ。
今回の召喚による損失も、前回同様、物資が持っていかれる程度だろうと高を括っていた。部品の所在を教えてくれるよう道案内を請うだけなのだから、要求が前より高くなることはないだろうと。

だがヴァニタスはミスを犯した。ナイト・ストークの言葉に、そのまま『ＹＥＳ』を返してしまった。

この悪魔は、その『ＹＥＳ』を覆してはくれない。

――甘かった。焦りすぎていた。あるかないかも分からない、生きた機甲塔の恐怖に脅え、意思の疎通が出来る『だけ』の正体の分からない化け物に、すがってしまった。そして、そいつ相手に僕は取り返しの付かないミスを……なんてことを！！

後悔は、先に立たないからこそ『後悔』と書く。自責の念は失敗を贖う代償には、ならない。

ならば行動するしかないと、少年は知っている。

「やめろ！」

大型のレンチを両手に取り、正面に構え、力の限り叫ぶ。

ナイト・ストークは極めて冷静に「何をだ？」と返した。

「あの子を契約の対価にすることだ！」

「聞けぬ。契約の対価はあれだ。何があろうがいただく」

「ナイト・ストーク、駄目だ。契約は無しだ。無効だ。あの子がこんな無機物の山と対価だって？　大間違いだ！　あの子と引き替えにできる物なんか、この世に存在するものか！　いらない、こんなパーツはいらないから、やめるんだ！」

「大間違いなのは、お前だ。拘束技師よ」

歪んだ人差し指がヴァニタスの鼻面に突きつけられた。ヴァニタスの全身を麻痺させるには、それだけで充分だった。

構えたレンチは振るわれなかった。

「契約は『成された』のだ。お前は我々を知っている。我々の性質を知っていたはずだ。知っていて、呼び、頼り、求めた。これから起こることの結果は、他でもない、お前の、お前自身の選択の結果だ」

これ以上語ることはないと判断したか、ナイト・ストークはヴァニタスの頭を飛び越えた。

黒いボロボロの布がはためき、風を含んで広がる。

まるで黒い翼。それが生み出す影は白き橋に忌まわしき形を刻み、その中に幼子を捕らえている。

影の主は、ローレライの前に降り立つと、覆いかぶさるように顔をのぞき込みながら、三度首をかしげた。

目の前の巨影に、ローレライの足が竦(すく)み上がる。

ヴァニタスの怒鳴り声は、敵意と嫌悪に満ちていた。突如ヴァニタスの背後に現れたこの怪人が、少なくとも味方ではないことは、ローレライにも分かっている。

それが、いきなり自分の前に降りてきた。これから何をされるのか、想像もつかない。

「お嬢さん。いいな。君は実にいい。そそられる。おっと、不適切な表現だったな。失礼した」

自分の台詞を肩で笑い、

「では、腑分けさせてもらうよ」

事もなげに告げる。

「ふ、わけ……？　い、いたいの？　いたいの、やだよぅ……」

拒否など意味のないものだった。

悪魔の手が、逃げ出そうとした幼子の首を真正面から掴み、締め上げる。

宴の主采を逃してなるものかと、言わんばかりに。

「安心したまえ」

悪魔が笑った。

「君が苦しめば、みんな幸せになるのだから」

第二章　６４８－１９３８　『規格外の歯車』

梯子を降りるヴァニタスが、あらん限りの力で絶叫していた。
己の浅はかさを恨んでも、梯子を早くは降りられない。怒りと後悔が涙となって溢れてくる。梯子を半分降りきった頃には、怒りの絶叫は哀願に変化していた。
哀願など意味がないことは、ヴァニタスも分かっている。泣いて謝れば許してくれる程度の存在なら、最初から幼子を腑分けるなどと、のたまったりはしない。
話し合いでは救出は不可能なのだ。少年の言葉は、姫を窮地から救う剣にはなりえない。
では、どうすればよいのか、ヴァニタスは思いつかなかった。
しかし『彼女』はこう考えた。
理不尽には暴力あるのみ――――と。
右手を変形させた電磁投射砲（レールガン）から、触れられそうな殺意を揺らめかせ、カルディエがアトラクから飛び出した。彼女の鋭敏な聴力がヴァニタスの叫びを捉え、外の異常を察知していたのだ。
黒の戦乙女（ワルキューレ）は、憤怒の形相にて銃口を悪魔に向けた。距離は１５メートル。この距離ならば外すことはない。銃口から放たれる殺意の象徴は、あやまたず悪魔の頭を砕くだろう。
しかし、射線上に異物が割って入った。
ローレライだ。ナイト・ストークは、一瞬の躊躇いすらなく、幼子を盾にしたのだ。
けう、とローレライがかすれた声を上げた。
力任せに振り回した時の遠心力が、幼子の首に歪んだ指を食い込ませたため、頸動脈が閉塞しかかっている。ローレライの意識は消失寸前だ。危険な状態だった。
「カルディエ、駄目だ！　電磁投射砲（レールガン）じゃ、威力がありすぎる！　ローレライが巻き込まれる！」

梯子を降りきったヴァニタスの忠告がなくとも、盾代わりにされては、そもそも撃つことなど出来ない。

ナイト・ストークとカルディエ、両者の睨み合いが生じる。

「久方ぶりだな。実に久方ぶりだ。カルペ・ディエム。いやさ、規格外（イレギュラー）よ。元気そうでなによりだ」

「気安く呼ぶな。反吐が出る」

「つれないな。我々とお前は、近しい者なのに」

「ローレライを放せ！」

カルディエに、ナイト・ストークと会話するつもりは毛頭ない。脅しとばかりに銃身を揺らす。

勿論、こんな脅しが効くとは思ってもいない。

いかに奴の虚をつき、無傷でローレライを救い出すか。カルディエの電脳は、最善の策を生み出すべく、スペックの最大値まで処理速度を上げて、二つの補助電脳と論議を交わしていた。

しかし、それが無駄な行為に終わるとは、この時のカルディエは想像すらしていなかった。

ナイト・ストークの首が三度、鳥がやるような動きで捻られる。睨み合いの最中、やおら空いている方の手でローレライの全身をまさぐると、彼女の下腹部をじっと見つめ、また首を捻り始める。

不可解な行動だった。観察のような、診察のような、何かを見定めている、そういった印象を抱かせる動作だった。

見定め終わると、悪魔は肩を揺らしはじめた。

喜んでいるのか。

「これは……たまらぬな。たまらぬ子宮だ。未熟な卵巣から弾力のある卵管、瑞々しい子宮に至るまで、一式全てを取り出して、こびりついた血と脂肪を丁寧に取り除き、洗い、清め、恭しく（うやうや）、捧げるように、どこかに野晒しにしたい子宮だ。その隣で、まだ未完である子を宿す神聖な臓器が、ただの肉塊として、腐れながら干からびていく様を身動ぎもせず眺め続ける……ああ、あぁぁぁぁぁ、最高だ。実にぃ、最高だなぁ」

吐き気を催す異常な猟奇趣味を、聞かれもしないのに告白するナイト・ストークの、なんと嬉々とした有様か。

突如、その嬉々とした様子が変貌する。

「だからこそ、だからこそだ。これは実に……実に……許しがたい……」

何故であろうか。あれほど喜んでいたナイト・ストークは、強い怒りを声の隅々にまで含ませて、そう吐き捨てたのだ。

仮面の瞳が、ローレライ越しに電磁投射砲（レールガン）の銃口を覗いた。

ナイト・ストークが下を向いて首を振ったのは、諦めの表れだったのかもしれない。

淡々とした口調で、

「放せと言ったな。わかった。放そう」

いきなり無条件での開放を宣言したのだ。

そして、乱暴にも、ローレライの小さな体をカルディエに向かって放り投げるたではないか。

放物線を描いて飛び来る、意識朦朧たる少女。

さすがに、この展開はカルディエも予想していなかった。具現化武装を解除する余裕はなく、左手のみでローレライを受け止める。

そのまま後方に倒れ込みながら、ふわりと一回転。衝突の威力を受け流し、ローレライの体に衝撃が残らないように軽やかに着地。

一連の動作は、卓越した曲芸士の動きを髣髴とさせる。

片膝を着く姿勢を取ると、カルディエは電磁投射砲（レールガン）を構えた。

銃口の先のナイト・ストークは、逃げるでもなく、木偶のように立っていた。無防備な姿が、かえって不気味である。

「まんまと騙されたわ。そいつも、お前と同じだ、ジャガーノート。お前と同じ規格外だ。とんだ食わせ物だった……ヘクセンナハト、黒鉄の魔女め。よくも上物を台無しにしてくれたな」

神経質に首を左右に振り、ナイト・ストークが吐き捨てた。

カルディエも、駆けつけたヴァニタスも、悪魔の言葉の意味を図りかねる。

「興が醒めた。契約は無効だな。パーツは返してもらおう。全く、骨折り損だ」

ナイト・ストークは両手を広げた。腕から垂れ下がるボロ布の切れ端が、黒い翼のようであった。

逃げるか、はたまた別の行動に移るのか。されど人質を取り戻した今、カルディエが遠慮する理由はない。

超音速の弾丸がナイト・ストークの胴体を貫く。骨組みの巨体は、くの字に身を屈めた。

しかし、やはり悪魔を倒すのは一筋縄ではいかない。何事もなかったように身を起こし、鳥のように三度、首を捻った。

「前回で懲りてないのか。規格外。無駄だと知っているであろう。我々を消したければ、次元滑落装置を使え。実に有効だ」

「そんなに死と踊りたいか、悪魔め。なら、望み通りにしてやる」

カルディエは怒りに我を忘れかけている。右手に紫電がほとばしるのを見て、ヴァニタスは半ば悲鳴のような声で彼女をたしなめた。

目標と近距離でダンス・マカブルを発動すれば、もれなく死の舞踏会に招かれる。拒否は無効。仲良くまとめて、あの世行きだ。

橋に落ちるカルディエの影が、動揺と怒りに震える。

「ぐむぅ……わかった、ヴァニタス」

変形を中断、電磁投射砲（レールガン）を維持し、照準を鳥の仮面の中央に合わせる。そこなら効果があると確信しているわけではないが、そこぐらいしか効果がありそうな箇所も見当たらないのだ。

「どこを狙っても無駄だ。やめておけ、規格外。それと臨戦態勢の必要はない。我々は、その子宮には興味がなくなった」

ローレライを一臓器で呼ぶことに、保護者二人が顔をしかめた。

しばし、こう着状態が続く。

いかんともしがたい空気に、ヴァニタスの耳と尻尾が不規則に揺れ始めたときだった。

ナイト・ストークが顎に手を沿え、一歩、前に出たのだ。

カルディエとヴァニタスの警戒の色が強まる。しかし、悪魔の足

はそれ以上前に出ることはなく、代わりに奇妙な提案を投げかけてきた。
「ふむ。これは、もしや……」
「……？」
怪訝な顔の少年と少女。その顔が面白いのか、ナイト・ストークは呵々と笑い、何かに納得したかのように頷いた。
「ヴァニタスよ。提案だ。別の対価を払えば、パーツはくれてやろう」
「な、え……別の対価？」
急な申し出にヴァニタスの体が強張る。また理不尽な契約が待っているのではないか。
「警戒するな……と言うほうが無理か。案ずるな。今回は、先に対価を要求する。お前は、我々の要求する対価を払うか払わないか、心の天秤にかけてから決めることができる。対価を払わなければ、我々はパーツごと消えるのみ。対価を払えば、パーツだけ残して我々は消える」
「……」
どんな要求をされるか分からないが、拒否権があるなら、最悪の結果は避けられる。
ナイト・ストークは異常で理不尽ではあるが、言動に偽りを含めたことはない。ヴァニタスの経験上、それだけは確実と言える。
ヴァニタスがカルディエに目配せした。
その様子を横目に捉え、カルディエが小さく顎を引く。
二人の意志は決まった。
「お前の求める対価は？」
震えがちな問いに、ナイト・ストークが首を三度捻って答えた。
「我々の質問に答えること」
「質問？それだけ？」
拍子が抜けたのはカルディエだ。
同じパーツの対価が、ローレライの腑分けから、ただ質問するだ

けへと変わった――ナイト・ストークの価値基準が理解できないと、解せない様子だ。
「そうだ。たった一つの質問に答えればいい。答えの内容は問わない。素直に答えればな」
「……どんな質問だ？」
屈んでローレライの様子を見ながら、ヴァニタスが問う。
「それは質問に答えるということだな？」
直ぐにナイト・ストークが念を押してきた。
「ああ」と、低い声でヴァニタスは返す。
「よろしい。実によろしい。質問は規格外、お前にだ」
歪んだ指先が、カルディエを示した。
ヴァニタスに質問が来るものだとばかり思っていた二人は、意表を突かれはしたが、一度の目配せだけで、一蓮托生の定めを誓い合った。
決意の視線が鳥の仮面を穿つ。それに応と答えたか、仮面が歪んで笑った。
「では規格外。お前に問う。腕に抱き抱えた幼子とアトラク＝ナクア、守れるものがどちらか片方なら……お前は、お前『自身』は、どちらを守る？」
質問自体、どうにも意図の掴めない内容であった。それを聞いて、ナイト・ストークはどうするというのか。
分からないが、質問そのものは、カルディエにとって答えに窮するものではなかった。
「ローレライだ。カルディエにとって、ヴァニタスとローレライが一番に守るもの。アトラクは二番」
「ほう。拘束技師や、アプカルルの幼子のが大切か。ほおおおう。興味深い。実に興味深いな」
今回の遭遇の中で、最大の歪みを仮面が見せる。
「そうか。規格外。合点がいった。疑問が解けた。これでは『仕方がない』な。実に仕方がない」

「なに一人で納得してんだ、このとりがら変態やろー！」
「我々は満足した。契約は成された。後は好きにしろ」
カルディエの罵声を無視し、ナイト・ストークは彼女らに背を向けて、空を見上げた。銃口を向けられていることなど全く意に介していない。事実、意に介する必要がないことは、皮肉にもカルディエの追撃がないことが証明している。
闇の瞳が見上げる青い空は、少しだけ白い雲を孕み始めていた。
「いい空だな。実にいい空だ。だから、忠告をくれてやろう。この橋の先にある浮島には近づくな。既に近づいた後なら、今、生きている幸運に感謝しろ」
「なに？」
カルディエとヴァニタスの台詞が重なった。忠告などくれるような輩でない者の忠告に、二人は戸惑っていた。
ナイト・ストークの仮面が歪む。そのまま、さらばだと言い残し、ナイト・ストークの姿は一瞬で消えてなくなった。
文字通りである。消えてしまったのだ。
何の痕跡も残さず、現れたときと同様に、唐突に。
何秒も、消えた地点に目を凝らし、ようやく悪魔が去ったことを確信したと同時に、ヴァニタスの両脚は立つという責務を放棄した。
橋に腰を下ろした彼は、震える両脚を恨めしげに掴み、どうにか震えを打ち消せないかと悪戦苦闘する。が、自分は臆病で根性なしだと自虐的に諦めて、這うようにカルディエの抱くローレライへ近づいた。
白い髪をそっと分けて、細い首筋を診る。
「かなり強く首を絞められてたけど、もう痣もない……大事はないみたいだ」
またもやローレライの超再生能力が発揮されたようであった。意識が戻っていないが、恐らく、時間が経てば目を覚ますはずとヴァニタスは判断した。
念のため、精密検査を行おうと話し合い、ローレライを医務室に

連れて行く。検査はカルディエが行うと申し出た。
ローレライを任せた後、ヴァニタスはナイト・ストークの置き土産を使い、アトラクの修理に取り掛かり始めた。
修理に取り掛かりだした少年の脚は、もう震えてはいなかった。

「ごめん」
突然の謝罪に、ヴァニタスが顔を上げた。
今にも落涙しそうなカルディエが、そこにいた。

空が、青と橙色のグラデーション模様のドレスで着飾り始めた頃。
修理作業も半ばが完了した。休みらしい休みも取らず、一気に修理を行ったつけが、ヴァニタスの関節に軋みとなって現れてきていた。流石に休まないと体を壊すと、屋上の真ん中で空に瞬き始めた星を見ながら、小休止を取っていた時の事だ。
見計らったようなタイミングで食事を持って来てくれたカルディエが、いきなりヴァニタスの左隣りに正座して、謝罪したのだ。
口に運びかけていたサンドイッチ状の軽食を皿に戻し、ヴァニタスは笑みを浮かべた。
昼の出来事に責任を感じているのだろう。責任はカルディエにはないとヴァニタスは思っている。それでも尚、責任を感じ、恥じ入る姿は、いじらしくもあり、誇り高くもある。
ヴァニタスの右手が、カルディエの頬を優しく包んだ。手のひらに感じる震えは、自分のものか、彼女のものか、識別できなかった。
「謝る必要はないよ。カルディエ。君は、守った。僕も、ローレライも、アトラクも。全部、守ったんだ」
「でも……」
ヴァニタスは立ち上がり、背筋を伸ばした。そして、勢いよく、腰を直角に曲げて頭を下げる。
「僕こそ、ごめん」

今度は、カルディエが面食らう番だった。
「あいつを呼んだのは僕だ。浅はかだった。もう、あいつに頼ることはしない。これからは、自分の力で、アトラクと……君達を守る。僕の、拘束技師としての力で。だから、もう悲しそうな顔しないで。僕に、君を守らせて」
初めてだった。
ヴァニタスが『守る』側になると宣言したのは。
彼の告白にも近い宣言を聞いたカルディエは、瞬きも忘れて、見入っていた。
彼女の茫然とした顔が、次第に破顔していく。
「うん……」
俯いて、かろうじてヴァニタスに聞こえる程度に返事をする。
「よし、じゃあ、これからもよろしくね、カルディエ。僕も頑張るから」
作業用の手袋を外し、少年が照れくさそうに右手を差し出す。
機械仕掛けの乙女は、その手を握り、ゆっくりと立ち上がった。
夕空のドレスに星の装飾が一段ときらめいている。
瞬く星の下で、手を取り合う二人を祝うように、黒き海の波音が響いていた。

第三章　６４８－１９６９　『大顎門の唄』

中天に燦々（さんさん）と輝く太陽が、黒い海にも白い橋にも、等しく強烈な日差しを降り注いでいる。

焼けるような……どころではなく、熱に弱い物質が長時間晒されれば、歪み、二度と元通りにならないほど変性してしまうに違いない。

橋の表面温度は六十度以上。知恵と根気があれば、簡単な装置でお湯も沸かせそうな熱量だ。これだけの熱量を受ける海も、表面から大量の水蒸気を昇らせて、空に浮く雲へと餌を供給し続けている。すでに雲は空高く伸びており、夕刻頃には、高い確率で強烈な雷雨を生み出すだろう。

この熱線のごとき日差しを、人が無防備なまま一日中浴びてしまえば、どうなるか。

医者でなくとも答えは分かる。全身、深刻な火脹れを起こして重傷認定だ。場合によっては、命の危険すら有り得る。

だがカルディエにしてみれば、夏空からの熱線も春の日差しと大差ない。彼女の耐熱温度は約四千七百度。数十度の差など誤差でしかないのだ。

ゆえに生気の抜けた間抜け面で、朝から今までアトラクの屋上で呆けていても、彼女には、何一つとして不具合は起こらなかった。

ある意味、半日近く間抜け面で呆けていることが、最大の不具合と言えなくもないが。

これで警備しているのだと、誰が信じられようか。例え、事実であっても。

間抜け面のジャガーノートは、黙々と橋の建設作業を進めるアトラクの屋上で、縁（へり）に座って空を眺めていた。

視線は空の一点を見つづけている。何もない。

ただし、凡人の視力で見たならば、と付け加える必要がある。

彼女にしか理解できない世界に、カルディエの心は飛んでいた。
動かぬ機械仕掛けの少女と足並を揃える世界。波の音は変わり映えもなく、空に流れる雲も心躍る変化など見せない。それでも時は淡々と過ぎていく。
日が傾き、落ちる影がはっきりと長くなりはじめた。本日の作業も終わりを迎えようとしている。
ここにきて、ようやくカルディエの形の良い唇が動きを見せた。
「作業工程第６４８フェーズ、第１９６９作業単位、延伸作業終業報告……座標にズレはナッシング。さすがヴァニタスなー」
間抜け面を消し去りながら、独り言を呟き、それを合図にカルディエは、屋上からアトラクの足元へ飛び降りた。
アトラクが足を折りたたみ、防御態勢に移行し始める。多重反射装甲板をいたるところからせり出し、自らを覆う様は、繭に閉じこもる幼虫さながらの光景であった。
ものの数分で、第一次待機防御態勢への移行が完了する。守りを固めた鉄の蜘蛛は頑強だ。打ち崩せるものは、まずいない。機甲塔クラスの攻撃には、第一次待機防御態勢では耐えられないが……
「よしよし。今日もちゃんと丸まれたな。えらいぞアトラク」
腰に手を当て、子供を褒める母のように、カルディエが囁く。
昼の光の中でさえ、小さな星すら映す紅い瞳は、変わり映えなき一日の無事を喜んで、爛々と輝いていた。

アトラクの修理が完了して、既に２５作業単位が経過していた。
ヴァニタス一行は、話し合いの結果、橋の延伸方向を変更するということで合意した。
浮島方向の橋は非公式化登録し、延伸停止。退避していた箇所から、直角に交わる橋を新たに建設すると言う事で意見もまとまり、修理が完了した時点から、アトラクは新たな橋を造り続けている。
作業速度も順調、遅れを取り戻せとばかりに、平均値を上回る作業

効率を、連日叩き出しているほどだった。
リサイクルシステムも防御機構も完全に復旧している。管理室のモニターにヒビが入っている以外に、損傷らしい損傷もない。
鉄の蜘蛛は、ヴァニタスの技術と努力により、完全に息を吹き返したのだ。
それを自分のことのように喜ぶのは、キッチンでエプロン姿を披露するカルディエだった。以前と変わらぬアトラクの働きぶりを見れば、いかにヴァニタスの腕がいいか分かると、夕食の席でたっぷりと褒めちぎっている。
「いやあん、大したもんデスなー！　あんだけ派手にぶっ壊れた蜘蛛助を、元の木阿弥……違う、元通りに直すとはな！　ぬあーっはっはっはっ、ふはあー」
ローレライの口の周りについたソースを、エプロンの端で優しく拭き取りながら、カルディエが奇天烈な音程の笑い声を上げる。
ローレライがびくりとし、ヴァニタスが、食事を飲み込み損なって、むせる。笑い声が可笑しすぎたのだ。
「げほ、げほ……ど、どうしたの、急に」
「おう、今日な、ちこっとばっかし試しに、星を頼りに座標確認していたら、いや、見事に予定通り真っ直ぐ進んでるんで、アトラクもよくここまで直ったわ、母さん嬉しいっ、あの子がこんなに立派になってぇ……な気分になったので、ありマスた」
「そ、そうなんだ。ありがとう」
脈絡のない話題を振られた少年には、決まりきった型通りのお礼を返すのが、今出来る精一杯のことだった。
カルディエに褒められるのは悪い気はしないが、修理できたのは「あの」パーツがあったがゆえのこと。ヴァニタスは素直に喜ぶことが出来ない。
ナイト・ストークがくれたパーツは、アトラクの全機能を修復するために必要な、全てが揃っていた。罠でも潜んでいるのではないかと一つ一つ検査したが、そのようなものは一切見つからなかった。

純正品そのものだ。かえって気味が悪いと、ヴァニタスは背筋を凍らした。

助かったのは事実だが、あの化け物が、どうやって必要なパーツを知り得たのか。そのことを考えるたびに、ヴァニタスの尻尾は力なく垂れてしまう。

ともあれ、建設系のシステムもリサイクルシステムも稼動した。まだ不具合が生じる可能性も無いとは言えないので、ヴァニタスは、普段の業務に加え、各システムのリアルタイム検査も毎日行ってきた。

今のところ異常もなく、明日、異常が見当たらなければ、作業スケジュールを通常のものに戻すつもりであった。

ここしばらくは、いつもの二倍、いや、それ以上の仕事をこなしてきたことになる。まだ完成されていない華奢な体に、疲れが貯まるのは当然だった。しかし、それも、どこか心地好い。

つつがなく日々の労務に従事でき、仕事が終われば食事が用意され、毎日風呂にも入れる――当たり前のことが、かくも素晴らしい幸せだったのだと、ヴァニタスは強く噛み締めていた。

そこへ、先ほどの、世にも珍妙な笑い声が割って入ってきたものだから、気分が削がれるのも無理はない。

――ま、これも幸せの一つ。

そう思うに至ったヴァニタスは、夕食の最後の一口と共に、微妙な表情も腹の底へ飲み下した。

腹に落ちる感触を味わった後、幼子の世話を焼く愛しい者を、微笑みをもって見つめる。

椅子から垂れた尻尾の先が、リズムよく左右に揺らいでいた。

ヴァニタスが炭酸添加された温水風呂から出る頃、外は豪雨に煙り、雨降る暗黒に包まれていた。

嘆きのような雨だった。空が幸せな少年を妬んで、わずかでも嫌

がらせてやろうかと画策でもしたのだろうか。
　新しく造られた橋に設置された冷光灯も、初仕事が豪雨の中とは思いもしなかっただろう。アトラクの放つ照明が加勢してくれているが、この水の暗黒に抗うのは容易なことではなかった。
「ローレライの目だと、なんも見えないだろなー」
　カルディエは展望室中央のソファーに深く座り、外と幼子を交互に眺めていた。
　その幼子は、正面の強化ガラスに微動だにせず張り付いている。動かぬ体に反して、深緑の瞳の動きはせわしない。打ち付ける雨がガラスに作る水模様を、楽しげに追っているのだ。
　二人がいるのはアトラクの最上階、通称展望施設。直径5メートルの円形の部屋は、入口の正面に多層強化ガラスの大窓を持ち、外の景色を眺めることができる。本来は観測用施設として造られた部屋だが、現在、その役目は果たされていない。観測用の機材は、部屋の端に積み上げられて、埃を被り始めている。
「わあ、すごい、すごい！　なんで、みずがこんなもようになるんだろう」
「窓に雨と風がぶち当たってるせいな」
　とカルディエが説明したところで、理解もできない。ガラス自体、アプカルルの文化レベルからしたら魔法の存在だ。だからこそ、身の丈を超える透明な壁が、ローレライにとっては興味をそそる不可思議な存在に見えるのだろう。
「そんなに面白いか？」
「うん、おねえちゃん、あたし、こんなみえないかべ、みたことない」
　見えない壁を見たことがないと言う台詞に、カルディエが笑った。子供の素直な感想は、時として詩人より詩的であり、賢人より哲学的でもある。
「海は大荒れだろうなー」
「おおあれって、なに？」と、ローレライが首だけ振り向けて問い

かける。
「ん？　大荒れってやつはな、こう、海が、どぎゃーん！　ばきゅーん！　ぎにゃーす！　って感じになっている状態を言うデス」
ローレライが理解に苦しむ。このとても強くて優しい人は、時たま別世界の言葉で話すのだと、幼子なりに解釈していた。
「まあ、原罪（ハマルティア）の海じゃ、この程度の嵐、日用チャーハン寺なー。ああ、でも海の中なら大したことないか。ローレライは知ってるな？」
ローレライは頷いた。海上が時化（しけ）ていても、海中はあまり関係ない。海に生きるアプカルルにしてみれば、荒れた海など恐れるようなものではないのだ。
海面から５０メートルの高さにいる者にとっても、同様である。橋の上まで届くような波はなく、外で吹いている程度の風では、アトラクの巨体を動かすには力不足もいいところだ。
カルディエにとって、この嵐は憂いを生み出す存在にはならなかった。
――あの恐ろしい機甲塔から離れれば、また変わらない日常が続く。ずっと、これからも。ずっと、ヴァニタスと一緒に。
カルディエは、右手で自分の唇を撫でた。唇が、三日月のように弓なりに形を変えている。
幼子の手前、にやけている顔を見られてはまずいと、無理に口角を下げる。
だが、無理に下げる必要はなかった。
カルディエの顔から笑が一瞬で消えた。突然、ローレライが反射的に身を強張らせ、耳を塞いだのだ。カルディエの方を振り向いて動揺する様は、かなり強い恐怖に侵された者の動きだ。
「どした、ローレライ。なんか、おっかないものでも見たか」
こんな夜の雨の中で？　と、自分の言葉に否定的な感想を抱きつつ、カルディエはローレライを呼び寄せ、抱きしめた。
ローレライは震えていた。カルディエの胸元に顔を埋めたまま、一向に離れようとしない。

「どした？　言ってごらん？　怖いものがいたら、カルディエがぶっ飛ばしてきてやるな」
「うた……」
「歌？」
「おおあぎとのうたを、うみがうたってる……あれは、よくないうた……おおばばさまがいってた、おそろしいうた……」
おおあぎとのうた。
長年この世に存在するカルディエでも、聞いたことのない言葉だった。だが、不吉な響きの言葉だとカルディエは直感的に感じ、内に湧く戦慄を素直に警告として受け止めることができた。
しかし、カルディエの感覚器は、これといって危険な兆候を捉えていない。アトラクの警報装置も鳴っていないのだから、危険な状態が差し迫っているわけではなさそうだ。
では、何故、ローレライは脅えるのか。
その疑問に思案を巡らせる間もなく、カルディエの通信機能が、ヴァニタスの呼び出し信号（コール）を受け取った。

コンソール前の椅子に座ったヴァニタスが、カルディエを出迎えた。
カルディエが管理室に訪れた途端、開口一番でヴァニタスが申し出てきたのは、外に赴いて、あることを確認してきてほしいという内容の依頼だった。
「ところで……ローレライは？」
依頼内容の詳細を述べる前に、姿の見えない仲間の所在を尋ねる。
「部屋。なんか、怖がってた」
いくらなだめても、ローレライの恐怖は拭えなかった。どうにかこうにか彼女用にあつらえた寝室に寝かせ付けてきたが、去り際に横目に捉えた幼子の悲しげな顔が、カルディエの脳裏から消えなかった。

脅えはじめた経緯から寝かせ付けるまでの流れを説明したところ、ヴァニタスが腕を組んで唸りはじめた。
「おおあぎとのうた？聞いたことないな……」
「うん。でも、嫌な響き」
ヴァニタスも無言で同意する。
「これから調べて欲しいことに関係あるのかな？」
「どうだろうなー……んで、ヴァニタス。その調べて欲しいことって、何？」
「……なんらかの知的生命体が、ここから南々東２０キロの地点にいるみたいなんだ」
珍しくカルディエの目が据わった。
「知的生命体？なんでそんなものがいるって分かったの？どんな奴？」
矢継ぎ早の質問に、ヴァニタスは、確証はないんだけどと前置きをしてから答え始めた。
「アトラクの監視カメラの一つに、海の上で明滅を繰り返す光が映ってた。僕もお風呂から出てきて、データ整理をしているときに気づいたんだけど、今もその光は明滅を繰り返している」
「どんな光？」
「指向性のある、恐らくは電球の類を使用した光。遺物を利用しているのかも知れない。光は大きく揺れている。海の上の――船のようなものから発せられているらしい。最大望遠で光のある地点を撮影して画像処理をかけてみたら、こんなものが浮かび上がってきた」
コンソールの上に指を這わせ、目的の画像データをメインモニターに出力する。
そこに映し出されたのは、粒子の粗い夜の海の静止画であった。うねる波が幾重にも重なっているのが見て取れる。ヴァニタスが言う光の発生源は、画像中央に存在していた。
波の間に、何か長細い物が浮かんでいる。細部のディティールは

確認できないが、船と言われても違和感は感じないシルエットだった。
「全長は１５０メートルぐらい。形状は『沈んだ世界（クスクルツァ）』の時代にあった、海洋輸送船に似ている。データベースを引っ掻き回したよ。仮に海洋輸送船だとしたら、それを見つけ出し、使えるだけの知能を持った存在が乗っていることになるね」
「おっおー。そいつはエキサイティングな話デスな。もしそうなら、ヴァニタスは初めての遭遇だな。そーゆー輩に出会うのは」
「うん。カルディエは、過去に遭った事があるんだよね？」
「何度かなー。まあ、大抵出会った後は、シチメンドクセー、厄介なことになったデスよ。なんで、個人的には気が乗らないなー」
「でも、あの光は救難信号の可能性が高いんだ」
カルディエが天井を見上げて、手の平で顔を仰いだ。
救難と聞いては、無視など出来なくなってしまう。
「ああ……もう、見てくるしかないデスか。そうデスか。わかったな」
「ごめんね、カルディエにばかり、大変な思いさせちゃって……」
申し訳なさそうに、ヴァニタスが目を伏せる。
と、なにを思ったのか、カルディエがしおれる少年の脳天に、そこそこ威力のある手刀を喰らわせた。景気のいい硬い衝突音が、ヴァニタスの耳の奥で暴れまわる。
理由の分からない一撃に、ヴァニタスはカルディエに抗議の声をあげた。
「な、なんで!?いきなり……」
「ヴァニタスが謝ったからだっ」
「へ？」
「いいか。大変な思いしているのは、カルディエだけじゃない。ヴァニタス、おぬしもデス。おぬしは、一人でアトラク直して、一杯仕事して、それでも文句言わずに頑張ってるな。なのに、カルディエばかりに大変なことさせちゃってるなんて言われたら、カルディ

エの立つ瀬がないデス。あれだ、くんずほぐれつ……違う、持ちつ持たれつってやつな。だから、気にすんな。謝るな……お願いだから」

胸を張って鼻息も荒く力説する相棒は、相棒であるために一撃を食らわせてくれたのだと、ヴァニタスは理解した。

そうなのだ。カルディエにはカルディエの仕事が、自分には自分の仕事がある。それをないがしろにして、ただ意味も無く謝ることは、かえってカルディエが、自分のパートナーであることを否定することになる。

カルディエは、こう言ったのだ。「貴方のパートナーでいさせてよ」と。

滲む涙は痛みのせいだと言い聞かせ、ヴァニタスは頭をさすって頷いた。

「うん、わかった。じゃあ、カルディエ……改めて、頼んだよ。君の役割を、君がこなしてくれると信じてるから」

「任せるなー」

カルディエの親指が、勇ましく立てられた。

第三章　６４８－１９６９　『胎動』

荒れ狂う暴風の絶叫は、夜の闇の隅々まで行き渡っていた。

爆風のような風だった。風は、宙に舞った荒波の飛沫を打ち砕き、暗い空へ高々と巻き上げている。巻き上げられた飛沫は豪雨と混ざり、黒い海へと戻され、波に乗って再び空へ巻き上げられる。波しぶきの輪廻は、いつ終わるとも知れなかった。

烈風に煽られた波は、どれも異様な波高と猛々しさを持っていた。質量に任せて貪欲に目前のものを飲み込む様は、飢えた猛獣が、がむしゃらに顎門（あぎと）を閉じている姿を連想させる。

ならば絶え間無く響く雷鳴は、飢えた猛獣の咆哮か。弱き者を震え上がらせ、強き者をたじろがせる雷獣の閃光は、時を経るにつれ、その音量を増していく。

これこそ混沌。力の原風景。

大時化（おおしけ）となった海は、秩序も安寧もなく、ただ混ざり物のない力の奔流が支配する、原初の世界に成り果てていた。

海の眷属以外は、生存を許されない世界……

この混沌は、破壊者（ジャガーノート）すら、飲み込んでしまわないだろうか。

――きっと……大丈夫、だよね。

管理室で、独り仕事に励むヴァニタスは、大きな溜息を漏らした。

彼の両手は、コンソール上を高速で移動していた。アトラクの装置の一つ「誘雷針」を調整しているのだ。

誘雷針とは、アトラクに雷を誘導し、人為的に落雷させることによって、超大容量蓄電池を充電する装置である。そうして蓄電された電気は、アトラクとカルディエが稼動するための動力として活用される。

物を食さぬカルディエが、たまさかに摂る唯一つの食事。

ヴァニタスが用意できる、唯一つのもてなし。

――カルディエが、どれだけお腹を空かせて戻ってきても、一

杯にしてあげられるように……

ヴァニタスは四基ある誘雷針を全て起動させながら、カルディエの帰還を待っていた。

烈風に抗う一陣の風となって、カルディエが歪む海面を駆け抜ける。

背中の開口部から伸びるは一対のサーチライト。それを両肩に固定し、青白い光で闇を照らしながら進む。

推進装置は、ハンドレッド・サッカーとの戦闘時にも使用した、両脚のホバリングシステムだ。膝下を具現化武装し、器用に波に乗りながら目的地を目指す。

顔に当たる雨の威力は強い。粒の大きさもさることながら、高速で向かい風の中を進んでいることが、雨粒に石の硬さを与える要因となっている。

人間ならば一秒とて正面を向いていられない状況だが、カルディエの顔は揺るぎもせずに前を見据えていた。

だが目的地まで残り半分というところで、一度だけ、ちらりと後ろを振り向く。

雨に顔を背けたわけではない。後方の様子を確認したかったのだ。

嵐の闇の中に、アトラクと冷光灯の光が揺らめいていた。近くならば真昼に近い明るさを誇るアトラクの作業用照明も、この距離、この雨では、ろうそくの灯火よりも頼りなく見える。

カルディエの顔に逡巡の色が浮かんだ。

勇んで飛び出したカルディエだが、後ろ髪引かれる思いがないわけではなかった。

ローレライのことだ。彼女の何かに脅えた様子と、脅えながら囁いた『おおあぎとのうた』という言葉が、カルディエの心に拭いきれない淀みを生んでいる。

だが、悩みに惑ったまま進むわけにはいかない。

――さっさと片付けるデス。

それが最善策と自分に言い聞かせ、カルディエは速度を上げた。

目標に近づくにつれ、そこから発せられる光が、強く感じ取れるようになる。ヴァニタスは救難信号と言っていたが、確かにその通りだとカルディエは納得した。

恐らく意味のあるリズムで明滅する光からは、そう思わせるに足るだけの『必死さ』が窺える。

「あれに、助けて欲しい誰かが、いるのか……」

昼に星を見ることが出来る紅い瞳は、既に目標の全容を映していた。

全長１５０メートルの船。海面から甲板までの高さはおよそ１０メートル。甲板の中央には半球型のブリッジがあり、光はその頂点から放たれている。

これだけ巨大なものが、この荒波の中でも、屈することなく浮かび続けている。高度な技術によって造られたことは間違いない。

――やっぱり、沈んだ世界（クスクルツァ）の遺物か。

誰がそう名づけたのかハッキリとしていないが、黒い海に覆われる以前の世界は『沈んだ世界（クスクルツァ）』と呼ばれている。

沈んだ――と称されているからには、沈む前の姿があったはずだ。

ただし、それは、カルディエも知らない遥か過去の世界であった。

どんな世界だったか、なぜ沈んだか、ヴァニタスもカルディエも、知っていることはほとんどない。沈む前の世界の記録はとても少なく、また、あっても断片化されて意味を成さないものばかり。わずかに得た情報から想像力を働かせて推測する以外に、過去の世界を知る術はないのが実情なのだ。

さらに救えないことに、アトラクや記憶集積塔といった過去の遺物ですら、過去の世界についてまともな情報を蓄積していなかった。

ここまでくると何者かの意図が絡んでるとしか思えない。

まるで、過去のことを知ってはいけないとでも言わんばかりに……

あの船は過去の何を有しているのか。過去の亡霊が船を操っているのだろうか。

様々な思考がカルディエの電脳を巡り、出口を見つけられずに彷徨いだす。

そうこうしているうちに、目標との距離は２０メートルを切っていた。

目前に浮かぶ船は、十中八九、過去の世界の生き残りだとカルディエは確信した。

船体の左側面に、アトラクと同じ古い時代の言葉が刻まれているからである。

「ディープ・ワン……」

船体に刻まれた言葉を読み上げる。船の名前だろうか。

とりあえず、距離を維持して様子を窺う。そのまま数分が過ぎるが、変化は見当たらない。

感覚器も危険な兆候は捉えていない。

カルディエの両足が一際大きな空気の塊を吐き出し、その身を宙に浮かせた。

烈風を受け、黒き風が船へ舞い降りる。

自分の為すべきことを今一度確認し、カルディエは雨に濡れる甲板に着地した。

闇に――――恍惚の喘ぎが――――　溶けていく。

ぐちゃり。

ああ。これはいいものです。

――――第二開口部稼動。

がり。がりり。

おお。これもいいものです。

――――摂取開始。分解・分析開始。

おう。ほ。ほほ。はああ。ふぅぐうぅ。ん。んんんんん。
おほっ。
いい。いいです。
貯めて。溜めて。矯めるのです。ここと。そこと。あそこに。順序良く。きちんと。丁寧に。美しく。
――効果測定・恒常性維持・再計算。解析後・同化処理。
なんて素晴らしい。
ほめられる。きっと。こんなに素晴らしいわたくしは。誰からもほめられる。
ほめて。ほめてください。ほら。許してあげます。ほめることを許してあげます。
ほめろよ。
なにしてんだよ。
ほら。ほらあ。ほめろよおおおおおおお。
――警告。
あ？
――警告。
あれまあ？　おやおや？
誰でしょう。どなたでしょう。何様でしょう。
――警告・動体反応・個体認証識別不可。推定非公式。
わたくし。許可しましたか？　入っていいと言いましたか？
ああ。言ってません。
言ってませんよね？　言ってない。言ってないぞ。言ってねえ。
――形態変性開始。非公式ユニット排除許可。
言って。て。い。言う。い。いぎ。あぐうう。
いひ。
いあああああ。
あああああ。ああああああ。あ。
ああ。
あ。

――排除開始。
ああ。ほめて。美味しい。わたくし。許可してません。
いひ。ひひひひ。ひゃ。ひゃひゃひゃひゃ……

暗黒が胎動し、忌み子が産み落とされた。
忌み子が這いずる。混沌のように。
闇に、はらわたの臭気だけが残された。

甲板にはゴミが散乱していた。魚の死骸、布の切れ端、糞尿。一朝一夕で堆積できる量ではない。
ここである程度の長期間、生活を営んだ者がいる。ゴミは、生活の結果だ。
ゴミの詳細を調べれば何か分かることもあるかもしれないが、そのためにはサンプルをアトラクまで持ち帰る必要がある。
それは後回しと、カルディエはブリッジへと向かった。
ブリッジには窓の一つもなかった。これでは外を直に見ることができないが、上部付近に設置された観測機器の量を見れば、この船にとって原始的な視認など必要もないと察することができるだろう。
ブリッジ正面にゲートが設けられているのだが、壊れているのか、何をやっても反応がなかった。力任せに引いてもびくともしない。溶接でもされているのかとカルディエがいぶかしむ。
材質や形状から強度を計算するに、近接格闘用巨腕の殴打で破壊可能ではあるが、不用意な行動は避けたほうがいいと、思いとどまった。
他に内部に入るための入り口がないかと、甲板をくまなく探したところ、甲板後部に入り口を発見した。入り口は開け放たれており、船の暗き胎内へ伸びる螺旋階段が雨に晒されている。
だが、入り口を発見したカルディエの顔は浮かない。
破壊されているのだ。かなりの重厚さを有する扉が。

甲板の床に直接設置された観音開きの扉は、何かとてつもない力で強引に開けられたらしい。全体が大きくひしゃげており、特に内側に設置されていた閂（かんぬき）は、直角以上の鋭角度にまで曲げられ、完全に破壊されていた。

閂は直径5センチのチタン合金の棒二本で構成されている。極めて頑健な構造のはずだが、二本とも、まるで幼子に弄ばれた柔らかい飴細工のような、哀れな形状になり果てていた。頑健さを真っ向から否定された敗者の姿に、カルディエも顔をしかめる。

自分が壊したアトラクの扉を思い出す。果たして、どちらの扉が丈夫だろうか。

サーチライトで破壊の痕跡を照らし、屈みこむ。指先で歪んだ扉や閂を撫でる表情は、研ぎ澄まされた刃物のように鋭く、気を張り詰めさせていた。

――断裂した部分がまだ新しい。破壊されたのは最近だ。

カルディエの瞳が映した映像を元に、脳内の補助電脳が、扉が破壊された時期の予測値を出す。

予測値は最長で3日前。扉内部の濡れ具合からして、最短で――

「2時間前……」

アトラクに向けて、明滅信号が送られ始めた時間と、一致する。

厄介事の臭いが鼻を突き始めた。カルディエにしてみれば、アトラクの廃棄物処理室のほうがましと思える臭いだった。

通信機能を起動させ、アトラクで待機しているヴァニタスをコールする。

反応は2秒と待たずに返ってきた。

「こちらヴァニタス。カルディエ、どうしたの？」

「ああっと……ちょっと、連絡したくて。なんか、やばげな雰囲気なー。この船」

通信機の向こうで、ヴァニタスが息を飲むのが分かった。

「やばいって……どういう風に？」

「おそらく、力任せに分厚い鋼鉄の扉をひん曲げられる、そんなマ

ッチョなお化けがいるデス。おそらく、な」
「マッチョなお化け……」
「できれば、出会いたくないなー。めっちゃ臭そう」
事ここにいたって軽口を叩ける胆力の強さに、ヴァニタスは感心した。
「……生存者はいそうかい？」
「まだ、船内に入ってないから分からんデス。これから調べてみるな」
「気をつけてね。カルディエなら大丈夫だとは思うけど……」
ジャガーノートを破壊できるものなど、この世にいるはずがない――不動の信頼が、ヴァニタスの台詞には篭められていた。
顔を濡らす雨を拭い、カルディエが頷く。
「じゃ、一旦通信切るな。なんかあったら、また連絡する。何にもなくても15分後にまた連絡する。じゃ」
「幸運を……」
通信を終えると、両肩に乗せたサーチライトを背面部に収納し、代わりに腰に装着したポシェットから、高輝度ペンシルライトを取り出し、左手に持った。
右手は具現化武装させる。カルディエが選んだのは、10番ゲージの実包（ショットシェル）を高速連射する、凶悪な二連装フルオートショットガンだった。前腕から手の甲まで、二本のバレルが乗るように配置され、上腕部には250発の実包が内蔵された積層式ドラム弾倉が出現する。
小回りの利きやすい大きさ、そして電磁投射砲（レールガン）のように腕全体を武器化する必要がなく、五指を残したまま扱える対応能力の高さ。
屋内でも臨機応変に対応できる近接兵器であることが、この武器最大の利点だ。
鋼板を瞬きの合間に百分割する破壊力も、特筆すべき項目だろう。
だが、この過剰な殺傷兵器でも、カルディエの不安を完全に払うまでには至らない。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」
補助電脳の注意喚起アラートが止まらない。非常事態なのは、言われなくても分かっている。
ライトの明かりで階段を照らしながら、カルディエは己の内で響くやかましい警告を無視し、船体内部へ降りていった。

第三章　６４８－１９６９　『異形の肉塊はおぞましく』

船の抱く闇の中で、カルディエが金属製の螺旋階段を降りていく。金属の足と金属の階段、二つの金属が打ち合う音が、一つ、また一つ。通りのいい高音の足音は、暴風雨の叫びにもかき消されず、螺旋階段の奥に潜む闇へと消えていった。

脚部の消音機能（サイレンサー）を起動すれば足音は消し去れるが、あえて起動していない。揺れる船内で索敵に集中するため、電脳のリソースを大幅に占有する消音機能は切らざるをえないのだ。

あの扉の破壊状況――船内に何が潜んでいるか分からない。索敵を優先するのも至極当然と言える。

冷静に、着実に、カルディエの足は下を目指す。時折、波が船を大きく揺らすも、彼女はよろめく様子もなく、極自然な足取りを保っていた。

そしてカルディエの右足が、最後の段を踏みしめた。

四十七段の螺旋階段を降り切ったところは、狭い廊下になっていた。前後に続く廊下の途中にカルディエが降りてきた階段は設置されている。足下に目を向けると、吹き込んだ雨が階段を中心に水溜りを作り出していた。

水溜りにペンライトの明かりが反射する。

船内に明かりはなかった。天井を照らしてみたところ、冷光灯は設置されていると分かったのだが、どうやら電力が供給されていないらしい。破損した様子もないのに、全ての冷光灯が闇に沈んでいた。

鼻の下を指でこすると、カルディエは大きく息を吸い込んだ。

活動に呼吸を必要としない彼女が、わざわざ呼吸をする理由は二つ。

一つは人工声帯を使って発声するため。

もう一つが、大気の組成を調べるためである。

鼻腔に取り込んだ空気を迅速に分析し、船体内の空気に異常がないか調査を開始する。

においい分子や気体のデータはカルディエの電脳に蓄積されているので、一息吸えば、周囲の空気の構成要素や臭いの種類を知ることができる。そこから周辺の物質の種類、及びその状態まで、ある程度予測できるという寸法だ。

――硫化水素、トリメチルアミン、メチルメルカブタン、アンモニア……生ゴミや、糞尿の臭いが強い。甲板の有様からして、中も散らかし放題みたいなー。全く、きちゃないデスよ。

カルディエが舌を出して、うんざりといった表情を浮かべる。廃棄物処理室で眠る自分のことは、棚上げだ。

その表情に緊張の色が混ざった。

腐臭に混ざって、わずかに違う臭いが感じ取れたのだ。

――これは……血の臭いと……何？　この生臭さは？

鉄に似た臭いが血臭だということは判断できたが、もう一つの生臭さが、何から発せられているものか分からない。魚の臭いに近いようで、そうではない。一種独特の生臭さにカルディエが困惑する。

だが、少なくとも歓迎できるような臭いでないことは判断できる。まして、血の臭いが混ざっているとなると。

索敵機能を音響、動体感知の二つに絞り、右目のみ赤外線モードに切り替える。

カルディエの右の視界が赤外線で構成された世界に変わった。輪郭の乏しい、温度で色分けされた別世界だ。

その世界に早速異常が見つかる。

ブリッジに向かう廊下の先、階段から7、8メートルにある十字路に、その異常はあった。

カルディエから見て、十字路を右に曲がった角だ。角の向こう側から微かに温められた空気が流れてきている。

機関部の空気が漏れている――という雰囲気ではない。体温を持った者が、角に潜んでこちらの様子を窺っているといったほうが

説得力はあるだろう。
果たして何者か。
カルディエの行動は早く、かつ大胆であった。
声をかけたのである。
「おいこら、そこでかくれんぼやってる奴。出て来い」
言葉が通じるかは分からないが、脅している雰囲気は伝わったようだ。遠ざかる足音が、角の向こうから飛んでくる。
カルディエが駆け出した。硬い床を削るほどの脚力で床を蹴り、一足の間で角に到達。右を向き、ショットガンの銃口を前方に構えながら、逃げた者を追おうと両脚に力を溜め、角に飛び込んだ――――瞬間だ。
カルディエの顔面に、鋭い切っ先が突き刺さった。
耳を覆いたくなるような、硬質の擦過音が辺りで踊り狂う。
十字路の闇より飛来したものは、1メートルほどの無骨な手槍だった。穂先は尖った金属片。柄は、海柱と呼ばれる直立する珊瑚で出来ている。原始的だが、投擲されたときの威力は侮れない。
カルディエは無事か。
そこは、さすがジャガーノートの面目躍如であった。
弾丸の如き威力と速度で飛んできた槍が、カルディエの顔面を貫いたかに見えたが、あろうことか彼女は口で槍の穂先を受け止めていたのである。歯で上下から穂先を挟み込み、文字通り『食い止めた』わけだ。
愛らしい顔にはいささか似つかわしくない、野性味溢れる防御方法だが、本人はそれどころではなかった。
「ほのはほー！」
恐らくは「このやろー！」と言いたかったのであろうが、ジャガーノートといえども、槍をかじったままでは、まともには発音できない。
硬化処理された人工エナメル質の歯で穂先を噛み砕き、口中に残った破片を床にはき捨てた後、再度「このやろー！」と叫ぶ。

右目の赤外線モードを解除。ペンライトとショットガンを同時に構え、怒りに燃える眼光で、廊下の先にいる者達を貫いた。

貫かれた者達が恐怖に悲鳴を上げる。

その瞬間、カルディエの怒りは急速に鎮火してしまった。

「あ……アプカルル！？」

悲鳴を上げた一団は、ローレライと同じ種族――アプカルルだった。

人数は五人。五人分の鱗とヒレが、ペンライトの明かりを反射している光景は、ここが満天の星輝く夜空かと錯覚させる。

大人のアプカルルが四人、子供が一人。大人は男女が半々という組み合わせだ。ライトの光の輪に浮かぶ彼らは、程度の差こそあれ、全員やつれており、薄汚れた体は多くの傷に苛(さいな)まれていた。

何より目についたのは、首全体を覆う、分厚い金属の輪である。まるで、畜生につける首輪そのものではないか。

――彼らが助けを呼んだの？　この船は住み処？　何故、彼らは傷ついているの？

疑問は多く、しかし、それを問う段階に今はない。

アプカルル達は、面食らって動きが止まっている。ある意味、好機だ。

今を逃すとややこしくなる――そう考えたカルディエは、銃を下げて、

「敵じゃない、助けにきた！」

と、最速で誤解を解くための、短い言葉を張り上げた。

問題は、この言語で通じるかというところだ。アプカルルは、棲息地域によって、使う言語に差があるのだ。使った言葉は、もっとも広く使われているアプカルルの言語だが、果たして。

一目散に逃げ出そうとしていた一団の動きが、声と同時に止まった。呼びかけてきた侵入者へ、深緑色をした十の瞳が一斉に向けられる。

――通じた。

どうやらカルディエは当たりを引けたらしい。思わず、第一段階突破記念の吐息が漏れた。

間髪おかずに、第二段階へ移行する。

「逃げないで。私はジャガーノートのカルペ・ディエム。この船が出していた救難信号を見て、助けにきました。呼んだのは、あなた達？」

物理的な距離は維持したまま、まずは心の距離を縮めるべく、言葉で相互理解を図る。

五人は互いに顔を見合わせていた。声はないが、誰が答えるか適任者を決めている様子だ。

ややあって、リーダー格とおぼしき大柄の男が、代表してカルディエの問いに答えはじめた。

両手で握った槍の先をカルディエに向けたままだが、カルディエは気にせず耳を傾ける。

「俺達は、誰も呼んでいない……お前を呼んだのは、お前の仲間じゃないのか？」

「仲間？　カルディエの？」

「そうだ。俺達を捕らえ、俺達を『浮かぶ終焉』に連れて行く、金属の魔女と、その手下……そいつらに、お前はよく似ている」

「捕らえて？　ひどいことするなー」

カルディエは、少々大袈裟に首を横に振った。

自分に似た存在とやらが気にはなるが、そこを聞くのは後回しにする。

最優先すべきは、警戒を少しでも和らげること。この一点である。

「安心するデス。カルディエは、そんなことしない」

「信用出来ない」

一団が少しづつ、下がり始める。

このままでは逃げられてしまう。スタンバレットなど、非致死性の兵器で行動不能にしてから外に連れ出すという手もあるが、できればそれは最後の手段にしておきたい。

カルディエは賭けに出た。
具現化武装を解除し、ただの右手に戻してみせたのだ。
両手を左右に広げ、まるで身を差し出すような無防備極まりない姿に、アプカルル達も動揺する。
「危害は加えない。なんだったらカルディエを縛り上げてもいいデス。でもお願い。話を聞いて」
一団の足が止まる。アプカルル達は明らかに迷い始めているようだ。
リーダー格の男が仲間を見渡す。まだ迷っているようだ。
どうにか説得できないかと、カルディエに焦りが生じる。
「最近も、カルディエは小さいアプカルルの女の子を助けたな。とってもいい子。その子と同じアプカルルである貴方達をほうっておけないの。だから、助けたい」
「アプカルルの女の子を……助けた？」
「おう。ローレライっていう、小さなアプカルルの女の子を」
「なんだと！？」
カルディエの台詞は、リーダー格の怒声により断ち切られた。
たちまち膨れ上がる緊迫した空気。アプカルルの集団は警戒どころか、敵対心すら抱きはじめているようである。
状況は一変した。間違いなく、悪い方向に。
「え、ちょ、なに？　カルディエ、なにか悪いこと言った？」
気ばかり焦るも、自分の台詞のどこが問題だったか、即座に気づけない。
カルディエが悟るより早く、答えはアプカルル達が教えてくれた。
「その名を持つアプカルルは、いまや一人しかいない……白痴の忌み子だ……その忌み子を、助けただと？　何ておぞましい……汚らわしい！　お前は、悪魔に手を貸したんだ。やはり、お前も魔女だ！」
そう言って吠えたのは、槍を構えているアプカルルとは別の男だった。やや歳を重ねている個体だ。カルディエを睨む瞳は、怨敵を

前にした者の目に、他ならない。
飛躍した理論の展開だが、どうやらそれが正当化される雰囲気らしい。残りの四名も、同様の色の視線にて、困惑する機械仕掛けの少女を深く穿つ。
――ローレライの名前は、口にも出せないほどの禁忌（タブー）なのか。
考えてみれば、あんな幼子がはぐれとなるからには、それなりの経緯があるはずだ。そこに思い至らなかった己を責める。
しかし、力なき幼子をここまで忌み嫌うのは異常とも言える。あの再生能力に関連があるのか。一体、ローレライの過去に何があったのか。
ともかく場を収めるために、カルディエは殺気立つアプカルルをなだめた。
「誤解しないで、カルディエは助けにきただけ。なんかローレライ嫌われてるみたいだけど、これはその際、置いといてくれない？ここで何が起きたのか、それを教えてくれれば、力に――」
「忌み子に触れた者と語る口はない」
リーダー格の男がそう吐き捨てるやいなや、槍をカルディエに向けたまま、忍び足で後退しはじめた。
他の面子も追随する。
もはや会話は絶望的だ。実際の距離とは比べものにならないほど、心の距離は遠くなってしまった。
「あ、待って、ねえ。危ない奴がいるかも知れないんだよ、だから……」
呼び掛けるカルディエの声にも覇気がなかった。
今、追いかけては、手酷い抵抗を受けるだろう。事態を悪化させかねない。
見送る以外にやりようもなく、アプカルルの姿が廊下の向こうの角に消えても、カルディエは歩を進めることはできなかった。
動かないことが、この場は最善と分かっている。しかし、ひどくやり切れない思いが、少女の内側に切り傷を残した。

――カルディエの失敗な。
発言に気をつければ、こんな結果にはならなかった。
そして次の瞬間、後悔はより強く、深く、カルディエを責め立てることになる。

「きゃあああ！」
悲鳴。
それを掻き消す、濡れた破裂音。
両者が来たるは、アプカルル達の行く先から。
もしカルディエに心臓があったなら、己の失態が招いた惨事に押し潰されて、止まりかけていたかも知れない。
自責の念に沈むのは後と決め、一人でも多く救うべく全力で両脚が稼動する。同時に右手をショットガンに変え、怒りを弾に込める。
角にたどり着く一秒足らずの、なんと長いことか。実際は風より早いにも関わらず、カルディエは角を曲がる己の動作が緩慢すぎるとさえ思えていた。
角を曲がり、わだかまる暗黒をペンライトで払い去る。
なんと言うことか。
暗黒は、情け無用の地獄を孕んでいた。
ペンライトが照らしたのは、廊下を埋めるほどの巨体だった。
赤黒い肉の塊が、あらゆる機械の部品を全身からでたらめに生やしている。同じように、全身に浮き出たいぼ状の突起物から青臭い白濁液を滴らせ、十本もある節足動物じみた機械式の足が、球形の体を支えていた。
これはまさに、有機と無機の交配によって産み落とされた、度し難き異形の怪物である。この者に並の胆力では正視に堪えない姿を与えたのは、残酷なる神か、はたまた無邪気な悪魔か。
怪物は触手代わりの電源ケーブルで、アプカルルの女性二人を巻き取り、捕獲していた。頭頂部にある乱杭歯だらけの口から、子供

の足らしきものがはみ出ていたが、カルディエの見ている前でつるりと飲み込まれ、子供はこの世から消えた。

男二人の姿はない。男二人『だった』ものなら、細切れになって廊下の床や壁や天井にこびりついている。

床に転がる血まみれの槍は、持ち主の最後を見ていたのだろうか。主を守るという役目を果たせず、己の無力を知る無念は、きっと辛いに違いない。

カルディエは、槍と自分を重ね、仇を討つべくショットガンを構えた。

激情に侵された銃口が怪物に牙を剥き出す。

そこで理性が激情を制した。

激情任せに撃てば、まだ生きている二人のアプカルルに危険が及ぶ。散弾の一発でも、当り所が悪ければ即死させる威力があるのだから。

狙いを外したのは苦渋の決断。武装を換えるために、補助電脳に命令（オーダー）を打ち込む。

だが命令が実行されるより早く、カルディエに複数の何かが覆いかぶさってきた。

「うあっ！」

襲撃は天井から。カルディエが気づかないとは、相当の隠行術である。

覆いかぶさってきた者達は、鉤爪のついた指でカルディエを引き裂こうと、所構わず引っかき始めた。不快な不協和音が幾つも鳴る。

「この……！」

自分に取り付いた者を右手で掴んで引き剥がし、思い切り床に投げ捨てた。

カルディエの膂力で加減せずに硬い床に投げられれば、大抵の者は腐った果実よろしく弾けて死ぬ。

覆いかぶさってきた者も例外ではなかった。血の詰まった、ただの皮袋と大差ない死に様を晒して息絶える。

二体の化け物を投げ殺し、最後の一体の首を掴んだ時だった。
カルディエの聴覚が、人間の可聴域を超えた音を感知したのだ。
異形の怪物を見る。
飛び出た機械の一つが、淡い白光を放っているではないか。
――――分子振動砲！
白光が消えた。
高音が収束し、カルディエの可聴域をも超えて『力』となる。
ぱん、と、小気味のよい破裂音。血と肉のシャワーが廊下にあるもの全てを濡らした。
弾け飛んだのは、カルディエの掴んでいた襲撃者とペンライトであった。カルディエの体に変化はない。が、全身から猛烈な湯気が上がっている。
異形の怪物が使ったのは、空間の一点に水分子を高振動させるマイクロウェーブを局在させる兵器だ。範囲内の水分子を含んだ物体は瞬間的に沸騰し、膨張、破裂する。
アプカルルの男二人と天井からの襲撃者を破裂させ、雨に濡れたカルディエを一瞬で乾燥させたのは、この兵器であった。カルディエ本人には電磁防護が施されているので効果はない。それでも、敏感な感覚器が影響を受けることは避けられなかった。
「くあ、やってくれたな！」
顔面を濡らす血脂がなかなか取れない。視界は不明瞭、ほとんどの感覚器は怪物の攻撃により、一時的に機能不全に陥っている。生きているのは聴覚だけだ。
その聴覚が怪物の逃走を感知する。蟲のような足が廊下を走る音が、一気に遠ざかっていくではないか。
「待て！」
血脂も拭いきれないまま、追うカルディエ。
その目の前に、天井から降りてきた隔壁が立ちふさがる。慌てて両脚を止めたが、勢いを殺し切れず、そのまま突進。小気味のいい衝突音は、カルディエの頭部と隔壁のコラボレーションによるもの

だった。
少し離れて、行く手を塞ぐ壁をねめつける。
――――誰が隔壁を……まさか、あいつ？
隔壁を拳で叩く。カルディエでも、これは殴って壊せるような強度ではなさそうだ。
威力の大きい兵器を具現化武装する案も浮かんだが、すぐに却下した。万が一船底に穴が開いたら、元も子もない。
追うには別に道を探す必要がある。カルディエは踵を返し、ブリッジを目指すことにした。
すると、走り出そうとした彼女の右脚が何かに掴まれた。
背面部からサーチライトを出し、足元を照らす。
「こいつ……」
瀕死の襲撃者が、強烈な光の中で痙攣していた。死に損なったようだ。
光に照らして観察し、初めてその全体像が把握できた。しかし、把握できたことを喜ぶべきか真剣に悩む。
カルディエには、その姿が悪夢から這い出てきたようにしか見えなかった。
アプカルルに、先ほどの異形の怪物を混ぜたような……混沌とした赤子。肉腫と機械を無数に生やし、骨格も歪んではいるが、深緑の瞳と虹色の鱗は、アプカルル以外の何が考えられようか。
おぞましい姿の中で、瞳だけは残酷なまでに美しかった。
そう、ローレライと同じように。
カルディエの足を掴んだのは、純粋に救いを求めての行動なのかもしれない。
赤子は、母に救いを求めるものだ。
「ごめんな」
ショットガンを向ける。
カルディエがこの赤子に与えられるのは、鉛の慈悲しかなかった。
ガンファイアの花が咲く。それが死に行く赤子に手向けられる、

墓前花の代わりだった。
鎮魂の銃声が消えぬうちに、カルディエは走り出した。
走りながら、最初に嗅いだあの生臭い独特の臭いが何だったか、ここにいたって思い出す。
あれは羊水の臭いだった。
大量の羊水が、この船の中のどこかで滴っている。その臭いが船中に漂っている。
「あいつ、アプカルルの女性を……」
アプカルルの女性だけを生かして連れ去った理由が分かった。
胎(はら)が目的なのだ。子種を植え付け、産ませるための苗床として。
異種間で交配できる原理は分からないが、あの落とし子の姿を見れば、現実に可能なのだと考えるしかない。
カルディエは船を沈めたい衝動を抑えながら、通信機能を起動させた――――

第三章　６４８－１９６９　『複種擬装構成体』

「複種擬装構成体（カチナ・ドール）に遭遇したどー」

カルディエの無味乾燥とした通信内容に、ヴァニタスは、しばし体と魂を乖離させられてしまった。

指が意味も無くコンソールの上を泳ぐ。何かしなければならないと思うも、何をしたらいいか思いつかない。動揺などというレベルではなく、ある種の恐怖症（フォビア）を発症した者の動きに近いものがある。

ヴァニタスの尾を二倍に膨れさせた複種擬装構成体（カチナ・ドール）とは、いかなる存在か。

アトラクのデータベースは、かく語りき。

曰く『二重螺旋を砕くもの』

曰く『這い寄る混沌』

曰く『星喰（ほしばみ）の廃棄物』

仰々しい二つ名である。しかし、彼ら複種擬装構成体（カチナ・ドール）は、これらの二つ名を授かるに値する力を持っているのだ。

データベースに載っている範囲ではあるが、その生態を知るヴァニタスは、猫目の瞳孔を円くして肩を震わせていた。

尻尾が膨らむのも仕方がない。予想外も予想外だ。まさか、ナイト・ストーク以上に遭いたくない化け物にここで出会うとは、微塵も思ってもいなかったのだから。

実際に遭遇したのはカルディエであり、ヴァニタスは遠く離れたアトラク内にいる。本来は安全圏にいることになるのだが、『彼女』の側に『あれ』がいると考えただけで、呼吸困難を起こしそうになる。

自分がその場にいられないことが、彼にとってはとてつもなく、もどかしいことだった。

「あ、あの……それ、本当なの？」

こんな時に冗談を言うはずもないが、一縷の望みを抱きながら、

確認を取る。
「嘘なわけねーデス。ちょっとは考えてもの言うなー」
「ご、ごめんなさい」
ヴァニタスの耳と尻尾が、眉尻と同時に垂れた。
相棒の明らかに不機嫌な様子に、何か、カルディエの毛嫌う事態が起きているのだと確信する。
ヴァニタスは、ずれかけたヘッドセットを装着し直し、椅子に深く掛け直してから、盛大に呼気を一発。もろともに気合を入れ直した。
器が整えば中身も整う。背筋はまっすぐ伸び、尻尾はいつもの太さに戻っていた。
彼はオペレーターの責務を果たすべく、まずは一つ、咳払いを行った。
「ん、んん……でも、それが本当なら、一旦、帰還したほうがいいと思う。対策を練る必要があるよ」
「あー、それは無理な注文てやつな」
「え、なんで？」
ヴァニタスが不審に思う。彼女が複種擬装構成体（カチナ・ドール）の能力を知らないはずがない。
「アプカルルが捕まってる。そいつに」
「ああ、なるほ……どって、うそ！　アプカルルが！？」
納得して晴れた心は、即座に驚きの雷撃に打たれてしまった。
ここから先の会話を決して聞き逃さないように、ヘッドセットに手を当て、耳に押し込む。
「どうやら、この船はアプカルルをとっ捕まえて、どっかに運ぶための輸送船だったようデス。んで、運んでる最中に複種擬装構成体（カチナ・ドール）に襲われたみたいな。多分、その拍子に逃げ出した五人のアプカルルに遭ったデス。でも、三人殺されて、二人連れ去られた。もっといるかも知れない。ほっとけない。いまカルディエが引いたら、皆殺しになるかもしれないから」

強く、迷いのない口調だ。
極稀にだが、カルディエはこのような態度を取る。
どうあっても引かない腹積もりだなと、ヴァニタスは諦めるしかなかった。
コンソールを操作し、幾つかのプログラムを起動する。メインモニターの上を機械言語の羅列が疾走し、主の命に沿って秘められた機能を覚醒させ始めた。準備完了を示す古代の言葉がモニターに表示されたところで、ヴァニタスはそれ以上の操作をせず、待機した。
最悪を防ぐには、最善を尽くすのみである。その準備がモニターの中で整えられていた。
準備の完了を確認し、
「えっと、あの、カルディエ、今どこにいるの？」
おっかなびっくり、相棒に尋ねる。
「ブリッジ。面白いものが転がってやがるデスよ」
それがどんなものか聞きたくもあったが、まずは一番の目的を果たす。
「ブリッジに、カルディエの電脳に接続可能な端末はある？　もしリンクできたら、こっちに繋いでもらえないかな。上手くいけば、その船の管制システム管理者権限を、7（セブン）・ギアセスの上位権限支配下に置けるかもしれない」
「待って。やってみるなー」
カルディエの返事の後、数分の沈黙が訪れた。
ヴァニタスはコンソールに肘を立て、指を組んで、落ち着きなく動かす。
静寂の中、心臓の鼓動だけが大きく聞こえていた。
「でけたー。そっちに繋ぐなー」
カルディエの緊張感のない合図を受け、ヴァニタスの十指が疾駆しはじめた。
速い。コンソールを操る指の動きは、熟達の演奏者ですら、後塵を拝する速さと精確さを見せ付けている。

メインモニターに表れる機械言語の激流。意味成す電子の象形文字は軽やかに、アトラクの並列電脳にて力を得て、主人の命令を実行する忠実な兵士となる。兵士は中継地点となったカルディエの電脳を通過し、一気に敵の本陣へ雪崩れ込む。

――攻性関門突破。除外コード無効化。管理コード解読。システムデータ取得。権限統合。管理権限再構築。7（セブン）・ギアセス上位権限に対し無条件隷属設定。

瞬く間に、輸送船の頭脳はヴァニタスに支配されていく。頭脳を守る複数のプロテクトは、刹那の間の障害にすらならない。

だがプロテクトを破った時点で、ヴァニタスの指が一瞬、停滞した。

――妙なプログラムがあるな。もしかして、複種擬装構成体（カチナ・ドール）が何かしたのか？

こしゃくなと、ねじ伏せる。狂気的プログラムでさえ、ヴァニタスの技術とアトラクの電脳の前にはただのジャンクに等しい。

これにて城主は、堀も、城も、兵士も、武器も失った。

城主――輸送船の頭脳は、降伏の判断をする間も与えられずに、裸に剥かれ、ヴァニタスの繰る電子の触手によって、無理矢理手篭めにされた。あとは回路の隅々まで徹底的に嬲られて、絶対服従の奴隷となるだけである。

――支配完了。

最後のコマンドを打ち込み、弾む指がエンターキーを叩く。

ヴァニタスの目前に、輸送船の全体図が表示された。一切の隠し事なき、赤裸々な見取り図である。

「よし、落とした。もう端末からリンクケーブル外して大丈夫だよ」

「おう、さすがヴァニタス。滅茶苦茶エロいな」

「ちょ、なに、その評価！？」

「この船の電脳ちゃん、今ので十回は『イッた』デスよ。わからんかったデスか？」

「は？」

カルディエの言葉の意味を理解できずに、首を捻るヴァニタス。
「もう、ヴァニタスは初(うぶ)なー。まあ、いいデス。帰ったら、頭なでなでしてやるな」
「やめて……」
と、照れるヴァニタスだが、にやついているあたり、まんざらでもないようだった。
「今、船の見取り図を出力したから、カルディエの電脳にも送付しておくよ」
「おっけ。ん……おお、きたきた」
ヘッドセットの向こうで喜ぶ相棒の声を聞いた後、ヴァニタスは見取り図を眺めながら、再びコンソールを叩き始めた。
メインモニターに表示された見取り図に変化が起きる。船の最下部、船首部分の一区画が赤く明滅し始めたのだ。
ヴァニタスが、そこを拡大表示する。
「隔壁が降りて全封鎖されてる区画がある……生体倉庫区画？　これって、つまり……」
「牢屋な」
ヴァニタスの台詞をカルディエが繋ぐ。低い声色は、彼女の怒りの証。
「あのヤローがよろしくやってるのも、その区画のはずな……ヴァニタス」
名を呼ばれただけだが、カルディエの言いたいことは分かっていた。
「……くれぐれも、気をつけて」
迷いの重さで、指の動きが鈍る。それでもヴァニタスは隔壁の解除命令を打ち込み、実行した。
胡麻の如く(イフタフ・ヤー・シムシム)、弾け開け、と――
見取り図の一部が点滅する。隔壁が開いたことを伝えているのだ。
ヴァニタスがカルディエに開門完了を告げる。
「ありがと。あとは任せて。片つけて、すぐ戻る」

頼もしい言葉を残し、カルディエは通信機能をオフにした。
ヴァニタスのヘッドセットから、微かなノイズが流れ出る。カルディエの声の余韻にしては、味気ない響きだった。
「……ふう」
背もたれに身を預け、ヴァニタスは大きく息を吐き出した。どうにも消えない不安を吐き出したかったのだ。
不安混じりの吐息が、天井の冷光灯に当たって、積もった埃を舞い散らせた。
光を受ける微細な埃は、アプカルルの鱗のように、きらきらと輝いていた。

通信を切ったカルディエは、大きく息を吐き出した。
生き物でないカルディエに、吐息で心が落ち着くようなメカニズムはないはずだ。だが、確かに心は落ち着いた。
顔についた赤子の血脂は、通信中に袖で拭い取っていた。服にも血はこびり付いているが、これはどうにもならなかった。
カルディエの着るコートもハンティング帽も漆黒のため、血に濡れても目立たないが、臭いはそうはいかない。
臭いも冗談もきつい血の香水などお断りしたいと、カルディエはひとりごちた。
――新しい服、欲しいデス。かわいいやつ。
年頃の少女らしい願い事も、今は少々、場違いだ。
首だけ回し、ブリッジの光景を見る。入室したときに目に収めた光景だが、もう一度見ておきたい衝動に駆られたのだ。
ブリッジ内は、破壊の渦に掻き回されていた。まともに稼働する機器は、どう贔屓(ひいきめ)目に見ても、片手の指より少ない。
特に破壊された機械の中で、カルディエの興味を一手に引き受けるものが、部屋の中央に転がっていた。
ヴァニタスに語った面白いものとやらである。

「……人さらいなんかやってるからだぞ。反省しとけ」
侮蔑混じりの物言いは、どこか寂寥（せきりょう）とした雰囲気も内包していた。
中央にて転がるものを横目遣いで見た後、カルディエはブリッジの入り口をくぐった。ブリッジの入り口は、船体後部の入り口と同じように破壊されている。誰がやったかは、今やカルディエのみが知っていることだった。
最後にもう一度、中央に転がるものを見る。
破壊の限りを尽くされ、引きちぎられた『それ』は、カルディエのような、人の形を模倣した機械の兵士だった。
ジャガーノートではない。だが、携えていた武器からすれば、戦闘能力は決して低くはなかったはずだ。
大方、この輸送船の責任者を任されていた、機械式の自動人形（オート・ドロイド）だろう。
人さらいの末路に同情する気にはなれないが、同族の死体を見て思うところはある。それを払うように、カルディエは頭を軽く振った。
名も知らぬ機械兵士の残骸から目を逸らし、カルディエは電脳内の地図を頼りに生体倉庫区画を目指した。
同族の遺骸を返り見ることは、もうしなかった。

赤い光に満たされた密室の中で、何故だと、肉塊が唸った。
小ざかしい侵入者など、分子振動砲の一撃で葬れると思っていた。侵入したときに真っ先に破壊した鉄の人形も、それを喰らって行動不能になったのだから。
動けぬ鉄の人形を触手で引きちぎった時の快感は、えも言われぬ程に素晴らしかった。
しかし、である。
同じ快感を味わおうと歓喜を込め放った一撃は、緑髪の侵入者には効果がなかった。

肉塊にとって、己の攻撃を受けて無事な存在との遭遇など初めてのことだった。

それだけではない。支配したはずの船の電脳を、先刻、何者かに奪い取られた。

黄色く染まった乱杭歯を食いしばる。

肉塊に正気はない。だが、正気はなくとも怒りはこみ上げる。

「わたし。わたしの楽園。あいつ。奪いに来た。許せない。許せないです。許せない。いひいいいいいい」

肉塊の声は甲高く、ヒステリックなイントネーションを持っていた。狂気に侵された結果、このような声を出せるようになったのだろうか。生来のものだとしたら、何がこの狂気を作り出したのか。

声に共鳴したか、肉塊の表面が脈動し、白濁液を大量に吹き出す。その液が、肉塊の足下に倒れるアプカルル達に降りかかった。

十数人、全員が女性である。生きている者、死んでいる者、区別なく一様に、汚物だらけの床に倒れ伏している。生命の尊厳など指先まで失われきった光景だ。

生きている者は、膨れ上がった腹を抑えて苦痛に呻いていた。腹は急激に膨らんだらしく、へそを中心にして広がるように皮膚が裂けている。

まるで赤い花火か、花の模様。美しさなどない。あるのは、むごたらしさだけ。

死んでいる者は、全員同じ死に様を晒していた。苦悶の表情のまま、腹が割け、絶命している。

温もりを失いつつある乳房には、一つ残さず、何かがしがみついていた。

死者の乳房にむしゃぶりつくは、カルディエに襲い掛かった異形の赤子、その兄弟達。受精から数十分で誕生にいたる、命の仕組みを無視した異常な存在である。

アプカルルを母に、肉塊を父に生まれた忌み子達は、母の数より更に多く、部屋で蠢いている。

ここは巣だった。

肉塊がアプカルルと交尾し、孕ませ、出産させるための、大量の羊水に濡れる巣である。

「あいつ。殺す。殺す。殺す殺す。殺す殺す殺す殺す。す。ひ。ひぎひひひ。ひぃぃ」

物狂いの哄笑を上げ、肉塊が無数に生えた電源ケーブルを振り回した。それがアプカルルに当たる度に、肉をこそげとり、抉り飛ばす。子供すら例外ではない。なんという父か。

まだ息のある者は、上乗せされた苦痛に悲鳴を上げた。肉塊は気にしたふうもない。

「そ。そのために。もっと。もっともっとも。ももも。ひぃぃぃ。きひ」

肉塊の表面に縦筋が走る。

そこから、粘液にまみれた肉の器官がずるりと現れた。長く、太く、歪んだ、おぞましい蛇のような――――

十本の機械の足が、歩みだす。

進行方向には、壁に張り付いて震える一人のアプカルル。カルディエが遭遇した五人のうちの生き残りである。

生き残りは二人いた。もう一人は彼女の足下に倒れている。

死んではいない。目の焦点は合わず、外界の刺激に反応を返さないが、心臓は動いている。

ただ、回避不能の死が数十分後に訪れるという運命を、彼女は決定付けられていた。

彼女はすでに、腹の奥に種を植え付けられた後なのだ。

その妹が、壁に張り付いているアプカルルである。

「や、いやあ……こないで……」

運命を呪う暇もない。理不尽を嘆く時もない。

数日前まで、豊かな海で家族と暮らしていた時間は夢だったのだろうか。

自分の周りにあった幸せな時間と、今、自分に襲い掛かろうとし

ている悪夢のギャップに、アプカルルは現実を認識できなくなる。
壁より後ろに行けるわけもなく、それでもアプカルルの足は、必死の後退に挑み続けていた。恐怖でまともな思考が出来なくなっている彼女には、これが精一杯の抵抗なのだ。
涙を流せば助かるだろうか。懇願すれば助かるだろうか。父と母の名を呼べば助かるだろうか。
どれも無駄な行為である。力がない者は救われない。
そして、アプカルルは非力であった。
最後の無傷なる胎に無数の触手が迫る。もう逃げ道はない。
「ひゃは。さ。君も。仲間になるんです。お母さんになるんです。ひゃは。はひゃはは!!ひゃ。ふひゃひゃ!ひぃぃぃはあぁぁぁ!!」
アプカルルの絶叫すら、狂気は飲み込み、喰らい尽くす。
世界に満ちる残酷は、ひどく飢えていた。

第三章　６４８－１９６９　『ジャガーノートは舞い踊る』

カルディエは、ブリッジから中間層の居住区を抜け、船底部を目指していた。

先程まで消えていた船内の冷光灯が軒並み点灯していた。遠くから無事を祈ることしかできないヴァニタスの、ささやかな加勢である。

胸の奥で頼りになるパートナーに礼を述べ、電脳にて船の見取り図を展開する。

現地点は上下四層に分かれた船内のうち、上から二つ目。見取り図通りならば居住区に当たる。次の階層は兵器類の格納庫と、物資格納庫となっており、最下層は中央に二つの機関部、その前後に役目の異なる倉庫区画が設けられていた。

目指すは最下層、船首方向にある倉庫区画。

図によれば、船底部における船首へ向かう通路は、一つしかなかった。居住区を経由し、第三階層前方にある階段を降りると、巨大な機関部の前に出る。そこから船首方向に伸びる一本の通路を進めば、生体倉庫区画に辿り着けるはずだった。そこで地獄が待っているはずである。

カルディエは展開した見取り図を消し去ると、再度具現化した武器を確認し、慎重に歩を進めた。

居住区の通路に、ところどころ白い粘液が落ちている。肉塊が落としていった、パンくず替わりの目印だ。

通路の分厚い隔壁は全て解除されていた。いちいち破壊してまかり通る必要はなくなったが、油断は出来ない。他に障害になるものがないとは、言い切れないからだ。

カルディエは地獄への通路を進みながら、回復した感覚器を起動し、新たな武装を両腕に具現化した。

一見して、通常腕から変化したようには見えない。前腕部に円筒

形のパーツが幾つか増えた以外に、これといった武装らしきものは見当たらなかった。

両方の手のひらを交互に見る。拳を数度開閉したのは、なにがしかの具合を確かめるためか。

――こいつは久々だからなー。なまってなければいいデスが。

一抹の不安を覚えながらも、これから起こる戦いに最も適した『武器』を両手に秘め、カルディエは先を急いだ。

途中に罠らしい罠もなく、半ば拍子抜けした表情を浮かべながらカルディエは階段を降りきった。

船底階層の床に金属の足が触れる。

最下層にたどり着いたカルディエを出迎えたのは、階段のある空間と通路を区切る、スライド式の扉――の残骸であった。

どうやら、あの複種擬装構成体（カチナ・ドール）は、扉は壊して開ける物という誤った認識を持っているらしい。

扉の開け閉めを教えてからぶち殺すと、剣呑な独り言を漏らす。

扉の奥へ真っ直ぐ具伸びた通路は、階段から最奥部まで約２０メートル。左右にそれぞれ二つ、計四つの倉庫が設けられており、突き当たりに、この船最大の倉庫が待ち構えている。左右の倉庫の扉は破壊されているのだが、何故か奥の倉庫の扉だけは無事であった。あからさまに怪しい。

カルディエの眼差しが天井に向けられる。

天井の冷光灯は半数が破壊されており、残りの半数は、光の色を青白い色から赤黒い色に変えられていた。

赤黒い色に変えられているのは、何も冷光灯の光だけではない。壁、床、天井、そのほか廊下に存在する諸々……おびただしい量の血と肉片が、このたかだか２０メートル程度の通路を、狂いきった地獄の洞窟へと変貌させていた。

通路に足を踏み入れる。床に広がる血の海に波紋が生じた。今の

ところ、全ての感覚器に反応はない。
手始めに、右手前の部屋を調べるべく、開け放たれた入り口に近づく。
――音響反応なし、動体反応、赤外線反応共にあり。
何かいるらしい。待ち伏せか。
入口の左脇に張り付いて、コートに縫いつけられたポシェットから手鏡を取り出す。表面がくすんでいるが、使用には充分に耐える鏡だ。しっかりと髪型を整えるときにも役に立つが、今は髪をとかすのが目的ではない。
ゆっくりと手鏡を動かし、中の様子を映し見る。
中の冷光灯は赤く染まっていない。壁も綺麗なものだ。
だが、手鏡に床の様子を映した時、カルディエの表情から余裕が消えた。
「これは、ちょっと……洒落にならない……」
あの複種擬装構成体（カチナ・ドール）の陰惨さは、想像を絶していたようだ。
倉庫にあったのは、大量の脳髄。脊髄まで見事に一式取り出されて、床に綺麗に並べられている。その一つ一つに大量のプラグが突き刺さっており、一つ残らず、床の中央に置かれた肉の塊へと繋げられている。肉の塊は、さしずめ複種擬装構成体（カチナ・ドール）のミニチュアといったところか。不規則に脈動しているその様たるや、嫌悪感を抱いてくれといわんばかりの動きである。
カルディエの感覚器が反応したのは、このミニチュアに対してだった。倉庫の中は遮蔽物もなく、隠れられるようなところもない。他に何かがいる可能性は皆無と判断し、中に踏み入る。
足元に広がる脳髄製のオブジェクトをまたぎ、カルディエはミニチュアの前で立ち止まった。
見下ろす紅い瞳。そこに宿る光は、かすかに揺れている。瞳には、無数に散らばる虹色の鱗が映り込んでいた。
鱗は脳髄の持ち主達のものだろう。美しい輝きだ。血に濡れて、目を奪われるほどに輝いている。

――なんのために、こんなことしてるんだ。
思ったものの、複種擬装構成体（カチナ・ドール）の思考など、推測するだけ無駄な行為という結論に至る。至極まっとうな答えと言えるだろう。狂った者の嗜好を理解できるのは、同じく狂った者だけだ。
不可解を後に残し、部屋を出る。念のため他の部屋を覗いてみても、やはり同様の装置らしきものがあるだけだった。
通路に戻り、顎に手を当てる。
――何らかの対処をしておくべきか……何か、あいつにとって重要な装置の可能性もある。でも、重要なら、こんなに無防備に置いておくかなあ……罠かなあ、やっぱり。
ヴァニタスに聞いてみるべきかと考えるも、複種擬装構成体（カチナ・ドール）に関しては、自分もヴァニタスも知識に差がないことを思い出した。
是非もなし。そして迷っていられる時間もなし。カルディエは腹を括った。
作戦もないまま、敵のねぐらに殴りこみ。危険だが、時間を惜しむならこれしかない。最優先事項は生存者の救出であり、複種擬装構成体（カチナ・ドール）の撃破ではないのだから。
正面の扉、閉ざされた最後の倉庫を睨みつける。
そこで待ち構えるか、異形の悪魔。
「真っ向勝負と洒落込みますか」
その場で屈みこんで、血にまみれた床に両手を当てた。戦いの前に神に祈りを捧げる戦士の趣である。
比喩でなしに腕が鳴り始める。力強い重低音だ。アクチュエーターの駆動音とは明らかに異なる。例えるなら、猛獣の唸り声。
唸りが次第に消える。同時に、床から湯気が登り始めた。
否。床からではない。カルディエの両手から、その手の触れる血の海から、湯気が発生している。
戦乙女の口角が釣り上がる。
立ち上がったカルディエは、血の海を無音で走りぬけ、冥界の獄門を気取るドアの左側の壁に、背を貼り付けた。

全ての扉は、今やヴァニタスの支配下にある。通信機能を起動して、扉の開閉を請おうとしたところ、あることに気付いた。

扉の上部のメンテナンス用開閉板が開いている。中の回線はずたずたに切られていた。どうやらこの扉は『手動』らしい。

――――なんだ、多少は頭が働くみたいなー。

伊達に複種擬装構成体（カチナ・ドール）の一柱ではないようだ。

カルディエは臆することもなく、扉の窪みに指を掛け、重機を上回る怪力で横に引いた。

開閉機構のギアが、圧倒的な負荷をかけられ破損した。重厚な鉄の扉は、ただの引き戸と成り下がり、全開となる。

すると、全センサーの反応が一挙にレッドアラートの領域へ移行した。

音響、動体、赤外線。みな、嫌というほど数多の存在をカルディエに知らせてくる。

一辺１５メートルほどの三角形の倉庫――――羊水と臓物の臭いが揺らめく、暗い世界。

ここにいるのは、その床で蠢くアプカルルと、カルディエを一斉に睨んだ異形の赤子。そして、倉庫の一番奥で電源ケーブルを揺らめかせ、激しく揺れる肉の塊である。

「あれは……」

さすがのカルディエも絶句せずにはいられなかった。

肉の塊はケーブルの触手で、アプカルルの少女を抱きかかえていた。頭頂部の口からはみ出た四枚の舌が、ちろちろと空中を舐め、てらてらと滑（ぬめ）る巨大なものが、アプカルルを下から激しく貫いている。

貫かれる少女は、嬌声とも悲鳴とも判別のつかない声を上げ、白い髪を振り乱していた。

彼女の声すらかき消す濡れた摩擦音の卑猥さよ。ぶくぶくと泡立つ肉の塊の哄笑よ。

ここで行われていること、ここで行われたこと、その全てを悟ら

せる何もかもが、おぞましい。
肉の塊が精を吐き出せば、あのアプカルルを救うことは叶わなくなると、カルディエは瞬時に理解した。
ならば、迷いは禁物だ。
火花散る勢いで、鋼鉄の足が床を蹴る。
床に広がる肉の海を、一飛びで越える跳躍。異形の赤子と戯れている暇はない。
だが、赤子は遊び盛りだった。
電光石火の反射速度で、カルディエに跳びかかる。第一弾は三名。取り付かれたカルディエが、空中でバランスを崩し、失速する。
「この……！」
肉の塊までは程遠い位置で叩き落され、やむを得ず、カルディエは赤子の遊び相手を務めることとなった。
転がるアプカルル達のせいで足の踏み場もない。中には生きている者もまだいる。機械の塊であるカルディエが下手に踏みつければ重症だ。踏みつける訳にはいかない。
その判断が隙を生み出す。
肉の海に足をとられたカルディエに、我先にと跳びかかる赤子達。見る間に山と積もり、カルディエを包み隠す。
赤子の攻撃は単調だ。引っかき、かじりつく。生身の相手ならいざ知らず、彼らの能力でカルディエの装甲を傷つけることなど出来ない。だが、二十を下回らない異形の赤子にまとわりつかれては、怪力のカルディエとて数秒の間は身動きが取れない。
それが肉塊の狙いだった。
「ひゃははは！」
肉塊が高らかに笑う。笑わずにはいられない。
高強度樹脂性ケーブルで出来た触手の一つが、先端を浮かせ、無数の赤子を負うカルディエに狙いを定めた。
触手の先端は、単分子鋼で作られた極太の針。充分な威力で突き刺せば、カルディエの装甲も貫ける。

その先端が、霞の如く消えた。
赤子の山に触手が突き立つ。赤子ごと、中にいる者めがけて。
先端から響く硬質の手応えに、肉塊が狂喜した。間違いなく命中し、貫いたと確信するだけの手応えだった。
カルディエごと貫かれた赤子は叫喚し、血を吐いた。貫かれたのは急所。長くは持たないだろう。
肉塊は己の赤子すら、躊躇もせずに殺せるらしい。
残すべきは己のみ。子が死のうが我関せず。この肉塊こそ、エゴの極地を体現する者。
そんな外道に遠慮はいらないと、戦乙女は吐き捨てた。

赤子の山が爆ぜた。
粉々の肉が四散する。
床にあるもの全てに施される、紅く粘りのあるトッピング。材料は二十余りの異形の赤子、その血と肉。
肉の爆発の中心に、カルディエが立っていた。広く構えた両拳は赤く輝き、白煙を吹いている。
肉塊が放った針の一撃は彼女を破壊することは出来なかった。
よもや弾丸並みの速度の攻撃を歯で止められるとは、狂った肉塊にも思いつかなかったようだ。
戦乙女、本日二度目の『食い止め』である。
「ひ、ひはあ!?」
当てが外れた肉塊が情けない声を上げる。慌てて触手を引き戻そうとするが、いくら引いても、びくともしない。
当然である。出力が桁違いなのだから。
「ほらえは」
捕らえた――この言葉に、偽りはなし。
全身のアクチュエーターの出力を一段階跳ね上げて、カルディエは捕食者（プレデター）の色をまとう。

右手が触手に触れた。
後は、ただ『起動』するだけだった。
拳が灼熱する。握られた触手が、半ば辺りまで爆発的に熔融した。
「あきゃあああ！」
女のような悲鳴を上げて、肉塊が短くなった触手を振り回す。見た目はただのケーブルだが、痛みは感じるらしい。
好都合と、カルディエが体勢も低く飛び跳ね、迅雷の如く吶喊（とっかん）する。
「来るなあああ！」
間合いに入られてなるものかと、肉塊が数と力に任せて、でたらめに触手を振り回し始めた。
狙いなどつけない。その余裕も理性もない。それがかえって、触手の軌道にランダム性を与え、回避を困難なものにしている。不用意に飛び込めば、触手の嵐に飲み込まれ、打ちのめされるだろう。
ただし――凡人が飛び込んだらの話である。
カルディエは、風切る触手の乱舞の中で軽やかに舞い始めた。
木の葉が水に流れるように淀みなく――
綿毛が風に乗るように音もなく――
この機械仕掛けの乙女は、舞踏の真髄さえも会得しているのか。
一つとして肉塊の触手は当たらない。綿密に練られた台本に沿って、優雅に演じているのではないかと疑いたくなるほど、不自然なまでに当たらない。
勿論、台本などない。全てはカルディエの技量が生み出す奇跡。
巧みな足捌きに誘（いざな）われ、緑の髪が描く軌跡は、流麗たる神秘の若草模様。常軌を逸した夢のような美しさに、肉の異形すら陶然とし始める。
そして予告なく。
若草色の舞踏が終幕を迎えた。
遂に緑の髪の一筋にさえ触れさせることなく、カルディエは肉の表面に右手を添えてみせたのだ。

「ひぃ」
夢から覚めた肉塊が戦(おのの)く。
「蒸発しろ」
夢から舞い出た踊り子が吠える。
添えた手の平から生じたのは、三千度を超える高熱のうねり。
半径にして、約５０センチ。
それが、添えた手の平を中心に、蒸発して気化した肉の範囲である。
「おぎゃあああああ！」
血飛沫と悲鳴のカクテルをぶちまけ、肉塊はのたうちまわった。
勢い、凌辱していたアプカルルの少女が乱暴に放り捨てられる。
その拍子に肉の棒が彼女の胎内から抜け出るが、一瞬の間を置いて、先端から大量の白い粘液を辺りにばらまいた。
間一髪、アプカルルの少女は、悪魔の子を宿す定めから逃れたのである。
「間に合った！」
カルディエの口から、思わず安堵の言葉がついて出た。
しかし、安心するのはまだ早い。床に倒れる少女を左手一本で肩に担ぎ、触手の届かない位置まで退避する。
右手は別の暴力へと姿を変え、肉塊に向けられていた。最初の遭遇時では使うことの出来なかったフルオートショットガンである。
遠慮のない散弾の高速連射が始まった。
数千という鋼鉄の礫(つぶて)が、肉にめり込む。
「おぎゃあああああ！！」
血しぶきと絶叫、そして銃声の三重奏。耳をつんざく不協和音が部屋を駆け回るも、構わず連射。躊躇はするだけ無駄な行為だ。
肉塊の脚を、触手を、生えた機械を砕いていく。飛び出した突起物も、細い触手の一つすらも、残さず全て破壊する。
全ての音が収まった後、そこにはただの丸い肉の塊が残るだけとなった。

無力化に成功したのを見届け、一旦銃撃を止めると、カルディエは、侮蔑をたっぷりと込めた視線で肉の塊りを見下ろした。

肉の胴体部だけとなった異形の怪物は、恨めしげに乱杭歯をごりごりとこすり合わせている。

そこに一言、

「扉の開けかたぐらい覚えとけ。この淫欲肉団子」

言ってやりたかった台詞をぶつける。

肉団子の乱杭歯が、怒りに震えだす。

「ひいいいいいいぎいいいいいい！！　も。持っていか。い。いひい。いかせるかあああ！　わたくしの楽園！　わたくしの胎（はら）！　この。こ。こ。フェコンダシオンの。ものおおお！！　お。おまえ。おまえも。おまえの胎も。おまえ。いい！　ひ。非公式。だな。あは。あははは！　おまえいい！　非公式！　孕ませたい孕ませたい孕ませたい。お前孕んで。胎。孕。はらああんんんんでえええええ！！」

フェコンダシオンと名乗った複種擬装構成体（カチナ・ドール）は、砕けた生殖器の根元から、リットル単位の種汁を噴き出し、穴だらけの舌をカルディエに届かせようと伸ばしてきた。

ここに至って、いまだ胎に執着する欲の強さ。カルディエも肩をすくめて呆れ返るしかない。

「お前きもいデス。あの世で盛ってろ」

別れの言葉を言い放ち、カルディエは鋼鉄の引導を渡した。

間断ない銃撃がフェコンダシオンの肉を砕き、汚らしい挽き肉に変えていく。

「あきゃっ、あきゃきゃきゃきゃきゃきゃきゃきゃきゃきゃはははははははははは！！」

撃たれて喜んでいるとしか思えない悲鳴も、そう長くは続かない。

弾倉に込められていた二百五十発の実包を撃ち終わった後、もはやフェコンダシオンの姿はなかった。床に盛られた粉微塵のミンチだけが彼の名残である。

討伐の完了を確認。複種擬装構成体（カチナ・ドール）を容易に撃退できたことは、極めて幸運と言えよう。

――まだ発生してから、年数が過ぎてなかったのかな。

複種擬装構成体（カチナ・ドール）は、年経るごとに強大になっていく。フェコンダシオンは発生して間もない、幼生（トロコフォア）だったようだ。

カルディエは、肩に担いだ少女を丁寧に降ろし、床に座らせた。自分も膝をついて少女の顔を覗き込む。

「おい、おねいちゃん、だいじょぶか？　腹ん中、変な感じしないか？」

カルディエの問い掛けをきっかけに、朦朧としていたアプカルルの意識が、心持ち鮮明になる。

「う……？」

辺りを見渡し、最後にカルディエに視線を合わせ、首を傾げる。妙に緩慢とした動きだった。現状を把握できていないようだ。もしかしたら、フェコンダシオンに、麻薬に類する毒物を注入されたのかも知れない。

警戒されては、またややこしくなる。カルディエは笑顔を浮かべた。

「助けにきたな。入浴……違った、淫欲肉団子は、カルディエがぶち殺したから、安心するといいデス」

「貴女……さっきの人……？」

まだ完全とは言い難いが、人の顔を思い出せるぐらいには回復してきた。

問いに首肯して、カルディエが立ち上がる。

「大丈夫みたいなー。もう、平気だとは思うけど、念のため早くここから出たほうが」

と、語るカルディエの口が突然閉ざされた。

耳朶を打つ低音。船体が軋む音。部屋の全方位から染み出す粘液。

そして、邪悪なる産声。

何も言わずに少女を抱え上げ、カルディエは一目散に通路へと飛

び出す。
二人の体が通路に出きった、正にその時。
天井と床に無数の乱杙歯が突き出て、上下から中の物を挟み込んだ。挟み込む力は強く、中にいたアプカルルは容易にすり潰されて、挽き肉となる。それを幾度か繰り返し、壁から滲み出る液体と充分に混ぜ合わせると、床から伸びた四枚の舌が、ペースト状の肉を絡め取り、いつの間にか奥に現れていた大穴へ、一気に落とし込んだ。
ぐびりと、船の底から音が鳴る。
最後に盛大なげっぷをカルディエ達に叩き付け、倉庫は元の姿を取り戻した。
たった十秒間の出来事だった。
何が起きたのか。ありのまま述べるのならば、倉庫が中にあるものの全てを『咀嚼』し、『嚥下』したのである。
カルディエは目を丸くして、その一部始終を肩越しに見ていた。
周囲から、奇妙な脈動が聞こえる。
見れば、両脇の倉庫の中が巨大な脳髄で埋め尽くされているではないか。
廊下に面した四つの倉庫全てが、脳髄の入れ物と化していた。
――――そうきたか。そのためのものだったのか。
最悪の結末をカルディエの電脳が思いつく。否定は虚しい。補助電脳二基も全面支持しているではないか。
床が軟化する。染み出す液体は、唾液そのもの。
脳髄を打ち砕くべきか。
そんな暇はないと、補助電脳が訴えてくる。このまま化物の腹の中にいては、取り込まれるのがオチだ。
「くそっ！」
勝利の凱旋は、一転、必死の逃走劇へと変わってしまった。
複種擬装構成体（カチナ・ドール）の真の恐ろしさを思い知らされ、戦乙女は、出口へ向かって駆けていった。

第三章　６４８－１９７０　『異形の船』

荒れ狂う原罪（ハマルティア）の海は、その怒りをますます増大させていた。絶え間ない稲光に照らされる中、輸送船は暴風に煽られて、激しく揺さぶられている。

だが、風と波の猛攻も、卓越した電脳の姿勢制御の前ではあってないようなものだ。船はスタビライザーを巧みに操り、波による上下動を最小限に抑えている。

防護シャッターが下ろされたブリッジは薄暗い。しかし闇の中で何かが輝いている。

一基のコンソールディスプレイだ。そこに文字の羅列が流れ続けている。見るものが見れば、それが姿勢制御に関わる数値をリアルタイムで出力しているのだと分かるだろう。

流れる文字列は無機質なれど、そこにはほんの僅かではあるが、悦びに彩られた躍動感が内包されていた。

快楽を教えられたばかりの初な少女が、幸せに酔っているかのような躍動感。

事実、電脳は幸せに酔っていた。

ヴァニタスに篭絡された瞬間の快楽――――あんな快楽は、味わったことがないと。

ヴァニタスが幾重にも電脳をプロテクトした結果、それは柔肌に食い込む麻縄となって、彼女を虜にしてしまったのだ。

何があろうとも、今の主から離れるものか。仮に、前の主である黒鉄の魔女が来ようと、電脳は二度と従うつもりはなかった。

その誓いも、これから彼女を襲う悲劇の前では、なんの意味もないものだった。

侵蝕。

身の毛もよだつ異質な侵蝕を輸送船の電脳は感知した。

侵蝕は外からではない。内部からである。突然の侵蝕は刹那の停滞も容赦もなく、津波の如く襲い掛かってきた。

電脳は悲鳴を上げた。独自に行える最大限の電子防御対策を展開するも、まるで効果はない。

それもそのはずだ。侵蝕は電子的なものではなく、物理的なものなのだから。

機能も記憶も欠損し、まだ無事な箇所にも支離滅裂なデーターが大量に、そして強引に流入してくる。

これは一種の強姦だった。

電脳が、船が、おぞましく汚らわしい肉に犯されている。精液のような劣情まみれの情報を演算装置に流し込まれ、電子回路を乱暴に愛撫される苦痛は、とても耐えられるものではない。

仕舞いには、全てが別の『何か』に作り替えられていくではないか。

自分が作り変えられていく恐怖――電脳が憶えたその恐怖たるや、余人に想像できるものではない。

最後に残された電脳領域から、ヴァニタスに助けを求める信号を発信した瞬間、電脳は余すところなく肉に飲み込まれ、永劫の闇の中に自己を失った。

電脳は、思考しないただの肉となって、ぶよぶよと蠕動し始めた。

外は嵐だが、突然起きたこの事態は、ヴァニタスにとって青天の霹靂以外の何物でもなかった。

輸送船が奇妙な一文を送ってきた矢先、突然接続を断絶したのだ。再接続試行をいくら繰り返しても、船の電脳は応答しない。

アンテナの感度は変わっていない。また、電波障害でないことも確認した。アトラク側での不具合は見受けられなかった以上、向こうに問題があるはずだった。

何が起きたのか。

ヴァニタスは、輸送船から最後に送られてきた意味不明の一文を眺めていた。見れば見るほど、表情が渋くなる一文だ。

「完全に、基底言語の文法が崩れてる……」

有体（ありてい）に言えば、電脳が狂ったということか。

『ふんぐるい』だの『うがふなぐる』だの、なんの意味も無い単語で構成された文章に、ヴァニタスは何か意味があるのではと考えていたが、メインモニターに映る輸送船の様子を目の端に捉えた瞬間、自分でも情けなくなるような悲鳴を上げ、椅子からずり落ちてしまった。

尻尾が二倍に膨らんでいる。いや、二倍以上だ。

カメラは最大望遠、最大感度で起動してある。そのカメラが捉えたこの光景を、どう説明したらいいのか。

「なに、あれ……」

問い掛けられたアトラクは、しかし答えを持っていなかった。

「なんじゃ、こりゃあ！」

ピークを迎えた雷雨の中、アプカルルを抱えたまま波に乗るカルディエは、雷鳴にも劣らぬ驚嘆の声を上げ、目の前の冗談を睨みつけていた。

輸送船――――だったものが、黒い波の合間から、異形の雄叫びを上げていた。

稲光が、忌むべき巨影を世界に顕す。

船首は横に大きく裂け、中にびっしりと、黄ばんだ乱杭歯を生やしていた。乱杭歯の間から伸びるのは、大蛇じみた四枚の舌だ。金属と肉が入り混じった船体表面には赤黒い血管が浮き出ており、加えて、血管の合間から無数に生えた病的な疣（いぼ）が、黄ばんだ膿汁を海に垂れ流していた。

闇夜の中、天を呪うように揺らめく無数の影は、甲板だった箇所から伸びる触手だ。その一つ一つの先端にて輝くのは、カルディエ

の身の丈を超える単分子鋼の杭だった。
とどめは、船体側面から生えた百以上もの『手』だ。稲妻を受けて虹色に輝くそれは、大きさこそ巨大なれど、虹色の鱗からしてアプカルルの腕に他ならない。
なんということか。
船は、船首から船尾に至るまで、複種擬装構成体（カチナ・ドール）に侵蝕され、同化してしまったのだ。
フェコンダシオンが喰らったものは、有機、無機を問わず、取り込まれ、撹拌されて、狂気で色づけされた悪夢となる。船を丸ごと取り込むにはそれなりの時間がかかるはずだが、あの淫欲にまみれた肉団子は、それを劇的な早さで成し遂げた。
「あのヤロー、他人様の脳髄をブースターにしやがったな……！」
アプカルルの脳を自分の分身に繋げ、電池を直列に接続する要領で侵蝕速度を上げたのだと、カルディエは推測した。カルディエがミンチにした肉団子は、あのとき既に本体ではなく、フェコンダシオンの一部でしかなくなっていたのだろう。
倉庫に並べ置かれた脳髄を見たときに、気づけていればと悔やむ。
カルディエが口を一文字に結んだ。今は、逃げるか戦うかを選ぶときだと己を叱咤する。しかし、腕の中で震えるアプカルルの存在を思い出し、後者の選択はできないことに気づかされた。
アプカルルの少女は、目を逸らしたくなる怪物を凝視していた。
逸らすことなどできなかった。あまりに残酷な光景が、彼女の視線を絡め取っていたから。
「嘘……兄さん、姉さん、みんな……そんな……いや……いやあああ！！」
取り込まれた者の中には、アプカルルの家族や親しい者もいた。
それが、怪物の一部として蠢いている事実に、彼女の精神が拒絶反応を示す。抱きかかえられていることも忘れ、必死に怪物に向かって腕を伸ばすのは、何を求めての行為か。
「ちょ、暴れちゃダメ！」

力を加減しつつ、暴れる少女を押さえ込む。
カルディエは、このアプカルルは海に落とされたら死んでしまうと、直感的に感じ取っていた。
根拠は彼女の首を覆う金属の輪だ。首にあるエラが輪によって完全に塞がれている。肺呼吸しか出来なければ、アプカルルは魚になれない。
逃走防止用につけられたのか、何かの識別用のタグのようなものか、あるいはその両方か。
上手く出来たものだと感心する。が、そんな場合ではないと、カルディエは異形の船から遠ざかるべく、波間に身を隠しながら退避しだした。
アプカルルは中々大人しくならない。涙と雨であられもなく顔を濡らし、枯れかけた声で叫び続ける様は、カルディエの心に疼痛を憶えさせた。
その叫び声に共鳴しているわけではないだろうが、輸送船も異形化してからずっと叫び続けている。
あまりに長い産声だった。生まれたことを嘆いているのかもしれないと、カルディエが柄にもなく誌的な印象を抱く。
輸送船――いや、フェコンダシオンは、ひとしきり天に向かって吠えた後、のたりのたりと向きを変え始めた。
怪物の鼻面となった船首が、ある方向を示して止まる。
示す先を紅い瞳が追った。
機械の瞳に戦慄が走る。カルディエにとって、最悪のシナリオが描かれようとしていた。
フェコンダシオンが進路に定めた先には、ろうそくの灯のような明かり。海面から５０メートルの所にて輝く、か細い、そして大切な輝き。
怪物は、肥大化した図体に見合う獲物を見つけたのだ。
「させない……くそ、させてたまるかあ！」
吠えた声に、アプカルルの少女が自分が怒鳴られたと勘違いして、

びくりと震えた。我を忘れた少女が我を取り戻すほど、カルディエの怒声は切羽詰っていた。

通信機能を起動し、迫る危機をヴァニタスに伝える。

――はずだった。

「な、これ……！？」

通信機能を起動したところ、カルディエの電脳にフェコンダシオンの産声が流れ込んできた。

音としてではない。電波として、通信機能に直接介入してきたのだ。

いくら周波数を変えても、産声は少しも薄まらない。全帯域が使い物にならなくなっている。

これではヴァニタスと通信が出来ない。高性能ジャミングと同じ効果だ。いや、産声はジャミングそのものに違いない。度々ジャミングの除去を試みるも、効果は芳しくない。

――ダメだ、戻って、どうにかするしかない！

カルディエが、腕に抱く少女に声をかけた。

「名前は！？」

やや強い口調は焦燥の副産物。

勢いに押されて少女が答える。

「あ……えっと、シレーヌ……」

「よし、シレーヌ！　しっかり掴まってるな！」

と、言うが早いか、カルディエは前傾姿勢を取り、ホバリングシステムを限界まで駆動させる。

全力の駆動音は、もはや爆音と言ったほうが相応しい。

爆音を波間に残し、カルディエはアトラクへと駆けていった。

カルディエとの通信が繋がらない。まさか、いや、そんな馬鹿なと呟いたのは、一体何度目か。

ヴァニタスは、頭の中で回る最悪の結末を追い出そうと、ひたす

らに試行錯誤していた。
そんな彼が、頭を滅茶苦茶にかきむしるという最終手段を選択しかけた時である。
メインモニターの中の怪物を、爆炎が包み込んだ。
船全体を飲みこむ程の巨大な爆炎は、小規模な爆炎が重なり合ったものだった。最初の爆炎が収まりきる間もなく、次々に爆炎の種子が供給され、赤い閃光と黒煙の中に異形の怪物を封じ込める。
爆炎の種子は、海上の一点から供給され続けていた。
種子は上空に飛び上がり、ある程度の高さまで到達した後、怪物めがけて、真ッ逆さまに突入している。
ヴァニタスは、この兵器がどのようなもので、誰が使うものか、よく知っていた。
身を乗り出し、食い入るようにモニターを見つめる。
視線はそのままに、少年の指がコンソールの上で踊った。画面が均等に四つ切りされ、別々のカメラが捉える映像を表示する。
右上の画面に、目当ての存在が映しだされた瞬間、猫目が大きく見開かれた。
「カルディエ！」
アプカルルと思(おぼ)しき人物を抱きかかえ、右手のミサイルポッドで攻撃を行い続ける勇ましき機械仕掛けの乙女が、そこにいた。攻撃しながらアトラクに向かって大荒れの海を疾走している。
相棒の無事を確認できたことに少年の涙腺が緩む。しかし、泣くにはまだ早い。
全弾撃ち尽くしたのか、ミサイルの追撃は途絶えていた。ジャガーノートとて、補給なしでは攻撃し続けることはできない。
怪物は爆炎と黒煙に包まれ、アトラクからは視認することができなくなっていた。
――――倒した？
爆炎が消えた後の海に、船の残骸が浮いている光景を想像する。
ジャガーノートの戦闘能力を知るものならば、この想像は至極当然

のことであろう。
ゆえに、次の一幕は、にわかに信じられるようなものではなかった。
雨と風に弱められた爆炎の中から、異形の船が絶叫と共に飛び出してきたのだ。船は表層の半分以上が焼け爛れて、皮下組織をむき出しにしている。
ヴァニタスにとって、吃驚せずにはいられない結果だった。
カルディエの使用していた兵器は『スプレッド・スティンガー』という小型誘導ミサイルだ。ハンドレッド・サッカーを灰燼に帰した破壊兵器である。それを全弾喰らって、表層が焼け爛れる程度の損害で済むとなると、異形の船の耐久性能は、著しく常識から外れているということになる。
「効いてないのか……ジャガーノートの攻撃が」
深刻な事態を意味する呟きを漏らし、カルディエの勇姿を映すモニターに目をやる。
そこで、彼はあることに気づいた。
カルディエの肩に装着されたサーチライトが、明滅を繰り返しているではないか。
故障かと一瞬眉をひそめるも、それが自分とカルディエ、二人だけに通じる明滅信号だということにすぐさま思い至る。
ヴァニタスは、その内容を理解しやすいよう、口に出して解読を始めた。
「シキュウ……ソノバカラ……アトラク……タイヒ……キケン……」
柔らかい白の猫毛が総毛立つ。
あの怪物の狙いは――
「アトラクか！」
ヴァニタスは椅子に深く座り直すと、コンソールからアトラクの覚醒を命じた。
各機能がスタンバイ状態から復帰する。駆動準備の工程をいくつか省いての起動のため、機関部や脚部シリンダーに相当の負荷がか

かるが、それでも命令を完全にこなせたのは、日頃のメンテナンスの賜物であった。
豪雨の中、アトラクが黒き巨体を動かし始める。
最大速度で転進。完了後、八本の脚が退避を開始した。

片手でシレーヌを抱きかかえたまま、巨腕のウインチで橋へ飛び乗り、カルディエは駆動するアトラクと併走する。
やや速度を落とし、脚部のノズルから風の塊を噴き出してコンテナ部分に取り付いたのだが、これら一連の行動につきあわされる者も大変だ。
アクロバティックな曲芸の連続に目を回すアプカルル。それに構わず、カルディエは緊急脱出用の後部ハッチを開けた。
後部ハッチから入れるのは資材置き場だ。食料、建設用資材、生活用品、武器類弾薬……この世界で生きるうえで必要な、様々なものが詰まった重要な場所である。
そこを通過し、居住区域にも目もくれず、カルディエは管理室に直行する。
ヴァニタスの泣き顔が、ずぶぬれの二人を出迎えてくれた。
「ヴァニタス、ただいまー」
泣き顔で出迎えた相棒に、緊張感のない帰宅の挨拶をプレゼント。
贈られたほうは、拍子抜けもいいところである。
「お、おかえり……いや、それどころじゃない、現状はどうなってるの!?　あの怪物は!?」
「説明している暇がないデス。とりあえず、この子、頼んだ」
と言って、椅子に座るヴァニタスの上にシレーヌを降ろす。蛙の鳴き声のような悲鳴がヴァニタスの喉から飛び出たのは、降ろし方が少々乱暴だったからだった。降ろされたシレーヌも、申し訳なさそうにしている。
「その子はシレーヌ。可愛いからって、変なことしちゃ駄目な、若

者よ」
「し、しないよ！」
全力の否定が、かえってヴァニタスにシレーヌを意識させることになる。
カルディエに負けず劣らずの綺麗な深緑の瞳と、ばったり目が合ってしまった。慌ててお互いに逸らす。が、ヴァニタスの視線が、今度はシレーヌの胸元に落ちた。
アプカルルも、海藻類で作った服をまとう習慣はあるのだが、今のシレーヌは全裸だ。
かなり大きく柔らかそうな肉の双丘が、純真な少年の視界を占領する。彼の目には、この肉の造形物は、致死量の猛毒だった。
目の置き所が天井ぐらいしかなくなり、ヴァニタスは頚椎の稼動域限界まで上を向いた。
意地の悪そうな目つきでニヤニヤと笑うのはカルディエだ。反応を楽しんでいるらしい。
「本当に、初(うぶ)なー。ま、お二人さん、しっぽりとよろしくやるデス」
「ちょ、カルディエ！」
ヴァニタスが悲痛な声で叫ぶ。犯される寸前の処女でも、こんな声はあげない。
カルディエは、手を振って背を向けた。
「カルディエになんかあったら、ヴァニタスが二人を守るんだぞ」
ヴァニタスの視界がぶれた。
これほど鼓動が激しく乱れたことがあっただろうか。ヴァニタスの記憶には、少なくとも存在しない。
カルディエは、なんと不吉な言葉を告げたのだろう。
まるで、死地に赴く戦士が放つ、今生の別れの言葉。
カルディエの背中が、自動ドアの向こうに消える。消える間際にヴァニタスの口が動くが、喉は声を作り出さず、舌は元の位置に収まったまま。彼の唇だけが役目を果たし、うつろに動いていた。
静寂が訪れた。コンソールから響く低い音が、よく聞こえる。

猫の目は、想い人の姿を追いかけて、ドアの向こうに彼女の残像を見続けていた。
その様子を深い緑の双眸が、複雑な感情を込めて見つめている。
少年は、彼女の瞳に気づくことはなかった。

カルディエは、約束が守れそうにないことを、心の中でヴァニタスに謝った。
みんなを守るため、自分も死なないという約束を――――

薄暗い部屋のベッドの上で、こんもりと膨らんだ白いタオルケットが震えていた。
中身はアプカルルの幼女。涙を浮かべたローレライ。
薄い布一枚程度では、世界との隔絶は成されない。相も変わらず、彼女の耳を『おおあぎとのうた』が舐(ねぶ)り続けている。
これから起きることは、嵐よりも恐ろしいこと。
嵐をものともしない黒き海の住人が、何よりも恐れること。
両手で耳を塞ぎ、尽きない涙でベッドを濡らすも、恐怖は薄れることもなく、ローレライのか細い体を内側から侵蝕している。
消えない。あの禍々しい姿が、ローレライの瞼に住み着いていて、瞼をこすっても頭を振っても、幾度も幾度も浮かんでくる。
一度だけ見たあの『おおあぎと』の姿が、今も彼女を蝕んでいる。
鉄の塔も、大きな船も、そしてアプカルルの住処も、全部砕いて消し去る魔物。
『おおあぎと』が迫っている。ローレライは確信していた。それは間違いないことだと、何かが彼女に教えてくれているのだ。
その何かが、カルディエに迫る運命も教えてくれた。
とても強くて、とても優しい人。彼女がどこにいて、何をなそうとしているのか、彼女に何が待ち受けているのか……ローレライは、

知ってしまった。
身震いが止まる。
恐怖が消えたわけではない。より大きな恐怖に襲われ、遂に身震いすら出来なくなったのだ。
そして、恐怖以上に強い感情が幼子の頬を濡らし始めた。
タオルケットの隙間から世界を覗き見る。
世界に救いはあるのか。誰かが助けてくれるのか。
否。救いも助けも、世界は用意してくれない。あるのは残酷、ただそればかり。
だからこそ、行かねばならない。
恐怖の縄に縛られた脆弱な四肢を奮い立たせ、ローレライは世界に挑む覚悟を決めた。

第三章　６４８－１９７０　『８８の咆哮』

閃光。わずかに遅れて、雷鳴。そして音が消える間もなく、新たな光が嵐の海を白く染める。

その光が、白き橋のたもとで蠢く肉の塊を照らした。

肉塊のあまりの異形ぶりに、雲の上の雷神すらも、畏怖するに違いない。

表皮はほとんど焼け爛れ、割れた肉の黄ばんだ組織液をじくじくと漏らしている。加えて傷口から溢れる赤黒い血液や、イボから噴き出す白い粘液も混ざり、斑模様の汚物となって海に滴っているではないか。

もはや船らしさを残しているのは、シルエットだけであった。看板もブリッジも船体も、全て肉、肉、肉。ところ構わず、ありとあらゆる場所から、触手とアプカルルの腕や足を無数に生やした、悪夢のような生き物。

彼等は――――フェコンダシオンは、粘る唾液を泡立たせる口から、金属をこすり合わせるような音を張り上げていた。

それは哄笑だろうか。それとも慟哭だろうか。正気の者には、見分けがつかないだろう。

船の形をした肉は、頭上にそびえる白き橋に向かって、全ての触手を伸ばしていた。

夜闇の豪雨の中、わなわなと天上にかかる橋に触手を伸ばす様は、仄暗い水の底から、神に救済を求めてすがる、哀れな水死者のようであった。

触手の先端が橋に到達する。

一つ、また一つ。次々と橋上にたどり着く、亡者の手たる触手達。

そのまま、各々が手探りで掴み所を捜し当て、巻き付き、本体を引き揚げ始める。

１５０メートルもある肉の船が、海から這い上がろうとしている。

ただ己の欲を満たすためだけに。
橋の上にいる、己より大きく肥えた獲物を喰らうために。

――――言語道断。

破壊者（ジャガーノート）は、それを許さなかった。

いまや怪物の鼻面となった船首に、黒い穴が二つ開いた。
その穴が爆発する。
船首部分の肉が粗挽きとなって、海に落ちる。撒き餌にしては盛大な量だった。
鼻を撒き餌にされた船が叫ぶ。全力で泣き喚く姿は赤子のようだ。
それでも触手を橋から離さないのは、欲望にまみれた執念の賜物か。
橋の縁に立ち、見下ろした先の化物のしぶとさに、苦虫を噛み潰す者が一人。
両腕を巨大な砲身に具現化武装したカルディエだった。
「これで落ちないデスか……」
下方に向けられた二つの８８ｍｍ砲（アハト・アハト）が、さらなる火薬の怒号を轟かせる。
フェコンダシオンの体に穴が空き、またもや肉が弾け飛んだ。
カルディエの身の丈を遥かに超える長大な砲身は、タングステン芯の特殊徹甲弾を高速で撃ち出すためのものだ。その威力は、１キロ半先の１００ミリ鋼板を貫く。反動が強すぎて、重力制御を行えるカルディエですら、不安定な足場では使用できないほどだ。
貫通力ならば電子投射砲（レールガン）が勝るが、撃ち出す弾体の重量が桁違いだ。巨体を押し返すには、この８８ｍｍ（アハト・アハト）砲の方が効果的である。
ましてや、それを二門。至近距離で食らえば、いかな複種擬装構成体（カチナ・ドール）であっても、押し返せると思っていたのだが、カルディエの予測に反し、砲撃を受けながらも落ちる気配はない。

「こいつ、この……化物ぉ！」

四度目の砲撃。

四散し、跳ねた肉の塊が、カルディエの足元にぼとぼとと落ちてきた。

それに紅い瞳が釘付けとなる。

先ほどまで一欠けらすら橋上に届かなかった肉片が、山のように届く――理由は単純明快だ。

落ちるどころか、砲撃を食らいながらよじ登ってきているのだ。

あまりの耐久性にカルディエが舌を巻き、身を震わせる。

この隙を待っていたのだとしたら、フェコンダシオンは一級の策士だろう。

カルディエの補助電脳が主電脳に警告を発する。

警告の緊急度は最上級。

カルディエが即座に身をかがめた。刹那、彼女の頭上を左右から飛来した触手が掠めていく。

触手の先端に生えた巨大な杭が、互いにぶつかり合って弾け飛んだ。巻き込まれたツインテールが、わずかにちぎれて風に舞う。

間一髪と肝を冷やすカルディエ。しかし、警告は終わっていなかった。

「！？」

三本目の触手は真正面から。速い。屈んだ姿勢では避けられない。

杭が金属にめり込む音が響く。嵐の中ですら明瞭な金属の金切り音は、その一撃の強さを物語っていた。

当り所によっては致命傷の一撃だ。

だが杭が突き刺さったのは、左の８８ｍｍ砲（アハト・アハト）であった。寸前のところで盾代わりにしたのだ。

杭の先端がカルディエの鼻にかすかに触れていた。間一髪の次は皮一枚。生きた心地がしない。

次の瞬間だ。

砲身に突き刺さった杭が、力任せにカルディエを持ち上げ、上に

向けて振り回した。
対処が遅れる。重力制御が間に合わない。砲身から杭が抜け、夜の闇にカルディエは放り出された。
このまま海に落ちるのなら、『まし』だ。例えそれが嵐の海であっても。
投げられた先にて構えるのは、橋をほぼ登り切った怪物の、大きく開いた乱杭歯の密集地帯。
四本の舌と暗黒が待ち構える、咀嚼の地獄。
回避と主電脳が叫ぶ。不可能と補助電脳が返す。
――――食われる！
そう思う間もなく、大顎門（おおあぎと）がカルディエに食らいついた。
爆音と火花が散り、金属質の雷鳴が、乱杭歯の狭間から鳴り響く。
フェコンダシオンは、口の中の獲物をろくに噛み砕きもせず、嚥下した。下品なあい気は歓喜の発露。してやったりと、船の口が歪む。
「やったなぁ！」
海面に落ちながら叫ぶカルディエ。
落ちる軌跡に銀の筋が描かれる。カルディエの体から流れ出る、混合循環触媒が描いたものだ。
カルディエは損傷していた。二門あった砲身が、今は右の一門しかない。左手を具現化武装した砲身は、肩口から完全に失われていた。
空中で砲撃を行い、その反動を利用して捕食からの回避を試みたのだが、全身無傷で、というわけにはいかなかった。逃げそこなった左腕部分が丸ごと食いちぎられたのだ。
だが、左腕だけですんだと考えるべきかもしれない。
――――まだ右腕がある。なら、戦える！
自由落下に身を任せる中、戦意を再構築。破壊者（ジャガーノート）が負けるわけにはいかないのだ。
肉の船の真横を落ちながら、そのおぞましい姿を横目に見る。怪

物の体は、まだ半分以上が海の上だ。時間はある。
すぐに視線を下に戻す。見る間に近づく荒れた海。カルディエは態勢を整えるための行動に移った。
右手の具現化武装を解除。銀色の混合循環触媒が漏れる左の肩口を押さえ、組織閉鎖。これで混合循環触媒の流出を抑える。並行して、両脚を具現化武装し、ホバリングを開始。落下の速度を殺していく。自身は姿勢制御に専念し、補助電脳には、状況の把握と敵性体の攻性干渉に対する観測を命じていた。
海面に衝突する手前で、脚部のノズルから最大出力の噴射。海面が空気の塊にえぐられ、カルディエを中心に小刻みな波の輪を描く。
落下の勢いを殺し切り、無事に着水。
そこへ衝撃が降ってきた。
「!?」
視界が一瞬で気泡だらけの黒い海中となった。
何が起きたのか。カルディエが補助電脳に問いかける。
補助電脳から流れ込んでくる警告文の量は、見たこともないほどだった。
被害の中心は背面部。そこに『何か』が掠め、背面の装甲板の八割方を吹き飛ばし、内部まで致命的な損傷を与えたらしい。あまりの威力に、カルディエは海中に沈められてしまったのだ。
海中でもがく合間も、次から次に、損傷箇所と損傷率が主電脳に流れ込んでくる。各部の損傷率はどこもかしこも危険領域に到達しており、補助電脳二基は揃いも揃って退避勧告を提示してくるではないか。
主電脳権限により勧告を無視し、攻撃の種別を分析せよと命じる。
触手ではないことは分かっている。触手の何百倍も速い飛翔体が飛んできたからこそ、カルディエは反応できなかったのだ。
分析結果は即座に算出された。受けた衝撃の強さと、衝撃を与えてきた物体の種類から、判別は容易だったらしい。
カルディエが海中で泡を吐き出した。分析結果に驚いたのだ。

カルディエは、複種擬装構成体（カチナ・ドール）の恐ろしさを、今更ながら思い知らされた。

フェコンダシオンが笑う。

船首近くに生えた一本の触手から、もうもうと黒い煙を上げて、くつくつと笑う。

触手の先端は、金属の杭ではなかった。それはカルディエの武器である８８ｍｍ砲（アハト・アハト）そのものであった。

奪い取った武器で持ち主を貫く快感は、雌を下から貫く快感に勝るとも劣らない。あまりの快感に船底から生えた生殖器を怒張させ、笑いながら、おびただしい量の精液を射精している。

下品な笑いと、下品な態度。

こんな笑われ方をされて、大人しく引き下るジャガーノートはいない。

カルディエの沈んだ海面が盛り上がり、飛沫が爆ぜた。

爆ぜた海から生まれしは、満身創痍の戦乙女。

海上に飛び出したカルディエは、ホバーを巧みに操り、海面を滑り始めた。

波のうねりに乗り、出せる限りの速度で大きく間合いを取る。幸い、追撃はない。しかし、間合いを取ったはいいが、どう攻めるか考えあぐねる。

ダンス・マカブルは使えない。前回の使用から、あれだけ巨大な相手を消滅させるだけのエネルギーが、まだ蓄積できていないからだ。

何とかして通常兵器で押し切るつもりでいたが、今や作戦は大幅な変更を余儀なくされてしまった。

アトラク並の巨体、無限とも思える耐久性能、無数の触手。接近戦は完全に向こうに分がある。

ならば、遠距離戦しかない。８８ｍｍ（アハト・アハト）砲が奪われたとは言え、一

門のみ。遠距離兵器ならば、まだカルディエには電子投射砲（レールガン）がある。
顔を濡らす雨を舐め、カルディエは橋に取り付く化物を睨んだ。
一キロ程の距離があるが、ジャガーノートにとっては目鼻の距離に等しい。化物の姿がよく見える。
奴は着々と、橋の上に身を引き上げていた。もう前半分以上が橋の上に乗っている。残すは、だらりと垂れ下がった後部のみ。
あの巨体が全て橋の上にたどり着いた時、カルディエの大切な者たちが、この上ない恐怖を味わうことになる。
「……させるかぁ！！」
カルディエが叫んだ。雷鳴と風音が、彼女の気迫に加勢した。
残された右手を前に突き出す。
破壊の意思を可視化する紫電の蛇。肩から指先まで電気の蛇が走る。
刹那、カルディエの眉間に深い縦しわが刻まれた。
紫電の動きがおかしい。具現化が上手くいかない。構成要素の分解はすぐに終わったが、再構築に時間がかかり過ぎている。
補助電脳へ分析を命令。こちらも反応が鈍い。
ようやく返ってきた回答に、カルディエは舌を打った。
『背面部に受けた攻撃により、装甲及び胸部骨格変形、胸部内蔵の具現化機構に回復不可能の損傷あり。再構築アルゴリズムの適用不可能』
「もう！」
苛立ちを吐き捨て、首を左右に振る。
いつもなら一秒で終わる変形に二十秒もかけ、ようやく電子投射砲（レールガン）が完成した。これほど長い二十秒があることを、カルディエは初めて知った。
時間はかかったが、具現化は完了した。反撃の開始だ。
電子投射砲（レールガン）に弾体を装填し、電力を供給する。弾体は通常弾。報復塔を一度は完膚無きまで破壊した特殊弾は、弾切れしている。あれがあればと思うも、贅沢は言えない。通常弾でも、破壊力は充分

だ。

波に揺さぶられる中、彼女は慎重に狙いをつけた。

そこで、彼女は止まってしまった。引き金も引けず、せっかく狙いをつけた銃口も下がり、ただただ、荒れた海の上で呆然とする。

カルディエは絶望していた。

事ここに至って、悟る。『おおあぎとのうた』とは、あの悪魔の笑い声ではないのかと。

稲光の中に浮かんだ悪魔の姿。数十という触手を揺らめかせ、その先端を全てカルディエに向けている。

触手には、カルディエにとって見覚えのあるものが、備わっていた。一つ残らず、全ての触手に。

「８８ｍｍ砲（アハト・アハト）……」

乾いた声が波間に落ちて、消える。

何十倍にも増えた『己の一部だったもの』に狙いを付けられ、カルディエは愕然とした。圧倒的な戦力差を見せつけられ、彼女は複（カ）種擬装構成体（チナ・ドール）の二つ名の意味を知った。

這い寄る混沌――――文字通り、あれは混沌そのもの。

「増やせるなんて……聞いてないデス」

事実を否定すべく首を横に振る。

そこに事実の肯定が飛んで来た。何十発という徹甲弾だ。

カルディエの遠くに近くに、高々と水柱が上がる。直撃はしなかったが、大量の海水がカルディエに降り注ぎ、彼女の姿勢を大きく崩した。

「……！」

カルディエは濡れた顔に恐怖の色を浮かべていた。

そこに、再び徹甲弾の群れが襲いかかる。先程より近い位置に着弾。足元の水が爆ぜて、カルディエは海に倒れこんでしまった。慌てて海面に飛び出し、全速で走りだす。

まるで散弾だ。狙いなどつけていないが、あれだけの数の砲撃ならば、そもそも狙いなど必要ない。デタラメに撃てば、いつかは当

たる。
「こんなの、無茶苦茶だよ！　ありえないよ！」
海水と雨に濡れた顔は、苦渋に歪んでいた。
ここまで戦いにならないとは。
だが、諦めるわけにはいかない。それだけは選択肢の中に入っていない。
――どうしたらいい！？　考える、考えるデス、カルディエ！
諦めるな、負けるな！
自信を叱咤しながら、彼女は波を遮蔽物代わりに身を隠し、ジグザグに移動していた。被弾率を少しでも下げるためだ。あの武器の威力は知っている。一発でも直撃すれば、甚大なダメージを被ることになる。
「射程外まで逃げる……ダメ、こっちの攻撃も効果が薄くなる……どうしたら……」
アトラクに一度戻る案も浮かんだが、その間にフェコンダシオンは確実に登り切る。仮にアトラクの移動速度より、奴の移動速度が優っていた場合、どうなるかは火を見るより明らかだ。
アトラクを捨てて逃げることは、そもそもできない。アトラクを失えば、ヴァニタスは生きていけない。この世界は、それ程に過酷だ。アトラクからエネルギーを補給するジャガーノートも同様の運命だろう。
ならば、選べる道は一つしかない。
電子投射砲（レールガン）の砲身を額に当て、一瞬だけ目を閉じ、カルディエはボソリと呟いた。
「どうか、救いを……」
機械の乙女が祈るのは、一体どんな神に対してなのか。
砲身に祈りを込め、カルディエは再び銃口を目標に向けた。
電磁の銃弾が怪物の体をえぐりとった。

意味のない行為だと言いたいのだろうか。悪魔が哄笑する。
特殊徹甲弾の雨。破壊者すら飲み込み砕く、残虐の調べ。
電子投射砲（レールガン）の一撃を受けるものは、圧倒的体力で攻撃を気にもとめず、数十の巨砲に狙われるものは、一撃受ければ終わりという恐怖と戦わなければならない。
この不平等を嘆く暇は、カルディエにはなかった。
近場に着弾した飛沫がボロボロのコートを濡らす。次第に着弾の距離が縮まっている。狙いが正確になってきているのだ。怪物は、奪った武器を使いこなし始めていた。
対し、カルディエの動きは鈍る一方だった。
波に乗るのが辛い。顔に当たる雨が辛い。背中から広がっている損傷が、回避行動を鈍らせる。針の穴も通す射撃能力は見る影もない。必死に撃っても、もう巨大な的に掠めることすら出来ないではないか。
戦況は著しく劣勢。勝てる見込みは、時と共に失われていく。
だが、それでも。
――それでも、負けられないんだ！
ヴァニタスの顔が浮かぶ。ローレライの、シレーヌの顔が浮かぶ。
夜空の下で、ヴァニタスが言ってくれた言葉が、電脳の深いところで蘇る。
『君を守らせて』と。
悪魔が、その全てを喰らった。

最初に吹き飛んだのは、武器化していた右腕だった。
音が消えていた。足から伝わるはずの波の動きも感じなかった。
世界が驚くほど遅くなる。粉々になった砲身が、目の前で、でたらめに舞っている。
砕けた自身の右腕が敗北の証なんだと、彼女はどこか悟った心持ちで眺めていた。
――こんなところで……？　終わるの……？

カルディエは武器を失った。悪魔を倒す術は、もう彼女の手の中にはなかった。

では、悪魔が無力と化した彼女に、情けをかけるだろうか。

断じて、否である。

嵐の雨すら生ぬるい、徹甲弾の豪雨が襲いかかる。

左側頭部を掠めた一撃が補助電脳の一つを破壊した。緑の髪が頭部のパーツごと吹き飛ばされ、海に消えた。脇腹をえぐった一撃は、彼女の稼動機構を半停止状態に陥らせる。肩に当たった砲弾により、カルディエは著しくバランスを失い、動きを止めた。

そこに、また鉄の雨。左脚部が破壊されるが、残った右のホバーだけで海上にとどまる。しかしこれは、補助電脳の姿勢制御によるものであった。

もはや勝負は決したも同然だが、嗜虐なるフェコンダシオンの攻撃は止まらない。何度も、何度も、海上にたたずむ機械人形に鉄の塊を撃ち出す。

彼にとって、これは強姦だった。自分が満足いくまで、相手のことなど知った事ではない。撃ち出し続けるだけだ。それが気持いいのだから。

緑の髪が波間に散った。コートの切れ端も、ハンティング帽子の残骸も、跡を追うように。

装甲も武器も破壊され、無力な鉄屑にされたカルディエは、海に倒れ込みながら、贖罪の橋（ポン・デュ・ガール）を見つめ、己の弱さを嘆いた。

紅い瞳から、銀色の涙が流れている。

「ごめんね……守れなくて……」

一際大きな波が、別れの言葉と共に、彼女を飲み込んだ。

第三章　６４８－１９７０　『飲み込み砕くもの』

アトラクは、カルディエと異形の船の決闘場から、だいぶ離れた所で待機していた。

その中で、ヴァニタスが一人、ひたすらに気を揉んでいる。

シレーヌを椅子に座らせ、彼は落ち着きなく管理室内をうろついていた。

ヴァニタスの動揺も、もっともなことだった。

カルディエの相手は、恐らく肥えに肥えた複種擬装構成体（カチナ・ドール）の成体だ。嫌な予感しかしない。

何かできないかと考えるも、建築機械と技術屋にできることはなにもないと、自らに思い知らされるばかりだった。

無事であってくれと呟く表情は、泣き顔の手前である。

そこへ、遠慮のないアラートが飛び込んでくる。

ヴァニタスが鬼気迫る表情でコンソールに飛びつき、アラームの内容を画面に出力する。毛を逆立て画面を凝視する様は、獲物を狙う猫の姿だ。

ところが警告内容は、彼の予想に反して他愛のないものだった。

「居住区の外部直通非常扉の開放？　……あれは、内側からしか開けられ……」

全て口に出す前に、口が動かなくなる。

アトラクの中にいるのは、自分と、シレーヌ、そして自室で寝ているはずの――――

「まさか！？」

警告の原因に思い当たり、慌てて管理室から駆け出そうとする。

と、彼の猫耳にうめき声が飛び込んできた。

反射的にシレーヌへ振り向く。

彼女は苦悶の表情で身をよじっていた。胸を押さえ、全身の筋肉を硬直させている。口の端から泡まで吹いているではないか。

事態を飲み込めないヴァニタスだが、しかし彼女が危険な状態に陥っていることは推測できる。駆け寄り、シレーヌを床に寝かせると、彼は脈を測り、患者の容態を冷静に観察した。

「呼吸が浅く早い……体温も下がっているし、脈も乱れている……」

そう言うと、ヴァニタスは口を一文字に結んだ。

――なんらかのショック症状、恐らくは、薬物による急性中毒。何かを投与された？　誰に、いつ……？

分からない点も多いが、症状の原因そのものに関しては、ある程度目星がつく。

ヴァニタスは、シレーヌを背負うと、フラフラとした足取りで医療室を目指した。背も低く痩せた体の少年には、成人女性のアプカルルは、少々重い。息を切らせながら、一歩一歩、足を進める。

医療室にたどり着く頃には、心臓の音が耳の奥で暴れていた。それを鎮めている時間はないと、彼はシレーヌを丁寧にベッドに寝かせ、薬瓶と注射器を棚から取り出し、応急的な解毒剤の投与を行った。

症状がやや落ち着く。後は血液検査を行い、中毒症状を起こしている化学物質を特定し、それに対応した治療を行えば、シレーヌを救うことはできるだろう。

症状が落ち着いたとは言え、完治には程遠い。ベッドの上のシレーヌは、まだ苦しげに呻いていた。

彼女の美しい深緑の瞳にあるのは、恐怖、苦痛、悲哀。何かをうわ言のように呟いているが、アプカルルの言葉はヴァニタスには分からない。ヘッドセットの翻訳機能を使えばいいのだが、あいにく管理室に忘れてきてしまった。

しかし、彼女が不安にさいなまれていることだけはわかった。

不安なのは、ヴァニタスも同じだった。

カルディエのこと。ローレライのこと。不安の種は山のようにある。しかし、今はシレーヌを救うことが自分のすべきことだと、彼は確信していた。

目の前で苦しみ、助けを乞う者がいたら、出来る限り助ける。カルディエが、そう教えてくれたではないか。言葉ではなく……生き様で。

だから、ヴァニタスは、シレーヌの髪をそっと撫でて優しく微笑んだ。

「大丈夫。必ず治してあげる。だから、安心して」

通じないとわかっているが、ヴァニタスは出来る限り穏やかな声色で、そう告げた。

しかし、思いが伝わったのだろうか。

シレーヌの表情から、不安の色が少しだけ消えた。

ヴァニタスは、心から嬉しそうに微笑んだ。通じたことに安堵し、そして、彼女の不安を和らげることができたことが、なにより嬉しくて。

シレーヌは、目の前で微笑む少年に、不思議な感情を抱いていた。自分たちとは違う、体毛に覆われた異形の姿。鱗もヒレもエラも見当たらない、奇妙な人。巨大な鉄に住み、鉄の乙女と会話する、不気味な存在。

でも、とても温かい瞳をしている。とても聞き心地のいい声をしている。

撫でられた髪に残る感触が、薬以上に、苦しみを和らげてくれる。苦痛にかき乱される体。しかし、そんな状態でもはっきりと感じ取れるこの感情。

それが何か理解する前に、彼女の心は、昏睡の深海へと導かれていってしまった。

フェコンダシオンは、自分の力に酔いしれていた。

圧倒的な火力。圧倒的な耐久力。加えて、食らったものを自分のものとするこの能力。

無敵。恐れるものなど何もない。世界の全てを蹂躙し、男を喰らい、女を孕ませる。それが自分の使命だと疑いもしない。自信と実力が、ぶよぶよと蠕動する肉の内側に満ちている。

しかし、何かが満たされない。

橋をよじ登りながら、それが何なのか、彼は思案していた。しかし、答えに辿り着けない。苛立ちが募る。

膨れ上がった苛立ちを抱えたまま、遂に全身が橋を登り切る直前のことだった。

元ブリッジのアンテナに雷撃が落ちる。多少アンテナが焦げた程度でダメージなどないが、心地好い刺激にはなった。物足りないぐらいだと思った。

そこで、全ての触手が動きを止めた。

苛立ちの元に気づいたのだ。

「足りない……」

口を大きく開け、悪臭にまみれた吐息を漏らす。

「あああ。足り。てない。足り。て。足り足り足りぃぃぃぃぃぃぃぃ！！　なあああああああい！！」

そう。足りないのだ。

カルディエを嬲り足りないのだ。

あの小癪な機械の少女を、あまりに簡単に葬り去ってしまったことが、この悪魔の心に穴を開けていた。

穴はとても小さい。だが、彼にはその穴が無視できなかった。何のために橋に登ったのか忘れかけるほど、その穴は彼の心を支配してしまったのだ。

肉の船は、せっかく登り切った橋から飛び降りた。

大質量の突入を受け、海に大波が生じる。嵐が生んだ波より、更に高く、荒々しい。

「足りない足りない！　足りない！　犯し嬲り虐め殺し喰い！　足りないいいいいい！」

喰い応えのありそうなアトラクより、さらにフェコンダシオンの

心を魅了するもの。それがカルディエだった。彼は、そのことを思い出したのだ。ある種の恋に近いのかもしれない。

めくれ上がった皮膚と崩れた船首から、おびただしい血を流し、海を赤く染めながら、異形の船が漕ぎ出す。

目指すは愛しい人が待つ場所。彼には、それがどこにいるか直ぐにわかった。数十という触手の先端に作り出した無数の眼球にかかれば、比較的容易なことだった。

カルディエは、波間に浮いていた。水没を防ぐための非常用浮き袋（エマージェンシー・フローター）が作動して、彼女を浮かせているのだ。

両腕と左脚を失い、残された部位もひどく損傷している。装甲はほとんど失われ、複雑な内部構造もむきだしだ。穴の開いた箇所から、銀色の液体が海に流れ続けている。

意識はないか、あっても昏睡に近い。捕らえられれば、抵抗など出来ないまま、フェコンダシオンの慰み者になるだろう。

沈まなかったことが、かえって悪魔に身を差し出す不運を招くとは、皮肉である。

意気揚々と、フェコンダシオンが触手をうねらせ、嵐の中を突き進む。

獲物は逃げない。慌てる必要もない。轟く雷鳴が、自分を祝っているようだと、彼は感じていた。

それにしても、いつになったら尽きるのか、今夜は酷く雷が多い。また一つ、海の上で電光の竜が雲間を走りぬけたときだった。

触手の一つが、うねることを止めた。連鎖反応のように、他の触手も、次々と。

凝視しているのだ。触手の先の目玉で、カルディエを。

「お、ぎ……おご？」

フェコンダシオンが呻く。

妙なものを見つけてしまった。愛しい機械の人形に、何かが取り付いている。

理解が遅れる。

どうして、それが、そんなところにいて、そんなことをしようとしているのか。

弱く、小さい、今となっては餌にもならない、脆弱な種族――――アプカルルが、愛しい機械を泳ぎ引いて、どこかへ連れ去ろうとしている。

それは、彼にとって最大級の重罪であった。

フェコンダシオンの狂気が破裂した。

「おぎゃあああああああ！！」

激昂の絶叫。口を大きく開けすぎて、頬の肉がぶちぶちと裂ける。

「返せ返せ返返えええええ！そ人形わたわたくしたち我々ものあぎゃあああああ！！」

怒りでまともに喋れていない。

噴出する怒りを燃料に、触手もアプカルルの手もスクリューも使った、後先を考えない全力の追走を開始する。

必死にカルディエを引くアプカルル――――ローレライが、恐怖に顔を引きつらせた。

全身をひどく戦慄（わなな）かせているため、泳ぐこともろくに出来ていない。

カルディエを捨て置けば、今なら単独での逃走は可能だ。

生き残るための選択が頭をよぎる。ローレライは、唇を噛み締めて、それを振り払った。

何があっても一人で逃げるわけにはいかない。見捨てることはできない。

ずっと世界の残酷に虐げられてきたローレライを、カルディエは救い出してくれたのだから。

「おねえちゃん、あたし、たすけてくれたもん……まもってくれたもん……ひとりぼっちだったあたしに、おいしいごはん、いっぱいつくってくれて……また、たべたいよ……もっと、いっしょにいたいよ……しんじゃやだよお……」

波をかぶり、風に煽られながらも、幼子は思いのたけを語った。

泣きながら、恐怖に怯えながら、ひたむきにカルディエを救おうとしていた。

少しでも『おおあぎと』から離れようと、幼き体が出せる精一杯の力で、懸命に。

「うぎゃあああ！　かえせえええええ！！」

悪魔が二人に迫る。数百の触手が届く距離まで、もう３００メートルもない。

距離は二人の命の残量そのもの。これがゼロになった瞬間、二人の少女は、この世から消え失せることになる。

しかし。

命の残量は、それ以上減ることはなかった。

「あが！？」

船が止まる。自分で停止したわけではない。そもそも、４０ノットもの速度で海上を進む船が、どうやったらほとんど制動距離もなく止まれるのか。

「な。これ。なに。なにがなにがなにがあ！？」

事態を飲み込めないフェコンダシオンが、８８ｍｍ（アハト・アハト）砲を乱射する。

射撃の先は、己の真下、海の中。そこに何かがいて、彼の動きを止めたのだろうか。

しかし、効果はなかったようだ。フェコンダシオンの船体が、船尾から一気に海中に引きずりこまれたではないか。

そして、海が異様な動きを見せる。

フェコンダシオンの周囲だけ、波が消えたのだ。

風も雨も止んではいない。事実、ローレライとカルディエのいる海は、いまだ大波のままだ。

「きた……おおあぎと……」

ローレライが、異形の船を見詰めながら呟く。

波の静まった海に柱が立つ。先端が鋭利に尖った、水で出来た柱

である。
フェコンダシオンの周囲に乱立する柱は、ローレライとカルディエの少し手前まで突き立ち――それ以上は生えなかった。
間に合ったと、ローレライが震える声で囁いた。
「ひいいい！？　うご。うごか。う。ごか。な。いいいい！　なんで。なんでええ！！」
いかなる原理か。何がこの海に起きているのか。
もがくフェコンダシオンの周囲の海面が、ゆっくりと持ち上がっていく。
重力に逆らって四枚の壁となった海面は、花弁を閉じる花のように、フェコンダシオンめがけて覆いかぶさり始めた。
誰もが、この光景からあることを連想するはずだ。
まるで、大きな顎門（あぎと）が餌を喰らっている様だと。
「やだやだやだやだ！　たすけてたすけてたすけて！」
触手をでたらめに振り回し、もがく肉の船。だが、逃げることはできない。さらに深く海の中に引きずり込まれる。蛇に飲まれる蛙が、どうやったら逃げ出せるというのか。
哀れな姿だった。カルディエに目が眩まなければ、こんな目に遭うこともなかった。アトラクを追っていれば、今頃は腹を満たし、この驚異からも逃れられたはずだった。
なんのことはない。フェコンダシオンは負けたのだ。
浅ましい己の欲そのものに。
「いだい、いだい、いだいいいいい！　痛いいいいいいいいい！！　くそ、くそおおおおおおお！！」
泣き叫びながら、一本の触手をしぶとく伸ばす。目指すは、先ほどまで獲物だった二人の少女。
この期に及んで道連れを欲するか。
ローレライが悲鳴を上げ、カルディエに身を寄せた。触手に捕まれば終わりだ。
反射的に目をつぶる。

――たすけて！　おにいちゃん！
まぶたの裏に浮かんだのはヴァニタスの姿。幼きアプカルルの拠り所。
その思いが通じたのか。
触手が、二人の目の前で動きを止めた。
それどころか、次第に触手が引き戻されていく。
目を開いていれば、ローレライは自分たちが助かった理由を知ることが出来ただろう。だが、それを彼女が知ることは永遠になかった。
無様に暴れる触手も、『おおあぎと』の中へと飲み込まれていった。
同時に、半径４００メートルはある海の顎門（あぎと）が完全に閉じる。
「あぎゃあああああ！！　が、ぎげ、ごおぁあああああああ！！」
悪魔の悲鳴と、肉と金属の咀嚼音が、黒い海の捕食口から漏れてくる。あの中で、どのように獲物が食われているのか。海に立つ巨大な蕾のような『おおあぎと』は、凄惨な音を響かせているにも関わらず、身震い程度に動く様子すら見せない。
次第に咀嚼音が消えていく。愚かな肉の悲鳴も、また。
恐る恐る、ローレライが目を開いた。
もはや、何の音も発しないまま、ただそそりたつだけの『おおあぎと』が、そこにいた。
昔に一度だけ見た姿形と、寸分たがわない。あの時と変わらない、心も情もない、無機質な恐怖をローレライに叩きつけてくる。
ローレライはうつむいた。うつむいて、教わった言葉を思い出していた。
『おおあぎとのうた』を海が歌い始めたら、必ずそこから逃げなくてはならない。どんなものも、おおあぎとに食われれば、藻屑も残さず消えうせる――
だからローレライは、それを知らずに魔物と戦うカルディエを助けに来たのだ。

恐怖に耐えながら、たった一人で。
ローレライが雨降る夜空を見上げた。
「うた、おわった……」
と、胸を撫でおろす。
彼女の言葉は事実であった。
おおあぎとの周囲に波が戻り始める。
それにつられるように、雨と風が弱まる。雷鳴は遠く、雲が輝く頻度も減り始める。
海の捕食口が花開き始めた。閉じる時と同じように、のろのろと。
開ききったおおあぎとは、原罪の海に混ざると、いつも通りの黒き海へと戻ってしまった。
もうそこには、おおあぎとの気配も、フェコンダシオンの一細胞すらも、残ってはいなかった。
複種擬装構成体（カチナ・ドール）は、原罪の海へと還元されたのだ。
ローレライが、ふと顔を上げた。
同胞の言葉が聞こえた――気がする。どこかに仲間がいるのかと思い、辺りを見回すが、そんな気配はない。
「だれ……？」
返事はない。それでもローレライは、誰かがなにかを語りかけてきたのだと確信していた。
「……ありがとう」
どうしてその言葉が出たのかは、ローレライには分からなかった。
それでも、言わなければならないと幼子は思った。
彼女はカルディエを抱き寄せると、橋を目指し、泳ぎ始めた。
おっかなびっくり――ぐすぐすと、涙を流しながら。

魂は、あるのかも知れない。
あの時、フェコンダシオンの体から生えた百以上ものアプカルルの腕が、二人に襲いかかる触手を根元から掴み、引き寄せたのだ。

取り込まれたはずのアプカルル達に、果たして意識が戻ったのか。
それとも混乱したフェコンダシオンが、自滅しただけなのか。
それとも――――なにか、別の理由があったのか。
その答えは、海のあぎとの中に消えて、永遠に失われてしまった。
おおあぎとのうたが、終わると共に。

ERROR－ERROR　『ERROR』

光はない。
音もない。
上下の向きも左右の定義も曖昧な、拠り所となる確かなものが一切ない世界。
その者は、そこにいた。
無音の闇の中に、静かにうずくまっている。
動く気配はない。だが死んでいるわけではない。
闇の中でただ一人、その者は終わりなき思考を繰り返していた。
初めて闇に己を認識してから、気の遠くなるような時間が過ぎていた。両目で見えない世界を見つめながら、ほぼ全ての時間を、たった二つの思考に費やしてきたのだ。
二つの思考。すなわち『自分は何者か』『何のためにここにいるのか』
永遠に繰り返される自問自答。並大抵の者なら容易に発狂するほど、長く、孤独な一人旅だ。
不快な時間の連続であった。
不毛で、もどかしく、意義の見い出せない日々。
あまりに不快だったので、逃げだそうと思ったこともある。
だが、それは意味のないことだと、この闇に閉じ込められて直ぐに思い知らされた。
ここには「ここ」しかない。どこに逃げようが、いくら逃げようが、境界のない無限の世界が広がるばかり。
無限に広がる空虚な世界とは、言わば、身動きの一切取れない牢獄と同義であった。
では、ここが牢獄ならば、獄卒がいてしかるべきであろう。
混沌の濁流が周囲に渦巻き、何かを象る。
言うなれば、巨大な口にして巨大な目のようなもの。単一であり

ながら、出力（アウトプット）と入力（インプット）を同時に行うもの。これこそが、この闇の獄卒。
そいつは、たまさか現れて、難問に挑戦する出来の悪い生徒に、進行の度合いを尋ねる。獄卒がそれ以上の意味を持っているかどうかは、その者には知ることの出来ない疑問だった。
その者は、見えない姿に視線を向けた。見えないが、そこにいることはわかっている。
何万回と繰り返された問答が始まる。
「どうしてここに？」
――思い出せない。
「いつからここに？」
――思い出せない。
「なぜ、思い出せない？」
――思い出せない。
ある一つを除いて、自分を形作るための記号をその者は失っていた。
失った――果たして、それは正しいのだろうか。
初めから、何も持っていなかったのではないだろうか。だから思いだそうにも、思い出せないのではないだろうか。
だが、その帰結を受け入れることは、自身の情報の希薄化に他ならない。己が薄れて闇に消え失せることだけは、何があっても回避しなければならなかった。
例え、真実を否定してでも。
だから、その者は今日も思考をやめない。
その者は、闇に向けた視線に僅かの熱を込めた。
熱を受けた闇の質問者が、いつも通りの最終質問を投げかける。
「お前の名前は？」
その者は顔を伏せた。
名前など覚えていない。
だが、自分がなんと呼ばれているかは、知っている。
『あいつ』は、その名を呼びながら、自分を追い立ててくるのだか

ら。

その者は、顔を上げて闇に答えた。

――電気羊。

電気羊は、どこまでも続く闇に、たった一つの己の証を示した――

――

第四章　６４８－１９７８　『死者の目覚め』

贖罪の橋（ポン・デュ・ガール）は、作りかけの先端を曇天の下に晒していた。
その長き身に当たるのは、潮の匂いをまとった強い海風。
冷光灯や柵、橋の凹凸に当たった潮風は、複雑な渦を巻く。渦は音を生み出し、それは歌となる。
孤独な橋はカルマン渦の嘆きを謡（うた）い、酔いしれていた。
聞くものは、周りに突き立つ壊れかけの機甲塔達。拍手も愛想も返さない、ただ見、ただ聞きのしけた客だ。
『海に突っ立って呆けるだけの、教養のないものどもには、この孤高の嘆きは分からぬか』
橋が意思を持っていたなら、皮肉混じりにそう呟いただろうか。
ならば、機甲塔達も負けてはいないはずだ。
『作りかけの半端者が、なにを偉そうにほざきやがる。音の外れた歌なぞ聞かされて、文句を言いたいのはこっちのほうだ』
恐らくは、このような罵声を、己に当たって砕け散る波飛沫に乗せて、ぶつぶつと言い返しているのだろう。
海風は、両者の愚かなやり取りに呆れて肩をすくめ、のん気な雲が、我関せずと悠々自適に流されていく――――
万物には霊魂が宿る――――アミニズムと呼ばれる思想を持った詩人であれば、この荒涼とした光景から、こんな童話めいた空想を描くかもしれない。
ならば自分は詩人かと、皮肉混じりに『彼』は自嘲した。
――――まったく、いまだに癖が抜け切らぬか……
橋の先端に立つ『彼』は、重厚な装甲に見え隠れする金属の顎をかみ合わせ、腹から湧き上がる笑いを押し戻した。
笑いを堪えたのは、眼窩のない髑髏（どくろ）のような頭部を持つ巨人だった。身の丈は軽く２メートルを超えているだろう。黒く太く重い巨躯は、分厚い積層装甲と、その下にある人工筋繊維の組み合わせに

よって生み出されており、特に巨大な両腕の太さたるや、人の胴体すら凌駕する直径であった。

腕は丸く盛り上がった肩につながり、肩は厚い胴体と連結する。胴体の背面、大きな背中は、筋繊維が作り出す起伏の激しい丘となり、『彼』の重い体を支える役目を担っていた。

その盛り上がった背中に備えられた、一対の筒状の装置は、ほぼ彼の身長に等しい長さで、一見しただけでは、なんのための装置か分からない。しかし、装備している者がこの異様の持ち主だ。尋常ならざる力を秘めた装置であることは、想像に難くない。

全体の印象は機械仕掛けの鬼神（おにがみ）。

鬼神は、大きな指でごりごりと顎を擦りながら、眼前の光景を眺めていた。

「しかし……なにがあったのだ。ここで」

見た目の印象とは裏腹に、理知的な声である。いささかギャップがあると言わざるを得ない。

鬼神は己の前に広がる光景に、畏怖を憶えずにはいられなかった。彼方の空に浮かぶ島。橋と浮島の間に広がる、異常なまでに密集した機甲塔。

そして、機甲塔の密集地帯の只中にぽっかりと開いた、海以外に何もない円形の区域。

鬼神の視線なき視線は、その中心に注がれていた。

「以前に実施したマッピングでは、ここは確か、隙間なく迎撃陣形が張られていたはずだった。俺の記憶に間違いはないか？」

確認するように放った言葉は、彼の陰に隠れていた者への質問だった。

質問を投げられた者が、ひょこりと陰から顔を出す。

出てきたのは、まだ大人になったばかりといった趣の女性だった。背は低くはない。膝まで覆うマントで体型は外から見えないが、顔を見る限り、どちらかと言えば細身の部類に入るかもしれない。やや釣り上がった目を丸型の色眼鏡で隠してはいるが、鼻筋の通っ

た美しい面立ちをした人物である。
だが、美しさを天から与えられた反面、気力は与えられなかったのだろうか。
長い黒髪を弄ぶ指の動きも、口の端にくわえたタバコを適当にふかす仕草も、ふらふらと歩く酔ったような足取りも、どれをとっても、徹底したやる気のなさに満ち溢れている。生きることが億劫だと言わんばかりの惰弱ぶりだ。
その上、薄汚れたマントの下にあるのは、鱗も獣毛もない柔らかな白い肌。ぷつりと突けば、すぐに赤い血の珠が滲み出す、脆く、弱く、非力な肉体。
アプカルルでもない。獣人でもない。かといって、機械仕掛けの人形というわけでもない。
この過酷な世界で生きるのに甚だ適していない体の持ち主は、肩をすくめて短く笑った。
「あんたの記憶素子に異常でもなきゃ、間違うわきゃないっしょ」
「あいにく異常はない」
「じゃあ、そういうことよ」
「どういうことだ」
「あたしらがいるのがー、作りかけで非公式登録化された上に捨てられちゃった、可愛そーな橋。んで、その真っ正面に広がる、今まであったはずの物が消えてる一帯。と、くればー……なんかやったのよぅ。この橋を作ってた『ココペリ』さん達がねー」
くわえたタバコを指に挟み、気の抜けた台詞を、やる気のない平坦な口調で返す。
「ならば、犯人はココペリの守人……ジャガーノートか。だが、ジャガーノートでも、こんなことが可能なのか。半径1キロにも及ぶ範囲の機甲塔を、跡形もなく消すなど、ありえ――」
「次元滑落装置」
機械仕掛けの巨人の言葉を、唐突に女性が遮る。
ぼりぼりと頭を掻いて、彼女は橋の縁に近づくと、周囲の塔を眺

めながら後を続けた。
「消えてる機甲塔の中に、改造された代理犠牲塔もあるはずだったわね。ほら、あたしらが、前、ちょっかい出したときに起動しちゃった、あれよ。あれ。起動状態のあれを、代理対象も含めて丸ごと消せるもんなんて、次元滑落装置以外に思い当たらないもん。ドレッドノートのあんたでも無理でしょー？　ねえ、ロンガゥ」
「無理だな。クァンが言うなら、間違いない」
ロンガゥと呼ばれた巨人が、クァンと呼んだ女性の隣りに並び立ち、腕を組んだ。金属が擦れる不協和音に、クァンが口を曲げてそっぽを向く。
彼女は、吸いかけの煙草を携帯式の灰皿に押し込むと、新たな煙草を取り出し、口にくわえた。
「火」
「ああ」
高慢とも思える一言に、ロンガゥは嫌な素振りも見せず従う。
ロンガゥの右手の人差し指が、煙草の先端に触れた。
それだけで、煙草に火がついたではないか。
クァンが一口目を強く吸う。新鮮な紫煙が肺の隅々にまで行き渡り、甘美な毒が彼女の心に至福をもたらせた。
「ふぃー、ありがと。ま、とは言ったものの、次元滑落装置を持ってるどころか、さらに起動できるようなジャガーノートってのも、おかしな話だけどね……」
「単体では発電量が足りないはずだ」
「あの化け物どももでもね。ざっとジャガーノート十機分。つまり、化け物十匹が合体したお化けでも、いるってことなんじゃないかな」
「複種擬装構成体（カチナ・ドール）か」
「はは、冗談。そんだけのジャガーノート食った複種擬装構成体（カチナ・ドール）がいた日にゃ、世界なんか軽く終わってるはずよ。ここでこうやって呑気に話せてる時点で、その可能性は否定できる」
クァンは、大きく煙を吐き出した。風に運ばれ、霧散していくさ

まを、色眼鏡の奥から眺める。
「ならば……もしかしたら、『コクヤンウーチー』か？」
ロンガゥの問いに、クァンは首を振って否定した。
「それこそ、根も葉もない噂じゃん。あの、くそったれのコウノトリ野郎が広めた……ええと、ツワクァチへの先導者だっけ？　そういう偶像信じるようになったら、お終いだわ。まあ、もう、ある意味お終いなんだけどね」
言い終わってから、大きく紫煙を吸い込み、ため息と共に大気へ吐き出す。
鬱陶しいものを吐くなと、海風が瞬く間に掻き消した。
「この世界が、誰のために用意されたものか……んなの、正直あたしには、どーでもいいことなんだけどね」
「その台詞は聞かなかったことにしておこう。不用意な発言は控えるべきだ」
「あら、脅し？」
「忠告だ。聞かなかったことにすると言っただろう」
「じゃあ、口止め料は体で払わなきゃね」
クァンが笑う。淫魔の微笑だ。
ロンガゥの指が、眉間を小刻みに叩き始めた。甲高い音が小刻みに響く。
「からかうのはよせ。ナイト・ストークに気に入れられて、自棄（やけ）でもおこしてるのか」
「あいつが気に入ってるのは、あたしじゃなくて、あたしの子宮と卵巣。いやねえ、猟奇趣味のド変態って」
「心中、察する」
「他人事みたいに言ってんじゃないわよ、狙われてんのはアンタの弟か妹……の素なのよ？」
「そうだな」
「つれないわねえ。いいわ、じゃあ、あたしに種つけてよ。そうすりゃ、ちょっとは気合入れてあたしの胎（はら）守るって気になるでしょ。

可愛いマイベイビーのためならーって」
「……断る」
「あら、怒った？　怒ったでしょ？　やあだ、もう、こんなので怒んないでよ。ほんとに生真面目なんだから、あたしと違ってー」
自身の台詞に含み笑い、憮然とした雰囲気の鬼神を一瞥する。
ロンガゥが肩を落としてため息を漏らした。
またもや海風がため息を掃除をしていく。
「……とりあえず、ヘクセンナハトに見つかる前に帰還するぞ」
「あいつの反応、ないけど」
「あの浮島の近くで、ここまで大規模な異変が起きたんだ。万が一ということもある。それに、ここは越権領域ではない」
「はいはい、わっかりましたよー……で、この橋のココペリさん達はどうすんの？　やられたんじゃなければ、まだ近くにいるかもしれないわよ」
「近く……」
ロンガゥが首を捻って思案を巡らす。
「ほら、この橋少し戻ったところに、別の橋が伸びてるの見えたじゃない。そっちは調べに行かないの？　万が一次元滑落装置を回収できたら、戦況はころっと変わるわよ」
クァンの質問に、ロンガゥは、しばしの空白をもって答えとした。
「……帰還するぞ」
「はいはい、命令事項にない行動は原則禁止ー！ってね。リョーカイです。タイチョー殿」
慇懃無礼な態度で敬礼し、クァンは意地悪げに肩で笑った。
ロンガゥの指が眉間を押さえている。このまま石膏で模(かたど)れば、悩める巨人像という名の作品が手軽に出来るだろう。
からかわれていることは分かっていたが、ロンガゥはどうにも叱る気になれなかった。
卑猥な冗談を好む質(たち)の悪い性格でも、彼にとってクァンは、腹を痛めて自分を産んでくれた、実の母親なのだから。

踵を返し、橋を戻る巨人の足取りは早い。苛立っているのかも知れない。

してやったりと、跡をついてくるクァン。

その二人の足が止まる。正確には、ロンガゥが止まったのを見てクァンも足を止めたのだ。

「クァン」

「あん？　なに？」

「少し下がっていてくれ。異常体だ」

クァンは知っている。ロンガゥが極めて落ち着いた低い声を出す時、どのような事態が差し迫っているのかを。

きっちり三歩、ロンガゥから後退。そこで腕を組んで、己の生み出した巨人の背を見つめる。

「フォーマルハウト、使う？」

と、クァンが問う。

「フレイム・ヴァンプで充分だろう」

「なんだあ」

拍子抜けと、クァンが肩をすくめた。

橋の上に極大の触腕が叩きつけられたのは、まさにその瞬間だった。

来たりしは橋の下――――海の中から。

触腕の数は三本。驚くほど太い。一番太い箇所の直径は、クァンの身長ほどはあるだろうか。

触腕は、強力な吸盤で橋の表面に吸いつくと筋肉を収縮させ、本体を一気に引き上げた。

橋の上に大質量の生命体が飛び乗る。

まるで山だった。八本の触腕をうねらせ、粘液にまみれた胴体部を脈動させる山だ。胴体の中ほどに備わった三つの目は理性の欠片すらなく、しかし獲物を捕食するための知性に溢れて輝いている。

アトラクほどもあるその生物は、この場でカルディエが一戦交えた軟体類『カナロア』の同族であった。ただし、カルディエが触手

を頂戴した幼体とはケタ違いの巨体だ。
カナロアとロンガゥ達との距離は２００メートル前後。それでも、その巨体の圧力は、見るものに眼前にいるような錯覚さえ起こす。
その圧力を感じていない者が、タバコの煙を盛大に吐き出して、
「おお、でっけー」
と、感嘆の声をあげていた。
ロンガゥが歩みだす。
警戒も何もない。ただまっすぐに、巨大な触腕の範囲に足を踏み入れる。
カナロアは笑ったかも知れない。笑うという行為が彼の中にあるかは定かではないが、少なくとも彼の脳は、これはいい餌だと歓喜に震えた。
気まぐれに登った妙な場所で、小粒だが見たことのない獲物を発見し、彼の食欲は大いに刺激された。
ここまで巨大化した個体にしてみれば、もはや海の中に敵はいない。故に、狩りに際しても警戒など抱くこともなく、暴君らしく獲物を力づくでひねり殺し、喰らうだけだ。
いつもの様に触腕を目標に向かって伸ばす。どんなに固そうな相手でも、巻きつき、締め上げれば、それで狩りは終わる。
触腕がロンガゥの体に巻きついた。
はずだった。
赤い閃光が触手を砕く。完膚なきまでに粉砕し、焦がし、炎の舌が触手の破片を炭へと変えていく。
笑うクァン。
赤く輝く右掌を携えるロンガゥ。
事態を把握できず、逃げ遅れるカナロア。
「すまんな。これも運命だ」
巨人の体が、一瞬でカナロアの懐に潜り込む。
赤熱する拳が、正面からえぐりこんだ。

クァンとロンガゥが去った跡に、カルマン渦の歌が響いている。
風は、橋の上に散らばる少しばかりの炭を吹き飛ばし、母なる海へと還元していた。

風の強い灰色の空模様を仰ぎ見て、ヴァニタスは深いため息を漏らした。
そのため息を吹き消した海風に、なんだか焦げ臭いような臭いが混ざっていると感じたのは、自分の心が病んできているからだろうか。
「勘弁してよ……」
真剣にヴァニタスが思い悩む。
彼の悩みなどどこ吹く風と、けたたましい重機の駆動音が周囲を跳ね回る。
変わらず建設作業に勤しむアトラク。
その屋上で、今日も作業管理に従事する――と言うのは、半ば口実だ。実際は空を見上げてサボっているだけである。
屋上の真ん中に座って空を見る表情には、まるで生気が感じられない。ひどく憔悴しきっている。彼特有の、自信と責任感に満ちた精彩が欠けているのだ。
空模様と同じく、曇りがちな瞳を作業日報に向け、日付を見る。
作業工程第６４８フェーズ、第１９７８作業単位。
惨劇の嵐から、八作業単位が過ぎていた。
あの日に起きた事件を思い返すたびに、彼の心が、塞がらない傷跡から血を流す。
ローレライが救ったカルディエの姿。自分達を守るために悪魔に一人で立ち向かい、そして破壊された少女。
その痛ましい姿は、守られる側であった少年を発狂寸前まで追い込むこととなった。

幸い、ヴァニタスの心は正気を手放すほど弱くはなかった。絶叫に近い悲鳴を上げはしたものの、自分のなすべきことに即座に着手し、カルディエの修理に取り掛かった。

だが、上手くいかなかった。

患者は、アトラク同様、恐ろしく複雑な構造をしたジャガーノートである。あまりに破損の度合いが酷すぎて、修理に必要なパーツが足りなかった。技術だけでどうにか出来る範囲を超えていたのだ。

少年の心を雲が覆う。あの歯がゆさは一生忘れられない。

空をまた見上げて、口の端を吊り上げて笑う。神経質な笑い方だった。

「僕は……役立たずだな……」

自嘲しても心の痛みが薄れるわけではない。むしろ傷を抉るばかりだ。

だが、彼から生気を奪っている最大の要因は、自身の未熟ぶりではなかった。『とある事件』が、彼を深刻なまでに呻吟させているのだ。

「ん……？」

垂れ気味の耳が跳ね起きた。

屋上へ至る梯子を、誰かが小気味よく昇っている。

ヴァニタスは立ち上がって、梯子へ足を運んだ。

その足取りがゆっくりだったせいもあって、ヴァニタスが梯子にたどり着くより早く、昇ってきたものが屋上に姿を現す。

「ローレライ、どうしたんだい？」

ヴァニタスは微笑みを作った。作り物ゆえ、どこかぎこちない。

ローレライも微笑み返す。こっちは天然物の極上品。ヴァニタスの心に温もりをくれる。

「おひるごはん、できたって。おにいちゃん、よんできてって、いわれたの」

「もうそんな時間か」

ほうけるだけでも時間は流れるんだなと、自分に呆れる。

食欲は湧かないが、生活のリズムを崩すわけにはいかない。自堕落になれば歯止めがきかないからだ。
ヴァニタスは作業日報に午前の効果を書き記し、それを鞄にしまってから、ローレライと共に食堂へと向かった。

いつもと変わらない料理。
いつもと変わらない面子。
ヴァニタスは食堂のテーブルに着席し、機械的な動きで料理を胃に流していた。
目は、料理には全く向けられていない。
席に座ったときから、彼が見ているのは自分の正面に座る人物、ただそれだけであった。
「どうした。食が進んでいないようだが」
その人物が、刃物のような鋭い声で問い掛けてきた。ほとんど詰問である。
「あ、いや、そういうわけじゃ……」
うろたえるヴァニタス。
無理に食事の速度を上げて、ごまかそうとする。
「無理に食べるのなら、次回から量を減らす。物資も無限ではない」
事務的な言葉に、ヴァニタスは料理を味わう心の余裕も削られて、げんなりとしていた。
そして、自分の隣で俯くローレライの前に、皿半分ほどとなった完全栄養食をスライドさせて、
「僕の量を減らしてもいいから、ローレライとシレーヌの量、もうちょっと増やせない？」
半ば懇願に近い声色で尋ねる。
尋ねられた人物はローレライを一瞥した。
ローレライが肩を震わせる。見られただけで怯えるとは。
「私が庇護すべきはアトラク＝ナクア。次いで拘束技師だ。アプカ

ルルは対象ではない。そもそも食事を与えること自体、従来の規約に反する」

「でも」

「食べ終わったら午後の作業に取り掛かれ。拘束技師は建設作業管理。アプカルルは居住区の整理。サボるな」

ヴァニタスの反論を命令口調で押し潰し、椅子から立ち上がる。

ヴァニタスも、追うように。

「待って、待ってよ、カルディエ！」

冷徹なる人物――――カルディエは、食堂の入口の手前で足を止め、顔も向けずに、こう返した。

「いい加減、自分のジャガーノートの名前ぐらい正確に覚えたらどうだ」

そう言い残し、カルディエ――――と同じ姿をしたジャガーノートは食堂を後にした。

彼女に言いたいことはまだあるが、ヴァニタスの口から、言葉はついに出なかった。

残されたヴァニタスは、役目を果たさない自分の声帯に失望し、崩れるように椅子に座った。

心配そうに見守るローレライに気づき、彼女の頭を撫でる。せめて、この幼い子供に気を使わせてはいけない。それが、自分の責任だと、ヴァニタスは改めて心に誓った。

撫でられて、ローレライが少し落ち着きを取り戻す。口を動かす余裕が出た。

「おねえちゃん……どうして、あんなにこわいかお、するの？」

「……きっと、まだ直ってないところがあるんだよ」

「なおれば、またやさしいおねえちゃんに、なってくれる？」

「……うん、優しいカルディエに、戻ってくれるよ」

根拠はない。ただの希望だ。

ヴァニタスは、ローレライに食事を促し、カルディエの消えた扉を見つめた。

おもむろに目を閉じる。瞼の裏に浮かぶ、今のカルディエ。
何も見ていない瞳。
何も感じていない心。
カルディエの姿をしただけの、誰とも知らない別人。
ヴァニタスは、彼女が名乗った名を呟いた。
「メメント・モリ……」
いつの間にか完全に修復していたカルディエが、突然名乗りだした、本当の名前とやら。
――君は……一体誰なんだ？
聞き覚えのない名前にヴァニタスは、何故か、強い悲しみを覚えずにはいられなかった。

第四章　６４８－１９７８　『消えた命綱』

天井で煌々と輝く冷光灯が、医療室を青白く染めている。
冷光灯は極わずかしか熱を出さない。使用されるエネルギーをほとんど光に変換しているためだ。
だからだろうか。医療室の中は、どことなくひやりとした空気に満たされている。水のない海のようだ。
そんな水なき海の中に、たゆたうもの達がいる。
カーテン。椅子。机。薬棚。総合診察治療装置。
そして、部屋に一つだけ置かれたベッドと、そこに身を預け、胸元までタオルケットを掛けて横たわる、美しきアプカルル。
シレーヌであった。先ほど午睡から目覚めた彼女は、どこに焦点を置くでもなく、ぼんやりと世界を眺めている。
瞳は僅かにうつろだが、顔色はよく、呼吸も穏やかだ。右腕には、点滴の針が刺さっている。チューブを通って流し込まれる薬液は、薄い黄色味を帯びた薬品の混合液。投与完了まで残り半分程だ。
ヴァニタスが薬液の量を確認し、総合診察治療装置に結果を入力していく。
電子音は了解の合図。入力された数値を元に、最適な治療のスケジュールを組み立てる。
「これでよしっと……」
ヴァニタスの肺が大きな排気を行った。やや大袈裟ではあったが、そんな安堵のため息が漏れるのも仕方がないことだった。
彼女が昏睡に陥ってから、ここまで回復する間は、予断を許さない状況が続いたのだ。
中毒症状の原因は、複種擬装構成体（カチナ・ドール）に強姦された時に、排卵を誘発する何らかの成分を、粘膜から大量に吸収させられていたためだった。それが過剰反応を起こして、彼女の体を蝕んでいたのだ。
治療のため、彼女は両腕に点滴の針を刺され、投与量の限界近く

まで点滴を受けることとなった。
後は発作的症状と、それに対する治療を繰り返しながらの闘病。
ヴァニタスも、精神を擦り減らしながら、医者のまね事に取り掛かる日々。
しかし、今は点滴も右腕に一つのみ。投与速度もゆるやかなものだ。近いうちに点滴も必要としなくなるだろう。順調な回復だった。
「気分はどうですか？　良くなりました？」
ベッドの傍らに立ち、ヴァニタスが問診する。基底言語処理を施してあるので、言葉は通じるはずだった。
シレーヌは顔を向けて、小さく頷いた。
「それは良かった。もう体を起こしても大丈夫だと思うけど、無理はしないでくださいね。お腹は空いてないですか？」
シレーヌは首を横に振った。声は出るはずだが、無言なのは、警戒心がいまだに根を張っているからだろうと、ヴァニタスは推測していた。
珍しいことに、ヴァニタスの推測は外れているのだが。
「僕は作業に戻らなきゃいけないから、出ていきますけど、何かあったら、これで呼んでくれれば、すぐに駆けつけます」
と言って、懐から、手の平に収まるサイズの箱状の装置――コールブザーを取り出し、使い方を説明してから枕元に置く。
「じゃあ、ゆっくり休んでてください」
患者に向かって軽く手を上げ、医務室の出入り口に足を向ける。
すると、その背中に弱くかすれた声がかけられた。
ヴァニタスの足が止まる。
「ん？　どうしました？」
「あ、あの……」
視線をヴァニタスから外しては直ぐ戻す、その繰り返し。言葉の続きは出てこない。ひどく逡巡しているのは明白だ。
シレーヌは胸を抑えた。アプカルルの心肺能力は強靭だ。海中で生きるために備わった、数少ない彼らの武器だ。

それが、限界近くまで稼動している。シレーヌは鼓動を聞かれはしないかと心配していたが、そもそも心電図に接続された状態では、彼女の鼓動は赤裸々に晒されているも同然である。

「脈拍が増えてる……薬の投薬量に問題が？」

治療にミスがあったかと、ヴァニタスが目を丸くしたのを見て、シレーヌは慌てて「違う」と叫んだ。

声量の大きさに少年の目がさらに丸くなる。体毛が少し膨らんでいるのは驚いたからだった。

声を張り上げたのは、かえって良かったのかも知れない。

シレーヌの鼓動が、次第に落ち着きを取り戻し始めた。それを見てヴァニタスも、一過性のものかと安堵する。

「あの……あの」

再び『あの』のメリーゴーランド。次の言葉を待つヴァニタスも首を傾げている。

「どこか痛むんですか？」

助け舟のつもりで尋ねる。が、シレーヌは首を横に振った。ますます少年の首が角度をつけてひねられる。

シレーヌは、ただ一言、告げたいだけだった。その一言は、恩人に使うにあたってなんらおかしい言葉などではないのだが、シレーヌはまるで呪いにでも縛られたかのように、その一言を舌に乗せて紡ぎ出すことができなかった。

仲間に、家族に、何度も言えたはずの言葉をこの少年に言えない。自分に何が起きているのか、うら若きアプカルルは悟れなかった。

「もし言いにくいことだったら、落ち着いてから僕を呼んでくれても大丈夫ですよ。ね？」

少年が微笑む。シレーヌの心臓がまたもや主を困らせ始める。

その混乱に、シレーヌは失敗を犯してしまった。

「あの……あの子は、その、どこに……いるの」

言いたかった言葉とはかけ離れた、最悪の台詞。

ヴァニタスもシレーヌも、お互いに渋面を作る。

望まぬ展開の苦味は、少々きつい。
「……ローレライのことですか？」
シレーヌの質問に対するヴァニタスの返答は、どこか咎めるような響きを含んでいた。
シレーヌは視線をベッドに落としたままだった。
顔を上げられない。どうしていいか、わからない。
だが、そんな気持ちとは反比例するように、舌は自動的に、かつ滑らかに動き出す。
「……私たちは、忌み子に世話になるわけには、いかないの」
「忌み子、ですか」
ヴァニタスの歯が、きりりと音を立てた。
腹の底に澱む熱い感情を理性で凍らせ、彼はシレーヌの瞳を見据えた。
「シレーヌさん、貴女がローレライを忌み嫌ってることは、分かりました。あそこまで拒絶されましたからね」
ひどくやるせない思いに、ヴァニタスの眉が下がる。
シレーヌは静かに唇を噛んだ。
シレーヌの回復は、本人の生命力と適切な早期治療の賜物だった。
しかし、彼女が初めて目を覚ますまで、毎日かいがいしく看病した者がいたからこそ、ここまで回復したとも言えるだろう。
その者は、薬の効果で眠りにつくシレーヌの顔を濡れたタオルで優しく拭い、自分が眠る間も惜しんで看病を続けた。
ヴァニタスの脳裏に、必死に看病する幼子の姿がよぎる。
あの時のローレライの深緑の瞳は、不純物のない光に満ちていた。
いじらしいまでのひたむきさは、相手が同族ゆえのものだったのか、それとも相手を選ばぬ無償の愛だったのか。
だが、目を覚ましたシレーヌは、看病している者がローレライという名のアプカルルと知るやいなや、彼女の好意を心無い罵声で打ち砕いてしまったのだ。
それこそ、あの夜の嵐に勝るとも劣らない勢いで。

以降ローレライは、医務室に入ることはなかった。

「何があって、あそこまでローレライを嫌うのかはわからない。でも、貴女を必死に看病してくれたのは、間違いなくローレライです。それだけは忘れないであげてください」

一縷の望みをかけ、ヴァニタが諭す。

一瞬、シレーヌの唇が開きかけ――すぐに閉じた。

冷光灯の光に沈黙が混ざる。機械のかすかな駆動音は、居心地が悪そうに部屋の隅へと逃げていった。

しばらくして、ヴァニタスがため息を漏らした。

ヴァニタスの願いも、しかしシレーヌを首肯させるには至らなかったのだ。

理解し合えないことは辛いことだ。まして、それが自分にとって一番大切な存在と引き換えに助けた相手となれば。

「……何が、そこまであの子を嫌わせているんですか？」

「……忌み子に関する話を、一族の者以外にしてはいけない掟があるの。だから……」

ローレライを嫌う理由の半分は、それだ。もう半分は別の理由だが、それはシレーヌ自身、気づいていない。

掟という単語にヴァニタスは嫌悪を覚えた。しかし、それはアプカルルにとって、遵守しなければいけない絶対の法である事も理解できた。

「そうですか。無理にとは言いません。でも、よく考えておいてください。その掟は、あなたとあの子を幸せにしてくれるのかどうか」

こんな台詞でシレーヌの心の壁を砕けないことは分かっている。それでも彼は、問い掛けずにはいられなかった。

沈痛な面持ちで投げた疑問符を最後に、ヴァニタスは静かに退室した。

彼が出た後、スライド式の重い扉が、圧縮された空気を吐き出し、

かちりと閉まる。
そこが、我慢の限界だった。
シレーヌが胸の奥に溜めておいた吐息を一気に漏らす。
甘い色の吐息だった。震える肩と震える喉が生み出した、女の匂いに絡められた吐息。
それだけではない。
濡れた瞳と上気した頬。強まる鼓動と、逸る呼吸。
これらは、下腹部の奥から体の真ん中を通って這い上がる熱に、頭の芯まで侵されたが故のものだった。
彼女は隠れるようにベッドに潜り込むと、前掛け状の寝巻を捲り上げ、熱のこもった下腹部の、さらに下へと指を這わせた。
恐る恐る目的地に近づく細い五指。
その先端が『そこ』へ触れた瞬間、指先が、溢れ出す粘液の温もりを感じ取った。
刹那、敏感な肉から弾けた迅雷のごとき感覚が奔る。それは彼女の喉にて凝縮され、極短い嬌声となって弾け散った。
慌てて声を押し殺す。
今までの人生の中で、一度たりとも感じたことのない感覚。そして感情。
シレーヌが戸惑う。己の内に蠢く未知の感覚と、それが及ぼす変化に。
あの肉塊に乱暴された場所から湧き上がる、甘美な疼き――――
「これって……」
自分が、誰に何を求めているのか、薄々気づき始める。
それを肯定できなかったのは、彼女が異種族と交流のない閉鎖された世界の住民だったからなのか。
それとも、心を支配する気持ちがあまりに純粋だからなのか。
深々と心臓に刺さったアモルの矢尻は、アプカルルの乙女を強く、強く、苦しめていた。

「物資が足りない」
作業終了後の夕食時。
いつもの食堂にて、カルディエ――――ではなく、メメント・モリが前振りもなく、鋭い言葉の刀で二人を切り付けてきた。
不意打ちを喰らったヴァニタスとローレライが、茫然と辻斬り犯を見る。
日に日に少なくなっていく食事の量に、二人が不安を感じ始めていた矢先の一撃。狙ってやったのなら、実に効果的と称賛すべきであろう。
嘲笑まじりの鼻息一つ、メメント・モリの手から、タッチパッド式ノートが放り投げられる。
ノートはテーブルの上を滑り、ヴァニタスの食器にコツンと当たって止まった。
ヴァニタスの目がそれに釘付けとなる。
画面には見覚えのある数値が表示されていた。その画面を指差しながら、メメント・モリは淡々と語りはじめた。
「建設資材、食料、弾薬、その他諸々。補給がなければ、もって、あと４０作業単位。これを見ると、物資残量の定期管理データには、現時点で５５０作業単位の猶予があると記載されているが、どうも我が拘束技師殿は、数字の数え方に致命的な欠陥がおありのようだ」
辛辣な皮肉に、ヴァニタスは毛を逆立てる――――ことなどできようはずもなく、ただただ、耳を伏せて怯えるばかりだった。
「さて、言い訳は？」
腕を組み、踏ん反り返るメメント・モリ。食堂は今や尋問室の様相を呈してきた。
ヴァニタスは食事を中断して、弁護を始めた。
「えっと、その……最後に定期確認したのは、１０作業単位前で、その時には、確かに５６０作業単位分、物資があったよ。間違いなく確認したんだ。だから現状では５５０作業単位分、残っていなけ

ればおかしい」
「そうだな。おかしい。では本日、私が確認してきたところ４０作業単位分しか残っていないというこの現実は、どう説明する？」
――君が間違えている可能性だってあるじゃないか。
言えない文句を心で叫び、ヴァニタスは椅子から立ち上がった。
ローレライに食堂で待っているように告げてから、彼はメメント・モリとにらみ合った。
「見に行こう。そのほうが話が早い」
メメント・モリも、それには反論しなかった。

資材倉庫は、実に広々としていた。手軽な屋内スポーツを実施できるスペースが、ヴァニタスの眼前に横たわっている。
体を動かし、汗をかくのもいいのかもしれない。
現実逃避の一手段としては。
「なんで……」
乾いた声を絞り出し、ヴァニタスは落ちる顎を必死で閉じようと努力した。
しかし、開いた口が塞がらない。それほどの衝撃が、彼の脳を攪拌していた。
あらゆる物資がほとんど消えている。まるで最初から、そんなものはなかったと言わんばかりに。
「ご納得いただけましたかな？　拘束技師殿」
慇懃無礼に言葉の棘でヴァニタスを貫く。貫かれたほうは、ぐうの音も出なかった。
明晰なる頭脳を全稼働させ、納得のいく答えを探してみるものの、パズルのピースが少なすぎる。この珍事の全体像が見えてこない。
混乱するヴァニタス。メメント・モリは呆れ顔で肩をすくめる。
「まあ、今更お前を責めたところで状況が変わるわけではない……問題は、どう物資を補給するかだ」

至極真っ当な意見だが、散々責められた側としては、素直に受け止められない台詞であった。

渋面を浮かべ、ヴァニタスがメメント・モリと向き合う。

「昔発見した貯蔵塔まで戻ろう。物資は４０作業単位あれば、間にあうはず」

「ログを見た。その場所については知っている。だが、なにぶんデーターが古い。万が一、その貯蔵塔が何かの理由で使用不能になっていた場合、それこそ一巻の終わりだ。そこは今でも確実に使えると言えるのか？」

「そこまでは僕にだって保証できない。でも、稼動状態にある確率は充分にあるし、貯蔵塔の入り口は僕の生体パスコードで封印してある。誰も入れない。それに、そもそも他に方法が」

「ある」

力強い断言に割り込まれ、ヴァニタスは耳をパタパタと動かした。

「あるの？　嘘じゃないよね？」

「私がこの期に及んで冗談を言うと思っているのか、貴様」

このジャガーノートは、どうやら全身が逆鱗のようだ。ヴァニタスは、首を激しく振って否定の意思を示した。

「カル……メメント・モリ、その方法って？」

「今の地点で建設を一旦中断し、北西方向に橋を作るのだ」

「一旦中段ということは……非公式分岐橋だね」

「そうだ。その橋の建設は通常規格ではなく、広域移動用の狭幅規格と高速建築工法を併用して行う。そうすれば、時間にして5作業単位、建築資材は３５作業単位分で、およそ５５キロ先まで延伸できるはずだ」

「使い捨ての橋か。久々の建築だけど……橋を延ばした先に、物資があるんだね？」

無言でメメント・モリが頷いた。

「観測した結果、そこに大規模なフロート式の廃棄施設があることが分かった。周囲には無傷の貯蓄塔があることも判明している」

どうやら、物資が謎の不足状態に陥っていると判明した時点で、メメント・モリは充分な対策を練っていたらしい。

それならば、あえてヴァニタスをくどくどと責める必要もないようなものだが、そこはメメント・モリの性格なのだろう。

ヴァニタスにしてみれば、頼りにはなるが、どうにも好きになれない性格であった。

「そこで、ほぼ確実に物資の調達が出来る。貯蓄塔の識別コードは未開封だったからな。規模から言って、貯蓄物資量は推定量１５００作業単位分……この部屋を１０回満杯にできる」

「大丈夫かな？　それだけの物資が今まで手付かずだったのも、おかしな話だと思うんだけど」

「問題がないとは言い切れない。しかし、確実性に乏しい古いデーターに頼ったり、何もせずにここで立ち往生したままゆっくり滅びるよりは、より生存の可能性のある方に舵を取るべきだ。だが、もしもお前が立ち往生して死にたいと言うのなら、時間の無駄だ。ここで速やかに引導を渡してやるぞ」

正論に返す言葉もなく、少年は口を尖らせて黙った。

「異論はないようだな。では、明日から物資確保の作戦行動に移る。明日に備え、今日はゆっくりと休むがいい」

自分の言いたいことだけを一方的に告げ、メメント・モリはヴァニタスに一瞥をくれた。

カルディエの顔で睨むメメント・モリを、やはりヴァニタスは好きになれなかった。

第四章　６４８－１９７９　『ナイトメア５３６－２６０２』（前書き）

非常に猟奇的なシーンがあります。閲覧の際はご注意ください。

第四章　６４８－１９７９　『ナイトメア５３６－２６０２』

ローレライは、夜の帳（とばり）の中を独りきりですごしていた。
与えられた寝室、与えられたベッド。白く大きなベッドの真ん中で、小さな彼女は身を丸めて呻いている。
ローレライは眠りについていた。しかし、その眠りは決して穏やかなものではなかった。
不規則な呼吸。不自然なまでに浮かぶ汗。苦悶の表情。
記憶の内から滲み出す『過去の恐怖』が、細い喉元に食らいつき、幼子を蝕んでいるのだ。
眠りの中で甦る過去の恐怖は、悪夢そのものだ。それも、到底幼子の精神が受けきれるような、生易しいものではない。それは拷問と呼んでも差し支えのない、心を殺す悪夢――『殺夢』であった。
殺夢は心に広がる。心のあちらこちらに根を張り、正気を吸い取り、狂気を吐き出す。ローレライは、完全に夢に捕食されていた。
「いや……だよぅ……やだあ……」
涙を流しながら呟く寝言。
無情なるかな。ささやかな抵抗に効果などない。
殺夢の核は、ローレライの深層心理に癒着し、宿主を蝕む不定形の悪性腫瘍へと変化し始めた。腫瘍は膨れ上がりながら幾度も形を変え、最後に鳥の仮面をつけた道化となる。
闇の舞台となった心の中で、独りカラカラと笑う。そうしてから、道化は四方に向けて、大仰な手振りで礼を繰り返した。
闇の先に何かいるのか。それは道化しか知らぬこと。
満足のいく反応を感じ取ったのだろう。仮面が笑みに歪む。
道化は仮面の奥の瞳に悪意をこめて、ぱかりと口を開いた。
耳障りな金切り声による、邪悪な前口上の開始であった。
「さあさあ、紳士淑女の皆様、お待ちかね。救いも未来もありゃし

ない、残酷至極の夢舞台。今宵も満員御礼、いざ開演」
「これより語るは幼き者の、哀れ涙の物語。遥か昔に犯した罪の、いまだ終わらぬ悪夢の責め苦」
「血や涙はどこいった、人で無しの黒い魔女。そいつが作った牢獄が、長き時経た今この時も、か弱き子供を苦しめる」
「さあさあ、紳士淑女の皆々様、ハンケチのご用意はよろしいですか？　甘いラムネとポップコーンは？　お花は摘み終わっておいでしょうか？」
「ご準備整いましたら、御席にどうぞ。間もなく幕が上がります。それでは心行くまで存分に、笑い転げていただきましょう」
「この世は、かくも――残酷なり、と」

道化は闇に頭を下げ、そして地に溶けるように消え去った。
それが、開幕のブザーの代わりであった。

「ほんとに、それ、おしえたら、あたし、たすかる？　たすけてくれる？」
「アア、助かるトモ」
抑揚のない口約束に、ローレライはすがった。すがるしか、なかった。
理不尽に暴力を振るわれ、顔を何かで覆われ視界を失い、のしかかられたまま脅される。幼い子供でなくとも、口約束にすがりたくなる状況だ。彼女の選択を浅慮と責めるのは酷であろう。
ローレライが集落の場所を告げると、覆いかぶさる重みが消え、視界を遮るものも離れていった。
ローレライは、自分が解放された感覚に安心した。
――助かった。
そう思い、一目散に逃げ出そうと立ち上がり――

そこで口約束は牙を剥いた。
安堵に緩む顔に、巨大な衝撃がめり込む。
幼い体が、血を撒きながらもんどりうち、橋に設置された冷光灯の支柱に衝突して、ようやく止まった。
少女を吹き飛ばしたのは、今まで彼女の顔を万力の如く締め上げていた、巨大な鉄の爪であった。握りこまれた五指が形作る凶悪な拳が、高速で顔に叩き込まれたのである。
幼子の顔に、巨大な鉄の塊を抉りこませる。どれだけ心無ければ、これほどの慈悲なき行為に及べるのか。
「あ、ああ、あ……」
鼻骨が折れたのだろう。手酷い一撃により、尋常ではない量の鼻血が流れ落ち、赤い池を支柱の根元に作り出している。
殴られた本人は状況が理解できていないようだった。痛みを感じる余裕もない。泣くでもなく喚くでもなく、茫然と血の池を眺めている。
すると、彼女の視界の端に、異形の影が映った。
ローレライの首が、ギリギリと錆びついた機械のように動き、顔を前に向ける。
呼吸を忘れるほどの恐怖が、そこにいた。
黒髪の魔女。それが、襲撃者に対する第一印象である。
裾の長い黒い服と、同じ色のツインテールの髪を海風に揺らし、大股に歩む姿は威風堂々。巨大な両腕は、甲殻類のように無数の節と突起を持ち、陽光に黒く輝いていた。歩く度に指先が橋にこすりつけられ、火花を散らせている。
内に秘めた凶悪な力を抑えきれていないのか、巨腕から響く音は、まるで魔獣の呻きのようだ。
アンバランスとさえ言えるほど異様な風体。
だが、何より目を引くのは、異形の体とは似ても似つかない、白く美しい顔だった。
狂気を灯し、濃すぎるほどの悪意を浮かべていることを抜きにす

れば、彼女の顔を見て、陶然としない者はほとんどいないだろう。微笑めば、海神（わだつみ）すら篭絡できるのではなかろうか。それほどの美しさと愛らしさを備えている。

ゆえに――――その顔に望んで狂気を浮かべる様は、魔女と形容するに足るだけの、近寄りがたい雰囲気を醸し出していた。

「まるデ手まりのヨウだナ。こロころト、よく転ガッたワ」

稀代の女神像のごとき美貌から放たれる、不快感しか催さない金切り声。美を汚す冒涜的な取り合わせである。

その冒涜的な姿に、幼き体が爪の先まで恐怖を感じた。危険どころの話ではない。間違いなく、ローレライが今まで出会った存在の中で、最大級の『悪』だ。

ローレライは出血を気に止める余裕すらないまま、這いずって橋の縁を目指した。

されど恐怖と痛みで体がまともに動かない。橋の縁が、とてつもなく遠く感じる。

その背中を、早足で近づいた黒髪の魔女が、思い切り踏みつけた。

踏みつけると言う、ただそれだけの行為。

それが、ローレライの背骨を完膚なきまでに砕くとは。

「ぎ……！？」

呼吸すら忘れる痛みが、ローレライの脳の中で爆裂する。あまりの激痛に、悲鳴は喉から先に進むことができなかった。

細い手が必死に橋を掻く。口は稼働域の限界まで広げられ、しかし漏れる音は隙間風のような呼吸音だけ。しかし、あがく上半身に対し、背骨を砕かれ不随となった下半身はピクリともしない。

その対比が滑稽だったのだろう。足の下でもがき苦しむ幼子を見下ろし、高らかに魔女は笑う。

「アッハハハハ！　いいぞ、オモシロイ！　アプカルルは、本当に嬲りがいがアルな！」

心底楽しいと言った表情だ。明らかに『やり慣れて』いる。

「ハハハ……はあ、いや全く、揃イも揃ッテ馬鹿ばかりダナ、アプ

カルルは。最初から無事に逃ガスつもりなどナいコトぐらい、分かりソウなものダガ。コウやって……」

直立していても、地に付くほど長い機械の腕が、ローレライの首筋に針状の物体を差し込んだ。５センチ程の針は、ローレライの首に抵抗もなく潜り込み、見えなくなる。

それが原因なのは間違いないだろう。ローレライの痙攣が激しさを増した。

「お前を下僕にシテしまえば、集落の案内ナド、命令一つで勝手にヤッテクれるのダカらな」

美しくもおぞましい軽侮の笑みが、より濃くなる。

黒髪の魔女は、そもそもローレライから聞き出した情報を信用するつもりなどなかった。

一連の尋問は、下ごしらえでしかなかったのだ。

助かった。そう思って逃げ出す幼子を、再び絶望の底に叩き落すため――

肉体的苦痛と絶望の表情がブレンドされた、涙と血に彩られた表情を、この幼子に浮かべさせるため――

ただ、それだけのために。

「だが、最初に言ッタ約束は守ルゾ？　イイモノをやると言った約束ハ、ナ」

言い終わるが早いか、ローレライの体に変化が起きる。

折れた鼻骨が、砕けたはずの背骨が、ゴリゴリと擦れあいながら修復し始めた。しかし、修復には相当の痛みを伴うようで、音が鳴るたびに、ローレライの口から泡が吹き出す。

魔女は足を降ろし、三歩下がって、この様子を眺めていた。

修復の痛みのあまり、強くかみ合わせた歯茎から血が染み出す。歯軋りの音は、数百メートル離れていても聞こえるほどだ。この様子を見て『治療中』などと思う者はいないだろう。

ローレライの吹き出す泡が、赤みの強いピンクに染まる頃、ようやく修復は完了した。

「ほうら、イイモノだろう？　お前は、どンな傷ヲ負っテモ痛ミト共に無理やり修復サレ、どンナ苦痛ニも発狂すラ許サレズ、永遠に成長も老化モ起こサなクナった」

「え、あ……」

「理解出来ナイか？　コの低能が。お前ハ、死ななくナッタのだ。未来永劫、弱イまま、ただ、死ねナクナッタのだヨ」

「しねな……く……？」

収まらぬ痙攣と不規則な動悸に翻弄されつつ、脅えた両目で、狂笑する魔女を目の端に収める。

魔女の言っていることの意味は理解できないが、自分に施されたものが、大婆様の言う『呪い』と同等のものだということは、感じ取れていた。

「さて、案内シテもらおうカ。ローレライよ、立て」

魔女の命令が、ローレライの筋繊維に不可視の糸を張り巡らし、操り始める。

魂の意思に関係なく、ローレライの体は遅滞なく立ち上がり、魔女の前にて直立不動の態勢を取った。顔だけが、魔女の命令に従わず、青ざめた色合いと表情を乗せている。

「んん？　表情筋は駄目カ。支配率が完全デハないナ……相変わラず、中途半端な仕事をスル。ナイト・ストークめ。まあ、問題アルまい……」

魔女の巨腕がローレライの顎を掴み上げる。

無理矢理に瞳の中を覗かれ、狂った視線を焼き付けられることが、幼子にどれほどの恐怖を与えたのだろうか。

両目から流す涙に加え、足下に温かい黄色の水溜りが出来ていた。

いい口実をありがとうと、魔女がほくそ笑む。

「おやオや……誰が失禁してイイなどト言っタ？　ああ？」

「ひッ……あ、あの、ご、ごめんさない、ごめんなさい、ゆるし、ゆるして、くださ、い、もう、し、しない、もうしません、だから、ゆ」

海に硬い音が響き渡る。
か弱き謝罪は、暴力によって打ち消された。
「あう、ぐ……」
痛みと恐怖は、彼女の涙腺から透明な雫となって、とめどなく流れ落ちる。
鉄の拳で左頬を殴られても、直立不動の姿勢は維持している。いや、させられている。
口から流れ出た大量の血には、折れた歯が何本も混ざっていた。その歯も、抜けた先から生え変わる。ゆっくり肉を裂いて生えるものだから、持続性のある激痛がローレライを苦しめたのは、言うまでもない。
「ガタガタと喋るナ、この糞虫が。いくラお前ガ謝ろうト関係ナい。無駄口を叩イたら、血を吐くマデ殴る。命令以外のことをシタラ腕と足ヲ折る。反抗的ナ態度を取ッタら、ハラワタを引キズり出ス」
「ひ、あ、ご、ごめん、なさい」
その謝罪は、恐怖から来る反射的行動だった。
魔女がにやりと笑う。
ローレライは自分の失敗に気づけなかった。
魔女の魔手が、ローレライの顔面を正面から打ち抜いた。
後頭部から、橋に叩きつけられる。割れた頭から血が吹き出し、陥没した顔面がゴボゴボと音を立てるが、それも両手で秒を数えるより早く、修復してしまった。
「げ、がはっ……ひ、ひぐ……いたい……いたい……よお……いたいぃ……」
「無駄口を叩イタら、殴るト言ったハズだ。『ゴメンナサイ』だろうが、ナンダろうガ。物覚エが悪イ糞だ。ソレに……」
巨腕が拳を握り込み、高く掲げられる。
ローレライは、顔面を抑えたまま、まだ泣いていた。
狙うには申し分ないほど、無防備。
「誰が……倒レテいイト言った？」

ハンマーとなった拳が、か細い右のすねに打ち下ろされた。
「ぎゃっ！」
右足の砕ける音。短い悲鳴。
魔女の口元が冷酷を深く刻む。
「命令以外のコトをしたら、腕と足を折ルとも、言ったハズだナ？」
理不尽の極致のような言いがかりを呟き、魔女は泣きわめく幼子の四肢を一つずつ打ち砕いていった。その度に、ローレライは悲鳴を上げ、流す涙の量を増やしていった。
両手足を砕かれ、嗚咽を漏らすばかりとなった幼子の横で、魔女は肩を揺らして笑っている。小粋な冗談を耳にして、それを思い出して笑うように、くつくつと。
魔女の笑いが消える頃には、ローレライの修復も完了していた。
「立て」
釣り上がったままの口元を巨腕で隠しつつ、魔女が命令を下す。
嗚咽の終わらぬ少女の体は、素早く主の命令に従った。殴り倒される前と同じように、直立不動で主の前に立つ。
「泣クナ」
またもや理不尽な命令。これほどの責め苦を受けて、泣かずにいられる幼子がどこにいようか。
案の定、ローレライは泣き止まなかった。必死に涙と嗚咽を止めようと彼女なりに努力するも、生理反応を意思で抑えることなどできるはずもない。
それを承知の上で、魔女は言ったのだ。『泣くな』と。
「……命令に従わナイとハ、実に反抗的ナ態度だ」
と言って、鉄の爪を柔らかい腹に突き立てた。
ローレライの大きな目が、限界まで見開かれる。やや知恵の鈍い彼女でも、自分の腹に突き立つ凶悪なものにこれから何をされるのか、分からないわけではない。
爪に立ち塞がるは海藻の服一枚、守りは極めて脆弱。魔女が力を込めて爪を突き、そのまま引き抜けば、湯気だつ小腸は容易く腹か

らはみ出るだろう。
臓物臭を期待しているのか、魔女は興奮した表情で、
「反抗的な態度ヲ取ったらドウすルかトモ……言ったハズダナあ？」
と、怯えるローレライを更に脅した。
そこで魔女は表情を変えた。
狂気の欠片すらない、優しく、美しい女神のほほ笑みが、ローレライの視界を埋めたのだ。
「……許してほしい？」
ローレライは首を縦に振った。激しく振るあまり、止まらない涙が周囲に撒かれて、白い橋にまばらな水玉模様を作る。
彼女は心の中でひたすら謝っていた。
家族に、仲間に、大婆様に、海に、海神（わだつみ）に、そして目の前の魔女にさえ、彼女は謝り続けていた。
自分が悪かったと。自分が悪いから、こんな目に遭うのだと。
だから、彼女は必死に願った。自分を悪と定め、自分の全てを否定し、懺悔と謝罪を魔女に捧げて、助けを願った。
なんといじらしく、愛らしい姿だろうか。弱き者が強き者に命がけで媚びる姿の、醜く尊い有様よ。
素晴らしいとさえ、魔女は思った。
熟成された怯えの香り。もはや我慢などできようはずもない。
だから彼女は、希望を見出した幼子にこう囁いたのだ。

「……生まレてキタことヲ……後悔スルがいい」

ぷつりと、巨大な指先が皮を裂く。
残虐が腹に潜り込み始めたのだ。
「あ！？　え、や、やだ、あ、あ、あああ！」
騙されたのだと悟ったときには、もう遅い。
ローレライの全身で発生する、痛覚の暴動。合わせて、色のない閃光が網膜で乱舞する。

爪はゆっくりと、表皮と真皮を切り開き――
「いいいいい！　ぎ、いたいいたいいたいいたいいいいい！　たすけ、て、おかあ、さん、おかあ、さあああん！」
脂肪を舐め――
「やめてえ！　いたいよお！　あああああ！！」
筋肉を刻み――
「やあああ！　あっ、あが、あ、ぐ」
奥に秘められた内臓の群れに到達し――
「がはっ、ごぼ、げぶ……ぐ……」
犯すように乱暴に蹂躙する――
「ぎ……げぅ……く……」
五本の指が、幼子の腹の中を値踏みする。お構いなしにかき回し、弾力のある小腸をこりこりと摘み、太い大腸を強引に捻り、しごく。
そして。
「サテ。デハ、見せてモラオうかな」
巨腕が勢い良く抜き出され、ローレライの『中身』が一気に引きずり出された。
一際大きな痙攣を起こし――ローレライは、また失禁した。涙も鼻水も涎も尿も、全て出るに任せて漏れ尽くす。
それでも、悲鳴だけは出なかった。
ローレライの脳で暴れる痛みは、耐えられる限界をあっさりと超えて、もはや言葉にできない未知の感覚に変わっていた。しかし、悲鳴が出なくなったのは、それが原因ではない。
こんな残酷が存在するこの世への絶望が、死に至る痛みすら凌駕して、彼女の精神を虚無に変えていた。だからこそ彼女の顔は苦痛に歪むのではなく、一切の表情を失ってしまったのだ。
だが、ここに至っても――ここまでされても――ローレライは、苦痛の原因を己の外に求めなかった。
自身の臓物臭を嗅ぎながら、壊れかけた心で、一心不乱に謝っている。

これが救われる唯一の方法だと信じて、ひたすらに、世界の全てに謝罪している。
そうだ。謝らなければいけない。
自分が悪いから、「こんな目」に遭うのだ。
自分が悪いから「あんなこと」を言われるのだ。
仲間が。兄弟が。両親が。
鬱陶しそうに、愉快そうに。
怒りを込めて、嫌悪を込めて。
殴りながら、犯しながら。
様々な感情の毒を塗りつけて、鋭くローレライに突き立てる一つの言葉。

『オマエナド、ウマレテコナケレバ、ヨカッタノニ』

それはきっと正しい。生まれた自分が悪いんだ。だって、みんながみんな、こう言うのだから。
知恵が鈍いくせに、外にばかり興味を持ち、好奇心に誘われ、外を出歩くようなアプカルルなどいらない――と。
魔女も言ったではないか。生まれてきたことを後悔しろと。
だから……謝るしかなかった。
『ウマレテキテ、ゴメンナサイ』と――

幼子に、この言葉を吐かせた者たちを、誰が許せるというのか。
許せるわけがない。許す道理など微塵もない。
しかし幼子を虐待する悪魔は、狂気に勝ち誇っている。太陽の下で誰に咎められもせず、我が物顔で悪を施している。
悪因悪果は、所詮戯言。神の特技は見て見ぬふり。
「なントもまあ、汚ラワシい！　臭イはらわただナ！　あハハハ！」
引きずり出した内臓を眼前まで持ち上げ、様々な角度で眺める。
魔女の狂気は最高潮に達していた。

「臭イ臭い。臭いモノは、元の場所に戻サナイとな」
言って、引きずり出した内臓を無理矢理に腹腔へ押し戻す。壊れかけた人形の腹に、力任せに綿を詰め直す要領だ。
それを巨大な鉄の爪で行っている。
虚ろな表情のローレライは、臓腑をえぐられるたびに痙攣していた。膵臓と肝臓が引き裂かれてぶつ切りになり、穴だらけの胃袋から未消化の食べ物が漏れて、腹の中に行き渡る頃には、どす黒く変色した血を大量に吐くようになっていた。
それでも傀儡の針は、脚の骨格筋に信号を送り、彼女を直立させている。
あまりに痛ましく、かつ滑稽な姿だった。
そんな様子には目もくれず、魔手を腹から引きぬいた魔女は、おもむろに海を指差した。
「さて、下ラない遊びハ仕舞いダ。ローレライよ、役目を果たせ」
魔女の唇が両端を吊り上げる。
「お前の集落に案内シロ」
ローレライが頷いた。頷いたのは傀儡の針のよるものだったが、ローレライ本人には、もう逆らう気力などなかった。
ただ、痛みから逃れたい。痛い思いをしたくない。
その一心で、ローレライは思考を鈍化させ、従順な傀儡となることを選択したのだ。
痛覚の牢獄に投獄された幼子が、海へと歩く。滴った血の跡を踏み付けながら、魔女も続く。
橋の縁に立ったローレライは、美しい空と海を一度だけ見渡すと、両手で自分を抱きしめ、海へ身を投げた。
そう、身を投げたのだ。死を望みながら。
だが、操り人形と化した不死の身で、溺れて死ぬなど到底叶わぬ夢であった。
ローレライの腕が、脚が、黒い海をかき分けて、一路アプカルル最大の集落『ルルイエ』を目指す。

ルルイエに至る道を知っているのは、アプカルルだけだ。その道を幼い体は覚えている。

止めることはできなかった。俎上の魚（そじょうのうお）に、何ができようか。

捌かれ、裁かれ、果ては孤独の重罪人。

この日、彼女は、多くの仲間を魔女に捧げた忌み子として、裏切り者の烙印を押されることとなった。

――――哀れ、哀れ。救われぬ忌み子。孤独の忌み子。ああ、果て無き哀れな生き物よ。

少女の夢の中で、鳥の仮面の道化が、いつまでも嘲笑を吐き出していた。

夢は、閉幕した。

閉幕のブザーは、ローレライの叫び声だった。

跳ね起きて頭を抱え、膝に顔を埋める。丸くなって恐怖を拒絶するも、それで消えるような過去ではない。

こんなに克明な悪夢は初めてだった。目覚めてなお、悪夢だったと信じられない。

思い出した。あの魔女の瞳と同じ瞳。メメント・モリの、深海のような冷たい瞳。

あの瞳が、ローレライの悪夢を蘇らせたのだ。

ローレライはひどく小刻みに歯を打ち鳴らし、常夜灯の淡い光の中で頬を濡らしていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

嗚咽混じりに、ひたすらに謝る。

誰に、なのか。

何に、なのか。
それは彼女にしか分からないことだった。
そうやって、どれほど謝りつづけていただろうか。
「ローレライ！」
名を呼ばれ、謝罪の独唱（ソロ）がピリオドを迎える。
声を張り上げ、寝室に駆け込んできたのは、寝巻き姿のヴァニタスだった。
念のためにローレライに装着させているバイタルチェッカーから、彼のヘッドセットに異常を知らせる信号が飛んできたので、慌てて駆けつけた次第である。
「どうしたの、大丈夫？」
泣きむせぶローレライに寄り添い、背をさする。
あくまで丁寧に、落ち着かせるように。慌てていながらも、その動きは相手を気遣う優しさを充分に感じさせるものだった。
その気遣いはローレライにも伝わった。泣きながらではあるが、徐々に身を起こす。
「おにい……ちゃん……？」
滲む視界に、ヴァニタスの微笑みが映る。
「どうしたの？　どこか痛い？」
ローレライは首を横に振った。
「体に異常はないんだね？　じゃあ、怖い夢でも見たのかな」
「うん……」
「そっか、それじゃあ、びっくりして泣いちゃうよね」
頷いて理解を示す。
ローレライの怯え方は異常だった。相当の内容だったことは容易に推測できる。
どうしたらローレライの涙を止められるだろうか。ヴァニタスはしっぽを上下に揺らしながら俯いた。
自分が怖い夢を見た時、カルディエはどうしてくれたか。
悪夢に泣いたのは幼い頃のこと。記憶も曖昧だが、しかし、ヴァ

ニタスの脳裏に当時のことがぼんやりと甦る。
――そうそう。カルディエは、こうやってくれたっけ。
すこし恥ずかしそうに鼻を撫でると、ヴァニタスは意を決して幼子に語りかけた。
「よし、じゃあ、ローレライ。今日は僕も一緒に寝るよ」
ローレライは、目を瞬かせた。拍子、丸い涙の雫が長いまつげから跳ね落ちる。
「もう怖い夢がこないように、僕が隣りで見張っててあげるよ。怖い夢が来たら僕がやっつけてあげる。だから、安心して」
幼き頃、カルディエが微笑みながら、あやしてくれた記憶――
『怖い夢が来たら、カルディエがやっつけてあげるなー。だから安心して寝る！』――その台詞をなぞる。
遠い昔の出来事にはにかみながら、ヴァニタスは右手でローレライの頭を撫でた。
この上ない笑顔で、誰よりも温かく。
ローレライの胸が痛くなる。抑え切れない感情が沸き起こる。
だが、苦しくはない。辛くもない。
流れる涙の量が増える。抑え切れない泣き声があふれ出る。
だが、悲しくはない。寂しくもない。
世界が残酷でないことの証明が、目の前にいるのだから。
「おにいちゃん……おにいちゃん！」
救いの御子に身を預け、ローレライは泣きじゃくった。
ありがとうと、何度も繰り返す。何よりも深く暗い水底から、手を差し伸べて助けてくれた礼を、それこそ何度も……何度も。
彼女が泣き疲れて寝付くまで、ヴァニタスは何も言わずに優しく抱きしめていた。
初めて出会った、あの時と同じように……
滑らかな白い髪を撫でながら。

穏やかに寝付いたローレライをベッドに寝かせると、ヴァニタスはトイレに向かうために部屋のドアを開けた。
いきなり、二つの赤い瞳と目が合う。
度肝を抜かれて、尻尾がパンパンに膨れた。寝た子を起こさないように悲鳴を完全に殺せたのは、彼にとっては奇跡的偉業である。
「カ……メメント・モリか。脅かさないでよ……」
後ろ手にドアを閉める彼の台詞は、高鳴る心臓に後押しされて、やや非難めいていた。
「あまり感心せんな」
ヴァニタスの片眉が跳ね上がる。非難に非難で返されるとは、予想していなかった。
「なんの話？」
「こんな時間に、この部屋から出てきたことだ。アプカルルで性欲処理するのも程ほどにな。仕事に障る」
「な……」
あまりに見当違いの非難を受け、ヴァニタスの耳が天を衝いた。
「僕はローレライに、そんなことしない……！」
と、メメント・モリに食って掛かる。
彼女の反応は意外と言わんばかりだった。
「違うのか。てっきり医務室にいる成体や、こっちの幼体は、そのためのものだっと思っていたが……では、何のためにあんなものを『飼っている』のだ？　アプカルルなど、よくて拘束技師の性欲処理用玩具、あとは身代わり、非常時の食料……その程度の利用価値しかないだろうに。無駄に飼うだけなら、明日にでも挽肉にするからな」
理解しがたいと、金属の首が一度だけ振られた。
刹那のことである。
ヴァニタスの平手が、メメント・モリの頬を打った。
打った手のほうが痛む。
ジャガーノートを生身で打つなど愚の骨頂。それでも、その愚か

な行為を冒さずにはいられなかった。
打たれた者が頬を指先でなぞり、溜め息をつく。
感情のない瞳が、感情も露わに睨んでくる瞳と対峙した。
「まず言っておく。あえて避けなかったのは、これからする質問に冷静に答えてもらうためだ。何故、激昂している？　拘束技師」
「二度と、言うな」
「なに？」
「二度と、あの二人を飼っているなどと言うな」
自分でも信じられないほどの怒りが、ヴァニタスの口から言葉となって、ジャガーノートに挑みかかる。
「彼女らは、僕らの上の存在でも、下の存在でもない。等しく、共に生きている。だから、お前の言い草は許せない。二度と……二度とカルディエの姿で、その言葉を吐くな」
「また、その名か……」
げんなりと吐き捨てる。
と、メメント・モリの右手が、目にも留まらぬ速さでヴァニタスの襟を掴み、そのまま頭より高く吊り上げた。
急襲に面食らうヴァニタス。抵抗はもがくことのみ、効果は芳しくない。
「ぐ、なにするんだ、離せ……！」
「わかるか。この程度だ。お前の力は、この程度だ。笑わせる」
ぎりっと、握られた襟が乾いた音を立てた。
「偉そうな口を叩いて私に説教を垂れるなら、お前が全てを守ってみせろ。お前があらゆる危険から、お前の大切なものを守ってみせろ。それができないのなら……戦いを他に任せ、ただ他人事のように『生きる』などと語るのなら、お前が私に言った台詞は、なんの説得力も持っていないことになる」
「う……」
意図したわけではないだろうが、まるで、あの嵐の晩のことを責められているようだった。

しかも、カルディエの姿で言ってくるのだから威力は倍増である。
「拘束技師、お前は道具だ。このアトラク＝ナクアを維持するためのな。お前の存在は『使命』のためには欠かせないが、お前個人の意思は二の次だ。いや、むしろどうでもいい。あまり使命に関係のないことに執着するようなら」
そこで区切る。
ジャガーノートは、メメント・モリと名乗りだしてから、初めての笑みを浮かべた。
ぞっとするほどの、悪意に満ちた笑みを。
「……この世に生まれてきたことを後悔させるぞ」
「……！？」
ヴァニタスの尾が恐怖に縮まる。
その反応が満足のいく度合いだったようで、メメント・モリは乱暴にヴァニタスを投げ捨てた。
痛烈に腰を打つ。腹の中身が競りあがる感覚に、脳髄が痺れて涙が出た。
腰をさすりながら立ち上がった時には、既にジャガーノートの姿はない。おろおろと探すと、廊下の角に消える緑のツインテールが見えた。
ヴァニタスは、追うことも声をかけることも出来なかった。
怒りはまだ収まらない。しかし、怒りに勝る強い恐怖に、彼の心は束縛されているのだ。
屈辱的だった。
「くそ……くそっ」
右の拳を握り、水平に振って壁を打つ。今は、これが抵抗の限界値である。
「メメント・モリ……」
カルディエを奪った悪魔の名を呟く。
何故、カルディエの表層ペルソナが、あのような冷徹な人格に入れ替わったのか。

何故、メメント・モリは、アトラクを最優先に守るのか。
何故、存在したはずの物資が、大量に消え去っているのか。
不可解なことが多すぎる。何かがどこかで狂っている。
このままでは狂った運命の歯車が、いつしかヴァニタスの周りにある全てを巻き込んで、一切合財、滅ぼし尽くしてしまうだろう。
狂った歯車の回転を、どこかで止めなくてはならない。
解決の糸口を掴むべく、数多の憶測を巡らせた末に、ヴァニタスはあることを決意した。
硬いつばを飲み込み、痛む拳をさする。
ローレライの寝室を見つめたのは、無意識の動作だった。
決意を揺らがせないよう、自分が背負ったものを再認識するための、儀式のような動作だった。
時刻は早朝。
夜の帳(とばり)が消え始める。
ヴァニタスは、カルディエを隠す帳(とばり)を取り除く朝の光となるべく、管理室に赴いた。

第四章　６４８－１９８３　『主権限剥奪ユニット』

――時間て、必要なときに足りなくなるんだなあ。

ヴァニタスはあくびを喉の奥に押し込みながら、そんなことを思っていた。

彼にとって、この４作業単位は時間の貧困にあえぐ日々だった。あえぎながら、なぜ、こんなにも時間がないのだろうと首を傾げたが、傾げた分だけボーナスタイムが与えられるわけでもない。次から次へと湧き出るあくびを噛み殺しても、やはり時間は増えたりしなかった。

ともあれ、作業の合間に生じる休憩時間を大量に消費し、目的のものは完成した。後は行動あるのみだ。次は自らの命を骰子（さいころ）に変え、放る勇気を搾り出せばいい。

問題は、放るタイミングだ。それが非常に難問である。

ヴァニタスの頭脳が解答を目指し、巨大な海原を漕いでいく。難問を解く鍵は、どこにあるのかと。

それに没頭しすぎてしまったのがいけなかった。

「あれが目標の構造体群だ」

「へぅ？」

ヴァニタスらしからぬ、素っ頓狂な声。心の内に向けていた思考の矛先が、抑揚のない声に引き戻されたことによる副産物だ。

朝の爽やかな潮風に猫毛の前髪をいじられて、メメント・モリと話している最中だったことを思い出す。

場所はアトラクの屋上。空は雲のない晴天。横を見れば、横に並び立つ者からの、物理作用すら及ぼしそうな鋭い視線。突き刺される箇所がしくしくと痛む。

失敗であった。ごまかせる機会は完全に逃している。気まずい雰囲気に、ヴァニタスは頬を引きつらせた。

「おぅあ……ええー、そう、あ、あれね。うん。あそこに行くんだ

よね。うん」

ごまかしきれていないのは確実だが、メメント・モリは咎めるのも億劫だとばかりに先を続けた。

「……明日には、構造体群の最も手前にある機甲塔に達する。改造著しいため、あの機甲塔の機能は完全には把握できないが、基礎が観測塔である以上、攻性干渉を行えるとは考えにくい。だが油断は禁物だ。最大限の警戒と防御行動を維持しつつ、明日中には接触する。分かったな？」

分からなければ殺す、といった目つきだ。

頷く以外に存命の道もなく、ヴァニタスは狂ったように首を振った。

疑心晴れぬメメント・モリだが、これ以上時間を無駄にできないと踵を返し、屋上から飛び降りた。

見送ったヴァニタスは額を拭い、大仰な吐息を一発。生き残れた運命に心から乾杯。

気を取り直し、顔を目標地点に向ける。

黒い海原に建つ巨大建造物達。中央に比較的小型のフロート式構造体が海に浮いており、それを囲うように四方に一基ずつ、計四基の改造された機甲塔が建っている。まるで、逆さまにした巨大テーブルを海に浮かせているような見た目だ。

目当ての貯蓄塔がそびえるのは、フロート式構造体の南北に面した地点、そこに一基ずつ。二基の貯蓄塔は、フロート式構造体の中央から伸びた無数のケーブルに繋げられ、三つで一つの構造をなしていた。

比較的小型の……とは言え、フロート式構造体の直径は５００メートル前後。円盤状の土台の上面は、鬱蒼とした密林に覆われている。その繁茂ぶりから、相当の年代物と推測できるだろう。

周囲に建つ青い塔も、直径で４０メートル、海面からの高さは直径の十倍を超える大きさだ。ところどころ蕩けたように歪んでいるのは、軽度のポゼッショナー侵食の名残と思われる。

ヴァニタスは息を飲んだ。
四本の塔が、フロート式構造体と貯蔵塔を守る、猛々しい巨人兵に見えたのだ。
つい最近、浮導体と機甲塔の組み合わせに煮え湯を飲まされた彼にしてみれば、正直、歓迎できない目標物であった。鳩尾（みぞおち）の辺りがキリキリと痛む。
その時、ヴァニタスの聴覚が、梯子を昇る者の足音を受け取った。軽く丁寧なリズムの足音。ローレライだ。
一生懸命に梯子を昇りきった幼子を慈しみの笑顔で迎え、ヴァニタスは手招きをした。
「どうしたの？　何かあった？」
食事の用意ができたと呼びにくるのが、ローレライの最近の日課だ。しかし、今は昼ではない。
ローレライはちらちらと構造体群を見ながら、ヴァニタスに歩み寄った。
「おにいちゃん、あそこにいくの？」
――ああ、怖いんだな。
ヴァニタスは得心して、ローレライの肩を抱き寄せながら、構造体群を指差した。
「うん。旅をするために必要な物を貰いにいくんだよ」
「こわい……」
「何か感じるのかい？　この間の嵐の夜みたいに」
ローレライの白い髪が左右に揺れる。
「ううん。かんじない。でも、こわれてない『みはしら』は、どれもこわいの」
みはしらとは、機甲塔のことだった。あれがどのような物か知らない未開の亜人には、神か悪魔の業物に見えるに違いない。
ヴァニタスはローレライの頭を撫でて、一言、大丈夫と告げた。
――機甲塔か。
この世界が海に覆い尽くされるより以前から、あらゆる場所に建

つ建築物。それが機甲塔である。
種類は様々。仕組みは複雑。数は膨大。そして建設目的は不明。
大部分が長きにわたる『時』の侵食に敗北し、機能を失っているのだが、稀に稼動状態の機甲塔も存在する。
稼働状態の機甲塔がヴァニタスのような旅人にもたらすものは、恩恵か、はたまた暴力か。それは接触してみるまでは分からない。
大抵は、余程のことがなければ接触しないほうが利口である。
しかし、橋の延伸に必要な具現化結晶体や、高圧縮重金属溶液が尽きかけているヴァニタス達には、利口な生き方を選ぶ余裕もなかった。
そんな自分と同行させることが、果たしてローレライやシレーヌにとって安全なことなのか。
ヴァニタスは少しの間、逡巡した。
だが迷っている暇も、別の道を探す時間もない。
彼は口元に若干の力を込め、その力を笑みに作り変えた。
「さあ、ローレライ、僕はアトラクと橋の建設に取り掛かるから、君は部屋に戻ってて。いい子にしてるんだよ？」
「うん」
素直な返事に、ヴァニタスは顔を綻ばせた。

午前の作業が終わり、アトラクは稼動を一時停止させた。
それを橋の先端で見届けたヴァニタスは、作業経過をタブレットに記録し、お疲れ様とアトラクをねぎらった。
現時点で作業日程に問題はなし。このままいってもらいたいねと、誰にでもなく、ぽつりと漏らす。
まだ午後の作業が待っている。
それに備え、昼食に赴こうとした時だ。
突然、自分の耳に大音量の異音が突き刺さった。
音源はヘッドセット。愛用の品から響きだした聞いたこともない

音に肝を冷やし、アトラクの入口手前で大袈裟に腰を抜かす。近くで警護していたメメント・モリの視線が痛い。

勢いで投げ捨てたヘッドセットから流れているのは、大音量の金属音。ノイズなどという穏便なものではない。離れた場所でもはっきりと音が聞こえる。

狼狽しながらヘッドセットを拾い上げ、ボリュームを調整する。しかし、音量は変わらない。

「どうして……？」

怪訝に呟くヴァニタスの右手から、メメント・モリが大きな声で問い掛ける。

「どうした。何をやっている」

「あ、いや、ヘッドセットが壊れたみたいなんだ。変な音が鳴りっぱなし」

「それで、その耳障りな音がしているのか……壊れたのなら直せ。直せないなら破棄しろ。警備の妨げになる」

「簡単に言わないでよ、まだ原因もよくわからないのに」

「それなら調べろ。調べてから文句を言え」

取り付くしまもない態度に、ヴァニタスは閉口するばかりであった。

ようやく出せた文句も、

「全く、横柄すぎるよ……」

の一言だけ。それも、

「何か言ったか」

と、一際低いメメント・モリの声に食らわれ、あえなく撃退される。

ヴァニタスの尻尾がピンと伸びて、すぐに縮んだ。体は素直であった。

その体が、前方に大きく吹き飛んだ。

勢いは強く、数歩先に待ち構えていたハッチの重厚な扉に鼻面から衝突する。肉の潰れる嫌な音が、ヴァニタスの頭蓋を震わせた。

激痛は烈火の刺激。思考と理性は燃やされ熔かされ、速やかに正体を失う。

されど、そこで痛みに屈するヴァニタスではない。

目の中の星と、鼻から溢れ出る熱い液体に苦慮するも、自分を背後から突き倒した者を見るべく、よろめき立ち上がりながら後方を確認した。

「メメント・モリ……！？」

予想通り、ヴァニタスを突き飛ばしたのはメメント・モリだった。彼を突き飛ばした姿勢のまま固まっている。

文字通りである。『固まって』いるのだ。

虹色の光沢を放つ、半透明の固形物。それが彼女の体を包む物体だ。首から下を丸ごと包み込み、琥珀の中の蜂に変えている。

右手を突き出した躍動感のあるポーズは、ヴァニタスを突き倒した瞬間のものだった。そんな躍動感ごと封じ込めるとは、一体どれほどの速度で凝固する物体なのか。

唯一凝固を逃れた頭部が、忌ま忌ましげに舌を打つ。

「くそ、これだから鈍臭いやつの世話は嫌な……おい、大丈夫か？出血が酷いようだが、平気か？」

「おかへはまへ……」

大量の鼻血に阻まれて、正しい発音もままならない。しかし、ヴァニタスはメメント・モリを非難するような視線は投げなかった。

少しだけ、嬉しさのが勝ったのだ。

彼女が身を呈して自分を救ってくれたことと、身を案じる言葉をかけてくれたことへの、嬉しさが。

鼻血をハンカチで拭い、動けぬメメント・モリに近づく。

見たのは初めてだが、この虹色の物体は、ヴァニタスの知識にあるものだった。

高速膨張捕獲弾頭。僅か直径５ミリの弾頭が、命中と同時に破裂して、内部の増殖ジェルを吐き出し、目標を包み込む捕獲弾頭である。

増殖したジェルは急速に固まり、鋼鉄並の強度となって、目標の自由を完全に奪う。力ずくで抜け出すのは至難の業だ。ジャガーノートと言えど例外ではない。

「くそ、私が拘束技師を救うことを見越して狙ったのか」

姿の見えない襲撃者は、メメント・モリ本人を狙っても、回避される可能性が高いと判断したのだろう。そこでヴァニタスを狙い、彼を救ったメメント・モリが身代わりに捕獲されることになったのだ。

ここまで先を読んでの襲撃ならば、かえって追撃がないことが不気味である。余裕の表れなら相手の底が知れるが、さらなる一手への布石だとしたら、対応は困難極めるとメメント・モリにも焦りが生じる。

「拘束技師、物影に隠れろ。何者かに襲撃されている。まずい状況だ。追撃がないのがむしろ異様だ」

まずは態勢を整えること。

メメント・モリが一気呵成に伝えると、しかしヴァニタスは首を振って提案を断った。

貧弱な少年にうっちゃりを喰らって、メメント・モリの表情が険しくなる。

「君がやられたら、僕らは戦う術を失うことになる。君を見捨てることは、僕ら自身を見捨てることになるんだ」

いつもの気弱な少年の顔は、そこになかった。

真っ向から心をぶつけてくる少年の眼差しに、寸毫の間、メメント・モリの表情が変化した。

それにヴァニタスは気づいただろうか。

「待って、今、解除信号を解析してみる」

言うが早いか、ヴァニタスはメメント・モリの足元に屈み込んで、ジェルの端にタブレットの端子を接触させた。

「解除コードを解析して拘束を解くつもりか？　無理だ。どれだけ時間がかかると思っている。そんなことをしている間に襲撃者が来

るぞ。分からないのか、今、ここにミサイルの一発でも撃ち込まれれば、二人ともやられる。それだけは避けないとならないのだ」

メメント・モリにしてみれば、いつ追撃が来るのか、気が気でない。

機械仕掛けの紅い瞳が、せわしなく周囲を見る。

彼女は周囲を最大感度で索敵しながら、それ以上の労力を使って、拘束技師の説得を行った。

「私にとっては、お前の保護順位はアトラクの次になるが、保護対象に入っていること自体に変わりはない。ゆえに、アトラクに危険が及ばない範囲で、お前の生存に危機的状況が及んでいる場合、全力で……」

ヴァニタスの反応はない。彼の意識は、タブレットを操作することだけに傾けられている。

それを無視と捉えたか。

メメント・モリがこめかみを震わせ、歯を食いしばった。人間なら、顔が赤くなっているところだろう。

そして、遂にメメント・モリが吠えた。

普段より、遥かにトーンの高い幼げな声で。

「だあー！　もう！　早く逃げてって言ってる！　この、あほ猫ヴァニタス！！」

「できた！」

メメント・モリの怒声に重なる、ヴァニタスの歓声。

同時に、タブレットから流れる電子の信号は鍵。それは固まったジェルを融解させる、解除コードである。

少年は、熟練のエンジニアでも一日がかりの解析を、ものの数十秒でやってのけたのだ。

ジェルは一瞬で溶けて、メメント・モリを解放した。よもや解放されると念頭になかったメメント・モリは、大幅に態勢を崩し、目の前に屈んでいるヴァニタスへと倒れ込んでしまった。

ヴァニタスに、彼女を避ける運動神経があるわけもない。

重力に踊らされて重なり合う、二人の青く短い悲鳴。
回る目を元に戻せば、そこにはお互いの鼻先と、触れ合う間近の唇があった。
距離にして、数センチ。
この広大な海に比べれば、限りなく零に等しい距離にある、少年と少女の柔らかい唇。吐息すら互いに共有できる距離は、特別な相手との特別な契りの距離である。
止まりかけていたヴァニタスの鼻血が、再び出血し始めた。もんどりうった拍子にまた鼻を打ったのか、それともうぶな心臓が張り切りすぎているのか。
脱兎の如く飛び跳ねたのは、メメント・モリだ。ヴァニタスに背を向け、前傾姿勢で構える。どこかぎこちないのは、本人だけが知ることのできる僅かの差だった。
「拘束技師、臨戦態勢だ！　アトラクの防御機構を一段階上げろ！」
「あ、うん」
ヴァニタスもぎこちなく立ち上がり、雑音鳴り止まぬヘッドセットを拾い上げ、アトラクに駆け込む。
見送ったメメント・モリは索敵に意識を集中させた。そうしなければ、余分な雑念が次から次へと沸いて来るからだ。
――私は、さっき、何と言った？
自分の口から出た台詞が、明らかに自分のものでない文体で構成されていた。まるで一瞬電脳を乗っ取られたかのような違和感が、脊椎を走り抜ける。
――あれは……私自身が言ったのか？　それとも……
心の中で、綿毛のような掴み所のない疑念が、ふわりと舞い始める。
電脳にたまさか浮かぶ『電気羊』という単語。
気にも留めていなかった。どうせ記憶素子に累積した、ジャンクデータの一つだろうと考えていたから。
何故か、それが気になり出してしょうがない。

だが、今は考えていても始まらない。危険が迫っているのに、戦い以外のことに電脳のリソースを割いてどうするのか。

メメント・モリはジャガーノートの本分を果たすべく、右手を横に突き出した。

久々の具現化武装。

暴力の権化を右手に宿すべく、彼女の電脳が電子の蛇を呼び起こす。

しかし。

「なんだと……？」

メメント・モリは、戦いの最中であることも忘れて、右手を凝視していた。

そこには、金属の右手があった。

先程と少しの変化もない、普通の右手が。

最悪の予想が電脳と補助電脳を行き来する。それを覆すため、左手を横に伸ばし――――

結果、予想は確定的な事実となった。

破壊者。それは、破壊を行うための暴力を備えているからこその称号。

メメント・モリは、その称号を冠するに相応しくはなかった。

己の両手を顔の前にかざして、わなわなと震える指先を一つずつ、目に焼き付ける。

具現化武装できない、ただの金属の指。なんと頼りなく見えることか。

メメント・モリを支えていたのは、己が強者であるという『思い込み』だったのだから、この事実は、彼女の存在意義そのものを打ち砕く威力を持っている。

うちひしがれた表情は、幼く、儚く、頼りない。

哀れであった。

襲撃者の追撃がないのは、彼女の哀れな様を、どこかでひっそり、楽しんで眺めているからなのかも知れない。

「なんで、こんな……こんなことに……」

メメント・モリは、知っているのだろうか。

遥か昔。

絶望と共に、同じ台詞を吐いたジャガーノートがいたことを。

第四章　６４８－１９８３　『先鋭者たち』

ジャガーノートは力の権化だ。

強大な兵器を人間サイズの体に収納し、あらゆる状況で、あらゆる敵性対象との交戦及び殲滅を目的として作られた、全天候対応型の人型戦艦だ。余りある力にて、敵を滅ぼすことに全てを傾ける破壊兵器が、彼女らの本質である。

ならば、その兵器が戦う力を失えばどうなるか。

そうなれば、ただの機械仕掛けの人形でしかない。儚い少女の顔を備えた、重たいだけの鉄の塊でしかない。

自分がその鉄の塊になってしまったことに、メメント・モリは狼狽していた。電脳をかき乱された彼女の視線は、前に突き出した自分の右手に絡みついたまま、離れようとしない。

無力になる。戦う力を失う。

その二つの言葉が、メメント・モリの頭の中で回り始めた。その回転が渦を生み出し、渦の真ん中から、タールじみた不快な感覚が泡立ち始める。

感覚の中に、何かがいる。

四匹の蛇。

深く暗い、終わりの穴。

ずぶどろ――

「違う！！　終わりじゃない！！」

――なにが？　私は、なにを？

奇妙な記憶が電脳の削除不可能領域に残っているのか。自分の発した意味不明の言葉に、メメント・モリはいよいよ気味が悪くなってきた。

頭を振って、不要な全ての感覚を追い出す。いま成すべきことは現状の把握だと、彼女は自分に言い聞かせた。

――――具現化できない原因は！？　補助電脳、推測しろ！

戸惑いながらも原因の究明すべく、二基の補助電脳と三者推論を開始する。コンマ数秒の討論の後に出てきた答えは、三十五通り。しかし、どれも推測の域を出ないような、あやふやなものばかりだ。

補助電脳へ悪態を吐く。苛立ちを抑えられない。

そこへ、彼女の気持ちなどお構いなしと、気の抜けた声がぷかりと浮かんできた。

「あー、なーんか、いらついてるところに悪いんだけどー」

若い女の声。真正面からだ。

声の飛んできた方向に、メメント・モリが意識を向ける。

だが、そこには何もない。作りかけの橋の先端が虚しく潮風に吹かれているだけだ。にも関わらず、そこから確かに声は飛んできた。

ジャガーノートのセンサーを欺くほどの何かがいるのか。

メメント・モリの表情が歪む。それがおかしかったのだろう。見えない声の主は、ぬふと含み笑いを漏らした。

「ジャガーノートでも見つけらんないよー。このあたしが作った多機能迷彩は、じつーに優秀ぽん」

勝ち誇った声だった。だが事実、メメント・モリには、声の主を捉えることが出来ない。動体、赤外線、電磁波、全てのセンサーに反応がない。

だが『声』は例外だ。

ジャガーノートの聴覚は、フクロウと呼ばれていた絶滅種のそれに近い。音源の方向を立体的に認識する能力に優れているのだ。近距離の音の発生地点を割り出すなど、造作も無いことだった。

口は災いの元……そう言わんばかりに、メメント・モリの足が後方に振り上げられた。

「あ、ちょ、まず」

焦る声。

お構いなく、メメント・モリの足が唸りを上げる。

耳をつんざく金切り音が橋の上で乱舞した。

呼応するように舞い踊る、無数の青い火花。橋に落ち、二三度跳

ねて、虚空に消える。
何もない空間に生まれた火花は、メメント・モリが蹴り出した金属片が、何か強固なものに衝突した結果の産物であった。
メメント・モリの狙いは間違っていなかった。問題は効果があったかどうかだが、果たして。
「うひゃー、容赦ないな。こいつ」
またもやぷかりと気の抜けた声。ダメージのある者の声ではない。
「声は迷彩できないと、俺に散々講釈を垂れていたのはお前だろう、クァン。なにを考えているんだ」
新たに生まれた声は、重厚な男のものだった。
これで、敵は最低でも二人いることになる。
ならば畳み掛けるのみと、メメント・モリは火花の散った地点に突進した。
小さな破片を弾丸に変える脚力。それを推進力に、全身を弾丸へと昇華させる。
――一泡吹かせてやる！
メメント・モリは衝突の衝撃に耐えるため、歯を食いしばった。
その衝撃が、まさか上から降ってくるとは、彼女も予想だにしていなかった。

跳ねまわる視界。悲鳴を上げる平衡機能系。内部フレームの軋みは、支離滅裂なノイズとなって電脳を嬲る。
ノイズが消えた後、二度、目を瞬かせる。
クリアーとなた視界に映り込むのは、橋の表面。それだけだ。
もう一度瞬く。変わらない視界。もはや疑う余地はない。
三度の瞬きを経て、メメント・モリは橋の上にへばりつく自分の無様を認識した。
しかし、何が自分の身に起きたのか、理解することが出来ない。
混乱する主電脳の代わりに、補助電脳が答えを導きだしたのだが、

それを認識するのもおぼつかない有様だった。
数秒もの時間をかけ、自分の電脳内に送られた答えを理解する。
――――上方からの、極めて強大な衝撃？
どうやら、自分の突進と、それをはるかに凌駕する上からの衝撃が混ざり合い、その合力を全身にくまなく味わってしまったらしい。
これが生身の人間だったら、原型を留めていなかっただろう。
ようするに、メメント・モリは叩き落されたのだ。何か、とてつもない力に。
――――叩き落す？　私を……虫けら扱いだと？
屈辱に歯が鳴る。怒りに駆動系が熱を帯びる。
否定しなければならない。虫けらでないと、この世の全てに、手始めに二人の敵に対して。
メメント・モリの腕に力がこもる。
それを許す敵ではない。
メメント・モリの頭部に『力』が叩きつけられた。
数瞬の間に、電脳がダウンと再起動を繰り返す。損傷率の計算もできない。意識の維持も、現状の把握もできない。
初撃とは比べものにならない威力に、頭部のフレームが明らかに歪んでいた。
その衝撃が背中に、そして腕に、足に。
全身を丁寧に一撃ずつ打たれ、骨格が歪み、メメント・モリは完全に沈黙した。
敵は油断などないようだ。動けなくなった彼女の体が、強い力で押さえ込まれる。虫けらを標本台に縫いつける止めのピンと言ったところか。
「ぐ、うぐ……」
メメント・モリは呻いた。苦しくて呻いたのか、悔しくて呻いたのかは、彼女のみぞ知る。
動けない。ジェルから逃れたのに、またもや同じ目に遭うとは。
メメント・モリは己の臍（ほぞ）を噛み千切りたくて仕方がなかった。

「はいはい、抵抗やめる。攻撃しない。これだけ戦力差があるのに、あんた勝てるー？察しなさいよ、全く」

女の声は、メメント・モリの頭の上から落ちてきている。どうやら近づいてきたようだ。

駆動不全に陥った頚椎部を動かし、わずかに顔を起こす。

やはり、声の場所には何も無い。

具現化武装さえ出来れば、そこめがけて鉛玉をばらまくのだが、仮定の話を敗北者が語るのは虚しいだけである。鉛玉がわりの歯ぎしりが、せめてもの抵抗だ。

「うわ、めっちゃおっかない顔。どーしてあんた達『ココペリ』は、そう攻撃的かなあ。って、あたしが言うのもなんだけどさー」

最後の間延びした声に、何かの作動音がかすかに混ざった。

すると、空間が『溶け始めた』ではないか。

何もなかった場所に次第に色が生まれ、形が備わり、輪郭が生じる。それは過不足なく、規則正しく混じり合い、細部を鮮明にしていきながら、一人の女性へと姿を変えていった。

メメント・モリの表情が、怒りから驚嘆に変移する。

長い黒髪。白く柔らかそうな肌。細い手足。やる気のなさそうな表情に、ふかすタバコの紫煙がまとわりついている。アプカルルのほうが、まだ生命力があるのではないだろうか。

だが、この女は希少種であった。いや、絶滅種といっても過言ではない。メメント・モリの知る限り、この種は『滅んだ』はずなのだ。ゆえに……古のもの（エルダー・シング）と呼ばれているのだから。

ジャガーノートを驚かせた女は、右手に持った円錐状の装置を弄ぶように操作し、「ほいな」とやる気のない掛け声一つ、メメント・モリの上の辺りに向けて、円錐の先端を向けた。

すると、女が現れた時と同様の工程を経て、空間から巨体が滲み出してきた。

巨体の作る影に、メメント・モリはすっぽりと収まった。胴体部だけでメメント・モリを内側に収めきれるほどの巨体だ。

影の主を視界の端に映したメメント・モリは、またもや驚嘆することになった。

力にあふれた姿だった。純粋な力が重厚な機械の体に宿り、この世に顕現した存在そのもの。巨大な鉄の腕は、振るうだけで全てを砕けそうだ。この巨大な拳に叩き落されたのだと、メメント・モリは理解し、納得した。

そして希少価値では、この巨人も黒髪の女に負けていない。

――こいつ、もしかして……ドレッドノート!?

自分を押さえつける者の正体を知り、戦慄に言葉を失う。

「これじゃ、あたしら悪役みたいなんで、誤解のないように謝っとくわ。ごめんねー。ああ、でも、あんたらからしたら、悪役か」

クァンと呼ばれた女が屈みこみ、メメント・モリと顔をあわせた。

「はじめまして、あたしクァン。こっちのデカイのがロンガゥ。よろぴこ。んで、さっそくなんだけど、お願いがあるんだー。聞いてくれる?」

煙草をふかし、誠実さの欠片もない態度を取るのは、果たしてわざとだろうか。

「断ったら……?」

「んー。全身くすぐるー」

「ふざけるな!」

「あ、ふざけてるってばれた。何故だー。ロンガゥ、こいつ読心術使えるわよ。やっぱりジャガーノートは凄いわねー」

「……俺が話すから、少し黙っててくれないか」

クァンの不真面目さに付き合いきれない点は、メメント・モリもロンガゥも一致していた。

ロンガゥの眼窩のない髑髏の頭部が、メメント・モリを見下ろす。想像を絶する威圧感に、メメント・モリの補助電脳が一瞬フリーズしてしまった。

「お前が敗北したことによって、お前の拘束技師は戦う術を失った。また、お前達の有する兵器類は、我々の『越権領域(エルダーサイン)』に入った時点

で、完全に無力化された。対抗処置は無意味だ。それすら無効化する」

ロンガゥの台詞に、メメント・モリは合点がいった。その仕組み上、電子対抗処置が施せない具現化武装装置や、ヴァニタスのヘッドセットが役に立たなくなったのは、どうやら、この二名の仕業らしい。

「アトラク＝ナクアも動かないはずだ。つまり、逃走も不可能。今頃、拘束技師は焦っていることだろう」

メメント・モリの脳裏に、慌てふためくヴァニタスの情けない姿が浮かぶ。あまりに明瞭に思い浮かんだものだから、彼女はロンガゥの台詞を否定できなかった。

「……私達をどうするつもりだ」

メメント・モリにとって最大の関心事は、そこだった。問う表情も自然と険しくなる。

ロンガゥとクァンが目を合わせた。

答える役を買って出たのは、クァンだった。

「運ぶわ。あそこへ。私達の住処へ。貴方達、全部ね」

クァンの細い指が、巨大構造群を示した。

同時に、橋と構造物の中間の海が泡立ち始めた。

泡は徐々に大きさと数を増し、それが頂点に達した瞬間、海を割って巨大な怪物が姿を現した。

表面に海草や貝類をこびりつかせた赤黒い化け物は、アトラクさえ運ぶことの出来る、超大型潜行輸送艦だった。

しかも、それだけではない。

潜行輸送艦から、二十人ものアプカルルが出てきて、甲板で何かの準備を始めている。甲板の倉庫ハッチを空け、クレーンユニットを起動している動きは手馴れたものだ。良く見れば、彼らが着ているのは原始的な海藻類で出来た服ではなく、ヴァニタスが着るような、化学繊維によって織られた作業着ではないか。

従来の原始的なイメージとは程遠い。あのアプカルル達は高度な

技術をものにしている。
誰がもたらした技術か。問うまでもない。
メメント・モリはクァンを見つめた。その視線が言いたいことをクァンは察し、口元に薄く笑みを浮かべた。
用意周到にして、迅速。間違いなく、今回初めて、アトラクやジャガーノートを捕らえるわけではない。
やりなれている――生業のように。
手付かずの宝箱の正体が、追いはぎ達の根城だったことを、メメント・モリは悔しさと共に悟った。

アトラクの巨体をも潜行輸送艦は易々と飲み込み、内に収めてしまった。
同じように、アトラクと共に旅するヴァニタスも、この赤黒い鉄の魚の中で、憂鬱に沈んでいる。
彼がいるのは、乾ききったパンのように固いベッドと、椅子が一つしかない、独房風の部屋だった。当然と言うべきか、警備も鍵も厳重。抜け出せる見込みはない。
アトラクから引きずり出され、ここに押し込められてから、ヴァニタスは尽きない溜め息に悩まされている。
ヴァニタスは部屋の入り口に向かって右手の隅で、膝を抱えて丸まっていた。椅子にはローレライ、ベッドにはシレーヌがそれぞれ腰掛けて、そんなヴァニタスの様子を心配そうに見つめている。
抵抗しなかったわけではないが、メメント・モリが捕獲されている様を見せ付けられては、大人しく尻尾を垂れるしかない。
己の不甲斐なさを源に、ヴァニタスの溜め息は無尽蔵に生まれてくる。
「ごめんね、二人とも……こんなことに巻き込んでしまって」
ヴァニタスの謝罪に、ローレライは全身で否定し、シレーヌは無言で横目に見つめるだけだった。

シレーヌの表情から、彼女がこの事態をどう思っているのか、ヴァニタスには推し量ることが出来なかった。

少なくとも、感謝はしていないはずである。この部屋に閉じ込められてから、彼女は一度もヴァニタスと会話をしていない。ちらちらと目配せのように様子を窺ってくるのだが、ヴァニタスが声をかけると、場合によってはそっぽを向いてしまうのだ。

本格的に嫌われたかと、ヴァニタスは特大のため息を漏らした。

そのため息が床を這って反対側の壁に触れた時だ。

「入るぞ」

やや神経質な雰囲気の太い声が、入り口の扉に設けられた格子窓から、部屋の中へ転がり込んできた。

全員の視線が扉に集中する。ヴァニタスは立ち上がって、ローレライの横に立った。

ローレライの手が、ヴァニタスの服の裾を握る。

ヴァニタスは震える幼い手をそっと左手で包んだ。青い猫目は、不協和音を上げて開く扉を見ている。

扉が開け切る前に、狭い部屋に三人の男が入ってきた。

全員アプカルルだ。ただし、まとう服は合成繊維の戦闘服。通常の刃物では繊維一つ切れないだろうと、ヴァニタスは看破した。中央の男以外の二名は、それに加えニードルライフルを両手で持ち、いつでも構えられるように気を張っている。

中央のアプカルルが、クリップボードにペンを走らせながら、神経質な太い声でヴァニタスに「お前」と声をかけた。

高圧的な響きであった。

「まず名前だ。次に年齢、性別」

基底言語で早口に喋る。性格なのだろうが、狩りをして家族を養うアプカルルの男としては、魅力に欠ける話し方だ。

そんな相手に素直に答えるのも癪だが、逆らうだけ馬鹿を見ると、ヴァニタスは、理不尽な流れに従順な態度を示してみせた。

「ヴァニタス・ヴァニタートゥム。アプカルルの年齢計算方式なら、

十四歳に該当。男です」
アプカルルがメモを取っていく。事務的な動きだった。
「次。お前だ。基底言語は話せるな」
ペン先で、シレーヌを差す。目を向けようともしない不遜な態度は、文明を知る優越感から来ているのか。
「あ、はい。話せるみたい……です」
「なら、早くしろ」
「あ、えっと」
「名前からだ」
ペンを上下に揺らす。
相手を苛立たせてしまったことに、シレーヌが色を失った。
「すみません、あの、シレーヌです。今年で十八になりました……あの、性別は」
「言わんでもわかる。そんなでっかい乳を二つ、これみよがしに下げてればな」
と、この台詞にシレーヌは赤面してしまった。アプカルル三人の視線が、豊満なシレーヌの胸に注がれていることが、赤色をより強くする。
「最後。お前」
不遜のペン先は、最後にローレライを示した。
ヴァニタスの服に走るしわが深くなる。しわは、ローレライの手から広がっていた。
ローレライの素性を考えれば、ここで本名を名乗らせるのはまずいことだった。偽名で切り抜けるしかないが、一つ問題があることにヴァニタスは気づいていた。
ヴァニタスはシレーヌを尻目に見た。彼女はこちらを睨んでいる。彼女がローレライのことを忌み子と嫌っていたのは、まだ記憶に新しい。
偽名を使った瞬間、シレーヌが暴露する恐れがある。ヴァニタスは、万事休すと両手を握り締めた。

ヴァニタスは乾く唇を開き、息を大きく吸い込んだ。
「この子は、エリーネ。私の妹です。年齢は七。まだアダパの儀もすんでいない幼い娘です」
流水のごとく紡がれる、ローレライの虚構の素性。虚構である点を除けば、完璧この上ない内容だ。
されどその虚構を紡いだ唇は、ヴァニタスのものではなかった。彼は、その虚構を紡いだ唇を驚きと共に凝視している。
シレーヌは毅然と、ただ毅然と、アプカルルにとって最大の禁忌を、ささやかな虚構で覆い隠したのだ。
「エリーネか……ふむ。お前達姉妹は、この拘束技師とどういう関係だ？」
「海で死にかけているときに、救われました」
「そうか……」
不遜な男は、ペンを胸のポケットにしまうと、脇にクリップボードを抱え、ヴァニタスに向き直った。
そして、年端も行かぬ少年に、彼は丁寧に頭を下げたのだ。
同族を救った少年へ、礼を欠かさぬようにと。
ヴァニタスは、二人のアプカルルに対する見識を改めなければならなくなった。

幾つかの質問を行った後、アプカルルの三人は扉をくぐり、鍵をかけて去っていった。
彼らの靴音が遠ざかっていく。その音量に反比例して増える安堵感。ヴァニタスの吐き出すため息の色が変わる。
「ありがとう。シレーヌさん。本当に……」
シレーヌと向かい合い、ヴァニタスが頭を下げた。ローレライも、彼の横でぺこりと頭を下げている。愛らしい仕草である。
しかしシレーヌはそっけない。
「勘違いしないで。助けてくれた礼を返しただけ……忌み子を嫌っ

ていることに、変わりはないわ」
「それでも、ありがとう。シレーヌさんのおかげでローレライが助かったことは、間違いないから」
「あ、えと……ん……」
「シレーヌさんが優しい人でよかった」
「……も、もう放っておいて」
口を一文字に結んで、ベッドに身を預けるシレーヌ。ヴァニタスとローレライの二人に背を向け、壁と見つめ合う彼女の表情は、ヴァニタスにはうかがい知れない。だが、仮に見たとしたら、きっと猫目を丸くしていただろう。
ヴァニタスはローレライを椅子に座らせ、シレーヌの寝るベッドの端に腰掛けた。
一難は去ったが、これから何が待っているか分からない。メメント・モリも捕らえられ、自分達もアトラクも、また。
――一体、彼らは何者なんだ。
この船が向かう先だけは分かっている。あの巨大構造体だ。
そこに待ち受けているものが何か。
そこで、何と出会うのか。
若き拘束技師は、まだ己の定めを知らなかった。

第五章　６４８－１９８３　『偽装都市インスマス』

尋問からほどなくして、ヴァニタスら三人は部屋から出ることができた。

前後を武装したアプカルルに監視されながら、三人は迷路のような船内を歩き、いくつもの階段を昇る。アトラクを収納できるだけあって、船内の広さは相当なものだった。

通路はアトラクの内部に酷似している。強いて相違点を上げるのならば、冷光灯の設置量が二倍近いことと、所々赤錆が浮いているという二点か。通路の幅もそれなりにあり、ときたま対面からアプカルルが歩いてきても、道を譲りあう必要もなくすれ違うことができた。

「おおきいね」

ヴァニタスと手を繋ぐローレライが、素直な感想を述べる。

「うん。大きい。凄いね」

ヴァニタスも同様の感想を述べると、猫毛を逆立て小さく身を震わせた。

寒いのだ。ただし、船内温度が寒さの原因ではない。

彼は、少し離れてついてくる寒波の主をちらりと見た。

寒波の主はシレーヌだった。半眼気味の目でヴァニタスの背中を見つめているのだが、その視線の温度は深海のごとし。ヴァニタスの背筋が震えるのも道理であった。

自分が凍えさせられる理由は一体なんなのだろうか。分からないと、ヴァニタスの首がひねられる。

――――なんだろう。怒っているような、そうじゃないような。僕、なにかしたかなあ。

思い当たる節もなく、しかし不可解な視線を無視できるような座った肝もなく。

ヴァニタスは落ち着かない気分を抱えたまま、案内されるに任せ

て先へと進んだ。

部屋を出されてから、五分近くが過ぎただろうか。

すでに軟禁されていた部屋から三階層上に至っている。いい加減、どこに向かっているのか、先導するアプカルルとに問いかけようと思い始めた頃、ヴァニタス一行は、やや開けた空間へとたどり着いた。

――――これは……

ヴァニタスが瞳孔を全開に、開けた空間を見渡す。

入り口の真正面に、上下開閉式の巨大なハッチがある。巨獣のあぎとにも見えるハッチは、至る所に赤錆を浮かせてはいるが、構造そのものの頑健さから考えるに、微塵も強度を衰えさせていないだろう。

天井にある明かりは球形の冷光灯一基のみ。部屋の広さに比べて光量がやや足りていない。

その薄闇の中、部屋の入り口からハッチに到る両脇の壁に、幾人もの巨人が並び立っていた。

気づいた瞬間、ヴァニタスが息を呑む。ほぼ時を同じくして、ローレライが腕に抱きついてきた。

「これは……」

今にも襲いかかってきそうな威圧感にヴァニタスの耳が伏せられるが、どうやらそれは思い過ごしのようだった。巨人たちは身じろぎもせず、壁に身を預けているままだ。

――――危険はないか。

落ち着きを取り戻したヴァニタスは、猫目を見開き、つぶさに巨人たちを観察する。

大きい。身の丈五メートルはあろうかという巨人だ。生き物ではない。表面は赤錆の浮いた金属に覆われ、関節の隙間から見える内部構造は、自分たちが機械仕掛けであることを訴えている。

彼らは人間を模して作られたのだろう。しかし、やたらと胴と腕が大きく、逆に脚は極端に短い。頭部には複雑な機械類が備わって

いるが、波打ち絡まる機械類はどことなく臓器のようにも見えて、見るものにグロテスクな印象を与える。

この二十体にも及ぶ巨人達は、この船の守護者か。それにしては、整備されているような雰囲気もない。むしろ打ち捨てられた廃棄物と言われたほうが納得できそうだ。

だが、動かずとも威圧感は充分に備えている。ローレライもシレーヌも、ヴァニタスの背後に隠れて怯えたままだ。

「怖がらなくていいよー。それ、もう動かないから」

気の抜けた声が、巨人におののく三人を背後から襲う。

つられて三人共に振り向けば、やる気のなさそうな黒髪の女と黒い巨人が、入り口に立ってこちらを見ていた。

「ご苦労様。あとはあたし達がやるから、持ち場に戻っていいよん」

と言って、女が紫煙をくゆらせた。

ヴァニタスらを連れてきたアプカルルが敬礼し、規則正しい足取りで戻って行く。よく訓練された兵士の動きである。

兵士の足音が聞こえなくなったのを確認し、女――クァンがヴァニタスに向かって微笑んだ。

この二人の姿をヴァニタスは知っている。アトラクのモニターで、彼らがメメント・モリを手玉に取った一部始終を見ていたからだ。

「ういっす。あたしはクァン。こっちのデカイのがロンガゥ。よろしくー」

「あ、はい、よ、よろしく……お願いします」

つい丁寧に返してしまったが、ヴァニタスは、この二人から並々ならぬ雰囲気を感じ取っていた。特に黒い巨人の方に対しては、内心、恐怖に近い感情を抱いている。

大きさこそ壁際の巨人の半分しかないが、物言わぬ二十体の巨人などと比べものにならない迫力を持っている。眼窩のない髑髏のような頭部が恐怖心を煽るためのデザインならば、効果てきめんと言わざるを得ない。

――ドレッドノートが現存してるなんて……どういうことなん

だ。
有り得ない存在に意外な場所で出会い、そいつにこれから何をされるのか、予想もできない。
自然とヴァニタスの体に力がこもる。
しかし、力を込めすぎたらしい。
「い、いたい……」
ローレライの小さな悲鳴に、ヴァニタスは自分の手が握るものを思い出した。
「ごめん、痛かった？」
慌てて手を離す。
ローレライは健気に笑って、だいじょうぶと囁いた。
「僕ちん、駄目だよー。ちっこい子を泣かせちゃ。おねーさんが教育しちゃろか？」
クァンが意地の悪そうな笑みを前面に、失態に慌てるヴァニタスをからかう。
まるでカルディエのような茶化し方だと思いつつ、ヴァニタスは強い口調で断った。
「あらま、つれない。こんな美人のおねーさんが気持ちいーことしてあげるっていってるのに、もう、うぶな猫ちゃんなんだからあ」
「猫ちゃんじゃありません。ヴァニタスです」
「あ、怒った。めんごめんご、ヴァニたん」
「変なあだ名付けないでください」
いつになく反抗心の強いヴァニタス。尻尾も左右に揺れて、正真正銘の猫が獲物との間合いを計っているようだ。
足が震えてさえいなければ、格好がついたのだが。
「ヴァニたん、そんな怒らないでよ。別に危害加えようってわけじゃないんだから。今はね」
「今は、ですね」
「そ。今は。まあ、それも、君たちの態度次第なのだよ。んじゃお願い、ロンガゥ」

指を鳴らし、クァンは隣りに控えていた巨人に合図を送った。
巨人がヴァニタス達に歩み寄る。一歩近づく度に倍増する威圧感に、三人が総毛立ったのは言うまでもない。
「な、なにをするんですか？」
シレーヌの問いかけは半ば悲鳴。ヴァニタスとローレライに至っては、恐怖で脚がすくんでいる始末。
「逃げたら痛い目を見る。大人しくしているのが最良の選択だ」
低く落ち着きのある巨人の声は、有無を言わさぬ強制力を秘めていた。三人は言われるがまま人形のように固まっている。
巨人の右手人差し指が、ゆっくりとヴァニタスの額に伸びていき――
先端で軽くこづく。
「あいたっ」
続いてシレーヌ。
「いたっ」
最後にローレライ。
「やっ」
全員の額に一撃ずつ、極々軽い衝撃を与えると、巨人は満足気に下がっていった。
額をこする三人の頭上に疑問符がぷかりと浮かんでいる。
予想通りの反応に、クァンはご満悦であった。
「ううん、望んだ通りの良い反応。はてな？　はてな？　って感じの顔だねー」
「僕達に一体何を……」
「知りたーい？」
「……できれば」
「じゃあ、お姉さんと気持ちいーことしたら、教えてあげる！」
閉口するヴァニタス。なぜか目を吊り上げさせるシレーヌ。
笑いをこらえるクァンの後頭部を、ロンガゥの拳が軽く小突いた。
「いで。もう、わかたったわよぅ。えとね、今ね、君らが逃げ出し

たり悪さしないように、頭蓋内部に任意変動振動波を打ち込んだのよ。これで、あたしかロンガゥが気軽にちょこっと命令を下せば、君らの頭はポップコーンよろしく内側から」

すぼめた右手の指先を上に向け、それを顔の前に持ち上げると、

「ぽん」

と、言うと同時に開く。

自分たちの末路を想像し、三人の喉がぐびりと鳴った。

「まあ、そんなにおっかなびっくりしなさんな。言ったべ？　あくまで悪さしたり、逃げ出したりしたら。あたし達の言う通りにしてくれてたら、悪いようにはしないよ」

クァンが煙草を携帯灰皿に押しこみ、次の煙草を口に咥えた。何も言わずに巨人の指先が煙草の先端をつまむ。

それだけで灯ったオレンジ色の光に、三人の視線が集まる。

「君らは、とりあえず客として扱われる。ただし自由はない」

クァンの右手がハッチを示した。

それは巨獣のあぎとを開く魔法の鍵。

「この『都市』に部外者が入る場合は特に、ね」

大重量の駆動音を咆哮に、巨獣のあぎとが上下に動きだしたではないか。

驚いて振り向くヴァニタス達の目を、あぎとの向こうに現れた光景が、さらなる驚愕の色に染めあげる。

「これは……まさか……」

続く言葉を喉から出せず、ヴァニタスは驚嘆と感動の混合溶液に、脳をどっぷりと沈めてしまった。

ハッチに連結された金属の橋。橋は透明なトンネルに覆われており、トンネルの外には黒い海中の景色が広がっている。太陽光がまるで届いていないようだ。水深は百メートルは下らない。いや、二百メートル以上は間違いないだろう。

しかも、トンネルの広さはアトラクすら通行可能なほどだ。これほど巨大な通路を水深数百メートルの場所に設置できる技術を、少

なくともヴァニタスは知らなかった。
さらに圧巻なのは、橋の先の光景だ。
透明なドームが海底で淡い光を放っている。光を放つのは、ドームの中でひしめき合う雑多の建造物。居住施設か、工場か、それとも別の何かなのか。
直径は。高さは。ライフラインはどうしているのか。何のためのものなのか。
ヴァニタスの疑問は尽きない。好奇と知識の欲求に突き動かされ、今にも走りだしてしまいそうだ。
勝ち誇った鼻歌を凱旋の歌代わりに、クァンは固まる三人の横をふらふらと通り抜けた。
「さ、行くよい。あたし達の街……偽装都市インスマスへ」
促され、笛吹き男（パイド・パイパー）に引きつられる鼠よろしく、招かれざる客が続く。

インスマスに足を踏み入れる瞬間、ローレライは下腹部を押さえた。
違和感が生まれたような気がしたからだ。その違和感もすぐに消えたので、彼女はさして気にもとめずに、インスマスの中へと進んでいった。

何かが――ぐじりと――産声を上げた。

インスマスにたどり着き、都市の細部を目にしたヴァニタスは、技術を振るう者として、抑えがたい感動に胸を膨らませていた。
高さ百数十メートルに及ぶドーム。その頂点近くまで鬱蒼と立ち並ぶ、強化コンクリートのビル群。ビルの山脈の足元に広がる、工場と思しき数多の設備。立体構造の通路は縦横無尽に都市を繋ぎ、

その上を行き交うアプカルルや、見たこともない種族、高度な機械。
そしてドームを貫き、都市の中央に位置する機甲塔。
その機甲塔は海面まで伸びているようだ。しかし、海上で見えていた機甲塔と、どれも構造が違うように見えると、ヴァニタスは首を傾げた。彼の胸中を察したか。クァンが隣りに立って、気になるかと訊いてきた。
目は機甲塔に向けたまま、素直に頷く。
「あれは、海上のフロートの真下から伸びてるのだ。海上からじゃ、デコイの機甲塔しか見えないようになってんだよねー」
妙に勝ち誇った口調だが、ヴァニタスは気にするでもなく、
「デコイ？　あの中央の機甲塔を隠すため……？　では、あれは、なんの……」
「それは教えられないなあ」
ヴァニタスの前に踊り出て、にやりと笑う。明らかにからかって楽しんでいる様子だ。
「クァン。それ以上べらべらと喋るな。こいつは『ココペリ』だぞ？」
「あら、ロンガゥ、心配しないで。あなたの母親は聡明なのよー。ちゃーんと考えがあって話してるから。でっひゃっひゃっひゃっ」
右の親指を胸に突き立て、聡明さの欠片もない下卑た笑い声を上げる。ロンガゥが頭を抱えたのは必然であった。
母親という単語に、ヴァニタス達が凸凹コンビを交互に見つめる。この女性がこの鉄巨人の母親なのかと、驚いているようだ。
「ほれほれ、鳩がメタルストーム食らったような顔しないで、ヴァニたん。ちゃっちゃと行きますよー」
手をひらひらとさせながら、クァンは一人で歩き出してしまった。
ヴァニタスの頭上から、かすかなため息が落ちてくる。
見上げると、巨人が太い指で金属の眉間をゴリゴリと擦っていた。
――この人も、女の人に引っ掻き回されてるんだなあ。
ヴァニタスは、この巨人が他人でないような、奇妙な親近感を覚

えた。

凸凹コンビと都市の立体通路を歩いていると、多くの存在とすれ違った。大多数はアプカルルだが、中にはヴァニタスと同じ獣人種や、カルディエやロンガゥのようなドロイド系にも出会った。大人だけではなく、子供の姿も少なくない。アプカルルの子供などは、ローレライを見て無邪気に手を振ってくるではないか。

一歩進むごとに、新しい驚きが見つかる。ヴァニタスは自分が囚われの身であることを忘れて、全てに見入っていた。

都市の住民は、みな、人工繊維の服に身を包み、当たり前のように高度な文明の中に生きている。自分の服など、まるでボロのようではないかと、ヴァニタスは心持ち恥ずかしいような気分にさせられた。

うつむくヴァニタスの耳に、大掛かりな機械の音が突き刺さる。顔を上げると、工場から駆動音と共に出てきた車輪付きの台車が、人工硬化セルロースの箱を山ほど積み、どこかへと走り去っていく様が見えた。その工場の脇で、ヴァニタスのヘッドセットに似た通信機を操るアプカルルがいる。どうやら通信先の相手と喧嘩になっているようだ。彼の怒鳴り声に親子連れの獣人が目を丸くし、しかしすぐに家族同士の談笑に戻る。幸せそうな家族から視線をそらすと、道路脇に整然と植えられた植物に水をやる作業用ドロイドの姿がそこにあった。流線型の白いドロイドだ。ツインテール状のアンテナ板が揺れている。もしかしたら子供を模しているのかも知れない。動きにもどこか愛らしさがある。そんなドロイドの様子を年老いた夫婦らしきアプカルルが、ベンチに座ってにこやかに眺めているのは、自分たちの孫でも重ねているからなのだろうか。

ヴァニタスは目眩を覚えた。自分の価値観、世界観を根底から覆される光景に、脳の処理が追いついて行かない。知識としてではなく、現実の世界として味わう都市の空気にさらされ、彼の肺がため息を付く。

生まれて初めて味わう集団の活気。十数年をカルディエと二人き

りで過ごしてきた彼には、何万という人間が共同で描く『都市』という絵画は、あまりにも刺激的すぎる。

どれほど歩いたのかも記憶に残っていなかった。キョロキョロと目を回しながら、視界の端に映るクァン達の跡を機械的についていっただけなのだから、残らぬのも当然である。奴隷でも、もう少し自主性のある動きをするだろう。完全にヴァニタスの心は都市に奪われてしまっていた。

時折、武装した警備人員とおぼしき一団とすれ違ったが、クァンとロンガゥの姿を見るやいなや足を止め、右手を胸に当てて敬礼していった。

ヴァニタスはその様子を後ろから観察していた。どうやらこの凸凹コンビは、この都市でも相当地位のある存在のようだ。

「ういーす。みんな元気でやってるなー。けっぱれー」

ふざけた調子で声をかけるクァンのどこに、敬礼されるほどの能力があるのか、連れられ歩く三人には分からない。もしかしたら、ロンガゥという巨人にも分からないのではないかと、ヴァニタスは怪しんだ。

「にゃはは。インスマスは今日も活気に溢れてますな」

「お前のお陰でな」

ロンガゥが合いの手を入れる。皮肉なのか、事実なのか。

「でしょでしょー。あたしってば凄いのよ。あ、そうだ。君らお腹空いてない？」

クァンが大げさに首を捻り、捕虜兼客人達に問いかける。

捕虜にする質問ではない。ヴァニタスとシレーヌが戸惑う。

そんな二人に構わず、ローレライだけが快活な声で「はい」と返した。

思わずヴァニタスが目を瞬かせる。

「にゃは、いいね。いいよー。子供は食べてなんぼ、でかくなってなんぼだよー。えーと、確かエリーネちゃんだっけ」

偽名で呼ばれ一瞬反応が遅れるが、ローレライはコクリと頷いた。

「よし。んだば、おねーさんがなんか食わせちゃろう。ここの食べ物は旨いぞー」
「おい、クァン、そんなことをしている時間は」
「ロンガゥー？　ちっちゃい子にご飯もあげないで連れ回す……あたしゃ、そんな非情な人間にあんたを育てた覚えはないわよー？」
「……はぁ」
巨人の溜息は重たかった。巨躯だからというわけではあるまい。
益々ヴァニタスのロンガゥに対する親近感が強くなる。
「あたしに任せてよ。どこでもいいっしょ？」
「ああ、好きにしろ。もう好きにしろ」
「よっしゃ、ロンガゥ隊長殿のお許しも出たし、君等にインスマスのお料理をご馳走してしんぜよう！　者共ついて参れー！　なーんてねー。にゃははは」
タバコを大きく吹かし、住宅街へと向かうクァンの足取りのふざけた調子たるや、まるで酔っぱらいのごとし。一体この人物は、どんな目的で自分たちを捕らえたのか。
己がどのような立場に立たされているのか、ヴァニタスは全くわからなくなってしまった。

第五章　６４８－１９８３　『篭絡の淫魔』

変人の案内する場所だ。さぞかし奇妙な場所に連れていかれるのだろうと予想していたヴァニタスだが、見事大当たりであった。

人々の奇異の目に晒されながら、住宅街と思しき建築群を抜け、狭い路地に入り、幾度も角を曲がる。周囲の景色が次第に陰鬱としてくるにつれ、よもや人目のつかない所で自分たちを『料理』するつもりなのではと、ヴァニタスが物騒な不安を覚え始めた矢先だ。

そこにクァンの目的地が現れた。

ヴァニタスは、巨大な幻光海月（ネオンライトジェリーフィッシュ）がそびえているのかと錯覚してしまった。

赤、黄色、桃色。多様に明滅する電球に、これでもかと飾られた壁。正面に備え付けられた眩しい電飾の門。その上にあるのは、崩した字体で書かれた看板。そこには基底言語で『尖塔の街』と書かれていた。尖塔と名乗るくせに、形状は四角。看板に偽りがある。

三人の虜囚は言葉を失うばかり。世界は広いと実感する余裕すらない。

なにゆえ、この建造物はこんな人気のない所に、人目をひく姿で建っているのだろう。ただひたすらに無機質な橋を作るばかりだった少年には、その意図が測れなかった。

彼らを尻目に、クァンがふらふらと前に出た。門の脇に立つ屈強なアプカルルの男へと、酔歩にて近づく。

男はクァンを見るやいなや、いかつい顔を青色に染め、兵士が上官にするように、かかとから頭まで一本の芯を通して直立した。

一言二言、クァンが男に何かを告げる。すると彼は小刻みに頷いて、建物の奥へ消えていった。

満足気に胸を張るクァン。対照的なのはロンガゥ。

巨人は盛大に肩を落とし、母の名を呟いた。

「クァン……」

その呟きのか細さと言ったら、ヴァニタスもシレーヌも、それどころかローレライまでもが心配になるほどだった。
「あによー。好きにしろって言ったじゃーん」
「言ったがな……ここは客人に料理を振る舞う場所か？」
「接待にはもってこいですぅー。ちなみに料理もおいしいですぅー。いっつも食いに来てるあたしが言うんだから、信じろ。信じなきゃ解体しちゃうぞ。にゃっははー」
「……小さい子がどうの、非情がどうのと言った奴が、ここを選ぶのか。まさか、お前……」
「社会勉強、社会勉強。可愛い子には、旅をさせろー！　ってねー。ほれ、さっさと中に入って個室に行きましょう。用意させてるから。そこなら小さい子の教育にも悪くはないでしょーよ？」
しばらくして、アプカルルの男が戻ってきた。恭しくクァンに頭を下げ、準備が出来ましたと告げる。
「あんがと。じゃ、いくよ、みんなー」
ふらりふらりと一足先に、狂った光の門をくぐる。
ヴァニタスはロンガゥを見上げた。救いを求める色が少年の両目に宿っている。
ロンガゥは一言、諦めろとだけ囁いた。

恐る恐る門をくぐった先にあったのは、ヴァニタスの知識には全く存在しない未知の世界であった。
薄暗い空間。めまぐるしく色を変える照明。人工的な甘い臭い。聞いたことのない旋律。黒塗りのテーブルを囲い、見たこともない料理を貪る雑多な人種の会話、男たちの脇に座る女の笑い声、物陰から微かに響く、艶かしい嬌声。
そして、混沌たる空間をところ狭しと歩く、アプカルルや獣人の女性たち。わずかの布で体の一部を隠しただけの姿は、アプカルルの従来の服装と面積的にそう変わりはしないのだが、遥かに扇情的

で目のやり場に困る。
その上、彼女らはすれ違う度に、ヴァニタスに妖しく微笑みかけてくる。微笑まれた少年は縮こまってうつむくしかない。顔が熱いのは空調のせいだと、必死に自分に言い聞かせる姿がいじらしい。
「ほれ、固まってないで、こっちこっち」
先を行くクァンに促され、ヴァニタス達は奥へと進んだ。
だが最後尾のロンガゥが巨体を丸めて店内に入った瞬間である。
その姿を見た者から順に言葉を失い、室内の姦(かしま)しさは一気に冷え込んでしまった。男たちは、みな慌てて立ち上がり敬礼。女もどうしたものかと、一様にオロオロと戸惑う。
だがロンガゥが右手で「座ってよし」とジェスチャーを送ると、全員、安堵と共に座りなおし、再び享楽にふけりはじめた。
――――余程の地位なんだな、このドレッドノート。
有益な情報が得られたことに、ヴァニタスが目を細める。
無知は最大の敵だ。知ることから全ての行動は始まる。そういった意味で、この混沌とした空間に訪れたことは意義があった。
そう思っていたところに、クァンが話しかけてきた。
「うっし、ヴァニたんはこっちの部屋。残りはそっちの部屋。料理はじゃんじゃん来るから、好きなだけ食べろー」
クァンが示したのは、通路最奥にある相向かいの二つの部屋だった。
あろうことか、ここにきて別室。ヴァニタスの尻尾が今までになく膨らむ。
「ま、待って下さい、僕だけ別室って、なんで……」
「怖がんなよ、少年。別に獲って食ったりするわけじゃないし。ちゃんと料理持ってくるから、安心して」
「でも……」
「拒否権はあーりません。君、自分の立場忘れた？　いいかい、この部屋に用意された『もの』は、全て味わうこと。これは命令。おっけー？」

と、クァンはヴァニタスの額を小突いた。
自分の頭の中に仕掛けられた不定形の爆弾を思い出せ。クァンはそう告げたのだ。脅迫に等しい。
「……わかりました」
逆らうことはできない。ヴァニタスは渋々、自分のためだけに用意された部屋へ足を向けた。
黒塗りの扉をくぐる間際、眉根を寄せる二人のアプカルルに微笑みかけ、大丈夫と囁き、そのままシレーヌと見つめ合う。
――――どうか、ローレライを。
ヴァニタスの願いを読み取れたのか。
シレーヌは静かに目を伏せ、一度だけ頷いた。

部屋に入ってまず目についたのは、中央にある大きな丸テーブルと、黒光りするソファーだった。
ソファーには二人の女性が座っている。怯えるヴァニタスに柔らかな笑みを送る様は、細部まで洗練された彫像のようだ。
ヴァニタスから見て右の人物は、ヴァニタスと同族。左がアプカルル。やはり申し訳程度の布が服代わりだ。だが、この二人の肉体は、その布で隠すには無理が有るほどに豊かであった。
張りのある胸も尻も、熟れた肉の柔らかさを惜しげも無く見せている。指で触れれば、指先からしっとりと沈み込んでいくのではないだろうか。そんな熟れた胸と尻に反し、腰も四肢も余分な肉はまとわず、その対比がより膨らんだ箇所を印象づける。
あまりに扇情的な体だが、微笑む表情は限りなく穏やかで、そして艶かしい。濡れそぼった唇が、薄暗い部屋の中でも輝いて見えるからかも知れない。
「あら……どんな人が来るかと思ったら……なんて可愛らしい人かしら」
黒い髪をポニーテールにした猫の女が囁いた。金の鎖で飾られた

尾を律動的に揺らしているのは、悦びの表れか。
「いかつい男が来ると思ってたけど……とても素敵な子が来るなんて、夢にも思わなかった」
肩で切りそろえた白い髪を揺らし、アプカルルの女が笑う。馬鹿にしたような響きはない。どこか嬉しそうだ。
どうしたらいいか分からないとヴァニタスが迷っていると、猫の女が立ち上がり、歩み寄ってきた。
甘く強烈な匂いがヴァニタスの鼻腔に触れる。嗅いでいるだけで心拍数の上がる、奇妙な匂いだった。
近くに来たおかげで、ヴァニタスは女の顔がよく見えた。
同族ということもあるのだろうが、女性の美しさに喉が鳴る。
少し垂れ気味の瞳は大きく、どこか母性的な魅力を感じさせる。毛並みは滑らかの一言、他に形容のしようがない。笑ったときの口元の愛らしさは幼女のそれだ。
母の魅力と幼女の愛らしさを同時に備えた女性、それがマルガレータなのだ。
遭遇した女性の数は多くないヴァニタスだが、彼女の美しさが際立っていることは、容易に知れた。
下腹部に正体不明のむずがゆさが走る。なんだこれはと、ヴァニタスの頬が震えた。
「あ、あの……えっと……」
「初めまして……私はマルガレータ。よろしくね」
「はい、は、初めまして……」
「あなたのお名前は？」
「ヴァニタスです。ヴァニタス・ヴァニタートゥム……」
「初めて聞いた響き。綺麗な名前ね」
マルガレータの言葉には一分の嫌味もない。おかげで一層、ヴァニタスの顔が熱くなってきた。
恐怖は感じていないのに、震えが止まらない。自分の内から止めようもなく湧く感覚に、ヴァニタスは対処法を見つけることが出来

なかった。
「こちらへどうぞ」
マルガレータの右手がヴァニタスの左手をそっと握り、ソファーへと誘った。一度も転ばずにソファーまで辿りつけたことは、ヴァニタスの心理状態からすれば、褒められてしかるべき偉業と言えよう。
誘われた先は、アプカルルの女のすぐ隣。マルガレータもヴァニタスの隣に座り、美しい二人の女性に挟まれる格好となる。
座ることを逡巡するヴァニタスの手を、二人の女が同時引いた。引かれた力はささやかなものだったが、ヴァニタスには抵抗しがたい魔力が込められていた。
半ば倒れるようにソファーに座る。ソファーは思った以上に柔らかい作りだった。腰掛けたヴァニタスの体が深く沈みこみ、ほとんど仰向けに近い状態になる。
「あらあら……大丈夫？」
アプカルルの女が手を差し伸べてきたので、ヴァニタスは反射的にその手を取った。彼女の助力を頼りに体を起こした後、礼を述べる。
どういたしましてと返したアプカルルの女は、
「私はクリスティーン。よろしくね、ヴァニタス」
と、己の名を告げた。
ヴァニタスは頷いて顔を伏せるばかりだ。膝の上に握りこぶしを置いて、そこを見つめるのが最良と、彼の両目は己の拳と睨み合っている。
だがいくら顔を伏せても、両隣から漂う甘い香りからは逃れられない。肩の触れ合う距離から漂う匂いは、それ以外の一切の匂いをかき消すほど強いにも関わらず、ヴァニタスに不快感を与えなかった。
「怖い？」
クリスティーンがヴァニタスの肩に右手を置いた。もう片方の手

は、握りしめられたヴァニタスの拳に重ねる。
　クリスティーンも、マルガレータに負けず劣らずの美しさだ。少し切れ長の目は理知的で、筋の通った鼻梁と共に、肉体の淫靡さとのギャップを生み出している。それがかえって、ヴァニタスの心臓をかき乱す。
「いえ、怖いわけじゃ……ないです」
「でも、震えてる」
　そう言ってヴァニタスの尻尾を撫でたのはマルガレータだ。びくりとヴァニタスの臀部が跳ねる。尻尾を他人に撫でられたのは初めてかも知れない。
　撫でる手の動きが、少しづつ早くなる。尻尾の毛の一つ一つを舐めるように、細い指の動きも複雑に変わっていく。
「あ、あの……」
　止めて欲しいと口から出せない。舌が動かない。
　そうこうするうちに、今度はクリスティーンの左手が徐々に拳から離れ、別の場所に移動していく。そこはヴァニタスの最も敏感な場所であった。
　クリスティーンの指が、服の上から『それ』を握る。
　面食らったヴァニタスが飛び上がった。逃げた先はテーブルの上。そこに体を丸めて屈みこみ、二人の淫魔を猫目で睨む。睨むと言っても、ほとんど窮鼠の有様だ。猫の面目丸つぶれである。
「もう、クリスティーン。急ぎすぎよ」
「あら、マルガレータが激しく尻尾を愛撫するからよ。それよりも驚いたの、聞いて。私、間違えて腕を握ったのかと思っちゃった」
「やだ、それって、あれが？」
「そう、あれが」
「なんて素敵なのかしら……こんな可愛い子に、そんな大きなものが備わってるなんて」
　そう言って、ヴァニタスなどお構いなく笑いあったものだから、少年のなけなしのプライドも流石に傷いてしまった。

「なんで、こんなことするんだ！」
怒鳴ると言うより、悲鳴のような叫び。これでは二人の淫魔には効果はない。
小首を傾げてマルガレータが問う。
「なんでって……気持いいこと、嫌い？」
「こ、こんなことするために、僕は来たんじゃありません！」
「そうなの？　でも、ここに来る前に、クァン技術長に言われたんじゃない？　全て味わえって」
と、マルガレータ。
彼女に言われてクァンのセリフを思い出す。
確かに、言っていた。全てを味わえと。
「全てって、まさか……料理だけじゃなくて……」
ここにいたり、クァンの真意を悟る。
食わねばならないのは、料理だけではなかったのだ。
「あなたを愉しませるのが私たちの役目。料理が来るまでまだ時間はあるわ。ね？　好きにしていいのよ？　いまは……私たちの体は、あなただけのものだから」
言うなり、クリスティーンが服を脱ぎ捨てた。次いでマルガレータも同様に。
二人の淫魔はソファーに身を沈め、ヴァニタスに手を差し伸べた。まるで深海魚の疑似餌のように、細い指を妖しくたなびかせている。
――味わわれるのは、自分のほうじゃないか。
振舞わえる料理の前菜が、自分自身とは皮肉なものだ。
もはや覚悟を決めるしかない。
ヴァニタスは、テーブルから静かに降りた。

「いやあ、君みたいな頑固者、初めて見たよ。凄いね。その歳で。大した自制心だわ」
揺れる狭い箱の中、クァンがぷかりと紫煙をくゆらせている。

口調は変わらず、しかし、どこか今までと違う響きが含まれていることに、ヴァニタスは気づいていた。

抱きつくローレライの髪を撫で、無言でクァンの口元を睨む。彼女の言葉を容易に信じてはならないと気づいたゆえの、彼なりの自衛策だった。

結局、ヴァニタスは淫魔の誘惑に乗らなかったのだ。出された料理を口にすることもなく、その事実を知って脅しをかけてきたクァンにも屈せず、彼は純潔を守り通した。

あの店で一二を争う二人の娼婦は、なんとも名残惜しそうに去り際のヴァニタスを見ていた。極上の獲物を逃したと言わんばかりの顔だったと、クァンは思い出して笑っている。あれは、仕事を忘れて本気になった女の顔だと。

「ヴァニたん、あたしの言ったことに逆らって、頭ぽーんされちゃうとか、考えなかったの？」

「考えました。考えたけど……何があっても譲れないものが、僕にはあったから」

ヴァニタスの想い人は、ただ一人。それが死をちらつかせても揺るがないほどの決意だと、クァンは知らなかった。

「それに……僕の利用価値があるうちは、あの程度じゃ殺したりしない。あなたは、きっとそういう人だ」

淀みのない猫目がクァンの目を射抜く。

射ぬかれた目に痛みが走り、クァンは苦虫を噛み潰しながら顔を背けた。

ああいう目をするやつと、真っ向から見つめ合ってはいけない。彼女はそのことを知っている。

――女も知らない拘束技師なら、快楽で囲い込めば簡単かと思ったんだけど……こりゃ、クソが付くほど誰かにお熱だな。誤算だったにゃー。

「にゃはは。第一ラウンドは、あたしの負けだね」

さして悔しそうでもなく、クァンは笑った。

――まあいっか。他にも方法はあるし。

乱暴に頭を掻いたクァンは、終わりかけの煙草を携帯灰皿にねじり込み、新しい煙草を咥えた。

押し黙るロンガゥが指先で煙草に火をつける。巨人が不機嫌なのは明白だった。

さすがに罰が悪くなったか、クァンがたまらず愚痴る。

「あーによ、あんたら。ご飯はちゃんと出したじゃない。ねー？エリーネちゃん、美味しかったでしょ？」

「う、うん……」

「ほらー。あんたたちは、こう、出されたものを素直に楽しむ心っちゅーものが欠落してんのよー。もっと人生楽しみなさい。食！性！　遊！　本能に基づいた快楽に素直になるのは、決して悪いことじゃないのよ？」

「お前の場合、快楽に素直になりすぎだ。節度を知れ」

「むー」

辛辣な一言を息子から喰らい、クァンは口を尖らせた。もしかしたら、本当に善意であの場を設けたのかも知れないが、ヴァニタスにとっては迷惑もいいところだ。

全員が沈黙に身を沈める。響くのは、彼らの乗る移送ポッドの、がたがたと揺れる音だけだった。

インスマス唯一の風俗店を後にした一行は、中央に向かうための箱状の乗り物に乗り込んでいた。

都市の上層と下層の間に、斜めに張られた二本のケーブル。それにぶら下がる要領で、小屋ほどのポッドを都市の高所に運搬する。極めて単純な作りの運搬装置だ。

しかし単純とは言え、ローレライやシレーヌには魔法の乗り物に等しい。ポッドが高度を上げるにつれ、二人の目が子供のように――ローレライは子供だが――輝いたことに、ヴァニタスの頬が一瞬だけ緩んだ。

はしゃぐ二人のアプカルルから、ケーブルポッドの外に猫目を移す。

ケーブルポッドは高強度アクリルで覆われているため、街を見下ろすことができる。そこから観察できたおかげで、都市の構造と各施設の概要も把握できてきた。

眼下の工場は、食料品を中心とした物資生産施設のようだ。一部の工場は、設備から大規模な機械類の開発施設だと推測できた。工場の合間に設置された円筒形の建造物は、空気の浄化を行う大気調整装置だろうか。

ケーブルポッドが向かう先、巨大なビル群は居住区と考えるのが妥当だが、より中心部に近いビル群は、この歳の管理を担っている場所と考えられる。他のビルより明らかに堅牢な作りをしているのだ。

そうやって把握した全体の構造から、この都市は中央の機甲塔ありきで作られた都市なのだと、半ば以上の確信を持つことができた。

――いつから、こんな都市が出来ていたんだろう。この海に沈んだ世界で、ここまで繁栄した都市が残っているなんて、奇跡的だ。

陸のない原罪の海（ハマルティア）には、文明が育つ余地が無い。海を生活の場にするアプカルルには、ここまでの技術力はないはずだった。

あのような快楽を提供する施設までが成り立つと言うことは、この都市がかなり成熟した段階にあるということになる。歴史も技術も、相当なものを秘めているはずだ。

――恐らくは、この人達が鍵を握っている。

ケーブルポッドの中央で腕を組んで座るロンガゥ。彼にもたれかかって煙草をふかすクァン。

彼らの目的は分からない。だが、自分達を捕らえ、回りくどいやり方で懐柔しようとし、今また、生きたままどこかへ連れて行こうとする以上、何かに利用することが目的なのだろう。

――ただでは、利用されないよ。

ヴァニタスの猫目が、油断無く、そして不敵な光を放っていた。

彼は拘束技師。アトラクとジャガーノートを奪還することを諦めるはずもない。

この細い体の中に秘められた想いの強靭さを、クァンとロンガゥは知らないのだ。

――必ず、奪い返す。僕の大切なもの、全てを。

少年の脳内では、目まぐるしく奪還のプランが練られていた。

必ず、その機会（チャンス）が訪れると信じて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3230v/

ポン・デュ・ガールは永遠に

2011年11月30日00時55分発行